福岡市

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ

福岡城址

― 内堀外壁石積の調査 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集

1983

福岡市教育委員会

福 岡 市

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ

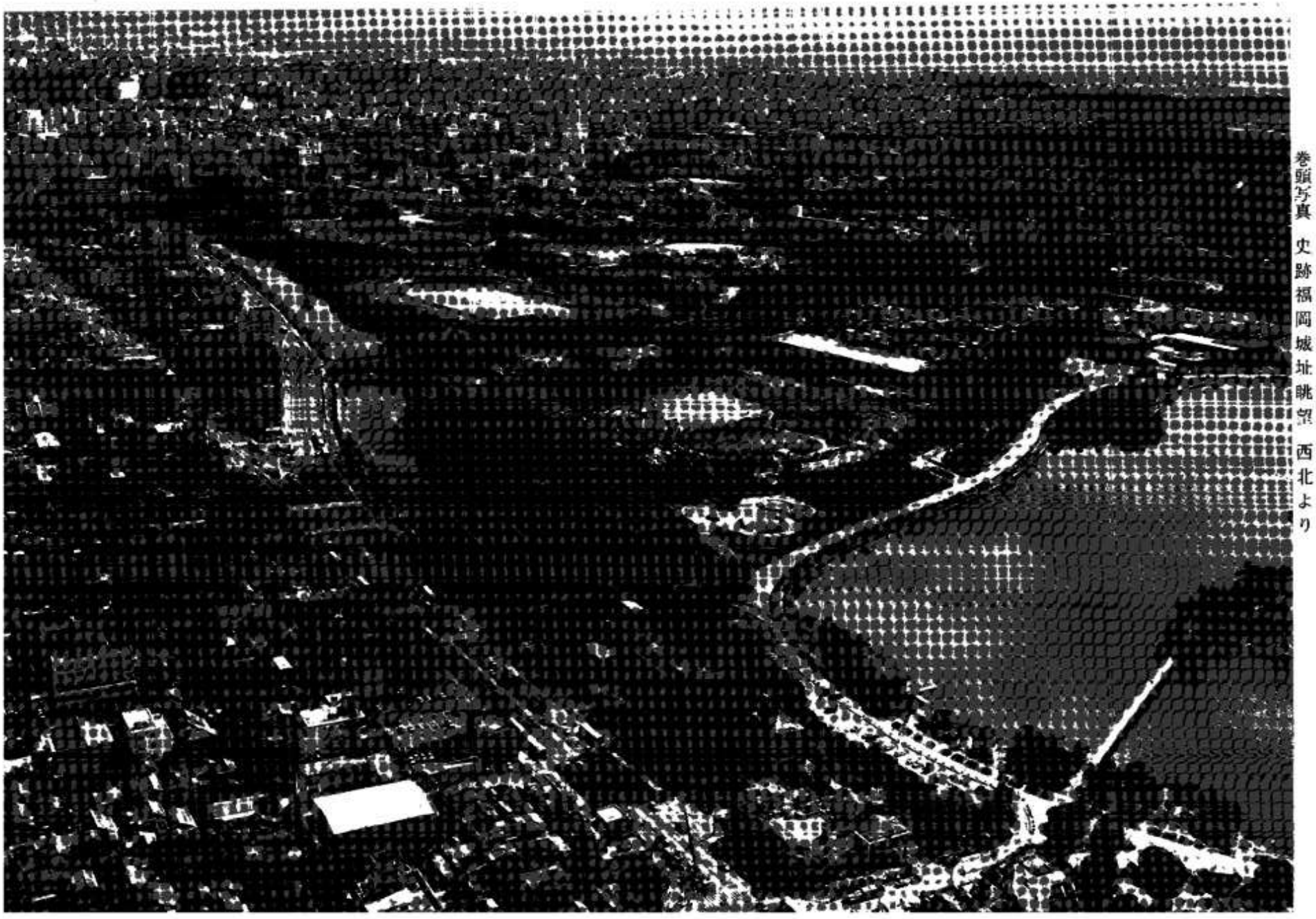
福 岡 城 址

— 内堀外壁石積の調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集

1983

福 岡 市 教 育 委 員 会



巻頭写真　史跡福岡城址眺望　西北より

序　　文

福岡市の新しい交通体系として昭和56年7月部分開通した地下鉄1号線は本年3月には1号線全線が開通する運びとなりました。福岡市教育委員会では、交通局の委託を受け昭和51年以来地下鉄路線内の埋蔵文化財の調査と出土資料の整理に携わり現在もつづけています。

本書は昭和51年12月から昭和53年6月にかけて調査を実施した福岡城関係の遺跡について報告するものです。福岡城の石垣は明治以来、貫線道路の下に埋没したままの状態になっておりましたが、今回地下鉄路線内にかかる石垣の構築状況を把握することができ、赤坂工区ではその一部を保存復元して、市民の皆さまに見学いただけるようになったことは誠に喜ばしいことと考えています。

この報告書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、研究資料としても活用いただければ幸いです。

発掘調査から資料整理に至るまで、交通局をはじめ指導委員の先生方など多くの人々の御協力に対し深甚の敬意を表するものであります。

昭和58年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　西津　茂美

例　　言

1．本書は、福岡市が企画した福岡市高速鉄道の建設にともない、福岡市教育委員会が高速鉄道建設局から受託し発掘調査を行なった、福岡城関係の発掘調査報告書であり、これを「福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ」とする。

2．福岡城址に関する考古学的、文献史学的方面の資料価値を高めるため、併せて、福岡市立歴史資料館、財団法人　出光美術館、九州大学文学部考古学研究室に保管されている福岡城出土の遺物の紹介、昭和56年度に福岡市教育委員会が行なった赤坂１丁目の福岡城石垣の調査結果、それに、福岡城の文献史学からの論及を、付編として掲載した。掲載するにあたっては各機関および多くの方々に種々の便宜をはかって頂き、心より感謝申し上げる次第である。

3．本書には、元九州大学教授　種子田定勝先生をはじめ、出光美術館　弓場紀知氏、九州大学考古学研究室　田崎博之、矢野佳代子氏、福岡市美術館　田坂大蔵氏に玉稿を寄せていただいた。記して感謝申し上げる次第である。それ以外は、折尾学、塩屋勝利、山崎龍雄、浜石哲也、池崎譲二、田中寿夫、森本朝子が執筆し、分担は本文目次に示すとおりである。なお、題字は古藤国生氏の揮毫による。

4．本書に用いた石垣実測図は、福岡市教育委員会が、東洋航空株式会社、共同航空株式会社に委託した写真測量の成果をもとに、再編集したものであって、座標第Ⅱ系を用いており、方眼北は真北にN－0°19′－Wの偏りをもつ。

5．写真測量の不可能な部分の石垣および土層の実測については、山崎、浜石、池崎らがあたり、平野芳英、渡辺一雄、高倉浩一、青木和明、長沼孝、小木曽隆、郷堀英司、佐藤正和、富田和夫らの援助を受けた。トレースは池崎が行なった。

6．現場関係の写真は、折尾、山崎、浜石、池崎、山中が撮影し、遺物写真は白石公高が中心に撮影し、一部池崎が撮影した。

7．遺物の実測・拓本は、陶磁器関係を森本、有島美江、撫養久美子が、須恵器関係を田崎博之、日野光嗣が行ない、瓦類は伊藤裕子、毛利美枝子、川原美都子、林田道代、能美須賀子、西原年枝、村田喜代美、山田由美子、唐川茂子、田子森牧子、市川元子、飯田順、今村淳子が行なった。トレースは折尾が行なった。

8．本書の編集は、塩屋、山中、森本、常松幹雄の協力を得て折尾と池崎が行なった。

本文目次

Ⅰ．高速鉄道関係埋蔵文化財調査概要
第１章　調査に到る経緯……折尾　学……3
第２章　組織の構成……折尾……4
第３章　路線内遺跡の調査概要……折尾・塩屋勝利……6
Ⅱ．福岡城址　―内堀外壁石積の調査―
第１章　遺跡の立地と歴史的環境
１．立地……池崎譲二……13
２．歴史的環境と調査研究……池崎……15
第２章　調査の経過……折尾……18
第３章　調査の概要
１．第Ⅰ区の調査……折尾……23
２．第Ⅱ区の調査……山崎龍雄……25
３．第Ⅲ区の調査……山崎……26
４．第Ⅳ区の調査……池崎……28
５．第Ⅴ区の調査……池崎……30
６．第Ⅵ区の調査……池崎……32
７．第Ⅶ区の調査……浜石哲也……34
８．薬院新川石垣の調査……折尾……36
第４章　出土遺物
１．瓦類……池崎……38
２．陶磁器……森本朝子……48
３．須恵器・陶質土器……田崎博之……63
４．その他の遺物……池崎……64
第５章　城壁に使われている石材……種子田定勝……66
第６章　保存された石垣について……池崎……71
第７章　結語……池崎……72
付編　１．福岡市中央区赤坂１丁目の福岡城石垣の調査……田中寿夫……75
２．福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション……池崎・森本……77
３．出光美術館の高野コレクション……弓場知紀……107
４．九州大学考古学研究室収蔵の平和台出土遺物……九州大学考古学研究室……111
５．黒田長政と福岡城……田坂大蔵……119

挿図目次

Fig. 1　高速鉄道路線内遺跡地図（1／75,000）…… 2
Fig. 2　福岡築城前の地形…… 13
Fig. 3　福岡城之図（江戸時代）…… 20
Fig. 4　福岡城地図（大正初年）…… 20
Fig. 5　福岡城地図（昭和5年）…… 21
Fig. 6　福岡城地図（昭和53年）…… 21
Fig. 7　薬院新川石垣嗣木実測図（1／40）…… 36
Fig. 8　出土遺物実測図　軒丸瓦（1）（1／4）…… 40
Fig. 9　出土遺物実測図　軒丸瓦（2）（1／4）…… 41
Fig. 10　出土遺物実測図　軒丸瓦（3）（1／4）…… 42
Fig. 11　出土遺物実測図　軒丸瓦（4）（1／4）…… 43
Fig. 12　出土遺物実測図　軒平瓦（1）（1／4）…… 44
Fig. 13　出土遺物実測図　軒平瓦（2）（1／4）…… 45
Fig. 14　出土遺物実測図　軒平瓦（3）（1／4）…… 46
Fig. 15　出土遺物実測図　瓦叩き目文様拓影集成（1／4）…… 47
Fig. 16　出土遺物実測図　陶磁器（1）…… 50
Fig. 17　出土遺物実測図　陶磁器（2）…… 51
Fig. 18　出土遺物実測図　陶磁器（3）…… 52
Fig. 19　出土遺物実測図　陶磁器（4）…… 54
Fig. 20　出土遺物実測図　陶磁器（5）…… 55
Fig. 21　出土遺物実測図　陶磁器（6）…… 56
Fig. 22　出土遺物実測図　陶磁器（7）…… 57
Fig. 23　出土遺物実測図　陶磁器（8）…… 59
Fig. 24　出土遺物実測図　陶磁器（9）…… 60
Fig. 25　出土遺物実測図　須恵器（1／3）…… 63
折込み　福岡城濠地層断面図

表目次

Tab. 1　石垣築造後の陶磁器…… 59
Tab. 2　石材の岩種岩類別個数と個数比…… 68

写真図版目次

PL. 1　1. 福岡城下の橋と汐見櫓の現状
　　2. 調査地点遠景（Ⅵ区）　左上は平和台球場
PL. 2　1. 福岡城石垣試掘風景（Ⅱ区）
　　2. 発掘作業風景（Ⅲ区）
PL. 3　1. ステレオカメラによる写真測量風景（Ⅰ区）
　　2. 文化庁技官の視察
PL. 4　1. Ⅰ区石垣（東より）
　　2. Ⅰ区石垣（西より）
PL. 5　1. Ⅰ区石垣（部分）
　　2. 石垣線と裏込め石
PL. 6　1. Ⅱ区石垣（下の橋に続く、西より）
　　2. Ⅱ区第2トレンチ土層
PL. 7　1. Ⅲ区石垣（東より）
　　2. Ⅲ区石垣（西より）
PL. 8　1. Ⅲ区石垣（西より）
　　2. Ⅲ区石垣入隅部（南より）
PL. 9　1. Ⅳ区石垣（西より）
　　2. Ⅳ区石垣（東より）
PL. 10　1. Ⅳ区石垣（東より）
　　2. Ⅳ区石垣入隅部（西より）
PL. 11　1. Ⅳ区石垣入隅部（南西上より）
　　2. Ⅳ区石垣入隅保存部
PL. 12　1. Ⅳ区石垣入隅部保存作業
　　2. Ⅳ区石垣清掃作業風景
PL. 13　1. Ⅳ区第2トレンチ裏込め
　　2. Ⅳ区第2トレンチ土層
PL. 14　1. Ⅳ区第3トレンチ
　　2. Ⅳ区石垣入隅部第12トレンチ
PL. 15　1. Ⅵ区ポンプ室石垣岩盤状況
　　2. Ⅵ区石垣（東より）

PL．16　1．Ⅵ区石垣入隅（西より）
　　2．Ⅵ区石垣旧入隅（西より）
PL．17　1．Ⅵ区第6トレンチ土層
　　2．Ⅵ区拡張トレンチ1（左旧、右新石垣　北より）
PL．18　1．Ⅵ区拡張トレンチ　2石垣
　　2．Ⅵ区拡張トレンチ　3石垣
PL．19　1．Ⅵ区拡張トレンチ　4石垣
　　2．Ⅵ区拡張トレンチ　5石垣
PL．20　1．Ⅶ区石垣（東より）
　　2．Ⅶ区石垣（東より）
PL．21　1．Ⅶ区石垣（東より）
　　2．Ⅶ区石垣（西より）
PL．22　1．薬院新川石垣（南より）
　　2．薬院新川石垣（北より）
PL．23　1．薬院新川石垣断面
　　2．薬院新川石垣胴木出土状態
PL．24　　出土遺物　軒丸瓦
PL．25　　出土遺物　軒平瓦・丸瓦
PL．26　　出土遺物　陶磁器（1）
PL．27　　出土遺物　陶磁器（2）
PL．28　　出土遺物　陶磁器（3）
PL．29　　出土遺物　陶磁器（4）
PL．30　　出土遺物　陶磁器（5）
付図　1．福岡城平面図（1／4000）
　　2．福岡城内堀外壁石垣調査区と石垣線　薬院新川石垣線（1／1000）
　　3．Ⅰ・Ⅱ区石垣実測図とトレンチ土層図（1／100，土層図1／40）
　　4．Ⅲ区石垣実測図とトレンチ土層図（1／100，土層図1／40）
　　5．Ⅳ区石垣実測図とトレンチ土層図（1／100，土層図1／40）
　　6．Ⅴ区石垣実測図とトレンチ土層図（1／100，土層図1／40）
　　7．Ⅵ区石垣実測図とトレンチ土層図（1／100，土層図1／40）
　　8．Ⅶ区石垣実測図（1／100）
　　9．薬院新川石垣実測図とトレンチ土層図（1／100，土層図1／40）

Ⅰ．高速鉄道関係埋蔵文化財調査概要

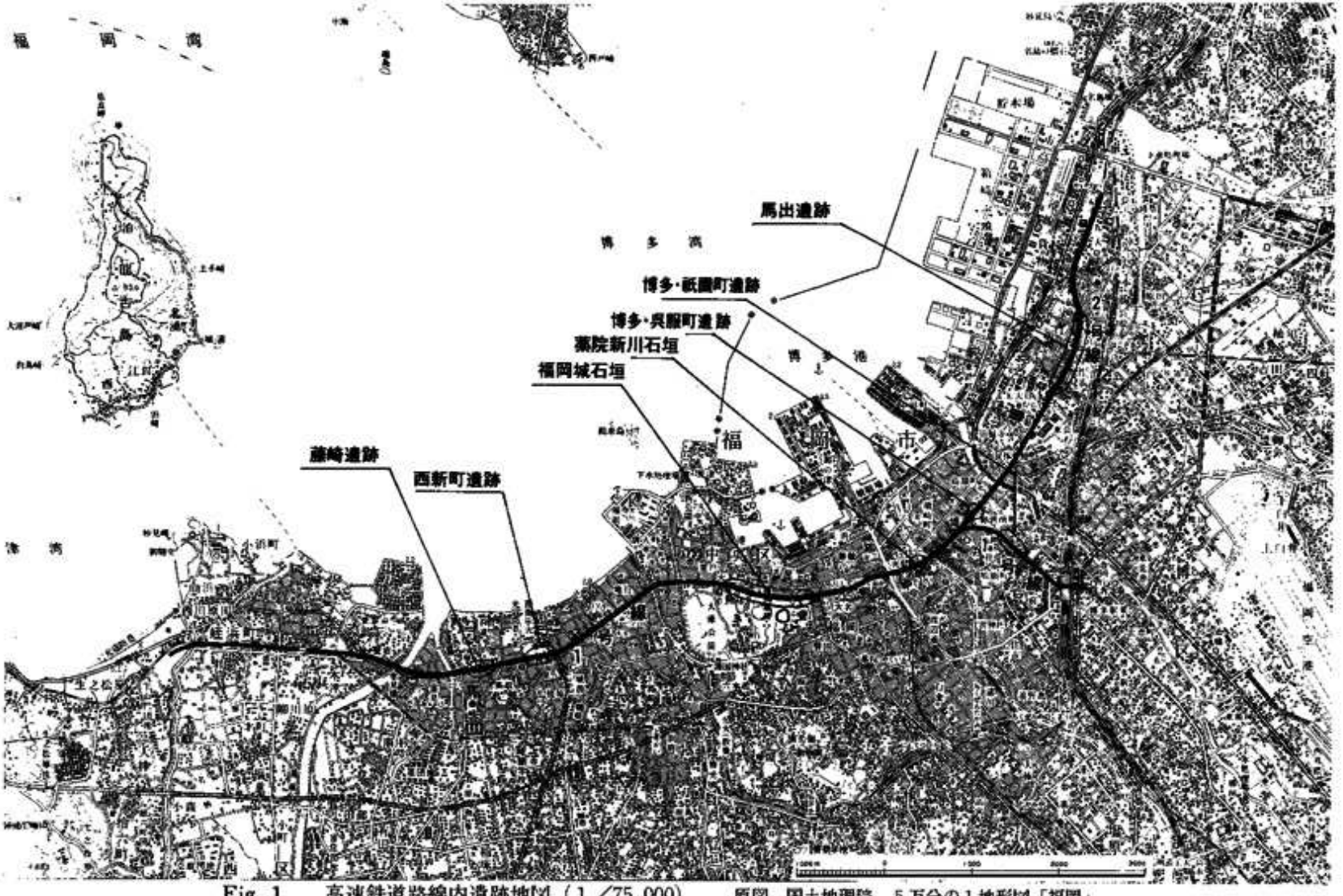


Fig. 1　高速鉄道路線内遺跡地図（1／75,000）　原図　国土地理院　5万分の1地形図「福岡」

第１章　調査に至る経過

昭和58（1983）年３月22日、福岡市高速鉄道１号線は開通した。福岡市にとって記念すべき１日である事を思い、又関係各位の御苦労に対し犒いの拍手を、まず送りたいと思う。

本路線内遺跡の調査を昭和51年８月に始めてこの方７年有余の歳月が流れた。福岡市の海岸線は、古来人々の海の彼方に対する想いをつのらせ、実際その想いを現実のものにして来た。古くは邪馬台国論争の象徴的存在である「漢委奴国王」の金印、西の都「大宰府」の迎賓館であった大宰府鴻臚館、そして中世の港町であった博多袖ノ湊等々は、大多数の市民に親しまれる歴史事象である。

このような意味において、地下鉄が海岸線に沿い走り抜ける事は文化財サイドにとっては恐怖でもあり、又千載一遇の好機でもあった。隧道建設担当の交通局、文化財担当の教育委員会双方が自己の立場を主張し協議する事、数十回。実際調査にとりかかるまで２年有余の月日が流れ、安堵の境地に至ったのは昭和51（1976）年６月であった。そして同年８月調査はゆっくりではあるが確実な足取りで始動したのである。昭和58年３月現在、地下鉄２号線箱崎、馬出工区の調査を行なっているが、想定した路線内遺跡の調査消化率90％である。調査した遺跡の調査工程は下表を参照されたい。なお下表に記述出来ない調査始動までの道のりは次のとおりである。

昭和49，50年、調査について協議。昭和51年５月、工事で福岡城石垣発見。昭和51年６月、路線内の文化財の調査について協議成立。昭和51年８月、西新町遺跡の調査を開始する。

遺跡名 ＼ 項		所在地	時代	性格	調査期間	調査面積	実動日数（ ）は夜動日数	備考
箱崎遺跡		西区箱崎西区役所前	弥生時代	共同墓地	昭和52年４月～同53年６月	4,925㎡	240（96）	
（防塁工区）		西区防塁前	弥生時代～古墳時代	生活址群	昭和52年12月～同53年４月	920㎡	40（12）	箱崎と西新町に入る
西新町遺跡		西区埋蔵館高校前	＊	共同墓地・生活址群	昭和51年８月～同53年４月	6,230㎡	234（37）	
福岡城内堀・石垣		中央区荒戸・大手門・平和台・赤坂	江戸時代	堀・石垣	昭和51年12月～同52年９月	14,900㎡	205（10）	
福岡城南陸・新川石垣		中央区天神（旧県庁前）	＊	武家の町と博多町人街とを分ける石垣	昭和53年３月～同53年６月	500㎡	18（2）	
外堀町遺跡		博多区・土居町・呉服町・綱場（旧電車通り）	鎌倉～室町時代	中世の港町	昭和53年11月～同54年５月	200㎡	54（1）	
祇園町遺跡	店屋町工区	博多区御供所町東長寺前	＊	中世の博多の街	昭和52年12月～同56年12月	1,832㎡	216（57）	
	祇園町工区	博多区馬場新町	＊	＊	昭和52年２月～同54年12月	4,500㎡	207（94）	
	博多駅前工区	博多区博多駅前	鎌倉～室町時代	＊	昭和54年12月～同55年８月	4,500㎡	122（10）	
博多駅遺跡		博多区博多駅南	弥生時代～古墳時代	墓域	昭和55年12月～同56年３月	約4,000㎡	30	河川のハンラン線
宮崎宮原遺跡		東区筥崎宮参道・馬出	鎌倉～室町時代	元寇防塁・門前街	昭和57年４月～	約5,000㎡	（さお数に（AM8:00～AM7:00））	調査中
				計		47,534㎡	1,366（319）	

第２章　組織の構成

調査指導委員

考古学　鏡山　猛（前九州歴史資料館長）　森貞次郎（九州産業大学教授）
杉原荘介（明治大学教授）　乙益重隆（国学院大学教授）
岡崎　敬（九州大学教授）　賀川光夫（別府大学教授）
横山浩一（九州大学教授）　大塚初重（明治大学教授）
藤田　等（静岡大学教授）　白木原和美（熊本大学教授）
田中　琢（奈良国立埋蔵文化財センター長）
西谷　正（九州大学助教授）　三島　格（前福岡市歴史資料館長）
藤井　功（福岡県教育庁文化課長）

日本史　筑紫　豊（前福岡県文化財保護専門委員・故人）
三宅安太郎（　〃　・故人）
田村圓澄（九州歴史資料館長・前熊本大学教授）
川添昭二（九州大学教授）

人類学　永井昌文（九州大学教授）

岩石学　種子田定勝（前九州大学教授）

水工土木学　山内豊聡（九州大学教授）

地質学　浦田英夫（九州大学教授）

建築学　土田充義（九州大学助教授）

歴史地理学　日野尚志（佐賀大学助教授）

福岡市交通局 ― 調査委託

交通事業管理者　大石秀雄

理事　岩佐辰生　松原弘和

総務部長　石橋秀敏　総務課長　松本　健
経理課長　岡部隆浩

工事部長　米澤福徳　工事課長　豊島　悟
第１工事々務所々長　静　純一
第２工事々務所々長　田中和敏

技術部長　理事兼務　設計課長　俵　友広
計画課長　石田慶男
計画第１係長　吉田豊治　調査の予算・調査現場の調整
中村俊喜

教育委員会 ― 調査主体

教　育　長　西津茂美
教育次長　志鎌幸弘
文化部長　中田　宏
文化課長　生田征生
埋蔵文化財第一係長　柳田純孝
事務担当　岡島洋一・古藤国生
調査担当　塩屋勝利・池崎謙二・浜石哲也・山崎龍雄・折尾　学
調査協力　山崎純男・井沢洋一・力武卓治

調査協力団体

藤崎遺跡　佐藤工業（株）福岡支店　取締役支店長　梅木正二
西新町遺跡　青木建設（株）福岡支店　取締役支店長　前田三男
戸田建設（株）九州支店　支店長　粟飯原延嵐
福岡城石垣　清水建設（株）九州支店　取締役支店長　森井哲也
鴻池組（株）　福岡支店　五十嵐章
日本国土開発（株）九州支店　支店長　伊藤幸郎
大成建設（株）福岡支店　取締役支店長　里見泰男
梅林建設（株）福岡支店　取締役支店長　平岡義孝
薬院新川石垣　間組（株）福岡支店　常務取締役支店長　西村重信
呉服町遺跡　大日本土木（株）九州支店　取締役支店長　越山萬作
祇園町遺跡　熊谷組（株）福岡支店　常務取締役支店長　勝元　元
三井建設（株）福岡支店　取締役支店長　龍岡一巳
博多駅前周辺　竹中土木（株）九州支店　支店長　長野和郎
博多駅東周辺　日産建設（株）福岡支店　支店長　今津孝二
筥崎宮周辺　西松建設（株）九州支店　支店長　甲斐栄一
（株）地崎工業福岡支店　支店長　大和田国彦
大成・梅林共同企業体代表者　大成建設（株）九州支店長　横内利治

その他の協力者

交通局関係　末藤洋（前理事）・原一夫（前工事部長）・本多修・（前技術部長）野田養一（前総務課長）・平山幸生（前工事課長）・永松正典（前第１工事々務所々長）・津高正高（第２工事々務所々長）
教育委員会関係　古村澄一・戸田成一（以上前教育長），清水義彦・井上剛紀・中能貞行（以上前文化課長），三宅安吉（前埋蔵文化財第一係長）

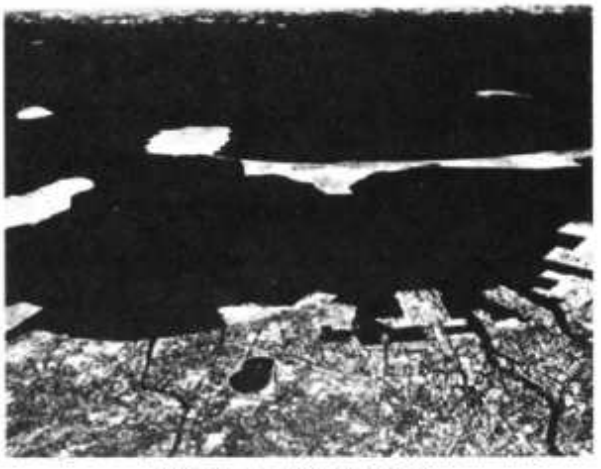
昭和57年１月１日に筑紫豊先生、同年４月７日三宅安太郎先生が相ついで御逝去された。両先生は地下鉄の埋蔵文化財はもとより、古くから筑前福岡の文化財の保護に精根を傾けられていた。特に両先生の博多の歴史に対する想いには老いを思わせぬ若さがあった。公私共に私達に優しい心遣いを示され、現代におかれた文化財の立場故に激励をこめられた御教示は心暖まるものがあった。両先生の御遺志に応えるべく、文化財保護行政に対する努力をお誓いし、慎しんで衷心より御冥福をお祈りする次第である。

第３章　路線内遺跡の調査概要

福岡平野は油山を中心にして、東西に長く、北に短く開けた平野である。そして平野の西端には西ノ浦、東端には志賀島があって、大きく博多湾を包んでいる。この博多湾には西より、背振山に源を発する室見川、油山に源がある樋井川、背振山より流れる那珂川、そして宝満山より端を発し、西の都大宰府、大宰府の防墨水城堤防へつながり、中世博多へと続く御笠川がそそいでいる。各河川は古来平野部の文化の源でもあり、文化を広げる流通路でもあった。室見川は早良平野を生み出し有田・小田部・四箇田・飯盛・野方等の遺跡が、また那珂川・御笠川は大宰府・須玖・板付・博多等の遺跡がそれぞれ示すように、原始・古代からこの方各時代の社会に計り知れない文明の泉を提供して来た。そして、博多湾も又太古より天然の良港として存分に活用され、対外文化、とりわけ海外文化導入の水口として、それぞれの歴史に果した役割は大きく、現代歴史家の研究の対象として大いに注目されるところである。

さて、交通変革の任に預かった本市地下鉄は海と陸の接点、換言すれば山の幸、陸の幸、海の幸とが一堂に集まる好位置をしめる海岸砂丘を東西に走り抜ける訳だが、そこには海陸両用文化を兼備した遺跡の宝庫が眠っていると見て間違いなく、事実７年有余の路線内遺跡の調査は先学はもとより現在の有識者の期待に充分応えるものである。

調査成果は藤崎・西新については既に報告済みであるが、結果をとりまとめることとし、今回報告の福岡城内堀石垣と城の虎口として重要な責を任された桝形門につながる薬院新川の石垣については後章を参照される事をお願いし、中世博多については資料の所見と歴史事実の関係について若干の見通しを述べ、広い知見の御教示を賜る事を期待したい。



博多湾の海岸線航空写真

藤崎遺跡甕棺墓調査風景

藤崎遺跡の甕棺墓

藤崎遺跡の学史を辿れば、発見は明治45（1912）年に遡る。藤崎１丁目１番地（当時同875番地）の川庄氏の宅地内で内部を朱く塗った箱式石棺墓が発見され、素環頭の直刀と共に三角縁二神龍虎鏡（仿製）の副葬を見た（後藤守一「漢式鏡」1926）。それ以後大正６（1917）年川庄氏隣の村上氏宅内で方格渦文鏡（舶載）を副葬する箱式石棺墓（中山平次郎「考古学雑誌」9－3 1918），昭和５（1930）年箱式石棺墓、甕棺墓、９個の最古の弥生式土器（永倉松男・鏡山猛「考古学」2－1　1931）、昭和30年代には数次の道路、下水道等の工事で甕棺墓等がつぎつぎに発見されている。

次に地下鉄と、藤崎バスターミナル、西市民センター建設に伴う本遺跡調査の成果を見ていきたい。

まず弥生時代の甕棺墓185基（内83基未報告）、土壙墓23基、石棺墓４基、特殊墓（石棺と壺棺の混合体）１基が上げられる。これら藤崎の弥生時代の墓制で特徴的な事実は内陸部の弥生墓制に比較して、海岸砂丘の墓制の特色をもっている事であろう。それは甕棺墓に内陸部では考えられない倒置された被せ棺が３基、甕棺に先行する石棺墓４基、それに石棺と壺棺を合せた特殊墓１基等が示している。この事実は砂丘という立地環境からの制約と把握されるより内陸部との宗教的慣習の相違と把握されないであろうか。今後の課題としたい。又、一般的に個々の弥生時代の共同墓地遺跡の開発時期が弥生時代の前期中頃の板付Ⅱ式期であるが、本遺跡の開始期が第101号甕棺が示すように縄文時代の晩期終末の夜臼式期まで遡る事は非常に興味あるところである。甕棺墓は弥生時代の最終末の西新町式期まで続いている。

次に本遺跡の最大の発見である方形周溝墓について概略を申し述べたい。方形周溝墓は10基発見され、その内７基に副葬品がある。その内容を以下に示す。

第１号方形周溝墓……内部主体５基（土壙墓３・石棺墓２）、内部主体部１号土壙墓からガラス玉６と管玉１、内部主体部４号石棺墓から摘鎌３の副葬品。

第３号方形周溝墓……内部主体部１号木棺墓から刀子１、ガラス小玉７の副葬品。

第４号方形周溝墓……内部主体である粘土塚より刀子２の副葬品。

第５号方形周溝墓……内部主体である木棺墓より刀子１の副葬品。

第６号方形周溝墓……内部主体である組合せ式木棺墓より三角縁二神二車馬鏡、素環頭大刀、鏃、刀子、鉋各１の副葬品。

第７号方形周溝墓……内部主体である木棺墓より刀子１、鉄片の副葬品。周溝より珠文鏡1。

第10号方形周溝墓……内部主体である木棺墓より変形文鏡、管玉各１の副葬品。

これら方形周溝墓が意味するところを整理したい。営まれた時期は古墳時代の前期である。

そして、周溝墓に埋葬された人々は地域の共同体を代表する首長であろう。そして又、福岡平野では特異な存在である方形周溝墓が形成された。以上の事実は本遺跡が古墳時代前期という階級社会を機構的に整備する時期的段階に、地域社会内における各集団に任される任務分業が特徴であり、他の集団に追随を許さない分業形態を示しているのではないだろうか。その分業の具体的形態とは何であったのか、それは海岸砂丘という遺跡形成の立地環境からして対外文化交渉の任務に置かされていたのではないだろうか。今後新しい類例を待って、課題としたい。

孰れにしても、今一度藤崎遺跡を学史的先学の発見資料と今回の地下鉄及びバスターミナル建設に伴った調査結果とをあわせ見て整理すると以下のようになる。１、縄文時代晩期に始まった墓地が営々と古墳時代前期まで続き、２、その中に砂丘上に形成されたという立地的環境の制約を受けたにしても、内陸部に比較して特異な埋蔵形態を営みながら、３、弥生時代終末から古墳時代にかけて、階級社会成立の時期に進んで行なわれたであろう地域社会内の機構整備に伴って、他の集団に追随を許さない分業の任について、各集団の集合体である地域共同体の首長級の地位についたと言える。この事については類推の域を出ないが、各地域の海岸砂丘遺跡の実態を把握する事により、事実にアプローチできるであろう。今後の課題としたい。

本遺跡の発掘調査による発見事実の細部については福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集（昭和56年発行）と福岡市同報告書第80集（昭和57年度発行）を参照されたい。

藤崎遺跡６号方形周溝墓

６号方形周溝墓出土の二神二車馬鏡

西新町遺跡は昭和30（1955）年「日本考古学講座４」に森貞次郎が北部九州弥生時代最終末の最後の弥生式土器として「西新式土器」の名を与えてから、修猷館高校前に広がる遺跡として知られて来た。

今次、路線内の遺跡調査では修猷館高校前一帯約500ｍ、6000㎡に遺跡の存在が確認された。弥生時代の甕棺墓は路線を細く横断するかのように30基が横たわって発見された。いずれも中期後半を示している。一般的に甕棺墓を主体とする北部九州弥生時代甕棺墓地は一単位少なくとも100基以上を数えるところから路線外も今後注目されねばならない。第10号甕棺墓には２個の南方産ゴホウラ製貝輪があって右手着装の状態で検出されている。又第19号甕棺墓には細形銅剣の切先部分が発見され、私見では人体刺突の結果と考えられる。孰れも、北部九州弥生時代共同墓地の様相と事象を同じくするもので一般的であり、北部九州弥生時代の墓制研究に資料を新しく追加した意義として把握したい。

本遺跡の大いなる成果としては弥生時代終末期から古墳時代前期に造営され居住された57軒の住居址をあげねばなるまい。集落の総合的分析は限られた路線内の調査という事も手伝って尚早と考えるが、土器編年研究上検出された資料は弥生式土器から古墳時代の土師器への移行期の遺物を包含するのが砂丘である事も幸いし、製作技法・胎土・焼成、そして多様化した土器形態の組合せを考える上で、充分研究者各位に答える姿を提供するものである。曖昧模糊としたこの時代の土器編年研究者各位が本遺跡出土資料をもとに大いに論じあわれ、本時代の土器編年を確立される事を期待してやまない。

弥生時代終末期から古墳時代初頭の土師器編年には曖昧な表現としてどちらの時代の仲間にも入らない「古式土師器」という表現が多々使用されるが、本遺跡は編年研究を学史的に又様式論的に見てこの用語を排除し、弥生式土器と土師器との境界を明確にしている。諸兄の批判を待つところである。詳細は福岡市埋蔵文化財報告書第79集（昭和57年発行）を参照されたい。

西新町遺跡　貝輪着装人骨

西新町遺跡の土器群

博多の地にはやはり中世の国際都市が眠っていた。

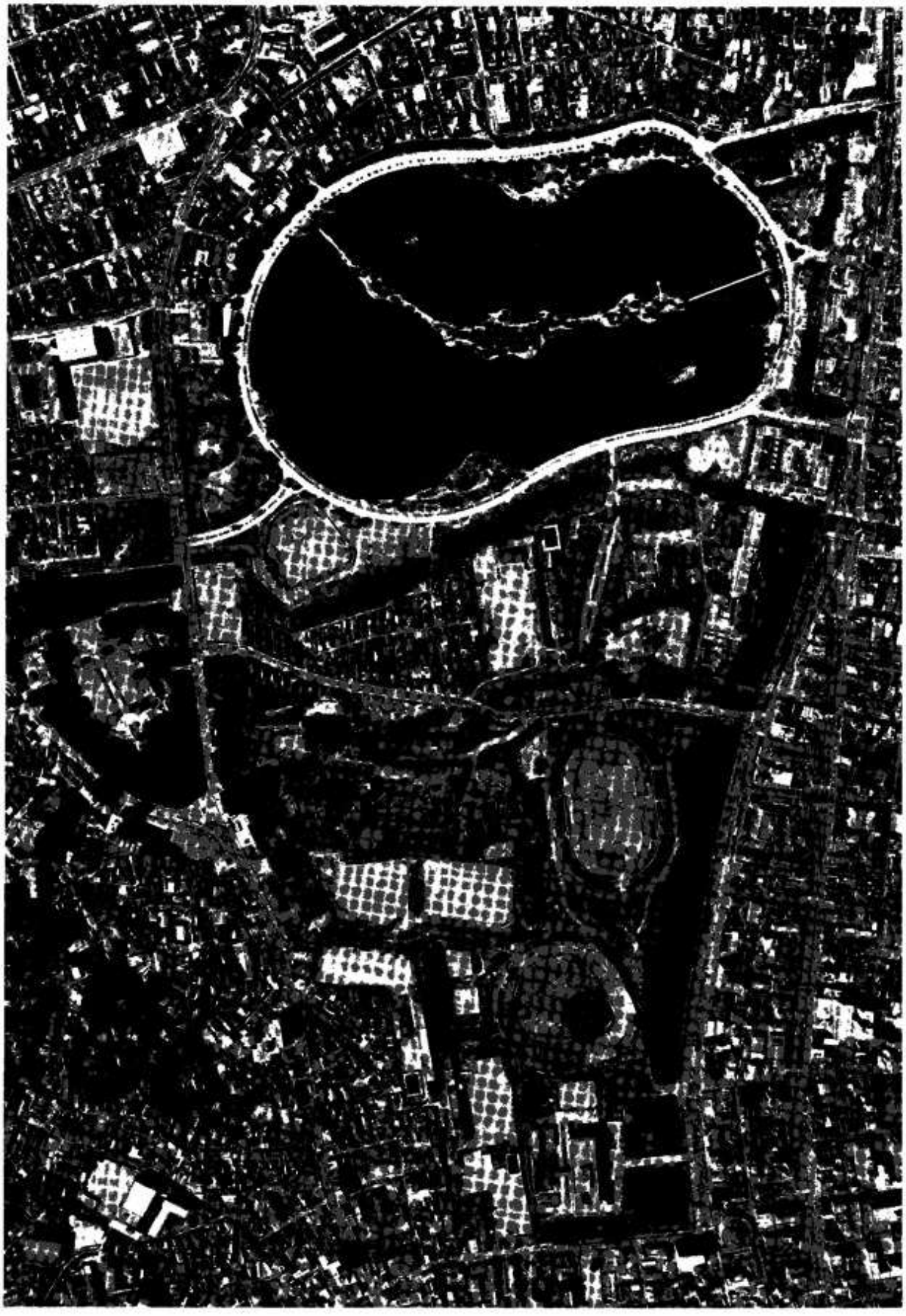
陝西省の耀州窯、山西省の霍県窯、河北省の定窯・邢窯・磁州窯、浙江省の越窯・龍泉窯、江西省の景徳鎮窯、福建省の徳化窯・同安窯・南安窯・泉州窯、広東省の広州西村窯・潮州窯。地下鉄路線内、大博通り拡幅道路、民間の各種工事に伴う17次等の調査で検出された陶磁器に対して中国やわが国の陶磁器研究者の鑑定によって与えられた産地名が上述の各地の窯で示される。疑わしき部分も若干見られるが、各鑑定者の意見を総合して考えた場合、新しい知見によって大幅な相違ある見解は出てこないと思われる。現在まで輸入陶磁器は博多地区の調査で数十万点発見されており、産地の窯が同定されたものは極めて一部である。しかしながら孰れにしてもこれら大量の輸入陶磁器は博多が中世の豊かな国際性を備えていた事を、歴然と実証するものである。

これら大量の陶磁器には墨書されたものがあり、使用された時期は区々であろうが、歴史事象に近ずく為の考証に一助を投入する意味で、重要な資料である。民間開発に伴う博多第４次調査の冷泉町７－１地内の調査結果の報告（「博多Ⅱ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第84集）によれば、「丁綱」・「王綱」・「恵」・「徳」・「朱□」・「吉匠」・「銭□」・「陳□」・「綱司」等の人名とその職分を表現したものが見られ、又「五口内」・「十口内」等々の注文の数であろう意味を示すもの、そして「僧図定」等の僧姓を示すものが見られる。以上の墨書陶磁器は「丁綱」等が中国に関係する人名と考えられた場合、中世博多の対外交渉史解明の上で重要な位置を占めていると言えよう。

今まで述べてきた遺物を包含する遺構には、真北に基軸をもつ東西南北の溝、現代の博多の街並平行の溝、時期差はあるが無数の井戸や墓等がある。真北に基軸をもつ溝は12世紀代までの遺物をもち、現代の街並み平行の溝は13世紀以後の構築である事が徐々に判明しつつある。孰れにせよ、これら性質を異にするであろう溝の時代を明らかにしてゆくことは中世博多の歴史の流れを把握する上で、重要な課題である。それは溝が道路と併行するものであり、溝と道路の方向性や区画が、当時の政治的力を背景とした結果として考えられるからである。

中世博多は歴史上、経済的国際性をいつ持ち始めたのか。そして又、その後の展開はどのように進んでいくのか。この問題は今からも続けられるであろう博多の調査が有意義な効率的調査となり得るかどうかの分岐点である。中世博多以前は律令体制に支えられた「大宰府鴻臚館」がある。大宰府鴻臚館は承和五（838）年に初見（「文徳実録」仁寿二（852）年十二月廿二小野篁卒伝）され、史料的実態は寛治元（１０９１）年になくなる。しかし具体的実態は中国への最後の使者が帰朝した承和五（８３８）年である。遣唐使の派遣の停止後は物質的交易のみに重きをおいた唐物使に委ねられるが、その唐物使が停止せられ、国家管理の貿易から地方官庁管理即ち大宰府政庁の管理に任され、換言すれば国家の直接貿易管理から間接貿易管理へと移行したのが延喜九(９０９)年である。この年が博多の貿易の始まりとされる。以下は次回を待つ。

Ⅱ．福岡城址内堀外壁石積の調査



史跡福岡城跡周辺部航空写真（高度 1,216m）

第１章　遺跡の立地と歴史的環境

１．立　地

国指定史跡「福岡城跡」は福岡市中央区城内にあり、博多湾をめぐって東西に広がる福岡市の海岸線のほぼ中央部にあたる。福岡市は東に那珂川、御笠川、多々良川の運搬・堆積作用による沖積平野である福岡平野、西に室見川などによる早良平野をひかえ、市街地はこれらの平野の上に発達をとげてきた。これらの沖積平野の低地部には、新生代第三期後期の「姪浜層群」あるいは「早良層群」と呼ばれる堆積物から成る島嶼状の丘陵部が認められる。早良平野における愛宕山、鳥原山、五塔山、福岡平野における荒津（戸）山、福崎、名島などがこれにあたる。福岡城はこれら島嶼状独立丘陵の１つで、平尾あたりから北へ向って伸びる最も大きな丘陵の先端部、福崎に位置している。

福岡城築城やその後の宅地開発等により多くの削平を受け、現在、旧来の地形を想起することは困難になりつつあるが、貝原益軒の『筑前国続風土記』や『福岡築城前之地形』（Fig.2）土質調査などの記録によって、それを復元することは可能である。やや長くなるが『筑前国続風土記

Fig. 2　　福岡築城前の地形

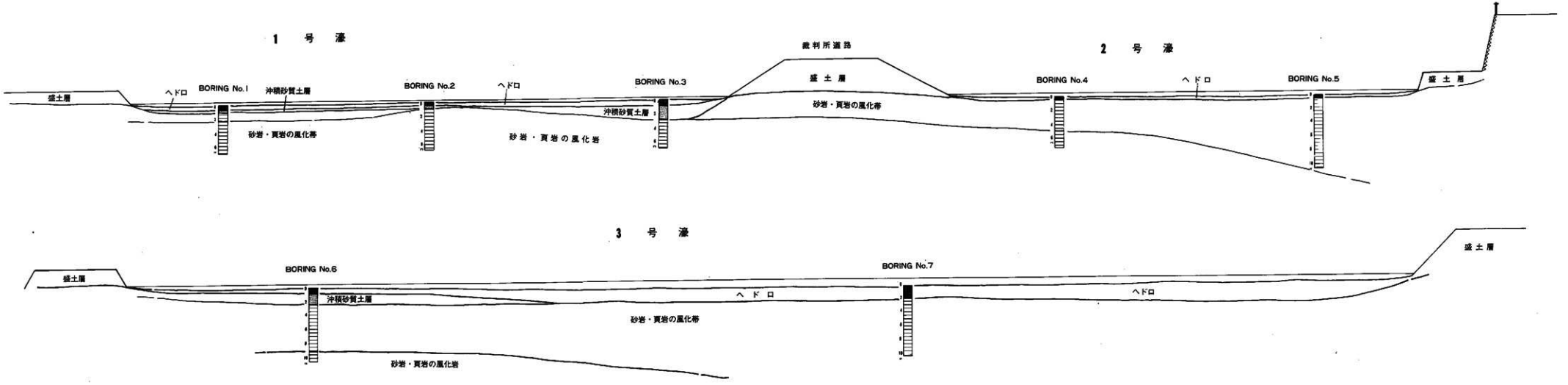
』の文章を引用してみよう。「城の西の方、むかしは福崎の汀まて入海有て、広き潮入の斥地なりしを、此城築るる時、是を埋て平地とせは、人力多く費いなん、是を用ひて要害とすへしとて、猶其地を掘りて、則塘に用ひらる。（中略）城の北の方町ある所、又乾の方荒戸、諸士の屋敷なと、むかしは入海の潟也。中にも荒戸山の下は、大船多く泊りける程の深き海なりしか、此城を築き玉ひし初、多くの人力を用ひて、やうやく海を埋め、終に平地として、士民の居宅となれり。又城の南方は、赤坂山より本丸の山につゝきて、要害のためあしかりしかは、山をほり切て隍とし、隍の南の山をならして平にす。城内のいぬゐに小高き山あり。是又本丸より高かりしかは、山をならしてひきゝ岡とし、如水公の兎袞の宅地とせらる。」これによると、西の大濠公園にあたるところは入江であり、荒戸山直下の海を埋め立て堀となし、南は丘尾切断により堀を設けて内郭としたのが明確である。このことは Fig. 2 の古絵図における福崎の丘陵の形状とほぼ一致する。

しかしこの古絵図は江戸時代半ば以降に作られたとされる住吉神社奉納絵馬の模写図の一つで、想像による部分もかなり多く、額面通りに受けとることは出来ない。個々の誤りについて論じる余裕はないが、城東の部分には触れておかねばならない。古絵図では冷泉之津という入江とされている一帯は、現在福岡市の中心街天神地区にあたり、那珂川等により形成された沖積地である。当然のように、いずれかの頃入海であったことは考えられる。これは昭和48年天神3丁目のビル工事において碇石[註2]が発見されたことからも明らかである。しかし同じく天神の西鉄電車駅工事や個人宅の井戸掘削の際に多くの中国産の磁器が出土していることから、古代末から中世にかけてのいずれかの頃には既に陸地化していたものと思われる。また『筑前国続風土記』に「郭の東南に長隍をほる。其東のはしの一区は、鍋島加賀守直茂より、加勢として人夫を多く援て、隍をほらせらる。」とあるのは、陸地を掘削したことの表現であろう。

城北の海に接する部分には須崎に到る長浜の砂丘が発達している。これは博多湾をめぐる左転回流によって形成された一連の砂丘群の一つで、本調査における石垣裏込め土層確認トレンチ（付図3～8）でも確認されている。荒戸山直下の海の埋立てとともに、この砂丘も更に埋め立て屋敷にあてたものであろう。

高速鉄道建設前の路線付近の綿密なボーリング調査や、福岡市教育委員会が堀浚渫のために行なった堀内のボーリング調査(折込図)などの結果によると、黒門東側と福岡地方簡易保険局西側の地点で第三期層岩盤は標高－10mにあり、国立福岡中央病院の北側から福岡家庭裁判所にかけて標高－2mとせり上り丘陵末端を思わせ、平和台球場北側では再び－11mと急激に落ち込み自然谷を示す。また平和台球場入口から赤坂読売ビルにかけて標高±0m前後に高まり、赤坂門交差点では－55mと極端に落ち込んで、旧県庁前付近の－33mあたりまで徐々に高くなってくる。赤坂の岩盤最高位を境に、西では洪積層は認められず、東側で－12m前後までほぼ

折込　　福岡城濠地層断面図（1／400）　福岡市教育委員会文化課　福岡城濠浚渫調査測量委託報告書1973より



水平に堆積が認められている。砂岩・頁岩から成るこの岩盤は著しい風化を受けており、堀はこの風化岩盤および沖積層を掘削したものであり、深さは堀中央部で標高－3m程度である。

城内の旧地形に目を転じてみよう。城内の西北に本丸より高い山があり、これを削平し御鷹屋敷を作ったという。ここは昭和54年の調査地点[注3]にあたる。昭和38・39年の福岡高等裁判所の改築にともなう発掘調査[注4]では、高等裁判所と平和台球場との間に大きな自然谷が確認され、高等裁判所の位置はかつて独立丘陵の景観を保っていたことが明らかになった。この結果は、先述したボーリング結果による岩盤の高低に一致している。また、昭和39年天守台（標高31m）から箱式石棺が発見され、他の地域が、削平、盛土などで地形の大きな変化を蒙っているのに対し、この地は、ほとんど旧地形に近い状態を残していることを示している。城郭全体としては前述のような地形利用から平山城の形状を呈している。

2．歴史的環境と調査研究

福崎丘陵の歴史的環境を見る場合、近世城郭としての福岡城、律令制下における大宰府鴻臚館という二つの視点をとることが可能である。この二点は、のちの福岡市の中央部にあって、近代以降の都市発展の基礎をなしたこと、古代日本の代表的客館を置き、対外の門戸として中世博多繁栄の契機となったこと等、九州の主都福岡市の歴史を観る上で極めて重要なところである。

福岡城に関する総合的な研究には、現在のところ管見に触れるものがなく、城郭概説書、郷土史等に概略述べられているにすぎない。大宰府鴻臚館については、中山平次郎博士[注5]、森克巳博士[注6]、亀井明徳氏[注7]らのその実相に迫った重要な研究があり、鴻臚館研究のためのバイブルとなっている。福岡城の歴史的環境については、付編5で田坂大蔵氏が詳述されており、また鴻臚館については中山、森、亀井氏の論文に詳しいので、ここでは福岡城内における調査を中心に述べるにとどめたい。

福岡城築城に際して、旧地形の削平、埋立が大規模に行なわれたことは前項で述べたところである。これを第一次の破壊と仮に呼んでおこう。幕藩体制の終焉以後の久しい間、城内は旧陸軍歩兵連隊の兵営とされ、更に戦後進駐軍ＭＰの本部となり、築城以来一般市民に開放されるまでの約350年もの間、まさに禁断の秘境とされていた。不幸なことではあったが、遺跡保護の立場からすれば幸いであったと言わねばならない。その間大規模な破壊から逃れえたからである。とは言え明治時代においてほとんど解体又は売却撤去され、堀は埋立てられ、城郭建造物の旧観が失なわれたのは文化財保護の他の一面からは悲しむべきことであった。

このような状況の中で、鴻臚館が旧福岡城内に存在したことを説かれたのは中山平次郎博士であった。中山説は、従来の鴻臚館博多官内町説に対し、警固所の位置と万葉集の古歌から、導き

出されたのであるが、これを更に強固なものとしたのは、年に一度城内が開放される招魂祭（ドンタク）の折（1915年）、城内で多量の古瓦散布地が発見されたことである。これを1926～27年にかけ「古代の博多」の一編として発表され鴻臚館福岡城内説が定説となるに到った。以後終戦に到るまで、玉泉大梁、鏡山猛、筑紫豊各氏の厳しい制限の中での古瓦採集が行なわれた。[註8]

戦後復興の中で第二次破壊のうねりは押し寄せた。その第一波は昭和23（1948）年秋の第三回国民体育大会の競技場の造成であった。中山博士が特に重要地点であると指摘された、現在鴻臚館と推定されている区域である。以後、この競技場の平和台市民球場への改造（1949年）、球場入口の拡張により土砂を削って堀を埋める（1951年）、球場のナイター鉄塔の建設（1954年）と破壊は続く。1957年に国指定史跡となったにもかかわらず、西鉄ライオンズの黄金期と重なり、同年球場の根本的な改造[註9]が行なわれ、庭球場の土塁の無届切取工事（1958～9年）、三の丸への国立病院建設（1959年）、バレーコートの無届掘削（1963年）、福岡高等裁判所の建設（1964年）と文化財保護の無法時代とも言うべき時が続き、福岡城と鴻臚館跡の破壊、とりわけ鴻臚館跡の壊滅的破壊は既に取り返しのつかないところまで進んでしまった。[註10]

この間、高野孤鹿、大場憲郎氏をはじめとする人々によって多くの遺物が採集されていたのは、せめてもの救いであった。この高野氏の採集された遺物は、その中に多量の越州窯陶磁器が存在していることを小山富士夫氏が認定するところとなり、それまで出土量の少なかった我国の越州窯陶磁器の実態を把握する上で重要な資料となったのは言うまでもない。また、「小蔣」銘の硯も呉越商人の来泊したことを示すものとして重要である。高野氏の資料は、現在福岡市立歴史資料館、出光美術館に収蔵されており、付編２、３で紹介することになっている。

数回の発掘調査も行われた。1951年の球場入口の拡張のための土取りによって礎石と思われる大石が発見され、九州大学九州文化総合研究所が調査を行なっており、調査結果は付編４に掲載されている。また、福岡高等裁判所の建設に先立ち福岡県教育委員会によって行なわれた1963、64年の二回にわたる発掘は、トレンチ調査とはいえ、福崎の地に初めて本格的な調査のメスが加えられたものとして評価されよう。[註11]その結果、前項で述べたように高等裁判所の西半と本丸丘陵東端との間に広い自然谷のあることが確認され、旧地形を復元する上での重要な知見が得られたのみならず、鴻臚館の位置を推定するのに良好な資料となった。

1957年に国の史跡として指定されたにもかかわらず、しばらくの間先述のような状態が続いたが、福岡市における文化財保護行政の充実も徐々に計られ、1977年以来、史跡福岡城の城址公園「舞鶴公園」としての保存整備事業も着々と進みつつある。戦後建てられた大学校舎等の移転（1970、75～76年）をはじめ、築城当時の位置に現存している唯一の櫓である重要文化財多聞櫓の解体復元工事[註12]（1972～75年）、城内各地（８ケ所）にある危険な石垣の保存修理工事[註13]（1971～76年）、市指定文化財名島門・県指定文化財母里太兵衛邸長屋門の補修工事（1978年

）、県指定文化財潮見櫓の補修工事（1980年）などである。これと併行して、保護・活用の一層の充実を図るため城内の環境整備事業も行なわれている（1977～80年）。

史跡の保存を第一に考慮し、整備によって遺跡が破壊を受けることなく、基本的には事前の発掘調査をもとに整備がなされるべきであるという整備を行なう上での理念に立って、1979年に黒田如水の隠棲地とされる福岡大学校舎跡地の発掘調査が福岡市によって行なわれた。数本のトレンチによる確認調査の結果、2本の溝と礎石が検出され、中国陶磁、国産陶磁、瓦など多くの遺物が出土した。[註14]

堀に関しても、県指定天然記念物ツクシオオカヤツリの保護の立場から、3mにも及ぶ堀内へドロの浚渫の必要が生じ、その際の基礎地盤の石垣に対する安全性を確認するためボーリング調査が行なわれた。その結果、堀城内石垣はやや風化の強い基盤上に、松材の胴木を用いており、比較的安定していることが確認された。明治以後に堀を埋められた天神地区においても天神地下街の工事の折に立会調査を行ない、肥前堀の位置を再確認し、今回報告の地下鉄路線内の石垣調査、赤坂1丁目石垣調査も次々と行なわれ、郭外の実体も明らかにされつつある。

1978年秋、球場施設の老朽化により内外野席の改装、外野人工芝化が計画された。文化財関係者は鴻臚館遺構確認の必要性を叫んだが、当局は地下に大きな影響を与えぬよう、全面人工芝に方針を変え、鴻臚館跡は今回も陽の目を見ることなく、緑の人工芝の下に隠蔽されてしまった。この年、皮肉にも新装なる平和台を捨て、ライオンズは埼玉へ去った。

註1　金子堅太郎　「黒田如水傳」　文献出版　1976年　所収

註2　元寇碇石と呼ばれた碇石も、近年北宋代に遡るものがあるとされる。

註3　福岡市教育委員会　「筑前国福岡城三の丸　御鷹屋敷」　福岡市埋蔵文化財調査報告第59集　1980年

註4　長沼賢海、渡辺正気他　「史跡福岡城発掘調査概報」　福岡県教育委員会　1964年

註5　中山平次郎　「古代の博多」(1)～(7)　考古学雑誌16巻6～17巻10号　1926～27年

註6　森克己　「日宋貿易の研究」　国立書院　1948年

註7　亀井明徳　「大宰府鴻臚館の実像―構造と遺跡の再検討―」古文化談叢第1集　1974年

註8　鏡山猛　「大宰府遺跡」　考古学ライブラリー4　ニュー・サイエンス社　1979年

註9　小田富士雄　「福岡市福岡城跡採集遺物調査報告書」　福岡市教育委員会　1961年

註10　高野孤鹿　「平和台の考古資料」（プリント）　1972年

註11　註4に同じ

註12　「史跡福岡城跡環境整備報告書」　福岡市教育委員会　1980年

註13　「重要文化財　福岡城南丸多聞櫓修理工事報告書」　福岡市教育委員会　1975年

註14　註3に同じ

第２章　調査の経過

古代・中世の博多が東アジアにおける日本の役割を代弁する存在である事は広く知られるところで、外来文化の受け入れ、摂取がこの時代の文化発達の主な特徴となっている。そして、近世の博多は、福岡城が築かれる事によって、商業的属性に比重がおかれるようになった。福岡が政治的属性にあって、博多が商業的属性にしめられながら発達していった事を考えるなら、福岡市の近世は一見この相異する性格の存在が相互に連携し合って発達していったと言える。福岡・博多の中世・近世の研究は都市史研究の上でも極めて重要である。そういう意味において、福岡城の研究は意義あるものであり、今次調査は、内堀の石垣と桝形門に続く薬院新川の石垣のみであるが、本研究に基礎的資料を提供するであろう事を確信するものである。

福岡城の特徴は後章で詳細に述べられるであろうが、次の三点が上げられるであろう。近世の城は内堀と外堀が設けられるが、本城は外堀をもたない。外堀は北の博多湾、南の大休山、西の室見川、東の那珂川という自然地形が最大限に利用されたのである。その第二点は城下町を四の丸にしたということである。その第三点は天守台は設けたが天守閣は築かれていないという点である。これら三点の特徴的発想は文禄・慶長の役の朝鮮出兵の折、攻めあぐねた晋州城（韓国慶尚南道晋州市）を模倣したとも伝えられているが、黒田長政が肥後の加藤清正についで石垣築の名門に上げられるゆえんでもあろうか。

本城の築城から現在までの流れを記すと次のようになる。

○築城以前

慶長５年（1600）９月　関ケ原の戦い（当時、黒田家は豊前12万石の大名。この戦いの論功行賞で筑前52万石の大名となる）。

慶長５年（1600）12月　筑前国に入部、小早川家の居城である名島城に入る。

○築城

慶長６年（1601）　福崎（旧那珂郡警固村）に本城の築城開始。

慶長12年（1607）　新城と城下町完成。黒田家曽祖父高政の居住地であった備前国邑久郡福岡の名を借り「福岡城」とする。今回の参考資料として堀幅は30間（約50ｍ）と伝えられる。

○城の倒壊（今次調査との関係資料）

明治22年（1889）３月　桝形門(現在の福岡市歴史資料館付近)とそれにつながる城壁が撤収される。福岡市の発足で福岡城と博多の街を分離する城塞は不必要となった為。

明治43年（1910）　第13回九州沖縄８県連合共進会が開催される。道路拡幅と市内電車

（旧福博電車・元西鉄電車）敷設の為、福岡城内堀の北側部分が埋められる。難工事で２年かかったと当時の新聞は伝えている。

○福岡城の保存

昭和32年（1957）　福岡城、国の「史跡」に指定される。指定の範囲は内堀から内側に限られたが、今回の調査で発見された内堀の北側の石垣線はこの時点では明らかでなく、含まれなかった。故に今回の発見は指定の範囲を広げるか否かの火種を残したと言える。

○埋没石垣との再会

昭和51年（1976）４月　地下鉄荒戸工区の工事が始まる。

同　年　５月　内堀北壁石垣を発見

同　年　12月　本格的調査を開始する。これまでの間工事は石垣に関係ないところは進められた。断っておくが、全面的に工事はストップした訳ではない。

昭和52年（1977）10月　調査は全て完了する。調査対称は総延長１ｋｍ、発見された石垣は450 ｍである。保存状態の良好な地点でかつ、石垣築造技術上重要な地点は下の橋（現在の大手門）の入口、福岡家庭裁判所前、サントリービル前、赤坂門バス停前等である。これらの地点は東西の石垣線と南北の石垣線が交わって90度のコーナーを作る部分であり、入念な築き方を感じさせる部分である。発見された石垣は全面保存、部分保存、移築保存かの選択を受ける訳だが、部分保存が選ばれ、下の橋の入口を除いた部分が保存され、赤坂門は公開保存の施設をもち毎週公開されている。家庭裁判所前とサントリービル前の石垣は地下に眠っている。他の石垣の石は城内石垣の補修用に収集され、他方では九州大学の医学部の公園に活用され、患者に安らぎを与えているところであり、調査者の喜びとするところである。

調査協力者は以下のとおりである。心より感謝申し上げ、益々の御活躍を祈念したい。

〔福岡大学〕　瀬口明宏　松尾　修　久保山正　篠崎　寿　青木一夫

〔熊本大学〕　田中寿夫　平野芳英　西村真一　高瀬哲郎　渡辺一雄　嶋田光一　林誠二

〔静岡大学〕　小木曽隆　守屋勝利　佐藤正知　長沼　孝

〔大正大学〕　石井　穂

〔九州芸工大〕河原吾一

〔明治大学〕　高倉浩一　青木和明

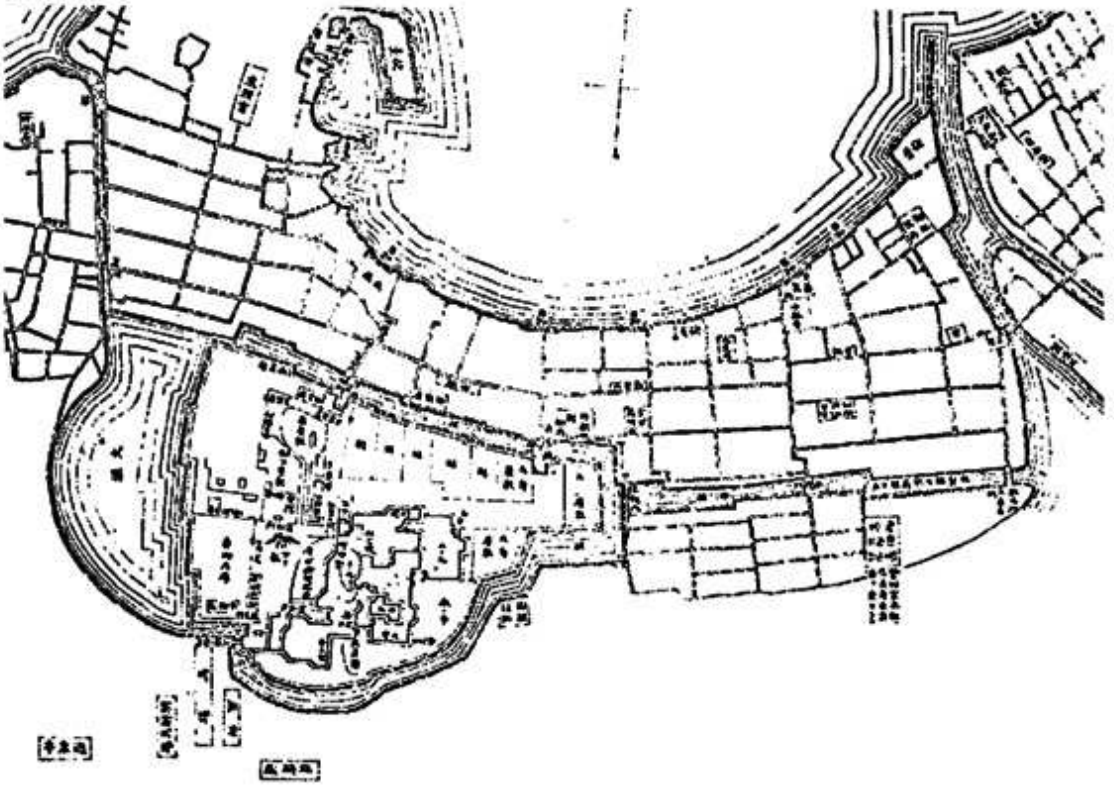


Fig. 3　福岡城之図（江戸時代）

Fig. 4　福岡城地図（大正初年）

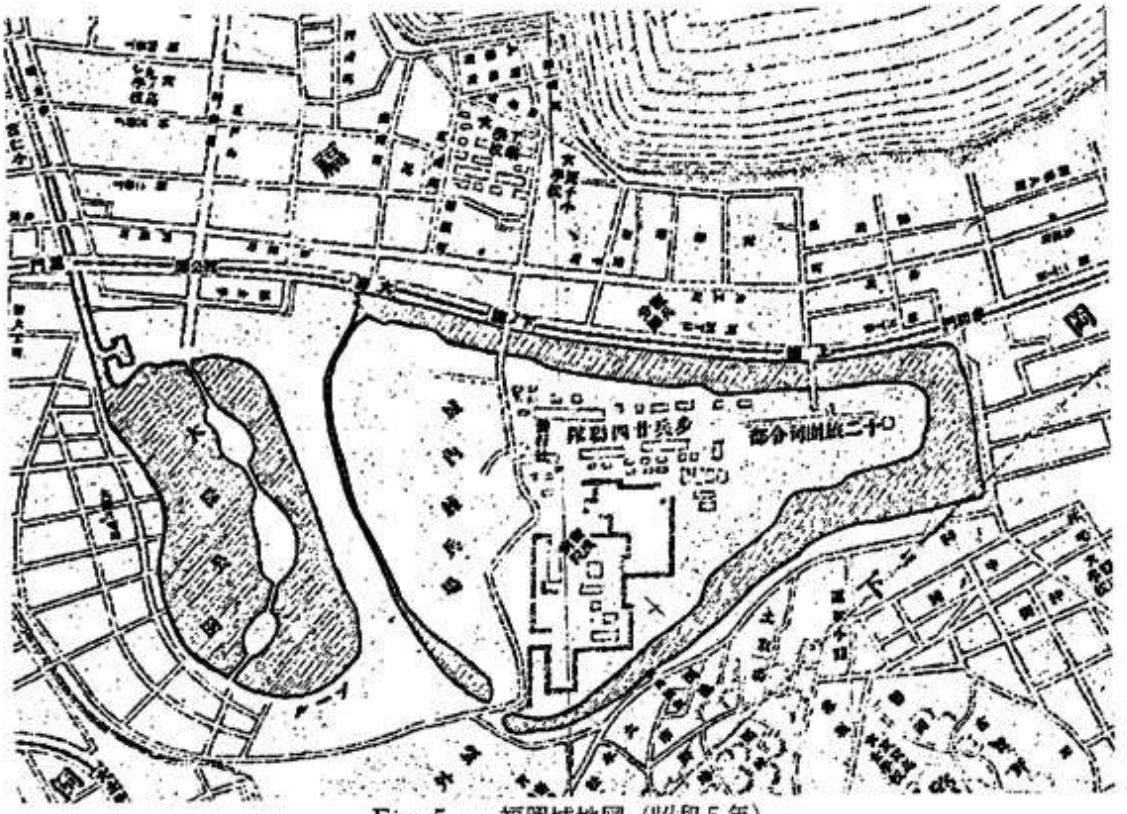


Fig. 5　　福岡城地図（昭和5年）

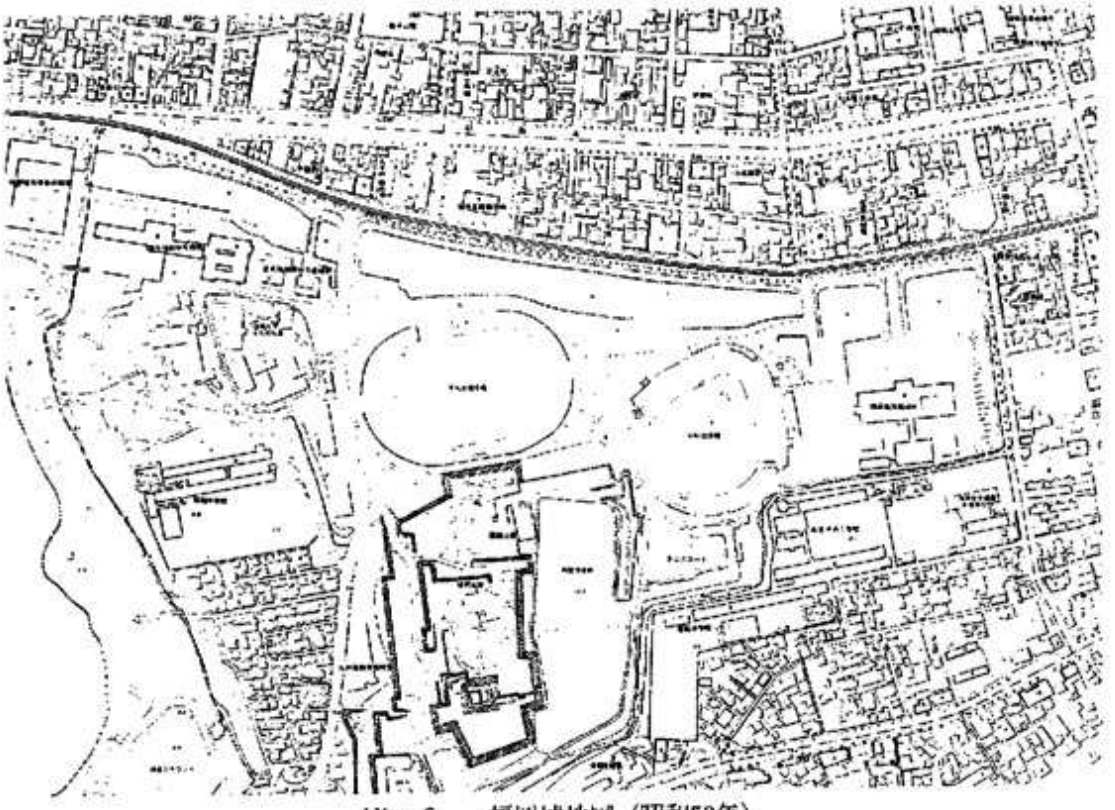


Fig. 6　　福岡城地図（昭和53年）

福岡城堀石垣の調査経過

1976年5月1日	荒戸工区で、地下鉄覆工時に福岡城堀石垣が発見される。
12月18日	荒戸工区の石垣線の確認調査を開始。
1977年1月18日	荒戸工区石垣の航空写真測量などを行なう。
2月4日	第2回地下鉄指導委員会議、石垣調査の方針を定める。
2月12日	平和台西工区の石垣線確認調査開始、下の橋に続く石垣横断部を検出。
2月21日	平和台東工区・赤坂工区の石垣線調査開始。
2月25日	赤坂工区石垣で2回にわたる増築が確認される。新石垣裏込めから「天保十年月庭」銘の墓石が出土。
2月26日	赤坂工区石垣線が、新旧入隅より更に東に延びることが判明。
3月1日	赤坂工区の読売ビル～井上整骨院間の歩道の試掘、石垣発見されず。
3月3日	平和台東工区サントリー前で、石垣入隅が確認される。
3月14日	平和台東工区ポンプ室石垣線の調査。岩盤のせり上りが明瞭。
3月16日	赤坂工区歩道に石垣線確認トレンチを入れる。
3月23日	岩石サンプル採集開始。
3月29日	赤坂工区航空写真測量開始。
4月5日	第3回地下鉄指導委員会議。
4月8日	平和台西工区航空写真測量開始。
4月23日	荒戸工区から石垣裏込めのトレンチ調査開始。
5月10日	平和台西東工区の航空測量不可能部分の石垣側面実測開始。
5月12日	Ⅱ・Ⅲ区石垣のトレンチ調査開始。
5月28日	Ⅳ区石垣のトレンチ調査開始、以後Ⅴ・Ⅵ区と続く。
6月7日	第4回地下鉄指導委員会議。一部現状保存、他は記録保存の方針が出る。
6月19日	Ⅳ区東側トレンチ裏込めで多量の古代瓦、中国陶磁が出土しはじめる。
7月11日	Ⅶ区の石垣延長線のトレンチによる確認調査を開始する。
7月29日	当初石垣がⅥ区入隅部より東に約110 m延びることが判明する。Ⅳ区入隅部の東に古い入隅のあることを確認。
9月5日	古瓦・陶磁器を多量に含む裏込め粘土の人力掘削を開始し、遺物の採集につとめる。
9月24日	堀石垣関係の調査完了。
1978年3月23日	薬院新川石垣調査開始。
6月22日	薬院新川石垣調査完了。石垣撤去後、旧位置に復元することになる。

第３章　調査の概要

１．第Ⅰ区の調査（付図３）

水堀は土台なく石垣を築候ては危き故、生松木を以胴木を入其上より石垣を積ば全こたへ申也。所次第胴木に控杭有べし。鉸を以松木継目留丈夫にして積べし。或は石垣築節は水なく跡より水堀に相成候所も右同前也。松は水中にあれば朽くさり申事なく数百年こたへ岩のごとくに成もの也。地形悪敷ば二本ならべもよし。草填も土中水中に用ひ申事大きにこたへよき也。砂浜に築時は根切深くして草填を土台にして石垣を積也。掘立の節砂故埋申時は砂を俵にして砂留にして掘立すべし。此土台は必草填也。或は海縁にて石垣へ水つき申所は尤深く掘立をして、草填を以組土台かささら土台を入、石垣炬強く築也。是も石垣のまへにすて石有べし。砂は掘れ安きもの故かくのごとし（喜内敏「城石垣の秘法と史料」の「後藤家文書」抜粋、探訪日本の城所収。その他城の石垣について「石垣組立秘伝」（岩手県立図書館蔵）・「愚子見記」（大阪府立図書館蔵）・「土鑑用法口訳」等があると喜内氏は指摘している）。

栗石の詰めようは土台の長さ程の分栗石を入るる。さて裏土にて栗石を堅むる也。至って堅くするときは、栗石を三角に置く也。又云はく、裏土と云ふは、土に小石を交合せて石垣を詰め、其の次に常の土を入るる也。又云はく、栗石とは石垣の内を栗石にて詰むこと也。下ほど栗石を沢山入るるがよし。裏土とは石垣の内の土也。これは右の如く栗石にて詰め、其の後へ常の土を入るる也。兎角裏土の石へ付かざるやうにすべし（喜内敏の同書の「武教全書」抜粋）。

福岡城の石垣の構築についてその技術的方法を記したものは現存していないと聞く。これは上述の文献が築城後も残されたというのは極めて稀の事で、技術者が完成後刺客に惨殺されるという非業の死を遂げたというのが一般的見識であるようである。故にもって拙策ながら、上記の文献を記す事により、今次福岡城の内堀の外壁石垣の調査結果と照合する事により、果して一定の方式によって福岡城の内堀が築かれたか否か、見て行きたいと考えたのである。

内堀の石垣Ⅰ区は全長約50ｍある。西端は何らかの作用が働き、調査時には既になく、ここではその原因は追求しない。東端は既存の建造物により壊されていた。Ⅰ区石垣で基底部から天端の石まで残存しているのは極く一部分で西端部分がその状態を保っている。石垣の表面を観察すれば全て自然石と思われる石礫の野面積で丁寧とは言えない。基底部は標高０ｍに奇しくも同一の基準でもって存在し、そこから天端まで残っている部分の高さは1.9ｍを計るにすぎない。しかし、この高さは文献がしめす数値と大体の一致をみている。基底部の基盤は全て砂である。その基底部の基礎的工事の施しは為されたかどうかは今回の調査では判明していない。

裏込の状態を見るために、任意に３本のトレンチを設定し、観察を試みた。１本目は西端よ

り７ｍ、（Ⅰ－１トレンチ）、２本目は１本目から15ｍ（Ⅰ－２トレンチ）、３本目は２本目より12.5ｍ（Ⅰ－３トレンチ）の位置にそれぞれ設定した。

Ⅰ－１トレンチの層位は22層を数える。それを以下に示す。

①灰黄褐色を呈し、ブロック状の粘土が混入しもろい。②粘土を主体として、幾分砂混りの灰褐色層。③鉄分を多量に含み、灰色を呈す。④鉄分混入の灰色砂層。⑤褐色粘土層で、粘土はブロック状に入っている。⑥赤褐色粘土層。⑦明灰色砂層。⑧暗灰色砂層。⑨明褐色砂層で粘土のブロックが点在する。⑩暗灰色砂層。⑪⑨層と似ているが粘土が多い。⑫暗灰色砂層。⑬明灰色砂層。⑭黒灰色砂層。⑮白灰色砂層。以下㉑層まで省略。㉒茶褐色粘土層で小礫を含む。

Ⅰ－２トレンチの層位を以下に示す。

①頁岩風化礫層。②頁岩風化礫混り灰黒色荒砂層。③黒色土層。④明灰色砂層。⑤明白色砂層。⑥暗灰色砂層。⑦明灰茶色砂層。⑧頁岩の小礫混り砂層。⑨粘質青灰色砂層。⑩茶色砂混り茶青色砂層。⑪頁岩の風化小礫層。

Ⅰ－３トレンチの層位を以下に示す。

①頁岩小礫混り明褐色粘質土層。②頁岩小礫混り黄褐色粘土層。③頁岩小礫混り赤褐色粘土層。④青色粘土層。⑤黄褐色粘土層。⑥茶褐色粘土層。⑦黒褐色粘土層。⑧砂層。⑨茶褐色粘質砂礫層。⑩頁岩風化礫層（ギッシリ詰まっている）。

以上が３本の裏込め用観察トレンチの層の順序である。

図化された断面図のⅠ－１トレンチが①層と㉒層、Ⅱ－２トレンチが①・⑪層、Ⅰ－３トレンチが全ての層がそれぞれ裏込めとして人為的に埋められた層である。しかし、今次の調査で把握された断面の土層図は石垣使用の最終段階を示しているのであって、石垣の築造時の段階を示しているものではない。石垣の状態が調部付近でふくらみ非常に不安定な感じをもたせるものがある。その状態から判断して、この石垣が築かれて遺棄されるまで何回かの修復を余儀なくされたであろう事は想像にかたくない。このように考えた場合、当初の石垣築造の手順はどのようなものであったであろうか。Ⅰ－１トレンチの⑫層、Ⅰ－２トレンチの⑧層、そしてⅠ－３トレンチの⑪層がその問題に答えているようである。当初の築造段階では大きな掘り方を以って、石を一段積み重ねる毎に裏込めに、表面石垣の調整の為に剥離石や小礫等を砂や粘土と混入させ、固めながら、一段ずつ築いて行った事を３本のトレンチの層が示していると言えないであろうか。

考古学的手法で見る時、表面的には乱暴で性急な感じが持たれる状態の中にも、統制のとれた一定の基準を前提とした技術的方式がある事に気づく場合が多々ある。福岡城内堀外壁の石垣の構築も為政者の要求に迅速に答える石工達の長年磨いてきた技術に対する誇りを感じない訳にはいかないのである。

２．第Ⅱ区の調査（付図３）

第Ⅱ区は第Ⅰ区から道路に平行に東へ延びる石垣が、調査区外道路北側の大手門ビルの敷地内でコーナーを持ち南に折れて道路を横断する部分である。確認された石垣長は約11ｍを測る。遺存状況は地下鉄工事の中間杭や壁柱工事によって、一部は完全に破壊を受けたりしてあまり良好ではない。発掘調査は昭和52年２月より実施した。調査はまず石垣全体を検出し、写真測量後地下鉄工事の中間杭を基準に北側Ｎ－１～６ｍ間と南側Ｎ－7.5～11ｍ間にトレンチを各１ヶ所設定し、北側を１トレンチ、南側を２トレンチと名称し、石垣裏込めの調査を実施した。

石垣は基盤面である灰白色砂層より根石を配せず直接積み上げる。石垣の構築状態はＮ－１～６ｍ、7.5～11ｍ部分で若干異なる。遺存状況はＮ－１～６ｍが５段、Ｎ－7.5～11ｍが４段迄残り、その高さは1.2～1.3ｍ、1.1～1.3ｍと若干Ｎ－１～６ｍが高い。壁石は全体に形が不揃いな自然石を使用している。Ｎ－１～６ｍでは腰石に一部1.0×0.3ｍの細長い石材を使用する外は、上も下もほぼ30～40cm前後の石材を用い、やや勾配を持って積み上げる。Ｎ－7.5～11ｍでは下部の２段が30～50cm前後、上部の２段が60～70cm前後と上が若干大きく、３段目がやや前にせり出すがほぼ直立気味に積み上げている。石材はＮ－１～６ｍより全体に大きい。石積み自体は全体に余り丁寧でなく、部分的にはＮ－7.5～11ｍ部分の様に煉瓦積み的な所も見られるが、全体的には乱石積みである。しかし各段の高さを整えようとする意図は窺われる。各壁石間には小さな割石や栗石をつめ、壁石の安定を計っている。

１トレンチ　基盤面の灰白色粗砂より上は次の通りである。灰褐色砂、赤褐色砂、明黄褐色砂、灰褐色粘質砂、明灰褐色砂、灰色砂、黄褐色砂、赤味を帯びた黄褐色砂、白色砂、茶褐色砂、頁岩風化礫混り粘土、青灰色砂となりその上は攪乱である。灰褐色砂から茶褐色砂迄は自然堆積である。石垣掘り方は石垣前面より約２ｍ程控えた所より掘り込み、基盤の灰白色砂迄緩やかに掘り込んでいる。石垣裏込めは、まず壁石の裏側の隙間に10cm前後の扁平な石材を詰め込み補強し、その背後を多量の20～40cm前後の割石、小栗石と共に下層で青灰色砂又は暗灰色粘土、上層で黄灰色粘土又は頁岩風化粘土を用いて強く踏み固めて裏込めしている。

２トレンチ　基盤面の灰白色砂から上は、暗褐色砂、明褐色砂、暗茶褐色砂、赤黄褐色砂、赤褐色頁岩風化礫粘土となる。掘り方は石垣前面より約２ｍ控えた地点から始まり、赤黄褐色砂より腰石上面迄緩やかに掘り込んでいる。裏込め状況は１トレンチとほぼ同様であるが、異なる点は掘り方上端の壁石３段目上面より上を暗赤褐色頁岩風化礫粘土で埋めている点である。

出土遺物　石垣前面の濠内堆積土より近世の陶磁器・瓦・日常雑器・ガラス製品等が出土しているが、裏込めからの出土はない。砂層より青磁片・土師器片の細片が少量、黒曜石石鏃が一点出土している。いずれも磨滅を受けている。

3．第Ⅲ区の調査　（付図4）

第Ⅲ区は横断部分のⅡ区から下の橋部分でコーナーを持ち、道路に平行に東へ延び家庭裁判所の西側で南へ直角に折れる部分である。石垣はこの地点の調査区南側歩道部分でコーナーを持って、東方向に延びⅣ区に連なっていく。第Ⅲ区で確認された石垣長は東西方向で56.5m南北方向で5.5ｍである。遺存状況は地下鉄工事等の攪乱を受け、部分的に壁石がほとんど抜かれ裏込石のみの所があるなどして、余り良好とはいえないが、しかし東側コーナー部分は一部天端付近迄残る部分がある。発掘調査は昭和52年２月より実施した。調査はⅡ区と同様に石垣全体を検出した後、石垣ラインの西側、中央、東側コーナー部分にトレンチを３ケ所設定し、裏込め・掘り方及び土層状態の調査を行なった。

石垣壁面　石垣は直接灰白色又は青灰色砂層より積み上げられるが、一部小ぶりの根石を腰石の下に詰める所もある。石垣の残存状況は東西方向部分では平均３～４段残るが、西側では孕んで崩れ気味であったり、地下鉄の中間杭にかかった部分では壁石が抜かれ裏込め石のみという所もある等で、必ずしも良好でない。しかし、東側の南へ折れるコーナー部分と横断部分は壁石の残りが良好で、６段迄残りほぼ天端付近迄残る部分もある。Ⅲ区での東西方向部分の石垣の平面ラインはほぼ直線で凹凸は見られず、横断部分とのコーナーの角度は直角である。確認した石垣から復元した濠幅は58～62ｍであり、平均60ｍとなる。石垣現存高は基底面から平均90～120cm程度残り、残りの良好なコーナー部分で190cm測る。壁石の構成は腰石も上部の石材もほぼ同程度の石材を用いるが、部分的には長さ１ｍ前後の長大な石材を用いている。一種の石積みの工夫であろうか。石材の形状は不揃いであるが、一般的に横長に積み上げており、一部の石材は面取り加工を施している。石積みは全体にあまり丁寧でなく、目地もはっきり通らない乱石積みに近いが、横断部分のように部分的に上下・左右に目地が通る重箱積みが見られる所もある。そして、各壁石間には小さな割石や転石を詰めて壁面の強化を計っている。部分的に扁平な割石を詰めるなどして打ち込みはぎ的様相を呈す所もある。

１トレンチ　石垣西側に設定したトレンチである。基盤面の灰白色砂より上は次の通りである。白色粗砂、赤褐色細砂、暗灰白色粗砂、頁岩風化礫混り青灰色粘土、青灰色粘土混り頁岩風化礫、頁岩風化礫（粘質で若干砂混り）、及び攪乱層である。灰白色粗砂層より上層暗灰白色粗砂層迄は、水平な堆積状態を呈し自然堆積である。しかし、その上の頁岩質風化礫混り土は、福岡城築造時の整地工事によって作り出された排土を埋めたものと考えられる。石垣裏込めは石垣前面から幅2.5ｍ程、高さは基底より1.2ｍを測る。石垣掘り方は頁岩風化礫混り、青灰色粘土より掘り込み、前面約２ｍ程離れた所から始まっている。壁石は勾配を付けず、ほぼ直立に積み上げるが、余り奥行きは持たない。掘り方内は大は50cm前後の平均30～40cmの大き

な栗石を多量に用い、頁岩質風化礫粘土を絡めて裏込めし、その背後を大量の頁岩質風化礫粘土で埋めている。本来の石垣掘り方は掘り方上端より60cmの深さしかなく、壁石の大部分は裏込め石と頁岩質の粘土で補強したものと考えられる。

２トレンチ　中央部分のトレンチである。基盤面の青灰色砂より上は次の通りである。白色粗砂、灰茶褐色砂、白色粗砂、灰黄褐色粘土、暗青灰色粘質砂、頁岩風化礫混り茶褐色粘質砂、頁岩風化礫混り灰褐色砂となる。白色砂迄はほぼ水平に堆積し自然堆積と考えられる。裏込め幅は石垣前面から2.30m程あり、その高さは基底面から１.５ｍを測る。石垣掘り方は大きく２段階で検出された。第１段目の掘り方は石垣前面から約４.５ｍ程離れて暗青灰色粘質砂より掘り込んでいる。２段掘りを呈し、深さは75cm程度と浅い。第２段目の掘り方は約５.３ｍ程離れた所から始まる。頁岩質風化礫混り茶褐色粘質砂から緩やかに第１段の掘り方の平垣面迄階段状に掘り込んでいる。壁石は３割程度の緩やかな法勾配を持って積みあげており、壁石の奥行きは腰石程大きくとり、安定を計っている。壁石自体の安定を計る裏込めは、10～40cm前後の比較的大ぶりな石材と頁岩質の礫混り灰褐色粘土で行なっている。

３トレンチ　石垣のコーナー部分に設定した。基盤面の白色砂より上は次の通りである。暗灰褐色砂、暗黄褐色砂、灰褐色粘土、白色砂、黄灰色砂、灰色粘質砂、赤褐色砂、そして、攪乱となる。暗灰褐色砂より上は頁岩の風化礫を少量混えたりして汚れが見られ、又堆積状態が複雑である事から人為的堆積と思われる。土層の観察では明確な掘り方ラインは確認出来なかった。壁石は高さに対して法２割の勾配を持つ。裏込め幅は約１.５ｍと他部分に比べて狭い。これはこの部分の石積みが他部分に比べ比較的大きな石材を用い、積み方も堅固な為によると考えられる。又トレンチで掘り方が確認出来なかったのは、自然堆積面が低く掘り方を掘りえなかったのと、この部分の裏込めが粘土ではなく、軟弱な砂である事に起因している。壁石の裏込め状態は、壁石が複雑に噛み合うコーナー部分の為調査は出来なかったが、その基底部分には幅60cm位の捨石を置いている。横断部分の裏込めは、約１ｍ程で東西方向の部分よりも薄い。これは横断部分の長さが東西部分の長さに比べ短く、さほど充分な裏込め作業を必要としなかった為と考えられる。

出土遺物　石垣前面の濠内堆積物より大量の近代陶磁器、瓦、日常雑器、ガラス製品等が出土した。濠が埋められる前の明治時代の遺物が多い。しかし、石垣裏込めからの出土遺物は少ない。近世の瓦が少量出土している外、縄目叩きを持つ古代瓦や土師器、須恵器、青磁片が若干出土した程度である。古代瓦は石垣裏込めの赤褐色粘土より出土した。

4．第Ⅳ区の調査（付図5）

第Ⅳ区は、地下鉄路線内で確認された石垣線のうち福岡家庭裁判所東端付近から大手門公団住宅東端付近までの石垣線約207ｍの区間であり、側壁柱で分断された各石垣線中最長である。地下鉄の工区では、平和台西工区（株．鴻池組担当）の東端から、平和台東工区（株．日本国土開発担当）の西端にあたる部分である。地下鉄工事の里程で言えば5ｋ747ｍから5ｋ938ｍにあたる。

調査は昭和52（1977）年2月中旬に石垣線の確認から開始し、堀内の掘削、石垣前面の清掃、裏込め部の清掃、航空測量写真の撮影、岩石分析資料の採取、トレンチによる裏込め断面観察の手順で調査を行なった。以下石垣の現状と各調査事項について述べる。

当区の岩盤（第三期層砂岩・頁岩）は、西側で標高約－2ｍ程度であり、東側に向って落ち込む状況を示しており、石垣はこの岩盤上に堆積した沖積層上に構築されている。不安定な地盤の際に一般的に用いられる胴木などの明確な基礎構造物は認められないが、小礫を砂層上に敷き、その上に石垣材を置くという工法もしくは、砂層上に直接根石を置くという工法をとっており、基底の標高は＋0ｍを前後する。石垣の両端が側壁柱によって破壊されているほか、中間杭にあたる部分やその周辺は、倒壊、せり出し、孕みなど工事そのものにより多大な影響を蒙っている。なかでもⅣ区西側の石垣には約10ｍにわたって亀裂が裏込め部分に生じ、人力による実測しかできぬので倒壊防止の梁を必要とする程であった。石積みの方法は部分的に布積みの印象を与えるところもあるが、ほぼ乱積みといってよい。石積みの高さについては、本来の天端石まで残っているところはなく、遺存状態の最も良好なところで基底部から約1.8ｍを計り、残存段数は5段を数える。通例は破壊を受けた部分を除いて1ｍ前後、3段程度の遺存状態である。これは明治末年の堀埋立て時の天端石などの除去等も充分に考えられるものの、地下鉄覆工時の桁架けによる削平も見逃すわけにはいかないだろう。石積みに用いられた石材は、他の区に比べ、大型化が顕著で、最大のものには長軸1.5ｍに達するものもある。観察の結果石材の細かな加工については認められなかったが、前面を揃えるために一面を面取りする例がきわめて多く目についた。石材の岩種については別項で詳しく述べられており特に触れないが、全体的に堆積岩（特に砂岩・礫岩）が半数以上の割合を占め、この区内において選択された石材の岩種に極立った変化は認められないようである。ある部分の石垣には堀底および石垣間にモルタルの浸入している部分があり、明治頃の石垣補修の可能性も考えられたが、結局工事による高圧モルタルの注入による影響であると推定された。

この区における調査成果の一つに、江戸時代古地図などに表現されている入隅部分が東端で発見されたことがあげられる。この入隅部は、他の部分よりも面取りされた大きな石材が用い

られ、控え積みの石材についても大ぶりのものが用いられており、頑丈な作りとなっている。そのために遺存状態は極めて良好であった。全体的に本来の天端石の近くまで残り、目地が通り、面が揃っている。この入隅部の裏面の構造確認トレンチの結果、この入隅部より石垣線が更に東側に伸びることが認められ、トレンチを延長したところ、この石垣線は13mのところで旧来の入隅部にぶつかり、石垣の新しい作り変えのあったことが判明した。旧来の石垣は、既に上半は石材が抜きとられ、辛うじて根石が残されている程度の遺存状態であった。この入隅の路線横断部の現存長は５ｍ程度であるが、第Ⅴ区石垣線の延長線と結んでみると出隅までの長さは約７ｍ程度であろうと考えられる。新しい入隅は、かつての堀内に構築されているため、石垣下面にはヘドロがみられ、それ故に控え積みはかなり頑丈に行なわれ、旧堀内にはかなりの数の石材が捨て石として置かれている。この新入隅部の構築年代を決定しうるような遺物は見られない。また、この新入隅部は、城の縄張りを考える上で重要なポイントであり、更に遺存状態も良好であったことから、その一部を現状そのまま保存加工し、原位置を留めたまま、道路下に残されている。（PL.12－１）

石垣の構築方法等を観察するために、第Ⅳ区では12本のトレンチを設定し、裏込めや旧地形の上層図の作成を行なった。基本的には20ｍ間隔としたが、石垣の遺存状態等によりある程度任意的にトレンチを設定した。トレンチ土層は、中間杭、覆工桁架け等の工事に起因する攪乱により多大な影響を蒙っており、上半部は削平されているが、基本的な土層については把握しうると思われる。いずれのトレンチにおいても、第三期砂岩・頁岩の岩盤上に堆積した灰白色～黄白色など種々の色あいの沖積砂層が基盤となっており、その上に二次的な埋立てである砂、粘土などが薄い層をなして存在する。石垣はこの自然堆積層である粗砂層に基盤を置き、二次堆積層（埋立）や自然砂層を切り込んで構築されている。石垣前面から３～４ｍの幅で裏込めが認められ、石垣の直後には大小の栗石、割石が控え積みとして多量に置かれており、その間隙を補うように、頁岩風化礫を含む赤味の強い粘土が詰め込まれている。その裏込めの立派なことは、軟弱な砂層上に石垣が構築されているということも一つの要因であろうが、当時の石垣構築技術の確かさを端的に示しているといえよう。また、Ⅳ区西側の数ケ所の裏込め粘土中に松の根の痕跡が残っており、松並木のあった可能性も考えられる。

出土遺物については、堀内・裏込め及び埋土部・自然堆積層とそれぞれ出土地点を区別せねばならない。堀は明治末年に埋められたものであり、この中の出土遺物は全て明治時代以前のものであるが、やはり明治時代のものが中心となる。瓦、下駄、陶磁器、ビンなどのガラス器、サーベル、薬きょうなどが出土している。裏込め部及び埋土からは近世の瓦、国産陶磁器などが出土し、この石垣線の一部も江戸時代のいずれかの時期に修覆されたことも考えられる。また入隅部付近に若干の布目瓦、中国産陶磁器が見られた。

5．第Ⅴ区の調査（付図6）

第Ⅴ区は、地下鉄建設の際の平和台東工区（株．日本国土開発担当）の路線内で発見された石垣線のうち、松島興産ビル前から高砂ゴム工業ビル前までの本体部で発見された石垣線約40mと、平和台球場入口の地下鉄電気室にかかった石垣線約6mである。

このⅤ区の石垣の調査も、Ⅳ区と同じく昭和52（1977）年2月中旬から行なわれたが、石垣線が側壁柱際に発見され、そのため側壁柱布掘りの影響で多大な破壊を蒙っており、若干の調査工程の違いがあった。すなわち、堀内調査が行なわれず、石垣線の確認と裏込め部の清掃を同時に行なったこと、航空写真測量は平面図についてのみ行ない、立面図は手描きで作成したことなどである。

第Ⅴ区付近の第三期砂岩・頁岩岩盤は、地下鉄建設前のボーリング調査結果によると、家庭裁判所付近と赤坂方面の高い岩盤とにはさまれ、急激に傾斜した自然谷の様相を見せている。これは昭和38・39年に福岡県教育委員会が行なった福岡高等裁判所建築にともなう事前調査において確認された、平和台球場と高等裁判所間の自然谷の流れと一致しており、古地形を考える上で重要な点である。石垣は、この自然谷を埋めた沖積砂層上に構築されたものである。

松島興産前～高砂ゴム工業間では地下鉄本体壁に接近して石垣線が出てきたため、布掘りや側壁柱打込みの大きな影響を蒙っており、上半部の遺存状態はすこぶる不良である。また、この区東西端は側壁柱に分断され、裏込めにまで破壊はおよんでいる。側壁と石垣前面との間隔が非常にせまいうえ、モルタルの浸入などの工事による被害で、石垣の側面全体を見ることは不可能であったが、石垣の辛うじて残された部分の標高から考え、3～4段程度の残り具合と思われる。しかし、実際に観察・実測の可能なのは現存天端から2段目までであった。残存石垣に関しては、欠失してしまった上半と対象的に、遺存状態は良好と言うべきで、石材はやや小ぶりのものが用いられているが、サイズはほぼ一定しており、野面石の布積みに近い乱積みとなっている。石垣下面にはおそらく第Ⅳ区と同様に胴木等の基礎構築物はないものと推測されるが、これは堀内壁がたとえ岩盤を基礎としても胴木をもつという事実から考えると、外壁の場合、石垣が高くないということ、崩れた時の補修が簡単であることなどがその原因でもあろう。石材の加工については、せいぜい面取り石が若干見られる程度で、細かな加工のある例は見なかった。石材の岩種については、第5章に述べてあるが、玄武岩などの火山岩類と堆積岩類とがほぼ二分しており、他区に比較し火山岩類の多いのが特徴的である。

平和台球場入口の地下鉄電気室で確認された石垣は、城内三ノ丸の家老屋敷方面へ通じる「上の橋」に結ばれるところである。東西端が側壁柱で切断されているのをはじめ、球場に通じる下水道等、数本の管によって上半部は若干の破壊を受け、石垣中央の一部はモルタルが浸入

している。この石垣の基盤は標高±０ｍあたりで砂層となっているが、約30ｍ東側の第Ⅵ区ポンプ室では岩盤が標高＋0.5ｍ程までせり上っており、砂層下の岩盤は浅いところにあるものと思われる。石垣の残存状態は西側で4～5段の石垣底より1.7ｍ、東側で３～４段の同じく1.2ｍ程である。やや大きめの石材が用いられており、面が揃っている。また孕みがなく、残存部分についての状態は良好である。積み方は野面石の布積みに近い乱積みといえよう。ここの石垣線は、第Ⅴ区西側と第Ⅵ区石垣線の延長線にはずれ堀内に１～２ｍ程度張り出すことになり、上の橋の橋爪にあたる部分と考えられる。しかしながら、明治初年に撮影された上の橋の写真によると、石垣の張り出しは今回検出した石垣より強く、当初の石垣線に後年新たに石垣を接ぎ足されたと考えられる。

第Ⅴ区では、電気室部分の１本を含め、５本のトレンチを設定し、裏込めや埋土、旧地形の状態の観察を行なった。石垣の遺存状態は先に述べたように良好でなかったが、布掘りの影響をうけたのはこの部分と裏込め部分だけで二次埋土の残りは比較的良好であった。基本的にはいずれのトレンチも、標高＋０.５ｍ程の沖積砂層上に、砂や粘土を薄く時にはブロック状に埋め、その南端に石垣を積んで裏込めを置くという方法が看取される。自然層の海側に高くなるのも他の地区と同じで、福岡城北側が築城前に砂丘であったことがわかる。裏込めの幅は２ｍ程度であるが、その控え積みの割石・栗石間を補塡する粘土と埋土に用いられた粘土は赤褐色の強い粘土で、その中に多量の古代瓦の含まれているのも重要な発見であった。

出土遺物は、堀内の調査が不可能であったため、いずれも裏込め・埋土・自然砂層からの発見である。布目瓦の出土は、第Ⅳ区東端の人隅部付近の埋土から中国陶磁器とともに若干出土しはじめていたが、その量は、裏込め、埋土として用いられている頁岩風化礫混りの赤褐色粘土の分布と同じように、Ⅴ区にはいると急激に増加した。遺物については第４章で述べることになるが、中国陶磁、古代瓦を多量に含む粘土が、石垣や屋敷の造成に際し、鴻臚館跡とされる現平和台球場付近から上の橋を経て運び出され、最も近い所であるⅤ・Ⅵ区付近に使用されたものと断言してよいと思われる。ここで発見された遺物は、二次的移動をしているとはいえ、その故地が明確であるという点で鴻臚館の遺物を研究する上に極めて貴重な資料であるといえる。このため、古代瓦を含む赤褐色粘土の存在するところに関しては、トレンチによる土層確認調査後全面的に調査することとし、遺物の採集に最大限の努力を払った。また、福岡城北側直下に形成されていた砂丘の層中からも、かなりの磨耗を受けているが、古代瓦、中国陶磁などの破片が若干出土している。

6．第Ⅵ区の調査（付図7）

第Ⅵ区は、地下鉄建設工区では、平和台東工区（株．日本国土開発担当）の東端から、赤坂工区（株．大成・梅林共同企業体担当）の西端にかかる部分で、福岡営林署前から福岡城一号濠までである。地下鉄ポンプ室で確認された石垣線13mと、その東側営林署前東端から一号濠中途で発見された入隅部までの石垣線約80mである。この区においても石垣線と工事による側壁柱とは非常に接近しており、ポンプ室と東側石垣線間の石垣は、工事によって破壊され、裏込めの控え積みの石材を残すのみであった。

平和台球場入口西側付近で急激な落ち込みを見せ自然谷の様相を呈した岩盤が、当区では、標高±0mから＋0.6mまでせりあがってきており、旧地形が島状の独立丘陵であったといわれる福岡高等裁判所所在地の北側丘陵裾部にあたる。またこの岩盤は地下鉄建設前のボーリング調査によると東側赤坂門交差点付近で標高－55mまでに落ち込むことが確認されている。この区の石垣はすべてこの岩盤上に構築されている。また、堀も風化の強いこの岩盤を削って作られたものである。

ポンプ室で確認された石垣は、東西両端を側壁柱により破壊されているが、基盤の良好なこともあって孕みなどは見られず安定している。ここでは岩盤の凹凸があり、凹部に栗石を巧みに置いて、その上に比較的大ぶりの石をのせ最下段の石の安定を図っている。石材には大小様々のものが使われているが、やや小ぶりの感があり、岩盤の凹凸にしたがい複雑な積み方をしている。前面には石材の張り出しがみられるが、これも岩盤の凹凸による影響であろう。各石材に加工はほとんど見られないが、石垣の間隙には割石片が組み込まれ、打込みはぎの工法にも似る。しかし基本的には野面石の乱積みである。

ポンプ室東側の石垣線は、側壁柱との間がせまく、西側では接してしまっているため、杭打ち工事前の布掘りによって大きな破壊を受けている。そのために西側での石垣の残り具合は良好でなく、側壁柱との間が広くなる東側にゆくにしたがって遺存状態は良好になる。したがって側面図の作成も手描き作業となった。この石垣線の基盤も岩盤となっているが、ポンプ室のそれに比べ風化が進んでおりやや脆い。またポンプ室程極端ではないが、岩盤の凹凸が見られ、レベルは標高＋0.1～0.5mにある。最下段の石垣は、岩盤の凹凸を利用し直接置かれる場合が多いが、小石などを敷いた上に置く例も若干見られる。東端付近では小石を敷いた上に比較的小ぶりの石材を置くのが特徴的である。用材は西側で大きく、東側で小ぶりとなる傾向があり、西側の残りの悪いところで２～４段、基底面から0.7～1.3m程、最も遺存状態の良好な東側ではほぼ天端石までの７段、2.2m程の残りとなっている。東側部分では天端石付近まで残っているため、全体的にやや孕みが感じられる。石垣の積み方は西側で、野面石の乱積みであるが、

東側入隅部付近では面取り加工のある石材を多く使い、その間に割石を組み合わせ打込みはぎの工法をとっている。これは補修の痕跡とも思われる。

ここの調査での重要な成果の一つに、東端で入隅部が発見されたことと、その作り変えが確認されたことが挙げられる。横断部南側は側壁柱で破壊されているものの遺存状態は良好である。堀内清掃時にこの石垣の基底面がヘドロ堆積上にあることから、かつての堀内に作られたものと思われ、旧来の石垣線が更に東に続いているものと考えた。石垣線の検出作業ではこの点に留意し調査を行なった結果、新しい横断石垣の前面から4.5ｍ東のところで旧横断石垣線の前面が確認され、更に旧横断部より古い石垣部も東側に延びていることがわかった。新しい石垣の裏込め控え積みの石材に「天保十年　月庭」と刻まれた墓石と思われるものが用いられており、この新しい入隅部の構築年代は、天保10（1839）年以降、すなわち幕末から明治初年に求められよう。旧入隅部の石垣は２～３段の残りで、やや大ぶりの石材が用いられている。この石垣の構築年代は明確にはしえないが、文化９（1812）年の福岡城下町・博多近隣古図ではこの部分の入隅が描かれており、少なくとも1812年以前の石垣であるといえる。この調査結果から、新旧石垣の延長線確認の必要性が生じ地下鉄路線外の南側歩道、濠端などに５本の確認トレンチを設け、それを追求した（PL.17～19）。濠端で確認された石垣線は東の読売ビルの直下に伸びていくことが明確になり、ジューキ福岡支店ビルの便槽掘りの際石垣が確認されたという聞きとりや、付編１に述べられている赤坂１丁目の石垣調査など併せ考えると、新しい時期の石垣線がかなり明確に復元されるに到った。これらのことは福岡城の縄張りの変遷を考える上で重要な発見であったといえる。また、この新旧入隅部は、その重要性と岩盤上にあり遺存状態の良好なことなどから、現地にそのまま保存され、市民への公開ができるようになっている。そして、史跡福岡城跡の一部として昭和55（1980）年２月に追加指定をうけている。

ここでも土層、石垣構築法などの確認のため７本のトレンチを設定した。石垣の基底面がいずれも岩盤にあることは既に述べたが、他区同様にここでもこの岩盤上に１ｍ程の自然砂層の堆積が見られ、その上に城下作りのための埋立てを行なっており、石垣の構築は、これらの土層を掘り込み、岩盤を露出させてから行なっていることがうかがえる。自然砂層は海側に向って高くなることが明瞭で、北辺の砂丘の存在が理解される。埋立てには、砂と粘土が用いられている。このうち赤褐色粘土の中には多量の古代瓦が混在しており、第Ⅴ区でも述べたように、鴻臚館推定地である現平和台球場付近の築城時に削平された粘土が、この付近の裏込め、埋土として運ばれたものであり、この中から採集された多量の古代瓦、陶磁器、須恵器などは鴻臚館に関する貴重な遺物として注目されるべきであろう。この古代瓦を含む粘土は、第Ⅳ区東端から第Ⅵ区東端までの約300ｍにわたって分布しているが、その密度の最も高いのは第Ⅵ区の部分である。岩盤上の自然砂層からも、古代瓦、陶磁器が出土しているが、量は多くない。

5．第Ⅶ区の調査（付図8）

第Ⅶ区は第Ⅵ区から東に約110ｍの部分に相当し、地下鉄建設赤坂工区（株．大成・梅林共同企業体）のほぼ西半分を占める。地上の建物で示すと、第Ⅵ区東端の石垣入隅部から旧キャバレー赤坂、読売福岡ビルなどを経て東へ進み、赤坂交差点の手前約50ｍの所で終わる。この東端部が石垣の東の入隅を作り、そこから方向を南に転じ、調査区外へと延びる所にあたる。

この第Ⅶ区は、当初石垣の存在を予想しなかった所である。しかし、1977年２月末に行なった第Ⅵ区の新・旧２つの石垣入隅部を調査した際、旧入隅部から東へ、点々とではあったが基底面に大ぶりの石が並んでいる状態を確認した。そこで、これは旧入隅部築造以前の石垣の存在を示すものでなないかとの予測を立て、まず現福岡城石垣の東北入隅部（読売福岡ビル西側交差点）に平行する工事区まで調査を拡張した。ここでは旧入隅部に伴う石垣の掘り方を見出したが、埋設管などによる破壊が著しく、東に延びると考えられた大ぶりの石はとびとびに数個検出しただけであった。同時に読売福岡ビル東側の小路の北端部をボーリング棒で探った所、石垣らしきものをあてた。場所からみてこれは南側に延びる石垣の一角ではないかと考えられ、東に延びている列石（石垣）がこの付近で入隅部を作るものと予測した。恰好なことに、埋設管確認のための試掘溝が、読売福岡ビルから赤坂交差点に向って掘ってあったので、それを利用しボーリング棒で探索を行なったが、石垣の手懸は得られなかった。このことから、調査区外の南側歩道部分に、途中から東へ延びる石垣が入り込んだのか、あるいはまた道路の中央寄りにそれが求められるのか二通りの推察がなされたが、工事との関係上これ以上の調査はこの時点では困難であった。そこで第Ⅵ区東端から読売福岡ビル東側小路部分までの約80ｍの工事区を第Ⅶ区として設定し、後日改めて調査を行うことにした。

調査を再開したのは、同年７月11日であった。先の調査の結果から、まず石垣と推測される列石を追うことにし、第Ⅶ区東端の石垣入隅部から、幅約４ｍのトレンチを東に向けて５本（西から順にⅦ－１・２・３・４・５トレンチと呼ぶ）、入隅部があると予測された読売福岡ビル東側小路付近までの総80ｍにわたって設置した。最初に掘削したⅦ－３トレンチで、明らかに石垣と思われる列石が出土し、このため残りのトレンチの調査も比較的スムーズに行なえた。当初入隅部が想定されたⅦ－５トレンチでは、石垣がさらに東側に延びたため、新たにⅦ－６・７トレンチを設けその後を追い、第Ⅶ区の全長は約110ｍとなった。入隅部を検出したのはⅦ－７トレンチであった。この石垣線は先の調査で予測した２つの可能性のうち、道路の中央寄りにあるとした方が当っていたことになる。石垣の残りが悪いこともあって、第Ⅶ区の調査は８月５日、Ⅶ－７トレンチの岩石サンプリングをもって終了した。以下、石垣の概要について述べる。

検出した石垣の残存状況は極めて悪く、そのほとんどが最下底の１段（高さ40～50cm）を残すだけであった。それも連続せず、Ⅶ－１トレンチ９ｍ、Ⅶ－２トレンチ６ｍ、Ⅶ－３トレンチ７ｍ、Ⅶ－４トレンチ４ｍ、Ⅶ－５トレンチ８ｍ、Ⅶ－７トレンチが入隅部まで６ｍと、第Ⅶ区の全長110ｍのうち約42ｍにしかすぎない。しかし、裏込め石や根石の状態から、石垣線は確実に捉えることができた。この石垣の残存状態の悪さは、堀を埋める際、石垣に使用されていた主な石を抜いたことに起因していることは間違いない。この地区の土層断面を観察するとその状況がうかがわれる。まず石垣掘り方部分まで掘り崩し、石垣前面を構成していた主な石を抜き、その跡を頁岩風化礫で埋め、さらに堀内に向って序々に埋め立てられている。石垣前面のほぼ基底面に見られた比較的小さな割石は、この石を引き抜く作業過程で転落、放棄された裏込め石と考えられる。約42ｍ残存した石垣は、まさに取り残し部分である。

Ⅶ－７トレンチで検出した入隅部は、西から約５ｍ延びてきた最下段の石垣が、南に直角に折れるものと考えられる。しかしその隅部分の石は、東列および南列でも抜かれており、裏込め石と入隅から約１ｍ南の２段残った石垣でその線を復元するしかない。この入隅部一帯の堀内には小さな割石が多量に転落しており、また残存する小割石も他に比べて多いことから、この部分にはかなり強固な控え積みを行なっていたことがうかがわれる。

石垣の基底面はⅦ－１トレンチで標高０ｍを計り、東に向って高くなりⅦ－４トレンチでは約0.3ｍとなる。そこからまた漸次低くなり、入隅部では標高約0.1ｍとなる。Ⅶ－1トレンチ基底面は岩盤であるが、それ以東は砂層となる。石垣はこの基底面に一部小割石を敷くものもあるが、ほとんどが直接最下段の石を置いている。残存する石は幅40cmの小ぶりのものから、幅１ｍほどの大ぶりのものまである。いずれも割石で堀側の面をそろえてある。最下段ということもあり控え積みはあまり見られない。この最下段の石のうち77点を石材鑑定した所、火山岩類3.9%、花崗岩類3.9％、堆積岩類92.2%という結果を得た。第Ⅵ区と同様、その石材がほとんど堆積岩類で構成されていることは注目すべきである。

出土遺物では、Ⅶ区西端付近でⅤ・Ⅵ区と同様に赤褐色粘土中から古代瓦があるが、後世の作り換えなどにより再度土が移動しており、わずかに41点を数えるのみである。東側では古代瓦は全く検出されない。この後世の埋立て時に、頁岩風化礫を含む粘質の強い粘土が埋土として用いられ、この中に黒田藩御用窯である、近世高取焼とその窯道具が多く包含されていた。その故地は荒戸窯に求められよう。

Ⅶ区石垣は、Ⅵ区入隅部に見られた２回の石垣の作り換えに先行することは確実である。入隅部旧石垣は、既に文化９（1812）年以前に存在しており、それ以前、おそらく築城時における石垣線であると思われる。そのため、Ⅶ区で発見された石垣線は、Ⅵ区東端の石垣入隅部とともに堀の縄張りの変遷を考える上で重要な資料であると言える。

8．薬院新川石垣の調査（付図9）

近世の城門は虎口といわれた出入口として、桝形門を多くもっている。桝形門は古くは冠木門といわれたもので、二つの門を直角に配して、四方を囲んだ門を意味している。福岡城は、城内と城下町の武家屋敷街とが一帯となった特有の城であったが為、福岡城の桝形門は城の東限を示す那珂川の河口、現在の福岡市立歴史資料館（旧日本生命ビル）付近に設けられていた。そしてこの桝形門から南の方へ那珂川西岸沿い（現在の東急ホテル・毎日会館そして旧福岡県庁跡の東岸壁）に城塞が高く築かれていた。薬院新川の石垣とはこの城塞の基礎部分を意味している。旧福岡県庁の東岸壁の石垣はその名残をとどめている。

明治22年（1889）3月福岡市が発足するが、市の名前を福岡にするか博多にするかで大いに議会は紛糾したという。議決は福岡・博多を指示するも同数であった故に議長判断により「福岡市」を採択した。故に、博多町人衆に威容を誇っていた桝形門と高くそびえる城塞は何かとその後の物議の対称となる事が考えられ、福岡市政発足と同時に取り壊されたと伝えられる。

福岡城は先述の如く、武家屋敷を取り込んで城郭となす事が一番の特徴と言われるが、その他に天守閣を持たず、城を取り巻く堀は内堀のみを設け外堀をもたない事も又特徴である。外堀には北は博多湾、西は黒門川、東は那珂川があてられたようである。薬院新川はこのような意味で外堀の石垣として把握する必要があると考える。

さて、本地点の石垣は隧道建設幅一杯に約20メートルの長さで、路線を横切るように発見された。石垣の基底は標高マイナス0.5メートルにあって、天端まで2.7メートルを計る。表面を窺うと部分部分に異った様相をもっている事が分る。中央付近にはたてかえられる以前の橋より古い橋詰を支える石垣があってこれはかなり現代に近い時期のもので整った整層積みの石垣である。これを取り除くと様相の異った姿を呈する。中央部分より南側の石垣は1メートル大の石を使用し面はそろえているが乱積によるものである。目地は整っておらず、その間隔は広い。石材は玄武岩を使用している。中

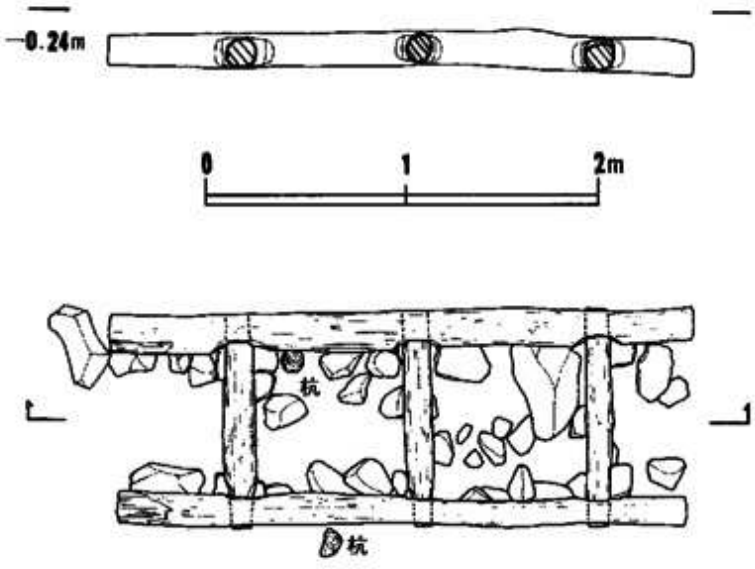
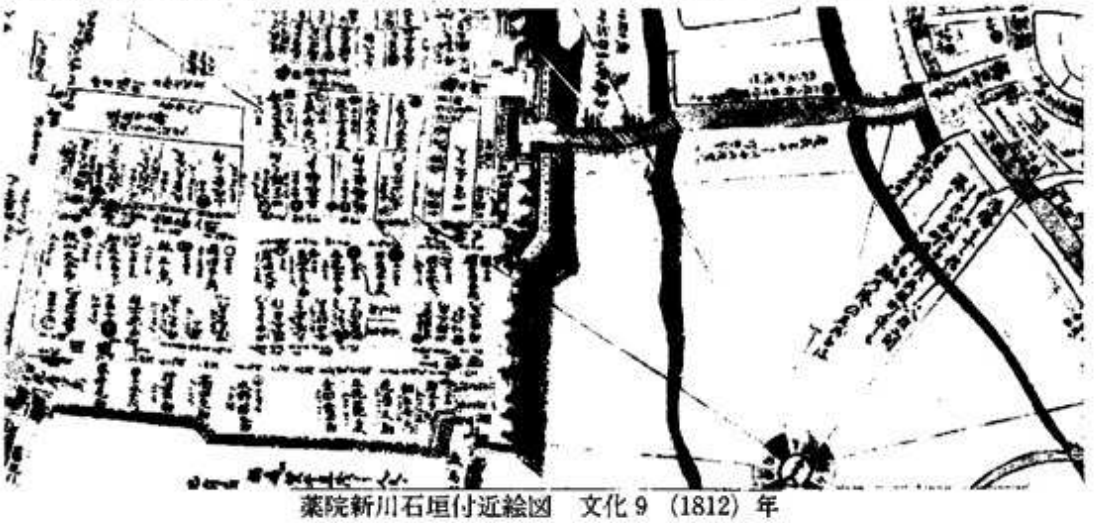


Fig. 7　薬院新川石垣胴木実測図（1／40）

央部分より北側は全てが花崗岩を採用し、目地が一定の方向に通っている印象を与えている。石の大きさは南のものより小振りである。石垣表面は加工して面取りを行って打込み剣ぎの積み方を採っている。南北両石垣の目地にはコンクリートがつめ込まれているが現代に近い時期この石垣を何らかの意識でもって再利用した結果と考えられる。また、積み方や石材の採用の点で南北双方で異りが見られるが、何の原因でこのような形になったかは把握できていない。考えられる事は、築造時の役割分担か、修復の結果を示していると言えるであろう。

裏込めの調査は2本のトレンチによって行なわれた。第1トレンチは南端より5mの地点に、第2トレンチは北端より5mの地点に、東西にそれぞれ設定した。第1トレンチの土層の状態を見ると、①層が淡褐色粘土層、②層が酸化された砂層、③層が暗青灰色粘土層、④層が粘土層で、ベースは淡黄灰色砂層であり、それぞれの層には大小の割石もしくは剝片の石が詰め込まれている。第2トレンチの土層を見ると、①層が暗褐色砂混り粘土層、②層が砂を含む粘土層、③層が灰褐色砂礫層、④層が青灰色砂層、⑤層が暗青灰色粘土層、⑥層が淡黄灰色砂層、⑦層が赤褐色砂礫層である。基盤の層は⑥層である。第1・第2トレンチ双方とも上面と後方部分がごく最近の攪乱を受けているが、下層は築造当時のものであると考えられる。石垣の基礎工事のあり方について第②トレンチに置いて梯状に組んだ胴木を検出している。材質は松の木でありしっかり組まれている。この事実は内堀の石垣に比べて、薬院新川の石垣が充分なる配慮をもって構築されたと言えるであろう。

加賀藩穴生方『後藤家文書』の「古伝書」、「城石垣始秘伝抄」、「唯子一人伝」巻一には肥後熊本の加藤清正を石垣築の祖としてあげ、清正の次に黒田長政があげられている。当時の石垣築のナンバーツーが築いた福岡城はどんなものであったのか。いまだかって充分な調査が行なわれたとも聞かないし、又史料も現存していないと聞く。それ故に今回の調査を契機として開発に伴う調査や学術的調査が行なわれていく事に期待したいのである。



薬院新川石垣付近絵図　文化9（1812）年

第４章　出土遺物について

今回の総延長１km以上に及ぶ福岡城内堀外壁石垣の調査で出土したコンテナボックス300箱に及ぶ遺物は、出土地点から、①堀内　②石垣裏込めおよび埋土　③自然堆積砂層に大きく分けられる。堀の内から出土したものは、福岡城築城以後の遺物であるが、特に幕藩体制の崩壊によって城の機能が失なわれ、封建社会のシンボルとも言うべき城郭の権威が失墜する明治時代に到って、堀は塵芥の処理場の如き様相を呈しており、ありとあらゆる生活用具が捨てられている。石垣裏込めと埋立て土から出土する遺物は、基本的に築城時の遺物が中心となるはずであるが、客土の中にそれ以前の遺物が多量に含まれていたのも今回の調査では特筆すべき点である。上の橋を中心とした東西約300ｍ区間の石垣裏込めと埋土の赤褐色粘土に含まれた膨大な量の古代瓦と陶磁器類がそうである。この赤褐色粘土は、大宰府鴻臚館跡と推定される福岡城内の現平和台球場付近に故地が求められるもので、徹底的な破壊を受けて考古学的追求の極めて困難な状況にあるこの鴻臚館跡の実相を究明する上で貴重な遺物群と言わねばならない。また、裏込め粘土中には、築城後の石垣修復にともない、一部築城後の遺物の混在することもある。自然堆積砂層から出土する遺物は、いずれも築城以前の遺物であり、磨耗がはげしい。縄文土器片から中世末までの遺物が含まれるが量的には少ない。これらの遺物はいずれもプライマリーな状態での出土でないとはいえ、福岡城・鴻臚館の資料的欠陥を補いうるものと思う。

１．瓦　類

瓦は、福岡城築城以降（近世）と鴻臚館時代（奈良～平安時代）との二期に大きく区分される。その量はコンテナボックス270箱あって、遺物全体の大半を占める。近世瓦は一部裏込めや埋土に含まれるが、堀内がほとんどで、量的には裏込め・埋土から出土する古代瓦がこれをはるかにしのぐ。粘土中に遺存しており風化がはげしく、小破片が多いため近世・古代の区別のつかないものも多いが、それらの個数を各区ごとに叩き文様でまとめてみると、第Ⅰ区（０点）　第Ⅱ区（０点）　第Ⅲ区（縄目１点）　第Ⅳ区（縄目３点　格子目25点　無文14点）第Ⅴ区（縄目180点　格子目395点　無文358点）　第Ⅵ区（縄目7,484点　格子目14,548点　無文15,923点）　第Ⅶ区（縄目11点　格子目18点　無文12点）総計38,167点となる。Ⅴ・Ⅵ区、特にⅥ区での多さが目をひく。鴻臚館の瓦については石松好雄氏の研究があり、細かく触れる余裕もないので、掲載しえた軒瓦について分類し、簡単な説明を加えるにとどめたい。[注1]

(1)三巴文軒丸瓦（Fig.8－１～８）内区に右回りの三巴文を配し、外区に８～34個の珠文を置き、平縁である。左回りの巴文の例もある。「(今宿) 喜兵衛」「(今宿) 又市」の印をもつものはそれぞれ17世紀末以降・明治時代の所産であるが、他は近世以降としか把握できない。

(2)三藤巴文軒丸瓦（Fig.9-9,10）内区に黒田家の家紋である左三藤巴文を配し、平縁である。

写実的なものと簡単化されたものがあり、いずれも近世以降のものである。

(3)黒餅文軒丸瓦（Fig.9-11.12）中央が丘状に丸く隆起し、周辺に9個の珠文を配して平縁に続く。黒田家家紋の一つ黒餅文を表現したものと思われ、近世以降の所産である。

(4)単弁連華文軒丸瓦（Fig.9-13～15）　内区と中房を隆起した圏線で区画する。中房に1＋4の大形の蓮子を施し、楕円形に退化した単弁の蓮弁を周辺にめぐらして外区に珠文を配す。蓮弁と外区珠文の数で幾つかに分類しうる。

(5)複弁11弁蓮華文軒丸瓦（Fig.10-16～26）いわゆる鴻臚館式で、中房に1+4+8 の蓮子を配し、24個の珠文を外区に置く。磨耗がはげしいが、砂層から出土したFig.11-37.38 もこれに含まれよう。

(6)複弁11弁蓮華文軒丸瓦（Fig.11-27～30）(5)に類似するが、蓮弁間の小葉が消滅し、外区の珠文が30個（推定）に増える。

(7)単弁11弁蓮華文軒丸瓦（Fig.11-31～33）二重の圏線により蓮弁を表現し、一弁は一重である。

(8)単弁蓮華文軒丸瓦（Fig.11-34）先の尖った蓮弁を圏線で表わすが、中に線状の隆起をもつものとないものとがあり、それぞれに重なって弁の数は不明である。中房に1＋8の蓮子を配す。

(9)複弁八弁蓮華文軒瓦（Fig.11-35）　退化した蓮弁で、平坦な外縁に珠文を配す。

(10)単弁十三弁(推定)蓮華文軒丸瓦（Fig.11-36）剣先形の弁をもち圏線で外面を表現する。

(11)均正唐草文軒平瓦（Fig.12-39～46）　いずれも近世瓦である。39～41は藤を表現したもので、(2)と対になるものである。他は中心飾に違いはあるものの、左右対称に唐草が伸びる。

(12)扁行唐草文軒平瓦（Fig.13-52～61）　内区には右向する単純な唐草を置き、細い圏線で区分した上下外区に珠文を配す。断面バチ形をなす例が多い。

(13)幾何学文軒平瓦（Fig.14-62～66）　内区に複線の斜格子文を置き、上外区に珠文、下外区に外向する凸鋸歯文を配す。断面はいずれをバチ形をなす。

(14)均正唐草文軒平瓦（Fig.14-67～72）いわゆる鴻臚館式で、(5)と対になる。上外区に珠文、下外区に外向する凸鋸歯文を置き、断面は段顎をなす。

(15)均正唐草文軒平瓦（Fig.14-73）内区に桃実様の中心飾を置き左右に反転する唐草がのびる。上下外区に珠文を配すが、風化のため明確でない。段顎をなす。

(16)均正唐草文軒平瓦（Fig.13-47,48,51、Fig.14-74）内区に車輪様中心飾の左右にのびる唐草文を置き、上外区に珠文を配す。バチ形の断面を呈す。

叩き文様は細分すればかなりの種類になるが、ここでは一部を掲載したにすぎない（Fig.15）。縄目、格子目、無文（不明も含む）の比率はほぼ1：2：2となる。左文字「今行」、「賀茂」などの文字のある例もある（Fig.15-18～26）。「今行」は多数出土しているが、他地域では大宰府などで出土しているものの数は少なく、今後検討を要する。

註1　石松好雄「大宰府鴻臚館跡採集の古瓦」（鏡山猛先生 古稀記念古文化論攷 1980年）

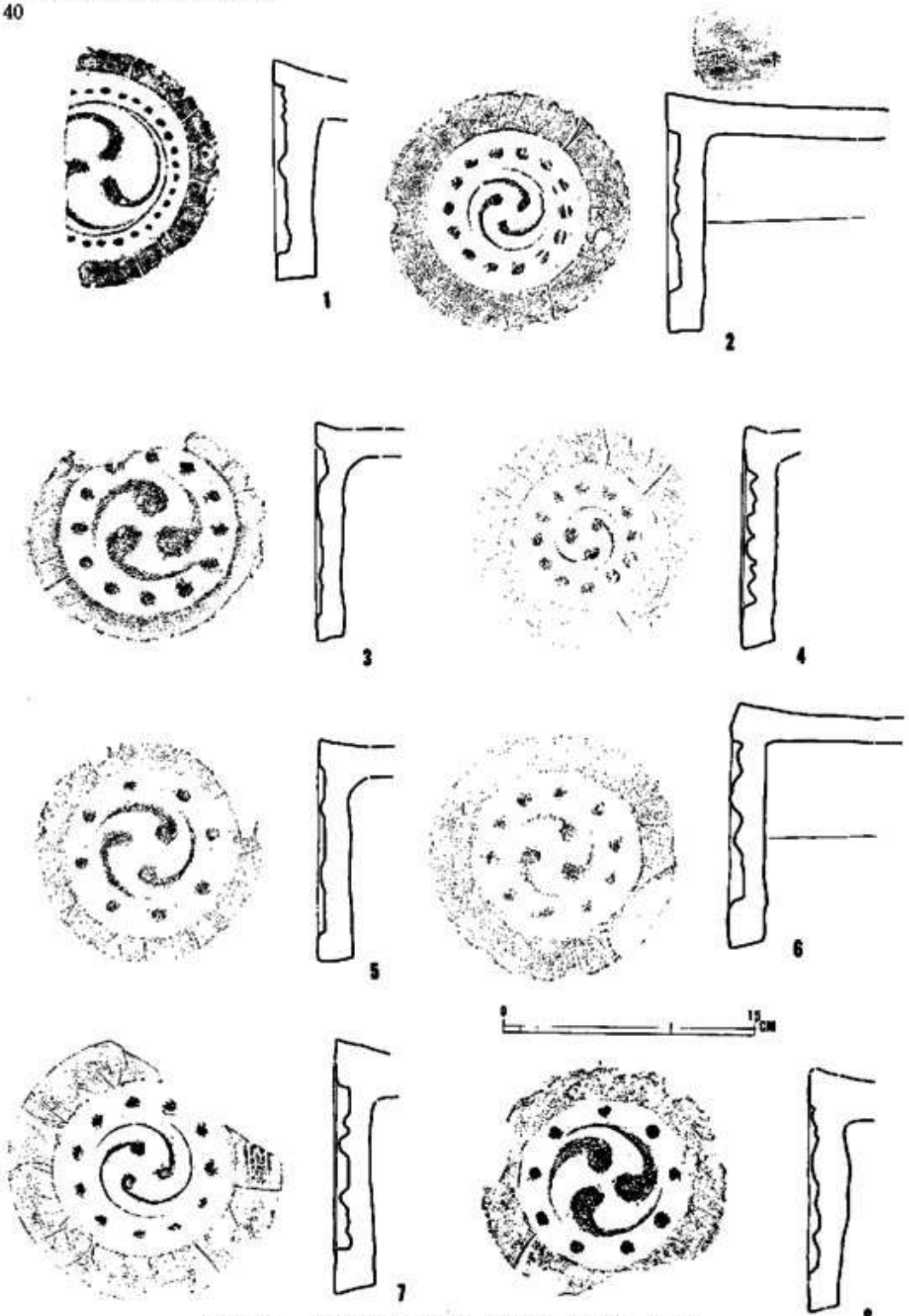


Fig. 8　出土遺物実測図　軒丸瓦（1）（1／4）

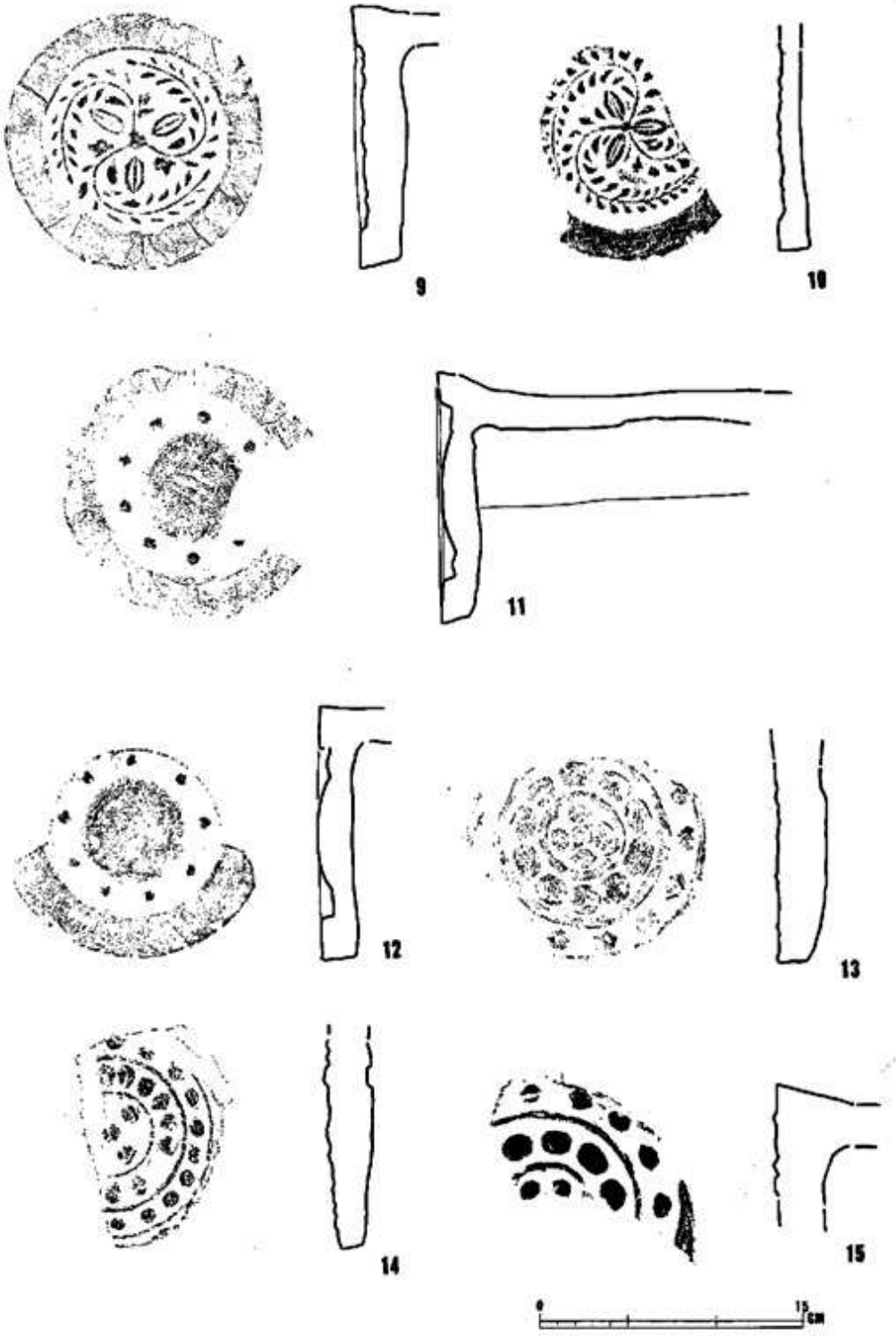


Fig. 9　出土遺物実測図　軒丸瓦（2）（1／4）

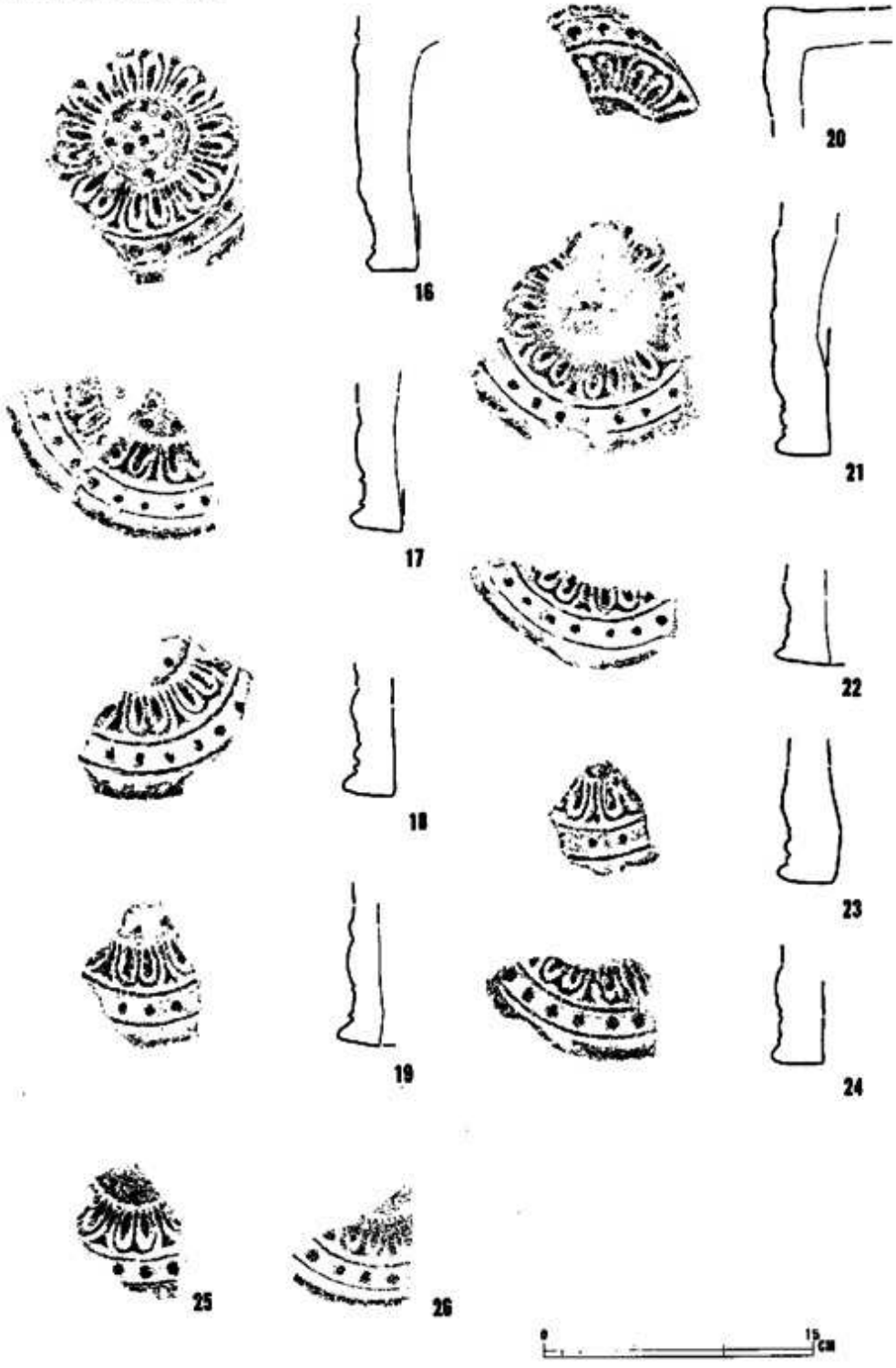


Fig. 10　出土遺物実測図　軒丸瓦（3）（1／4）

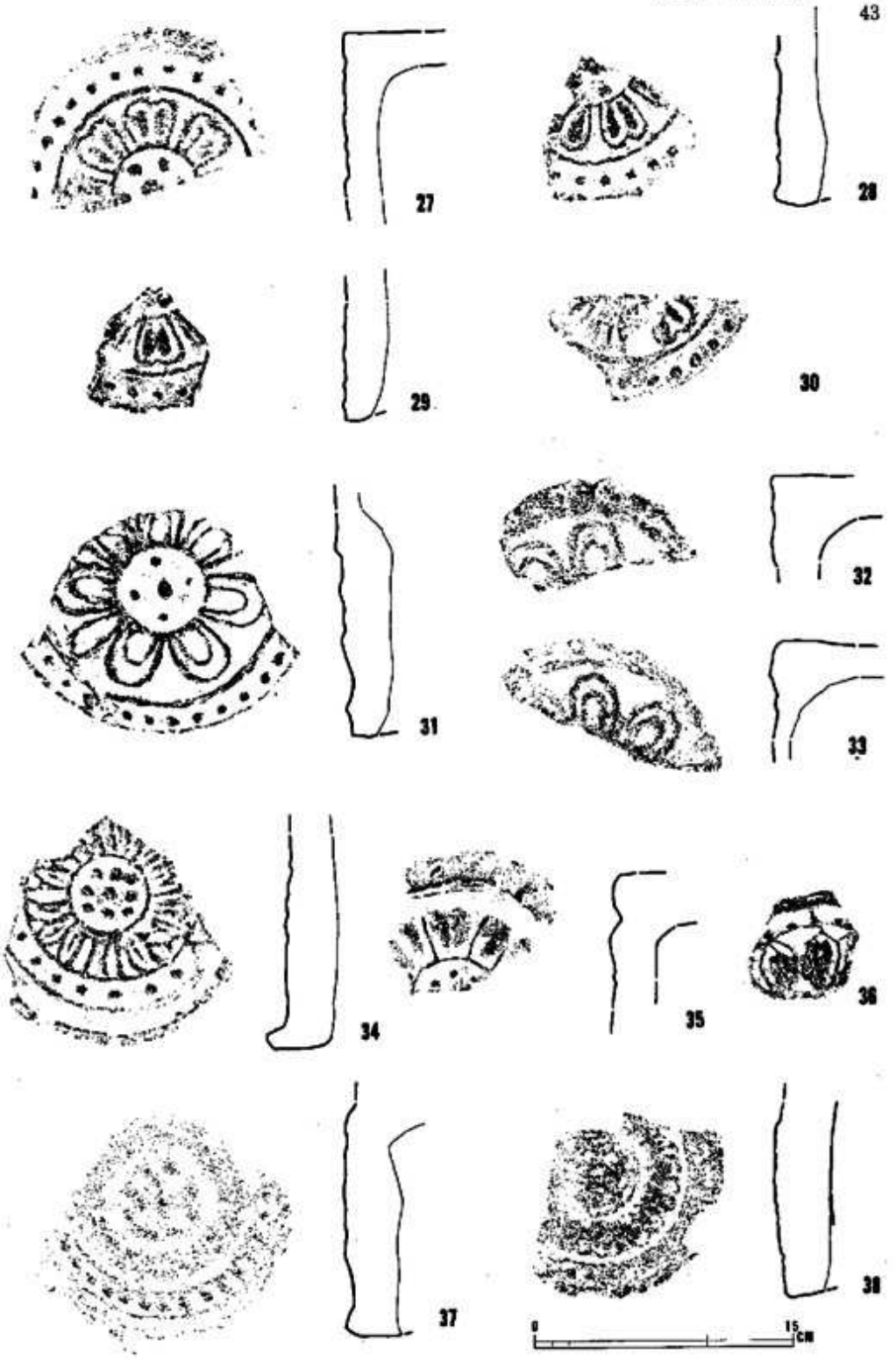


Fig. 11　出土遺物実測図　軒丸瓦（4）（1／4）

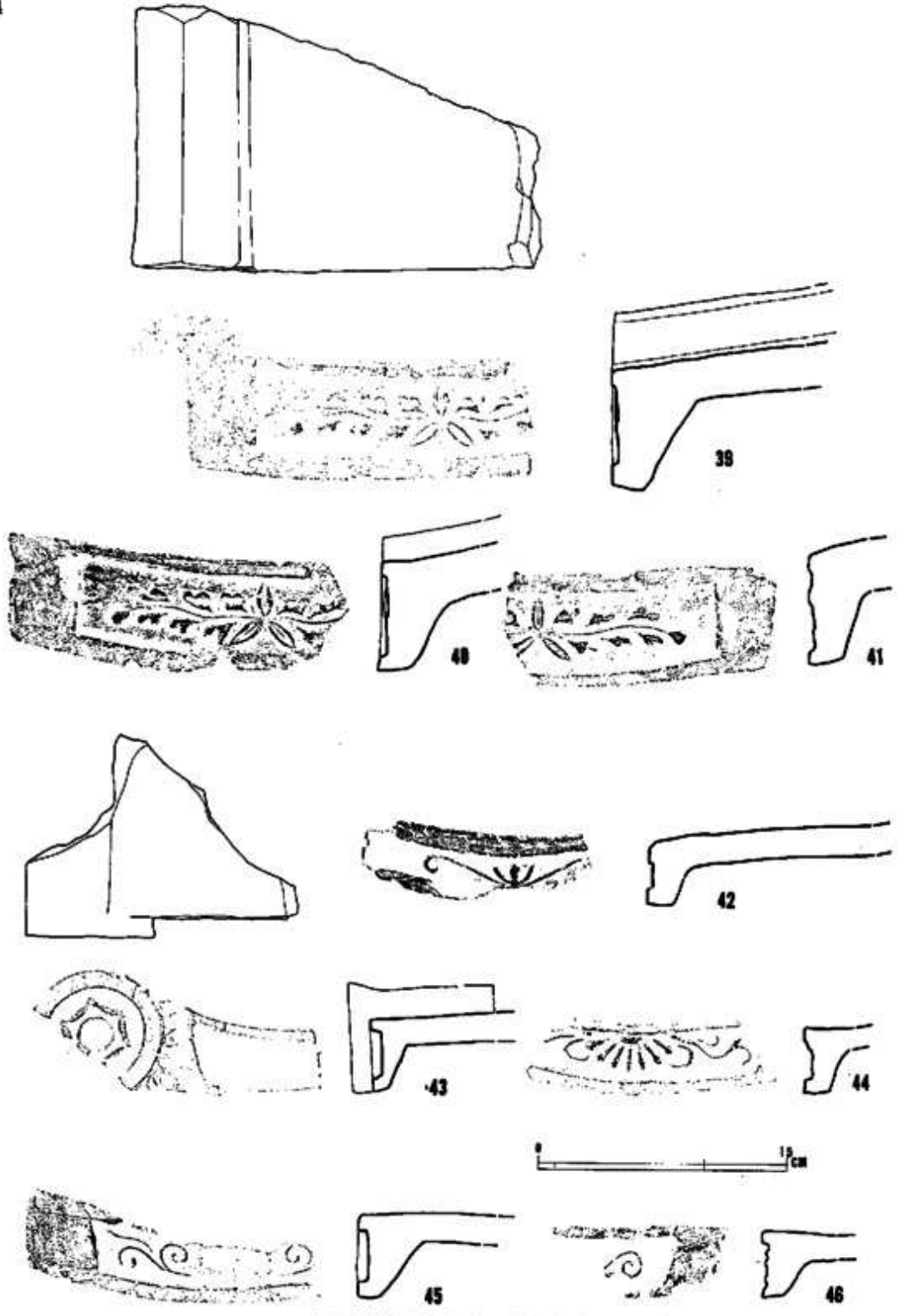


Fig. 12　出土遺物実測図　軒平瓦（1）（1／4）

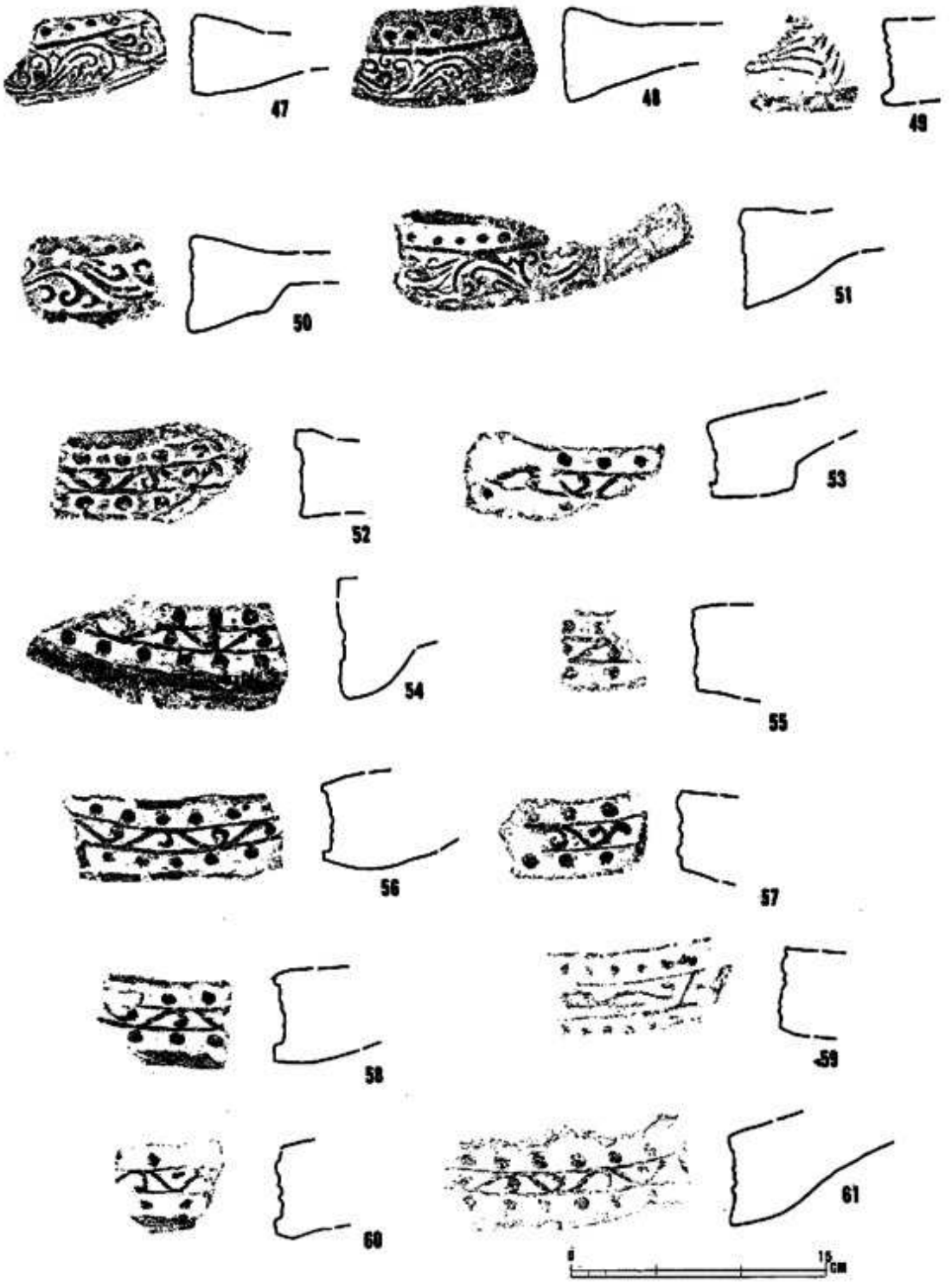


Fig. 13　出土遺物実測図　軒平瓦（2）（1／4）

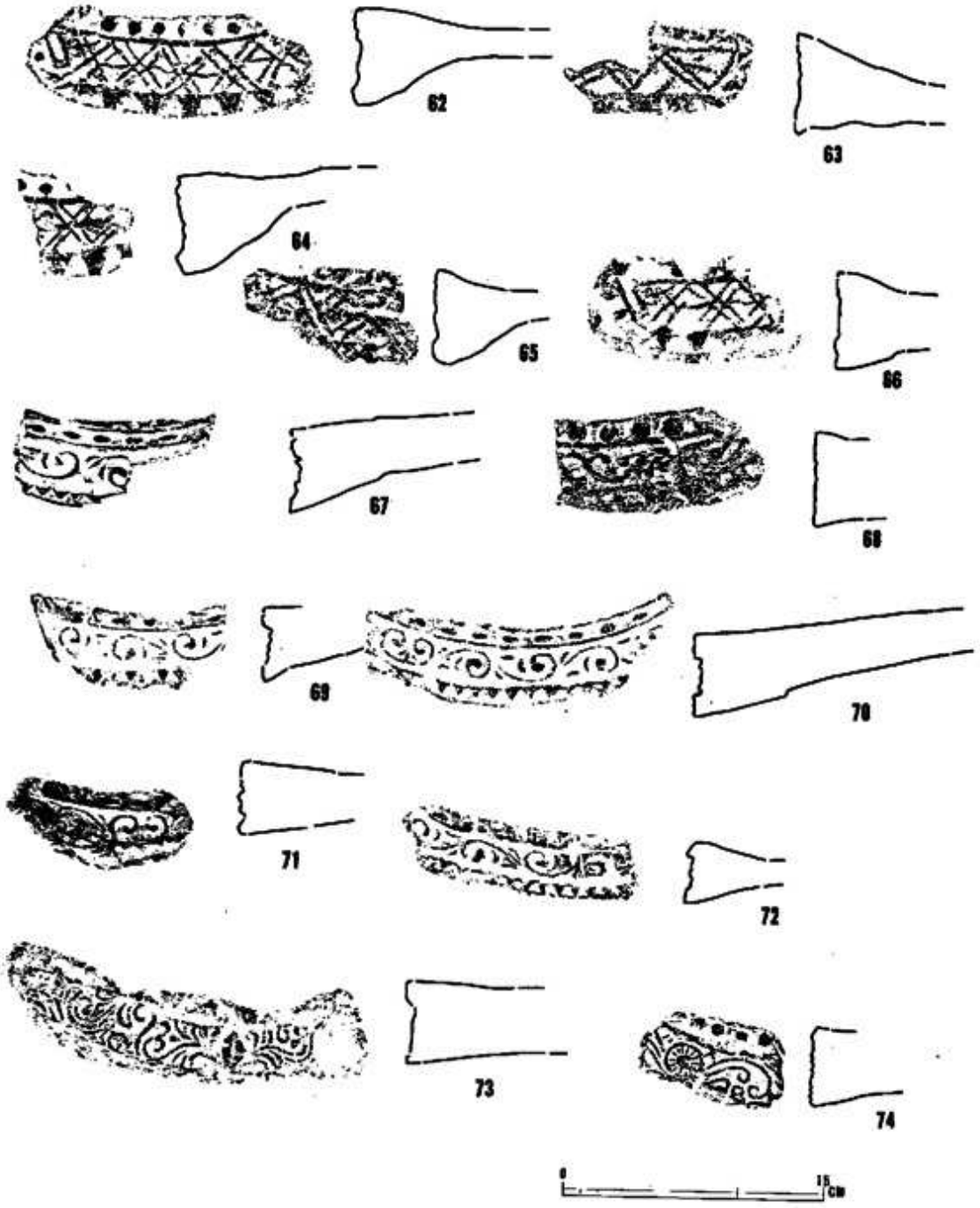


Fig. 14　出土遺物実測図　軒平瓦（3）（1／4）

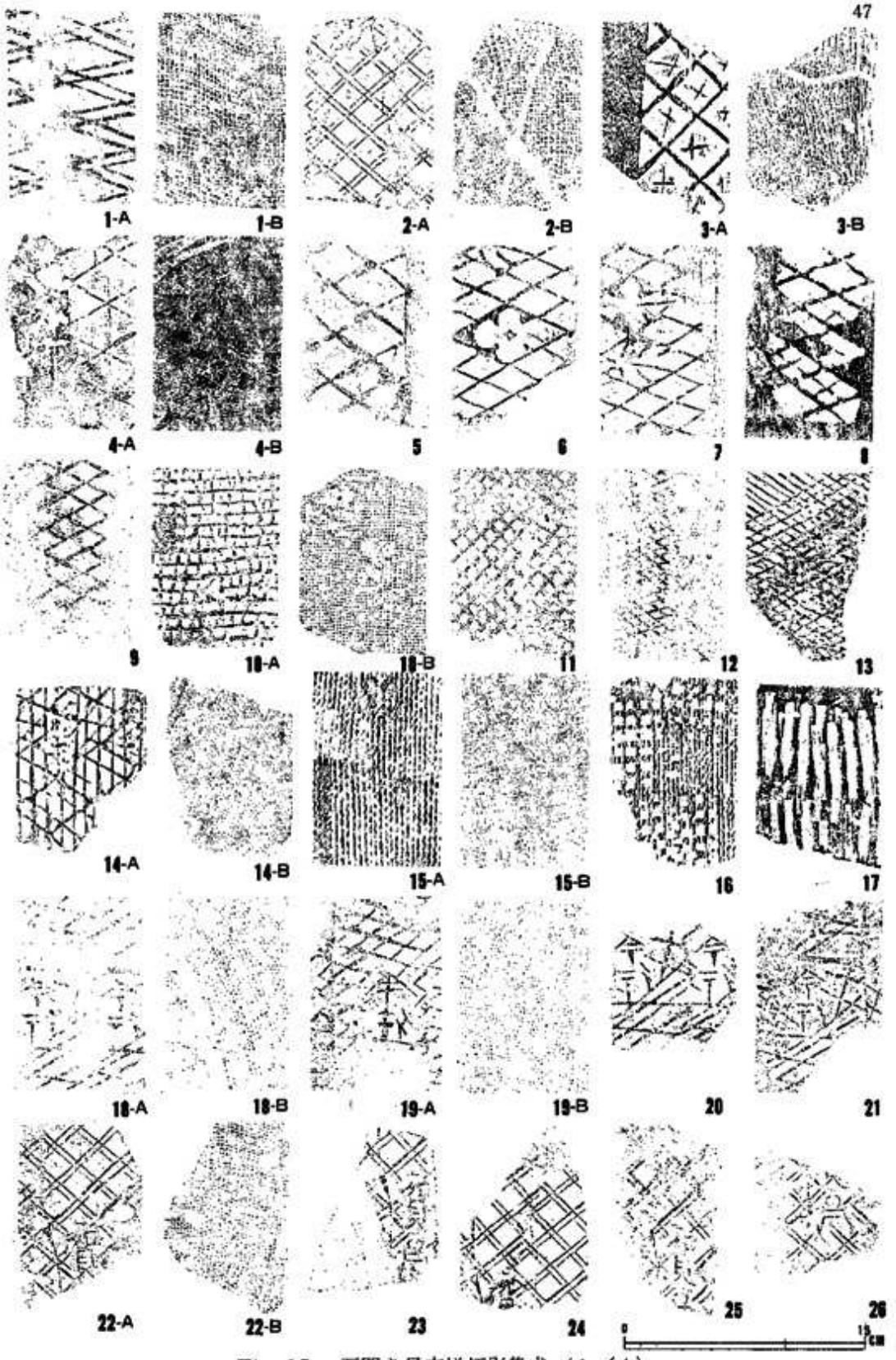


Fig. 15　瓦叩き目文様拓影集成（１／４）

2．陶　磁　器

〔白磁〕

晩唐・五代の白磁　(Fig.16-1~5)　1はいわゆる蛇の目高台の、邢州窯系白磁[1]である。粉白色の胎に、やや空色を帯びた透明ガラス質の釉がかかる。外底露胎で、高台の削りは施釉後になされている。横田・森田分類白磁碗Ⅰ－4に属する。他にⅠ－1、Ⅰ－2が各一片と、口縁が軽く外反するもの1片がある。PL.26-1。2～5は、やはり粉白色の胎土の碗である。いずれも灰黄色もしくはオリーブ色を淡く帯びた透明釉がかかる。釉はガラス質で細かい貫入があり、テラテラとした光沢がある。20、21には見込を針金で彫ったような沈線で囲んでいる。産地は不明。あまり報告を聞かない白磁である。PL.26－2。

北宋初期の白磁　(Fig.16-6～17-37)　これも我国で出土の報告を聞いたことのない白磁である。50余片あるが、貴重な資料なので小片もできるだけ図化してみた。これらは大きく、次の三つに分けることができる。

第一群　(Fig.16－6～15, 17－16～23)　胎はおおむね純白。粉白色で、破面はやや砂め。釉は基本的には透明釉であるが、焼成の加減か、カセが多く、青みもしくは黄白色を帯びるものが多い。高台は白磁碗Ⅱに似るが、ずっと大きく、低く、浅い。底部も厚くない。外底部には丸くハマ跡があり、その外周に時に黒い物質が付着している。6は碗の口縁部で、全体が淡灰黄色にカセている。器外にはへら削りの跡が残り、又縦に細い棒を圧当てて、器壁を花形に作っている。7　碗底部。淡く空色を帯びた透明釉には、細かい貫入がある。外底露胎。高台は内側に斜めに削る一方、外側からも面取りし、畳付はほとんどない。外底に黒い物質が輪状に付着。8、9　釉が乳白色を呈する碗底部である。10 粉白の胎に淡黄灰色の粉をまいたような色合の釉がかかる。艶があり、貫入はない。丸みのある細い折返し口縁である。11　6や7と似た器形のこの碗は、空色がかった透明釉がかかる。PL.26－3。18～20は平底の皿。胎は純白でガラス化が感じられる。釉はいずれも不熔物を浮かべ、灰黄色を呈する。貫入はない。いずれも全体に施釉の後、底を平らに削っている。見込は体側から削る段で囲まれている。18では口縁の外に太く浅い沈線をめぐらし、数か所で外から軽く押し、花形を作る。底にハマ跡あり、黒褐色の粒が、パラパラとついている。PL.26－4。21～22　底部は不明だが、杯もしくは小碗であろう。18とよく似た体部であるが、より薄手で、花形もはっきりしている。胎は灰がかった白に、微小な黒点がパラッと入り、淡い灰オリーブ色の釉には、軽く貫入が見られる。23は碗の口縁部であるが、白色の胎にけし粒大の褐点がポツポツ見える。釉は灰オリーブを帯びた透明釉で貫入がある。造りの薄い、折返し口縁である。PL.26－4。12～15　鍔広口縁の鉢である。時代性ははっきりせず、あるいは晩唐・五代のものかとも思えるが、釉や、胎土が上記の皿に似ているので、ここに紹介しておく。同一器形の破片10片があり、最低4個体を数

える。粉白色の胎は、時に灰色を帯びる。釉はどれもよく熔け切らない透明釉に、黄白色の粉を浮かべており、クリーム色を呈す。時に細かく浅い貫入がある。器形は広く水平に折り曲げた口縁に、柔らかい曲線をもつ体部が続き、大きな底には低い輪高台がつく。高台は、ここでも内側を斜めに削っており、外底いっぱいに、丸く黄色いツク跡がある。PL.26－5。

第二群（Fig.17－24～30）第一群と、器形上歴然たる差異は認め難いが、施釉はやや上で止まるものが多い。釉はかなり均質に熔けた透明釉で、大半は空色が強く、ほとんど青白磁といえる。外底には、ハマ跡や黒い物質の付着しているのが見られる。24～26　胎は白いが、所々に褐点が見られる。透明の、空色がかった釉には、部分的に細かい貫入が入る所がある。27は釉に細かい二重貫入が入り、透明感が少ない。外底に黄色のハマ跡がある。28～30　釉がよく熔けていないか、透明感がない。灰黄色を帯びる。PL.26－6。

第三群（Fig.17－31～37）やや厚手とはいえ、これも同じように大きく、低く、浅い高台である。しかし胎や釉は、上の二群とはっきり異なる。すなわち、胎土は淡灰白色。釉はかすかに霞のかかる透明釉で、灰色を帯びる。よく熔けて、光沢があり、貫入はない。白磁碗Ⅳ、もしくはⅤ類の、上質なものに、よく似た質感のものがある。外底にはハマ跡があり、時に黒灰色の粒が、焼着している。31　灰白色の胎土である。広く平らな見込は沈線で囲まれ、体壁は角をなして立上がる。釉は灰白色の半透明釉。32　灰白色の胎はよく磁化している。釉は黄みのある淡灰透明釉だが、素地に細かい筋や孔があり、その周辺が灰色の斑になっている。見込は小さくなっている。体外下部には、かんな跡がはっきり残っている。33　体部に縦線の端が見え、上は花形に作るものであろう。胎土はかなり白っぽく帯灰色の釉もよく熔けて、ガラス的である。外底に黒い粒が焼着している。34　胎、釉とも33に似るが、いくぶん不透明度が強い。35、36もよく似た質感である。37は、釉・胎の質感は似るが、釉色が灰色でむしろ青磁風である。PL.27－7。

宋代中期以降の白磁（Fig.18－38～54）以上の白磁とともに、11世紀後半以降の遺跡から、普遍的に出土する白磁も、得られた。これらについては、博多部出土のものについて試みた分類[3]に従って、説明したい。38、39　青白磁である。小ぶりの碗か。胎は白く、水色の透明釉がかかる。少し貫入が入る。この他、白磁皿Ⅴ－2タイプの青白磁片1片がある。PL.27－8。40　ベージュを帯びた　灰色の砂っぽい胎土に、黄土色に汚れた石灰を、ふりかけたような釉がみられる。非常に粗厚であるが、白磁碗Ⅱ－bである。41～44　灰濁色の釉で、口縁は肥大し、高台の作りも粗いが、白磁碗Ⅳに属す。PL.27－9。45、46　灰色不透明の釉は、光沢も貫入もない。造りは雑で、46など、高台が焼く前に欠けている。白磁碗Ⅵもしくは Ⅶ。47　灰色の粗めの土に、灰青色不透明釉。釉は粘性が強い。

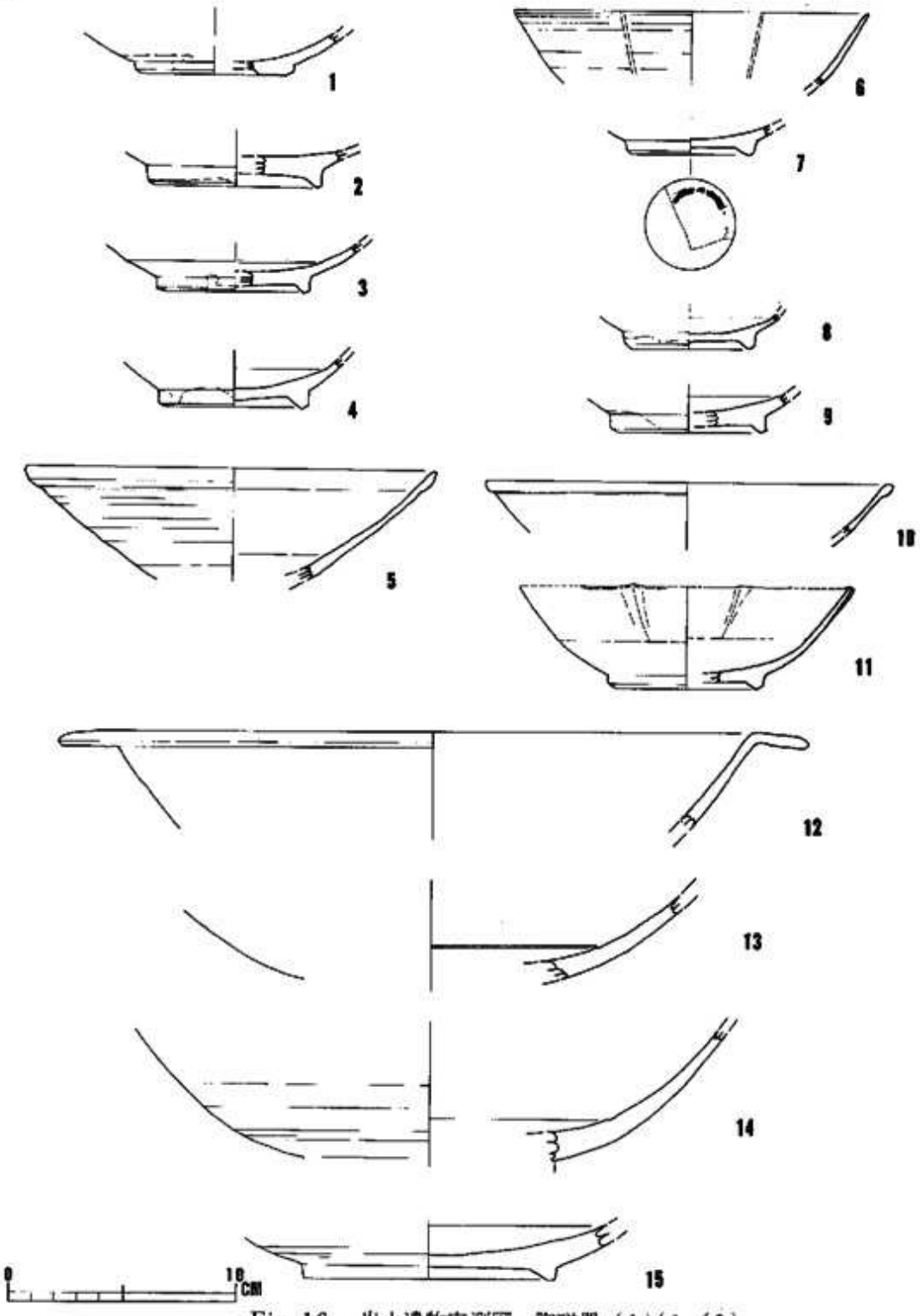


Fig. 16　出土遺物実測図　陶磁器（1）（1／3）

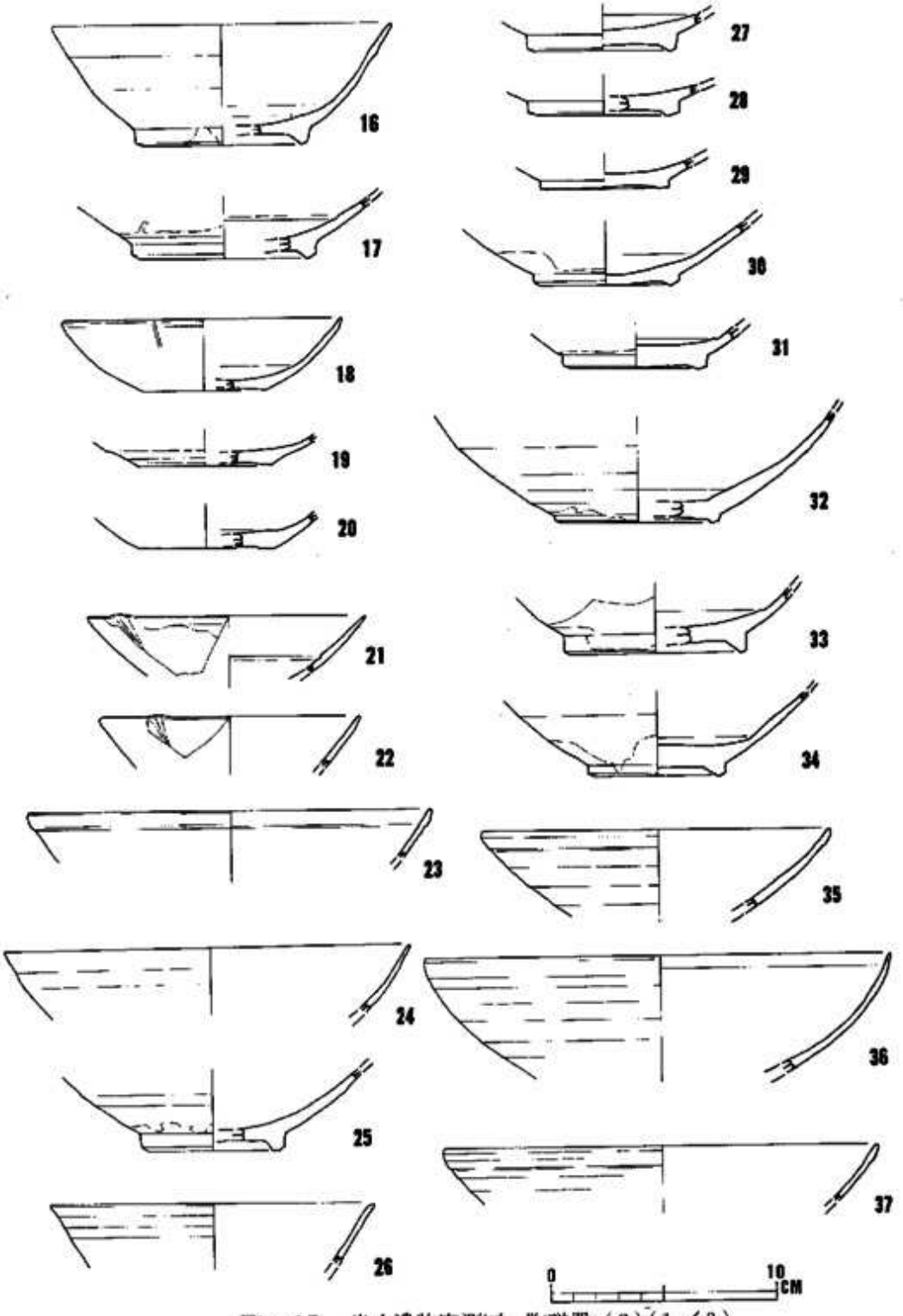


Fig. 17　出土遺物実測図　陶磁器（2）（1／3）

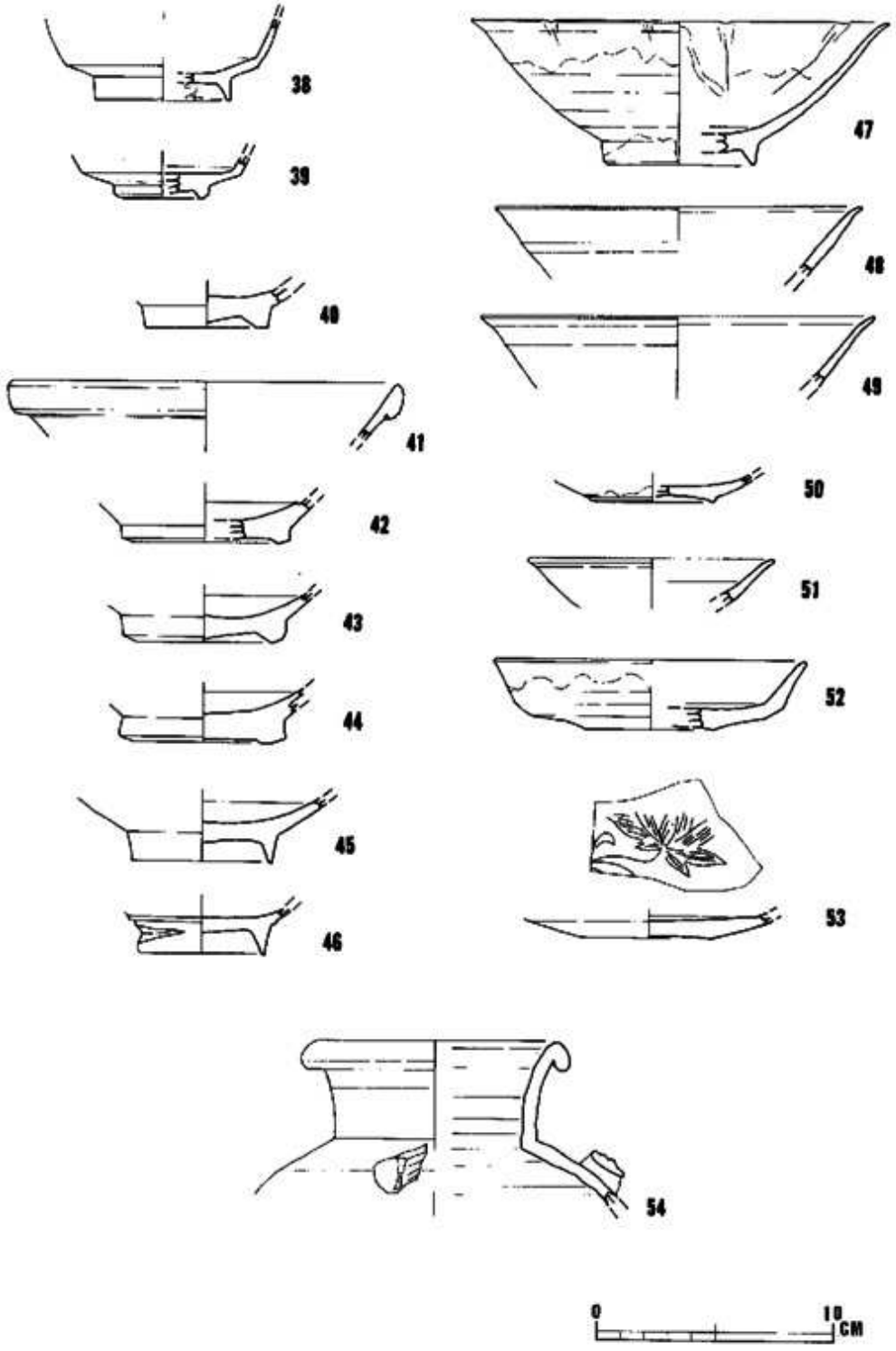


Fig. 18　出土遺物実測図　陶磁器（3）（1／3）

釉表に小さな褐色が浮く。口唇を少し欠いて、その下に縦に白堆線を施し、輪花碗としている。高台はやや高めだが、白磁碗Ⅷ—2である。外底にハマ跡がある。48, 49　灰色の胎土にオリーブがかった半透明釉が、平均にかかる。光沢は鈍く、貫入はない。白磁碗Ⅵでもありうるが、Ⅷとしておきたい。50　粉白の胎に、淡い空色の透明釉がかかる。極く低く細い高台が削り出されており、外底中央部には、周囲に黒い粒をつけた、丸い褐色のハマ跡がある。白磁皿Ⅷ。これは北宋初期第二群と、胎土や釉に似るところが大きい。51　白磁皿Ⅳの口縁部。52　灰白色の、やや粗めの土には、所々砂粒が混り、ピンホールの原因をなしている。釉は淡い灰オリーブ色不透明で、大きめの貫入が見られる。白磁皿Ⅶ。53　灰白色の小孔の多い土である。一部灰色を呈しており、その部分では、釉色も灰色。釉は、色の淡い部分では青灰色を呈し、全体として青磁としてもおかしくない色合だが、白磁皿Ⅶ—aである。外底に薄茶のハマ跡がある。50～53はPL.27－10。54　口を円く折り返した四耳壺。胎土は灰白色緻密な土に、大小の砂粒が混り、小孔が多い。黄オリーブ色を帯びた、半透明釉が厚くかかる。頸の付根で体部と接合している。PL.27－11。

〔青磁〕

青磁は、いわゆる越州窯系青磁と、龍泉窯系、同安窯系の青磁がある。前者については本書で試みた、高野コレクションの分類、後二者については、宋代中期以降の白磁同様「博多Ⅱ」で試みた分類に合わせて説明したい。

越州窯系の青磁　(Fig.19－55～20－79) 晩唐～北宋の青磁である。55はⅠ—1、56はⅠ—6に属する蛇の目高台の碗底部である。ことに後者は数は少ないが、特長的な胎土と形で注目される。PL.27－12。57はⅢ—1、58はⅢ—2—b。両方ともよく焼けており、ことに58は、露胎が滑らかで、畳付に見られる目跡周辺の火跡が、橙茶色に鮮かである。PL.27－13。59 Ⅲ類に似るが小形で、内底に目跡がない点、他に類例がない。60　底の作りからはⅥ類であるが、非常に細かい泥質の土には、ほとんど混りが見られない。露胎は茶色、釉はオリーブ色で、細かい貫入がある。PL.28－15。61、62　ともにⅣ類であるが、内底の目跡は塊状である。胎は乳褐色、釉は茶オリーブ色で貫入はない。PL.28－14。63～65　先細りになりながら、やや開きぎみに終わる碗の口縁部である。前二つは乳褐色の緻密な胎に、光沢のある、ガラス的な釉が薄くかかる。口縁を輪花に作り、体部も外から軽く押して、花形に作っている。64は胎、釉ともやや粗く、灰色である。器外に粗い削りが見られる。器壁は薄い。いずれもⅣ類の碗になるものであろう。66　胎土は灰色の細かい土に、けし粒ほどの褐点が所々に見える。半透明ガラス質の釉は、明かるいオリーブ色を帯び、細かい貫入がある。全体施釉の後、畳付を削って露胎とし、目土を置いて重ね焼をしている。目跡は紐状で輪形に置かれるが、数か所で区切れている。造りは粗く、焼ぶくれがある。口縁は薄造りで大きく外反している。PL.28－16。

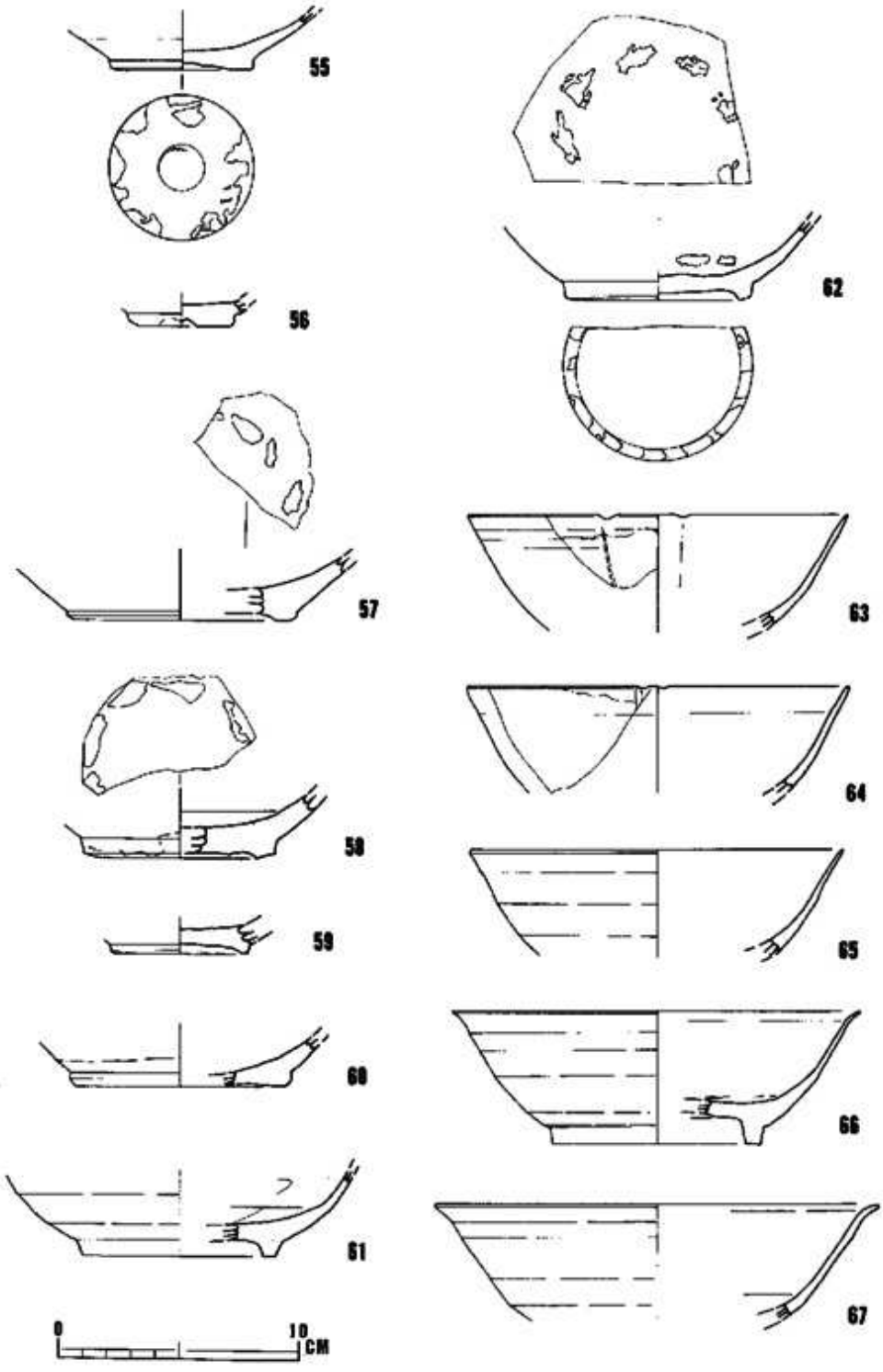


Fig. 19　出土遺物実測図　陶磁器（4）（1／3）

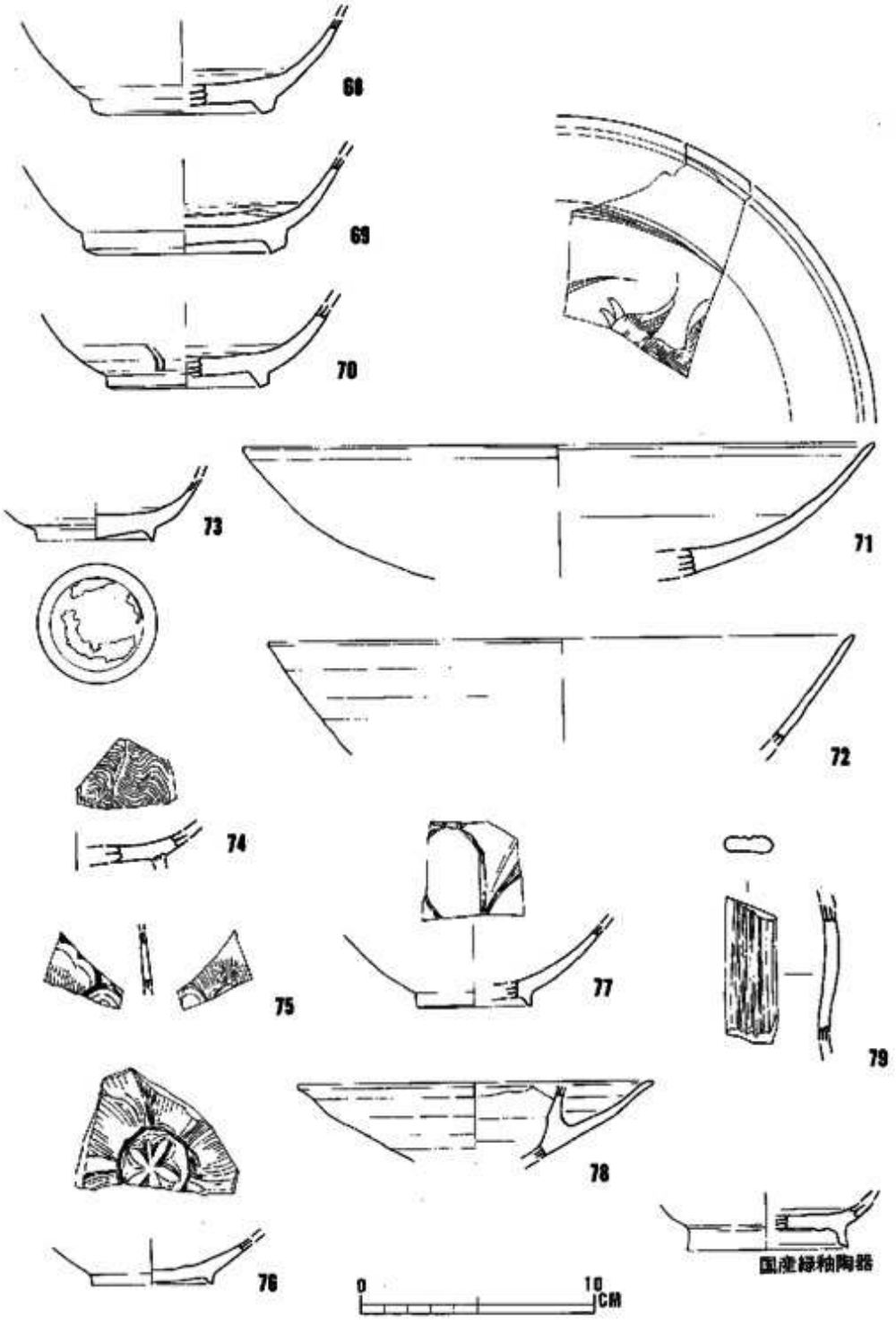


Fig. 20　出土遺物実測図　陶磁器（5）（1／3）

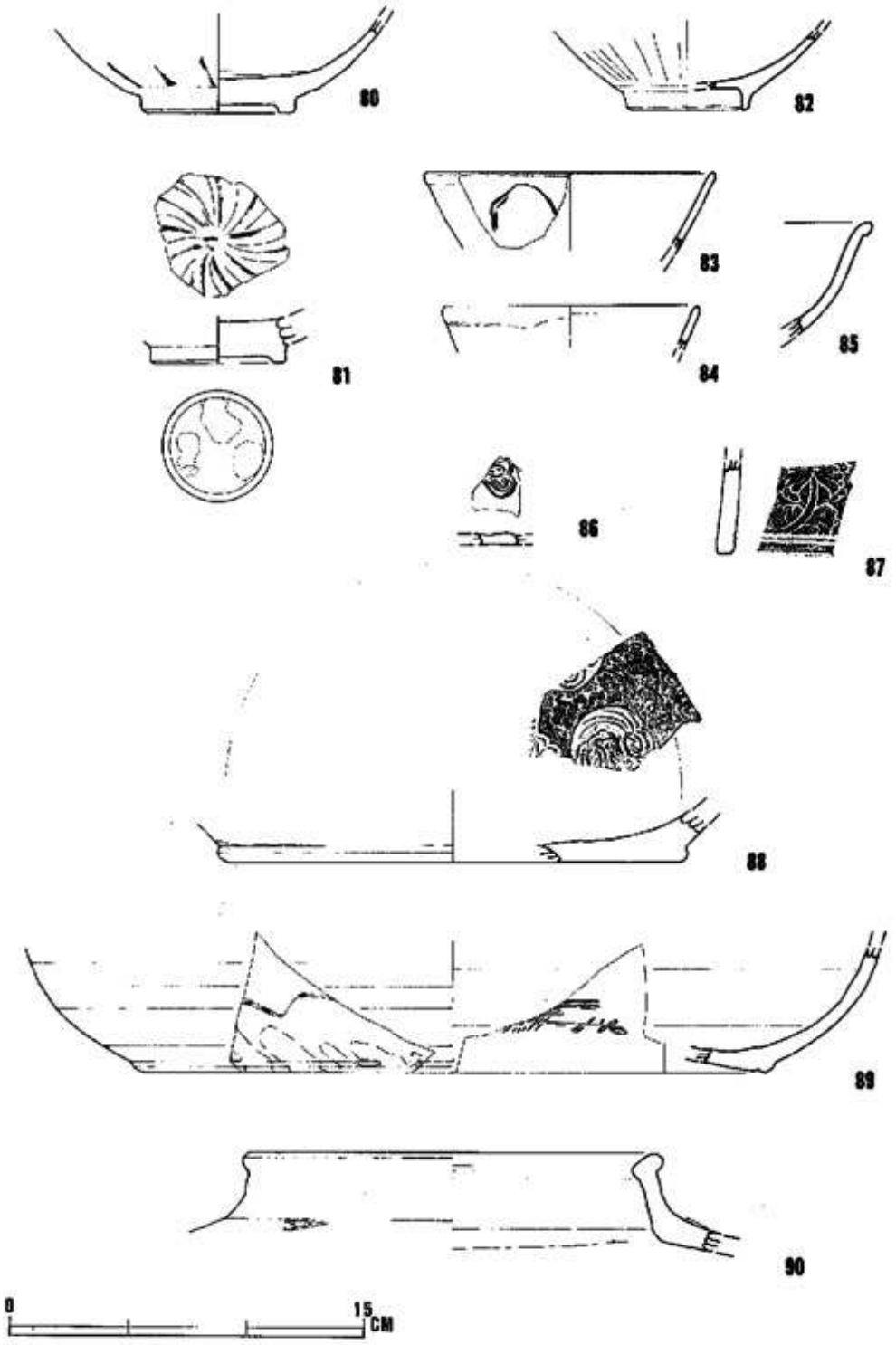


Fig.21　出土遺物実測図　陶磁器（6）（1／3）

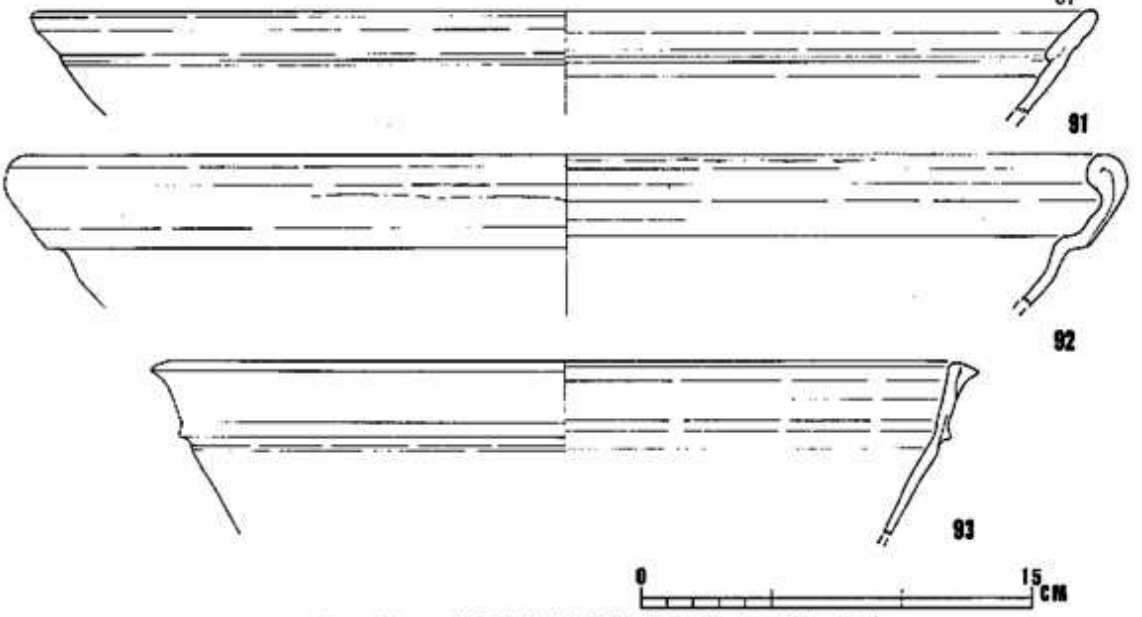


Fig. 22　出土遺物実測図　陶磁器（7）（1／3）

67は底を欠くが、66とよく似た特徴を持っている。この二つもⅣ類である。PL.28－18。68－70 灰色で小孔の多い土である。焼き足りず、釉が熔けていない部分が多く、黄白色にかせているが、体部では透明で、貫入はなく、ガラス質である。内底の目跡は、ほとんど輪状につながり、見込を劃する圏線がある。Ⅳ－bである。PL.28－19。71　鉢口縁部、下方では乳褐色、上部では灰色に焼けた土には、混り物はなく堅緻。オリーブ色ガラス質の釉が、均等にかかる。器内口縁に二本の平行線の間に曲線を描く文様帯をめぐらし、大きな見込には、一対の鳳凰を描く。鳳凰にはとさかと冠がつく。文様はすべて線彫である。PL.28－20左。72　やはり大鉢の口縁部。直線的に斜行する体部と、直口をもつ形で無文。灰ベージュの土には、細かい黒点が混り、オリーブ色の釉には、貫入はない。73～77　いずれも外底頂部に目跡があり、Ⅷ類に属する碗である。最後の一点が、ベージュ色を呈する他は、いずれも灰色の精良な土で、釉はガラス質、透明感がある。77を除き貫入はない。74には線彫の波濤文。PL.28－20右。75, 76にはへら彫と線彫を合わせた花文、77にはへら彫の花文が見られる。PL.29－21。以上の碗形品の他に、少数ながら他の器形のものがある。78は輪花形の托で、混りの少ない灰色の胎に、オリーブ色の透明釉がかかる。釉には貫入はなく、ガラス的な光沢があるが、黄褐色の粉をふいたようにかせた部分が多い。PL.29－23。79は取っ手。背に五条の筋が入る、平たい取っ手である。微かにオリーブがかった、クリーム色の釉には、細かい貫入がある。右の上方より筋二本には、濃褐色の釉が残っており、胎土も灰褐色緻密で、上述のどれとも異なるところから、長沙窯、もしくは婺州窯系と考えられている、青磁褐彩壺のものと思われる。PL.29－24。なお、PL.27－12は晩唐、PL.28－20は五代、PL.28－16, 29－21は北宋と考えられているものである。

龍泉窯系の青磁　(PL.29－26,30－27,28、Fig.21-80～85)

80　碗Ⅰ－6－aである。この類は他に4個体分ある。81　体部はないが、Ⅰ－4と思われる。外底に三個大きな焦跡が見られる。他に小片が7個体分ある。82　Ⅲ類の碗。灰緑色不透明な釉は厚く、よく溶けていない。83～85　これらは「博多Ⅱ」では得られなかった新しいタイプに属する青磁である。体壁は立ち気味になり、底径に対して器高が高くなっている。灰白色の胎に不透明釉が厚くかかっている。14世紀後半から15世紀にかかるものであろう。他に器内に印花文のある碗片があるが図示できなかった。これは元代の青磁である。

同安窯系青磁　(PL.29－25)　小片で図化できなかったが、碗3個体と、皿1個体がある。

陶器　(PL.30－29,30, Fig.21-86～22-93)

86　石膏のように細密な胎土はほんのり肌色がかっている。花弁形の文様は盛上がりが強いが、貼花ではなく、型押のように見える。小片の両面にペンキのような緑釉がかかっている。器形は不明。87　純白の石膏のような柔らかい土で、表面には太めの針金で深く彫りこんだ五代様式の端正な牡丹文が見られる。釉は剝落してしまっているが、線の奥に僅かに残るものから見ると、褐釉がかかっていたと思われる。器形は不明。88　褐釉もしくは青磁盤か、胎土は暗灰色で多孔、白黒の粒が少し見られる。露胎は栗色を呈す。白化粧の上に緑褐色の釉をかけるが、釉はガラス質で細かい貫入があり剝落が激しい。五代風の文様をスタンプで押出して器面を飾っているが、モチーフのわかるのは双鳳風文のみである。底は平底で削り出しの仮圏足。89　褐釉盤。泥灰色の土はやや粗いが混りはない。器内には黄土色の釉がかなり残るが、器外では殆ど剝落してない。剝落の跡は粉をはいたように白い。器外では釉色はオリーブがかった褐色である。器内には細かい草花文がスタンプされ、器外では短い斜線を並べたような装飾が見られる。平底である。90　褐釉壺、暗灰色の細かい土に白黒の砂粒がたくさん混っている。茶褐色の艶のない釉は、厚く溜った所では黄白色の粉を浮べ茶緑色に見える。肩に大きな目土がついている。器内は頸下から露胎で茶褐色を呈する。91　無釉鉢か。灰色の土に長石質の砂粒や黒い粒が大量に混っている。内に折り込んだ口縁である。92　鉢か。紫褐色の堅く焼き締った土には茶褐色の砂粒と粉めいた白い点が見える。大きく弯曲させた口縁は丸く内に向く折返し口縁で、口唇に土灰色の釉跡がある。釉は残っていない。93　褐釉甕か。黒灰色の土にはポツポツと黒点が混る。内外に茶褐色の釉がかかるが、よく熔けず、特に内側では白くかせている。口縁下に断面三角形の突帯があり、口唇も三角形に終わる。口唇は釉を削って露胎としている。

十六世紀の陶磁器　(PL.30－31,Fig.23-94～96) 石垣の築造よりは先立つ時代のものである。94　白磁碗底部　純白の土は精良だが破面に小孔が見られる。僅かに青みを帯びた透明釉がかかる。厚い節高台で外底のくりは丸い。全面に施釉して見込と畳付に砂目跡を残している。

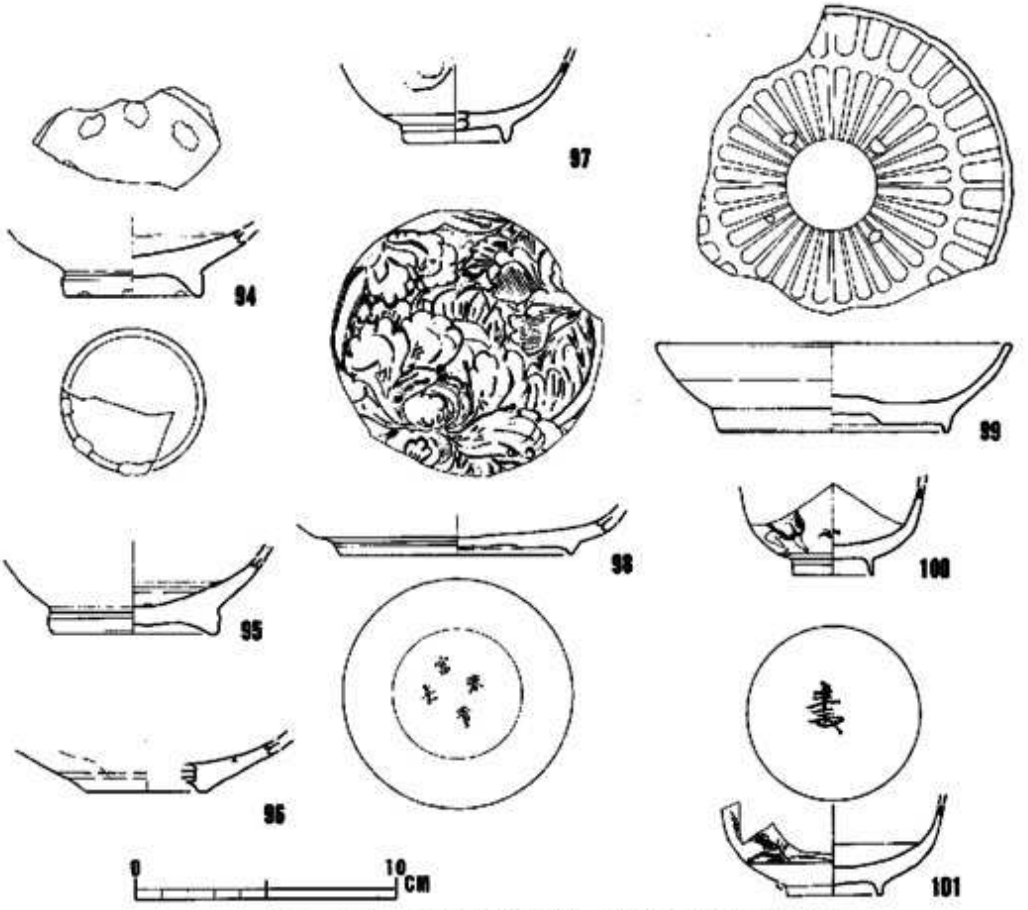


Fig. 23　出土遺物実測図　陶磁器（8）（1／3）

李朝16世紀後半の白磁と思われる。95　白磁碗底部、黄白色の細かい土だが非常に多孔である。微かにオリーブを帯びた半透明釉には細かい貫入がある。やはり節高台だが外底のくりは浅く雑である。全面施釉で畳付と見込に砂目がある。李朝16世紀か17世紀初めの白磁であろう。96　唐津皿、胎土は細かい砂という感じでガラス化は感じられない。微少な雲母まじりの茶色っぽい土で露胎は明るい橙褐色である。暗灰色の不透明釉には軽く貫入がある。松浦系の唐津であろう。

石垣築造後の陶磁器　（Fig. 97-110）以下は堀の底から出たもので、石垣築造の後に堀内に廃棄されたものである。94～110については佐賀県立九州陶磁資料館の大橋康二氏の御教示をいただいた。

Tab. 1　石垣築造後の陶磁器

	種類	胎土	釉	焼成	文様	その他	製作地・年代
97	染付碗	純白	帯肌色、不透明貫入あり	甘い	不明		有田 17C後半～18C初
98	染付皿	純白	透明釉、やや青みあり	良	牡丹文	蛇の目高台	有田 18C

99	白磁菊皿	純白	青白釉、貫入あり	良	型造りで中心より放射状に開く菊花。	蛇の目高台、見込にハマの跡残る	有田 18C
100	染付碗	純白	透明釉、貫入なし	良	人物、発色良		有田 18C
101	染付碗	帯灰白色	透明釉、貫入少々	やや甘い	水か。見込にマークあり		有田 18C後半～19C初
102	染付皿	白色	透明釉、やや青みあり	良	表に唐草文、見込に花		有田 19C
103	藍釉神酒瓶	白色	コバルト青の釉	良	無文		有田 19C
104	染付菊皿	灰白色	透明釉青みを帯びる	良	口紅、見込に型紙の梅花と手描の松葉	型押の菊皿	有田 明治以降
105	染付皿	帯灰白色	淡い灰色を帯びる	良	枠内に湖水の風景。口紅	銅版プリント	有田 大正以降
106	上絵碗	白	牙白色透明釉	良	六歌仙、糸で輪郭プリント、えび茶・緑・黒で彩色	銅版プリントと手描	有田 大正以降
107	染付皿	白	青みある透明釉	良	岩に牡丹か。口紅、コバルトは鮮明である。	輪郭を線描で陰刻スタンプ	有田 昭和？
108	陶器絵皿	黄白色	黄白色、細かい貫入、器外では溶けていない	やや甘い	黒っぽく発色した呉須絵 絵柄不明	釉は底の少し上まで	不明
109	陶器灯台	灰ベージュ	茶色（鉄）釉	良	無文		不明
110	陶器油注	灰	茶緑色 光沢あり 貫入あり	良	無文	孔は貫通していない	不明

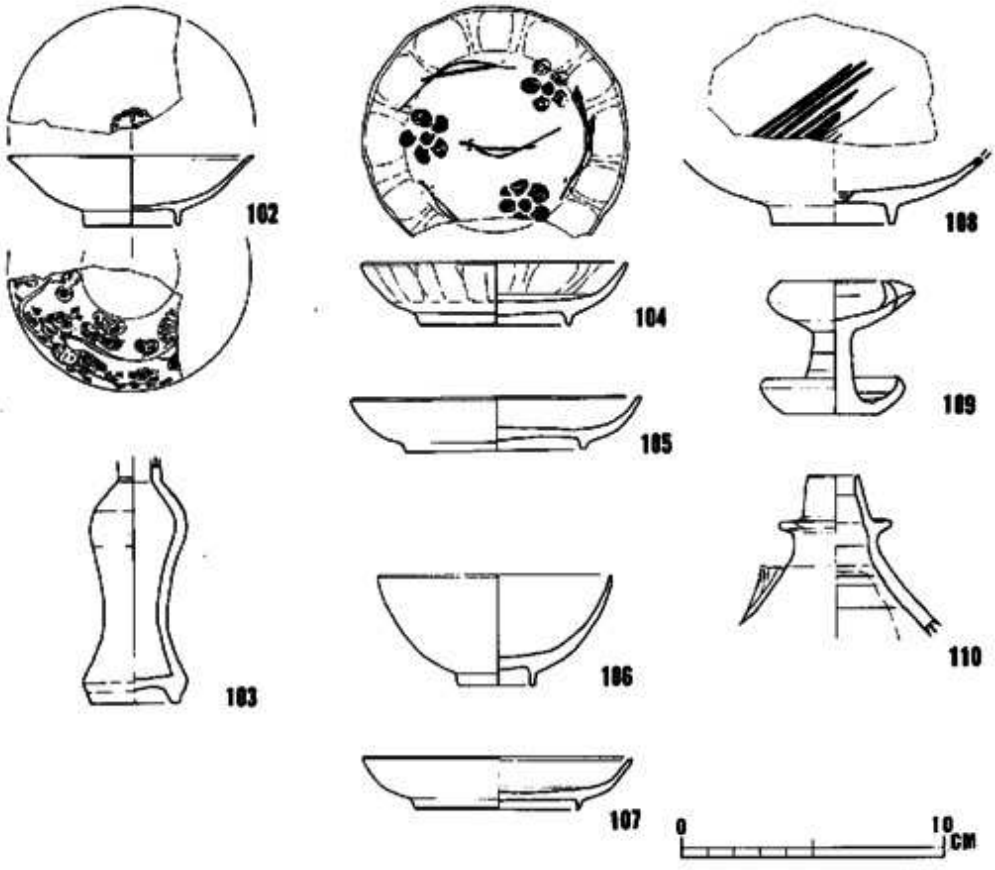


Fig. 24　出土遺物実測図　陶磁器（9）（1／3）

今回の調査で得られた陶磁器は、94以下を除いていずれもその廃棄された原位置から移され、福岡城の石垣築造に際してその裏に込められたものである。陶磁器の編年を主眼とするならば決して第一級の資料とはいえない。それにもかかわらずこの遺物の持つ意味は重要であった。注目すべきは2—37の白磁である。ことに2—30の白磁は足径が大きく、高さは低く薄手で、全体に五代・宋初の越州窯系青磁を彷彿させる。これが晩唐の邢州窯系の白磁と、宋・元のいわゆる江南の白磁との間に位置すべきものであることは、一見して明らかであった。

我国では9世紀に出土の中心がある邢州窯系白磁が10世紀に入って急速に姿を消してから、次に江南の白磁が怒涛の如く押し寄せる11世紀後半までの期間は、これまで白磁にとっては空白の時代と考えられていた。中国においても、近年紀年銘を伴う墓などからの出土例によって知見は増加しつつあるものの、窯址の発掘報告もほとんどなく、その生産地については、華北の定窯を除き、ほとんど知られていないのが実情であった。ところが偶々、最近中国での景徳鎮湖田窯址の発掘に関する論文のいくつかが発表され、我々もその実態を垣間見ることができた。もともと景徳鎮では五代の窯址ととして楊梅亭・石虎湾・黄泥頭などが早くから知られており、これらの窯では青磁と共に白磁も焼かれ、それは重ね焼の目跡が見込に残る越州窯風の碗であると紹介されている。近年湖田窯でも同様のものを焼いた跡が二か所発見されたが、ここでは碗・皿・壺などを焼く。下層は青磁、上層は青磁と白磁が見られるが、両者の形は同じものであるという。遺跡の規模は小さく遺品も多くないが、ここに匣鉢はなく、重ね焼が行なわれていた。1978年に豪猪岭で行われた試掘では、最下層から五代とよく似た器形の陶磁が匣鉢やハマと共に出ており、調査者はこれを宋初の製品と考えている。この白磁は胎土は緻密で透光度もよくすでに現在の磁器の水準に達するものであった。ただ、物原の遺物を見ると早期のものは釉色に微黄を帯びるものが多いという。以上の情報と共に、示された図は、正に我々の白磁と相似のものであった。

すでに我々は、博多部で発掘され、北宋の景徳鎮製品とされる遺物を多く持っているが、それらと今回の白磁が、非常によく似た胎土であることが確認された。折良く亀井明徳氏（九州歴史資料館）が景徳鎮を訪問されることがあり、問題の白磁から5片を選び現地の専門家刘新园・白焜鸿氏に見ていただくようお願いした。結果は2、3、7、22の4片について、10世紀後半から11世紀中期の景徳鎮製品である可能性があるとのことである。残りの1片については11世紀中期から11世紀後期のもので景徳鎮のものである可能性は前の4片に比してやや弱く、近辺の窯が考えられるそうである。不幸なことにこの1片は図化不能な小片であり、器形は22とよく似ているように見えて、筆者にはその差異を見出すことができない。強いていえば釉色が空色がかっていることが特長といえる。ために取り敢えず前記4点を標準として相似のものを集めたのが第一群である。それ以外のものを一応第二群としたが、集めてみるとその

大部分は釉色に空色が見え、ほとんど青白磁といっていいものである。又底部のあるものでは、施釉が幾分上で止まる傾向が見られ、一応区分の意味が認められるように見える。仮にやや新しい傾向の一群として考えておきたい。

31―37の、第三群とした白磁は、第一・二群とは明らかに異質である。11世紀後半以降の、東南海岸地方の白磁に近いものかと思うが、三上次男氏によれば、景徳鎮には、このような白磁もあり、31、32はそれで、又37は、景徳鎮五代の青磁に似るとのことである。他は、ことに高台に注目して、福建産かとされた。

以上の北宋初期の白磁が、今回出土の白磁全体に占める比率は圧倒的であり、この事実は同時に出土した越州窯系の青磁や陶器類の年代観についても、かなり確実な標準として利用することができよう。加えて、73―77の越州窯系青磁Ⅲ類は「太平戊寅」銘をもって確認されるように10世紀後半よりの時代を与えられており、又へらを用いた装飾の面からも北宋の青磁と考えるのが妥当である。61―70は越州窯系青磁Ⅳ類である。一般にⅣ類は10世紀に主役を演じたタイプとされるが、このⅣ類ことに66―70は全体に粗製で釉色は灰青色が多く、口縁は外反の傾向が強い。目跡は輪状に細く一続きに残る傾向がある。これらの特長は、11世紀後半からの遺跡と考えられる博多区冷泉７番地の越州窯系青磁碗（報告書では陶器碗とされる）で更に強調されるものであって、以上の諸点から当該の青磁を北宋初期の越州窯系青磁と認めることができよう。緑釉や褐釉、又無釉の陶器も、博多地区で未だに見たことがなく、９～11 世紀のものとする蓋然性は甚だ高い。尚、ついでに Fig.20 右下に示したのは、同時に出土した須恵質の緑釉陶器であり、10世紀東海地方のものとの御教示を、平安博物館の寺島孝一氏よりいただいていることを付記したい。

これらの陶磁器については、今後類例の増加をまって、我国に於ける輸入及び廃棄の年代を追求しなければならないが、現在のところ北宋初期に於いては越州窯系青磁に比して景徳鎮系白磁の器型変遷は遥かに詳細に把えられているため、この白磁の発見の意味するところは重要である。即ち鴻臚館を擁したこの地区の輸入港としての活動の下限を追求する上で貴重な資料となしうるからである。

註１　李輝柄　「邢窯の発見とその意義について」　出光美術館館報39　1981

註２　横田賢次郎・森田勉　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」　九州歴史資料館研究論集４　1978

註３　福岡市教育委員会　「博多Ⅱ」―本文編・図版編―　福岡市埋蔵文化財報告書第86集　1982．83年

註４　刘新园・白焜　「景徳鎮湖田窯考察紀要」　文物1980―11、刘新园　「景徳鎮湖田窯各期典型碗類的造型特征及其成因考」　文物1980―11

3．須恵器・陶質土器（Fig.25）

大小の破片がかなりの量採集されてはいるが、時期の判別のできるものは少ない。1～3は坏蓋で、口縁端部付近に小さな身受けのかえりをもつもの（1）と、口縁端部をおりまげるもの（2、3）とがある。後者は口縁端部のおりまげはシャープさを欠く。いずれも口縁部付近・内面を横ナデ調整し、1の天井部外面はカキメ調整、2の天井部外面は回転ヘラ切り離しの後に横ナデ調整で仕上げる。焼成は良好で、胎土には砂粒をほとんど含まず、灰青色を呈する。4～6は坏身で、5は体部の下方で一旦わずかに反転してたちあがり、全体の形状は椀に近い。いずれも器面は横ナデ調整を施され、焼成は良好で、胎土には微細砂粒を含む。4、5は灰色、6は灰青色を呈する。7～9は高台付坏の高台部破片で、高台端部が外方にはねるもの（7），同じく端部が外方にはねぎみに肥厚させるもの（8）、高台両端がわずかに張り出し断面逆台形を呈するもの（9）とがある。7、8は体部が椀に近い形状をなすものと考えられ、全面を横ナデ調整し、胎土には粗・細砂粒を含み、灰青色を呈する。9は外底面を時計まわりに回転

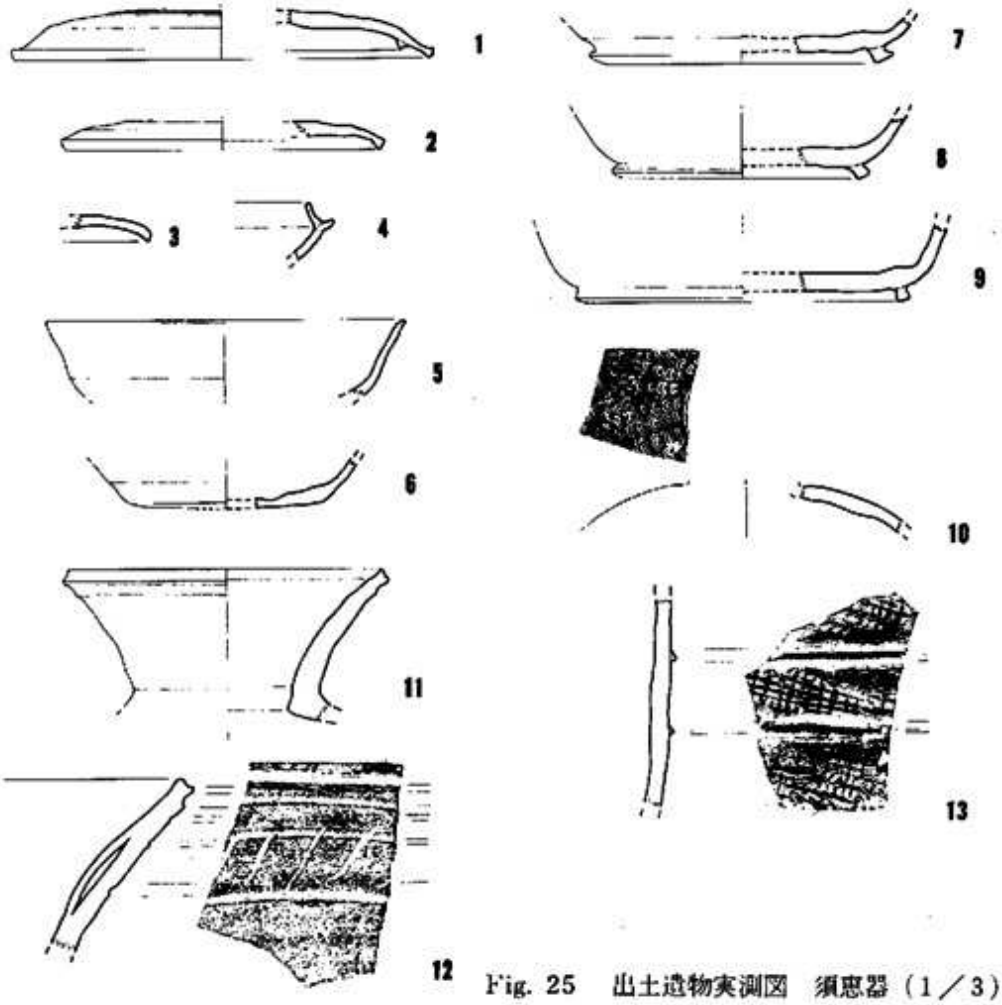


Fig. 25　出土遺物実測図　須恵器（1／3）

ヘラ切り離し、他は横ナデ調整で仕上げる。胎土には砂粒をほとんど含まず、灰白色を呈する。10は短頸壺あるいは長頸壺の肩部破片である。頸部の付け根には沈線がめぐり、それを中心として放射状に「ㅂ」形のスタンプの連続文様を配する。焼成は良好で、胎土には精選粘土を用い、器面は灰色、胎は小豆色を呈する。11は平瓶の口頸部破片か。内外面とも横ナデ調整を施し、胎土には砂粒をほとんど含まず、灰白色を呈する。12は甕の口縁部破片である。３条の浅い沈線をめぐらし、下方の２条の沈線間にヘラ状工具で斜線文を配する。内外面とも横ナデ調整を施し、胎土には細砂粒を含み、灰色ないし灰黒色を呈する。13は外面に格子目タタキを施した後に小さな断面三角形突帯を貼付し、その周辺を横ナデ調整して仕上げる。内面は横ナデ調整する。その他に、外面に格子目のタタキを施した後にカキメに調整し、内面には同心円文のタタキを残し、内外面に濃緑色の自然釉のながれた底部破片などがある。

以上、１・５・７・８は７世紀後半、２・９は８世紀前半、３は８世紀中頃に比定される。また、10については九州大学の西谷正助教授から統一新羅時代のものとの御教示をいただいた。

４．その他の遺物

堀石垣の調査で出土した遺物のうち、前項で述べたものを除いて、一括して出土地点ごとに簡単な説明を加えることにする。紙面の都合上、実測図、写真は掲載しえなかったことを予め断っておきたい。

堀内から出土した遺物はヘドロの堆積層中にいずれも含まれている。堀内出土遺物の年代は、築城時、すなわち江戸時代以降から、福博電車軌道敷設のため堀が埋められる明治43年までに限られる。先に述べたように、幕藩体制の終焉とともに城郭の権威が失なわれる明治時代に到って、堀はゴミ捨場の様相を呈してしまい、出土遺物は特にこの明治時代の遺物が大半を占める。サーベルの柄、機関銃の薬莢、飯盒など城内に設けられた旧陸軍兵営関係の遺物も見られるが、ほとんどは一般市民の日常生活に用いられた用具である。目につくまま列挙してみよう。徳利、銚子、盃、碗、皿、油壺などの陶磁器（有田、瀬戸周辺のものが多く、高取・須恵焼も含まれる。）　ビール瓶、牛乳瓶、ワイン瓶、ニッキ水瓶、おはぐろやクリームなどの化粧品瓶、ガラス皿、下駄、火箸、自転車のベル（英国トライアンフ社製）、明治22年の半銭銅貨、陶製貯金箱（「塵も積もれば山となる」と墨書きされている例もある。）、馬の蹄鉄など枚挙するにきりがないが、いずれも明治時代の人々の生活の様子がしのばれる遺物である。しかし、生活環境の変化も偉大なもので、古老に聞いても用途のわからない物も幾つかあった。このほ

かⅠ区石垣直下堀内で碇石が出土している。長円形の花崗岩の両側に縄かけ用の溝を彫り込んだもので、一端を欠失している。県指定文化財などになっている柱状の碇石とは形態が違い、それより後出すると思われる。石垣用材であったものが堀に転落したのかもしれない。

裏込めおよび埋土粘土からは、多量の瓦、陶磁器などとともに、土師器、弥生甕棺、石斧も少量出土している。土師器、弥生甕棺はいずれも細片である上、風化がはげしく詳細な観察は不可能である。石斧も火熱による剝落が多く全容を知り得ないが、玄武岩製の磨製である。城内に供給源を求められるこれらの遺物は、天守台で箱式石棺が発見されたことも併せて、鴻臚館（筑紫館）の設置以前から、この丘陵に集落の存在していたことを明確にするものである。Ⅶ区付近の石垣改修による粘土からは、高取焼の大甕の破片を中心に、ハマ、トチン、輪状焼台など窯道具が一括出土している。これらは1回目の改修時に埋められたものであるから、文化9（1812）年以前のものであると言える。福岡市における高取焼窯は、西皿山、東皿山が著名であるが、いずれも裏込め粘土供給源としては遠隔の地である。寛永5（1628）年から享保9（1724）年まで、荒戸に荒戸窯が設けられており、1回目改修時の粘土はこの窯が廃棄されたのち、ここから運搬されたものと考えるのが最も信憑性が高いであろう。この推測が正しければ、第1回目の作り換えは1724年から1812年の間に行なわれたものと言うことができる。Ⅶ区新入隅部の石垣裏込めからは、花崗岩自然礫を用いた墓石と思われるものが出土している。一面に「天保十年…木…」他面に「月庭…」の文字が刻まれている。これは天保10（1839）年以降に、第二回目の作り換えが行なわれたことを示すものである。

自然堆積の砂層から出土しているのは、少量の瓦、陶磁器などの他には、黒曜石石鏃、縄文土器、甕棺片等が目についた程度である。石鏃、縄文土器ともにローリングを受け、磨耗がはげしい。縄文土器は小破片で、文様等明確でないが、大濠公園でかつて阿高式土器が採集されたこともあり、それらと関係があるのかもしれない。

第５章　城壁に使われている石材

種子田　定　勝

石材の肉眼的・顕微鏡的観察を行ない、石材の種類（岩類・岩種）を細別し、それぞれの性状、個数比を区分別に明らかにした。その概要を簡単に述べる（１～３）。

なお、石材採取地点推定に関連のある事項についても若干附記する（４）が、各種石材の正確な採取地を決定ないし推定するためには、周辺地域の詳細な地質調査と、更に精細な岩石学的研究が必要であり、それは今後の研究課題である。

１．石　材　の　分　類

現地における石材の岩種鑑別に便利で、かつ、石材の採取地域の推定への第一歩として適当な分類基準を設けた。

玄武岩類（Basalts） —	Bb.	〝優黒色〟
	Bg.	〝灰　色〟
花こう岩類（Granites） —	Gw.	〝優白色〟
	Gd.	〝花こう閃緑岩〟
	Gj.	〝閃緑岩〟
	Gb.	〝斑糲岩〟
	Gs.	〝片状花こう閃緑岩〟
	Gp.	〝ペグマタイト質〟
堆積岩類（Sediments） —	Cg.	〝礫　岩〟
	SS.	〝砂　岩〟
	T.	〝凝灰岩〟
変成岩類（Metam. rocks） —	M.	〝優黒色・緑色〟

シルト（Silt）
珪化木（Mud. S）

２．石　材　の　分　類　説　明

１）火山岩類

玄武岩類	優黒色玄武岩	Bb.	黒色、ち密、無斑晶質。構成鉱物は、かんらん石、輝石（単斜）、斜長石、オパサイト等である。
	灰色玄武岩	Bg.	灰色、ち密、無斑晶質。板状節理がみられる。構成鉱物は、かんらん石、輝石（単斜）、斜長石等。

２）深成岩類

花こう岩類	ペグマタイト	Gp.	粗粒、淡桃色。カリ長石、石英、黒雲母、白雲母を主鉱物とする。

花こう岩（優白色）　Gw.　石英、カリ長石が比較的多く、優白質、斜長石（少量）、石英は波動消光が著しい。有色鉱物は僅かに黒雲母、緑泥石がみられる。

花こう閃緑岩　Gd.　斜長石が比較的多く、石英、カリ長石を含む。有色鉱物としては、黒雲母、普通角閃石、輝石類を含む。

閃緑岩　Gi.　斜長石、普通角閃石が主で、石英、カリ長石は少ない。輝石（単斜）を含む。

いわゆる斑糲岩　Gb.　暗黒色、斜長石が多く、有色鉱物として普通角閃石、黒雲母が多い。

片状花こう閃緑岩Gs.　片状構造が発達した花こう閃緑岩、主成分鉱物は、斜長石、石英、カリ長石。有色鉱物としては普通角閃石（緑色）がみられる。

3）堆積岩類

礫石　Cg.　粗粒（径2～10ミリ）、灰色。

砂岩　SS.　細粒（径2ミリ以下）、層理がみられる。（緑色を呈するものが多い。）

凝灰岩　T.　細粒～粗粒。比較的酸性、安山岩質凝灰岩。

註　火山砕屑岩であるが便宜上堆積岩類に含める。

4）変成岩類　M.

角閃岩　暗緑色、角閃石類のほか少量の斜長石、チタナイト等を含む。

蛇紋岩　暗緑色一灰緑色。蛇紋石、緑泥石、角閃石類、滑石等からなる。

緑色片岩　黒緑色、片状組織がみられる。緑泥石、角閃石類、蛇紋石、滑石等よりなる。

3．石材の岩種別個数比

Tab. 2 に示すとおりである。

各岩類、岩種の個数頻度分布は表から容易に読みとれるので、ここに記述を省略する。

4．附記（石材の採取地点に関連して）

石材採取地の推定は、地質、岩石の精査を必要とし、今後の課題として残されるが、関連ある若干のことを述べると次のとおりである。

堆積岩類

石材堆積岩は福岡市附近の「姪浜層」～「野間層」に属するものに近い。前者は姪浜町附近のほか、天神町一警固（地下）でみられ、後者は香椎町附近、野間～手塚附近に露頭がある。

玄武岩類

能古島、今山、毘沙門山等に産するものと同類である。

花こう岩類

福岡市附近の「糸島花こう閃緑岩」、「早良花こう岩」に近いものと思われる。前者は津船崎附近、今山、長垂海岸、能古島、立花山、香椎南方等に分布し、後者は、月隈丘陵、油山山地、飯盛長垂山塊の大部分を占める。

変成岩類

おそらく「三郡変成岩類」に属するものと思われるが、これは福岡市附近でも諸所にみられる。すなわち、香椎東方附近、立花寺東方、能古島、長垂、今津、柑子岳などがその例である。

調査参加者　　種子田　定勝　　妹尾　護　　高井　真夫
中田　節也　　南新　真裕

Tab. 2　石材の岩種・岩類別個数と個数比

区	ケース区分	個体番号	火成岩類			花こう岩類						堆積岩類					変成岩類		個数
			Bb	Bg	測(1) Rh	Gw	Gd	Gi	Gb	Gs	Gp	Cg	SS	T	Silt	Mud.S	M (Serp)	M (green)	(計)
Ⅰ区	1	1～40	52.5%			15.0%						32.5%					0 %		40
	2	41～117	36.4%			20.8%						42.9%					0 %		77
	3	118～183	40.9%			25.8%						33.3%					0 %		66
	4	184～264	38.3%			3.6%						57.9%					0 %		81
	5	265～368	54.8%			11.6%						33.6%					0 %		104
	6	369～480	39.3%			17.9%						41.0%					1.8%		112
	7	482～571	22.0%			27.5%						50.6%					0 %		91
	8	572～676	34.3%			14.4%						50.5%					1.0%		105
	9	677～764	60.3%			2.2%						37.5%					0%		88
	10	765～836	50.0%			2.8%						44.5%					2.8%		72
	11	837～926	21.1%			3.3%						74.4%					1.1%		90
	計（個）		251	121		16	50	32	21	1	1	Cg.T 269	SS.T 156	1	1		6		926
	%		27.1	13.1		1.7	5.4	3.5	2.3	0.1	0.1	29	16.8	0.1	0.1		0.6		(99.9)
Ⅱ区		1～123	39	12	2	1	3	1	2	1		20	20				2	1	109
			51.4%			7.3%						38.5%					2.8%		(100)

区	ケース区分	個体番号	火成岩類			花こう岩類						堆積岩類					変成岩類		個数
			Bb	Bg	Rh	Gw	Gd	Gi	Gb	Gs	Gp	Cg	SS	T	Silt	Mud.S	M (Serp)	M (green)	(計)
Ⅲ区	1	1～100	28	14		2	7	7	6			13	13			1			91
			46.2%			24.2%						29.7%					0 %		(100.1)
	2	101～200	16	9	1	4	4	3	5			32	21						95
			27.4%			16.8%						55.8%					0 %		(100)
	3	201～300	22	9		1		2				20	17		1				72
			43.1%			4.2%						52.8%					0 %		(100.1)
	4	301～400	12	10		1	1					43	20				2	1	90
			24.4%			2.2%						70 %					3.3%		(99.9)
	5	401～526	7	6		5	2	2	3			46	40				1	1	113
			11.5%			10.6%						76.1%					1.8%		(100)
	6	527～593	35	13		1	1	2	1			4	2						59
			81.4%			8.5%						10.2%					0 %		(100.1)
Ⅳ区	1	1～100	26	3		4						30	15						78
			37.2%			5.1%						57.7%					0 %		(100)
	2	101～200	12	2								26	34				1		75
			18.7%			0 %						80%					1.3%		(100)
	3	201～300	9	4		2	1					15	44	1			1		77
			16.9%			3.9%						77.9%					1.3%		(100)
	4	301～400	16	7		2					斑(2) 2	27	30					1	85
			27.1%			4.7%						67.1%					1.2%		(100.1)
	5	401～500	26	10			4	2	4			24	32	1			2		105
			34.3%			9.5%						54.3%					1.9%		(100)
	6	501～600	30	7			1			1		26	27						92
			40.2%			2.2%						58.2%					0 %		(100.6)
	7	601～700	31	9		0	6	1	1			9	21				1		79
			50.6%			10.1%						38%					1.3%		(100)
	8	701～1080	64	34		4	9	7	1	9		170	63	2		2	8	3	376
			26.1%			8.0%						63%					2.9%		(100)
Ⅴ区		1～146	36	28		1	1	1				54	13			1			135
			47.4%			2.2%						50.4%					0 %		(100)

区	ケース区分	個体番号	火成岩類			花こう岩類						堆積岩類					変成岩類		個数(計)
			Bb	Bg	Rh	Gw	Gd	Gi	Gb	Gs	Gp	Cg	SS	T	Silt	Mud.S	M (Serp)	M (green)	
Ⅵ区	1～200 570～592		7	7		1		1	1	1		135	67				1		221
			6.3%			1.8%						91.4%					0.5%		(100)
Ⅶ区	1～78		3			1		1		1		44	24		2	1			77
			3.9%			3.9%						92.2%					0 %		(100)
築陸新川	1～130		11	30		7	59	17	3	2			1						130
			31.5%			67.7%						0.8%					0 %		(100)

※(1)　Rh=流紋岩　　※(2)　Gp=桃色花こう岩類　石材の分類、石材の分類説明と相異する。

この章は、種子田先生が1977年に執筆された原稿であるが、編集上の都合により表の一部を改編させていただいた。表の誤り、見にくさが生じたならば全て編集者の責任である。
また、石垣個々の石種についてのデータも揃っているが、スペースの狭さから幾つかのブロック毎にまとめている。Ⅳ区の201～569の石材については、まだサンプルの鑑別が行なわれておらず、ここでは一応欠番としておく。

石材サンプル採取作業風景

第6章　保存された石垣について

今回の福岡城堀石垣の調査は、対象が、福岡市教育委員会のこれまでに調査経験のない近世城郭の石垣であるという点から、調査の完璧を期するために数回の調査指導員会議を開催して、各専門分野における調査指導員の先生方の調査方法等の御指導を賜り、それらをもとに発掘調査を行なうこととした。また、これらの石垣が、国指定史跡福岡城跡の総構えの一部であり、福岡城を把握する上で欠くべからざる重要な石垣であるという認識から、国民の共有財産として大きな価値を有するものであり、当然のようにその保存問題についても大いに議論がなされたところである。石垣保存に関しては、教育委員会および高速鉄道建設局双方の、路線決定前における事前協議の不備が強く指摘されたものの、既に路線変更の余地はなく、現実的な保存方法についての検討がなされた。オープンカット工法で、石垣基盤のほとんどが砂層、しかも路線内石垣総延長約450 mの大半が路線内を縦断しているという極めて困難な状況であり、技術的にも全面保存は不可能であった。あらゆる検討を経て導き出された方針は、部分保存の現状保存という方向であった。その条件は、石垣線の方向を考える上で重要な部分で、遺存状態の良好なことである。その結果、Ⅳ区入隅、Ⅵ区入隅の現状保存が決定され、特にⅥ区入隅は歩道に近いために、市民に活用されるべく公開保存施設も設けられることとなった。また、Ⅵ区入隅の現状保存石垣は昭和55(1980)年2月に、国指定史跡福岡城跡の一部として追加指定されることになった。薬院新川石垣では工事中に撤去し、終了後原位置に復元することとなった。

Ⅵ区入隅石垣公開保存施設

公開保存施設内部

石垣の一部とはいえ、困難な状況で残しえたのは、高速鉄道建設局の文化財に対する深い御理解と、調査指導委員の先生方や関係者諸氏の熱心な努力の賜であることを明記しておかねばならないだろう。

第7章　結　　語

時の移り変りにしたがって、明治末年、路面電車のレール敷設にともない、道路下に埋め立てられてしまった福岡城の堀石垣は、約70年後に今度は地下鉄工事によって再び陽の目を見ることになった。その時々の社会状況の変化が、堀石垣の辿った運命一つを見てもつくづくと感じられるのである。

昭和51（1976）年12月の荒戸工区の調査から始まり、昭和53（1978）年6月の薬院新川石垣の調査終了まで、足かけ約1年6ヶ月の調査結果をまとめたのが本書である。充分に意を尽くせなかったが、以上の成果を簡単にまとめ、結語としたい。

1．明治以降の度重なる埋立てで、城の総構えが不明瞭となってしまったが、その縄張りを再確認する上で重要な知見が得られた。Ⅵ・Ⅶ区での石垣線の作り換えは前後3回に及び、それぞれの年代もある程度推測され、石垣線の時間的変遷が把握された。

2．地下鉄工事により破壊されている部分も多かったが、石垣の構築法は看取しえた。堀外壁石垣は内壁および薬院新川石垣と比較し、基礎構築物が見られないなど稚拙な点が目についた。

3．石材の鑑定によって各工区毎の岩種の割合にも相違があった。これは各工区で石材供給源を異にしていること、補修工事による石材の変化などが考えられる。元寇防塁・名島城石垣・城南の古墳の石材などの再利用も言われているが、その点は明確にしえなかった。

4．裏込め及び埋立土から出土した多量の瓦、中国陶磁は、鴻臚館跡付近から二次的に移動したものであるが、故地の明確な遺物としてその資料的価値は高い。採集遺物という数に制限のある資料によって行なわれたこれまでの研究に、更に豊富な遺物群を加えることになった。博多遺跡群の調査とともに鴻臚館から博多へと対外貿易の窓口が移ってゆく経緯が、遺物の上からもより明らかにされるであろう。

5．石垣下の岩盤の推移や石垣裏込めのトレンチ調査により、一帯の旧地形を復元しえた。城北における砂丘の存在、丘陵や自然谷の方向の確認などである。

6．福岡城および鴻臚館の設置以前から、福崎の地に各時期にわたって集落が営まれていたことも重要な事実の一つであろう。

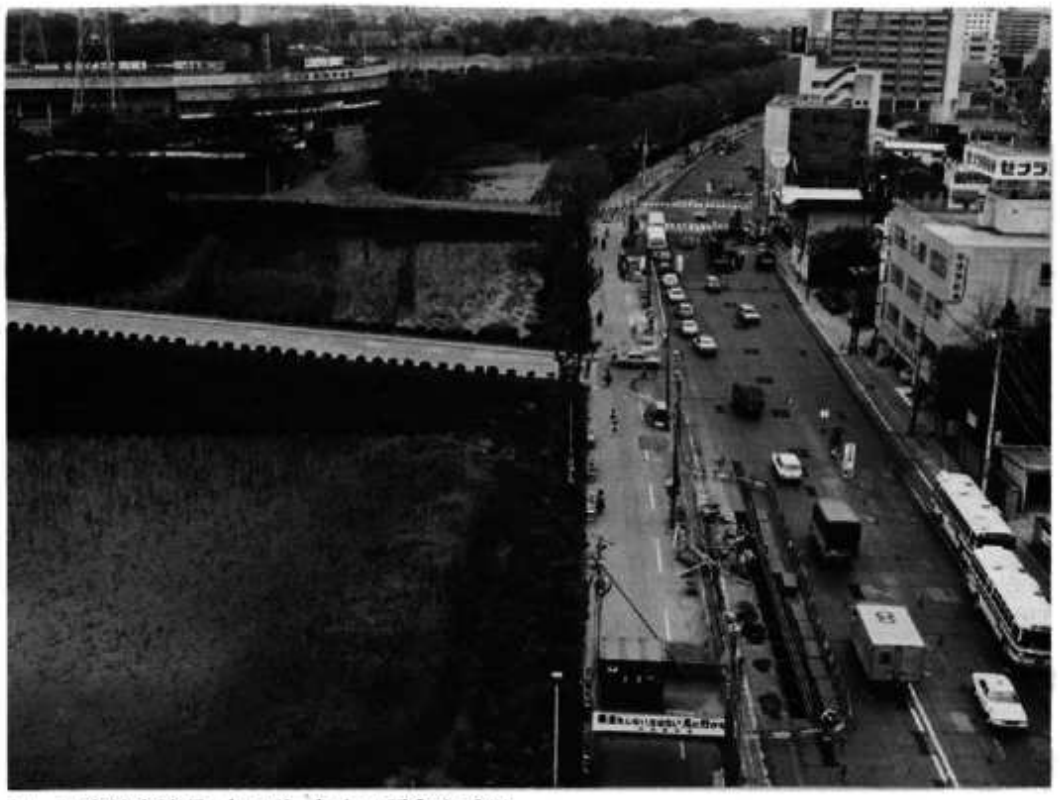
7．石垣線確認の上で重要なⅣ区入隅部、Ⅵ区入隅部、薬院新川の3地点の石垣が現地保存された。Ⅵ区入隅部新旧石垣は昭和55（1980）年に新たに国史跡として追加指定され、市民への公開施設も付設された。

これらの成果に加えて、付編として5編の福岡城・鴻臚館に関する報告・紹介・論文を掲載することができた。いずれも、福岡城・鴻臚館を研究する上で欠くべからざるものであると信じる。これらの成果が、福岡城・鴻臚館の実相究明に少しでも役立つならば幸甚に思う。

写真図版

PLATES

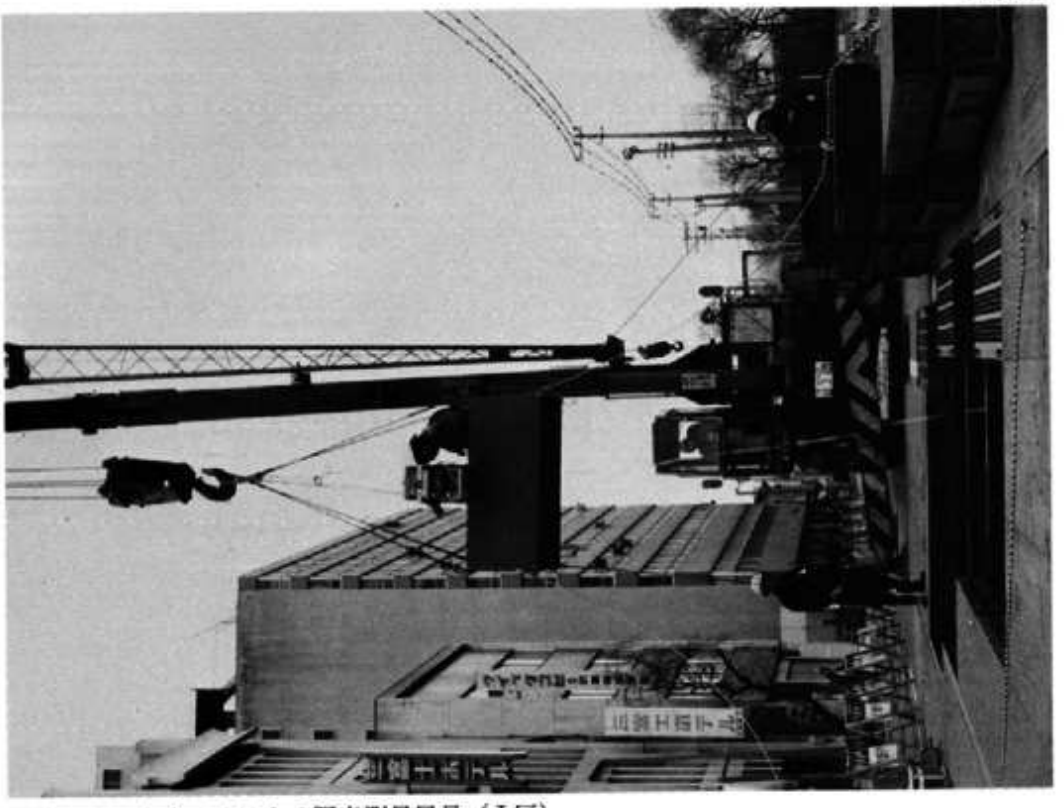
1．福岡城　下の橋の汐見櫓の現状



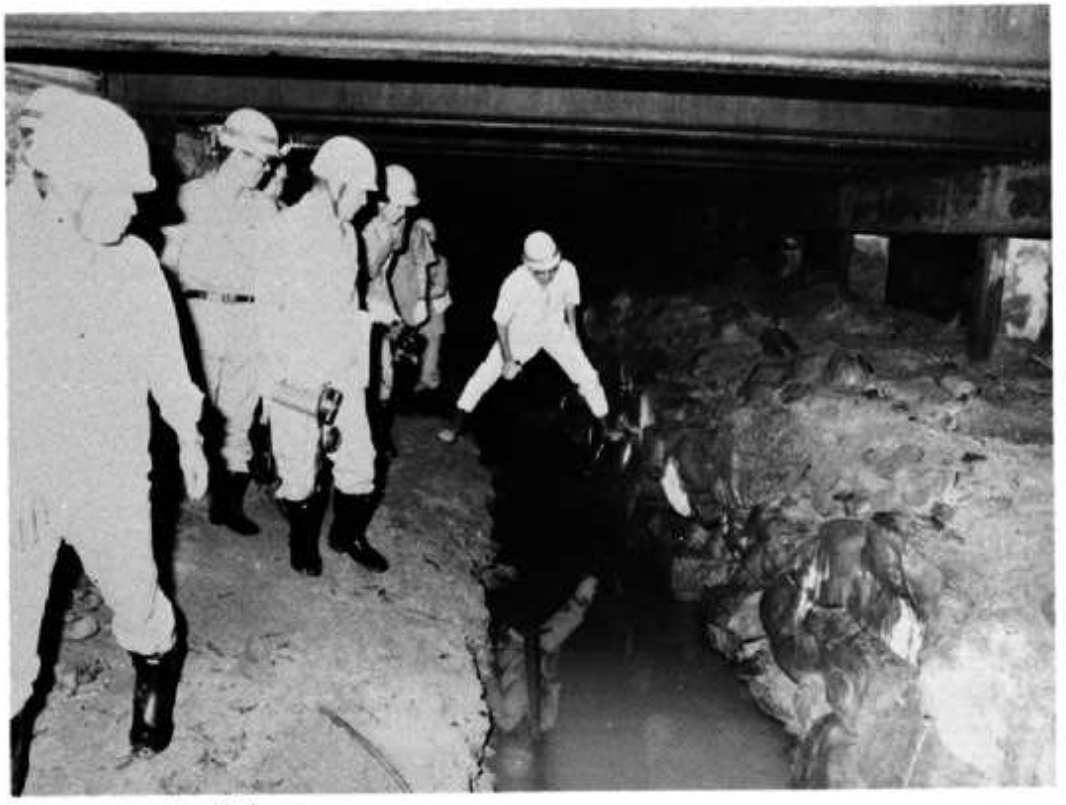
2．調査地点遠景（Ⅵ区）左上は平和台球場

1．福岡城　石垣　試掘風景（Ⅱ区）

2．発掘作業風景（Ⅲ区）



1．ステレオカメラによる写真測量風景（Ⅰ区）



2．文化庁技官の視察

1．Ⅰ区石垣（東より）

2．Ⅰ区石垣（西より）

1．Ⅰ区石垣（部分）

2．Ⅰ区石垣線と裏込め石

1．Ⅱ区石垣（下の橋に続く、西より）

2．Ⅱ区第２トレンチ土層

1．Ⅲ区石垣（東より）

2．Ⅲ区石垣（西より）

1．Ⅲ区石垣（西より）

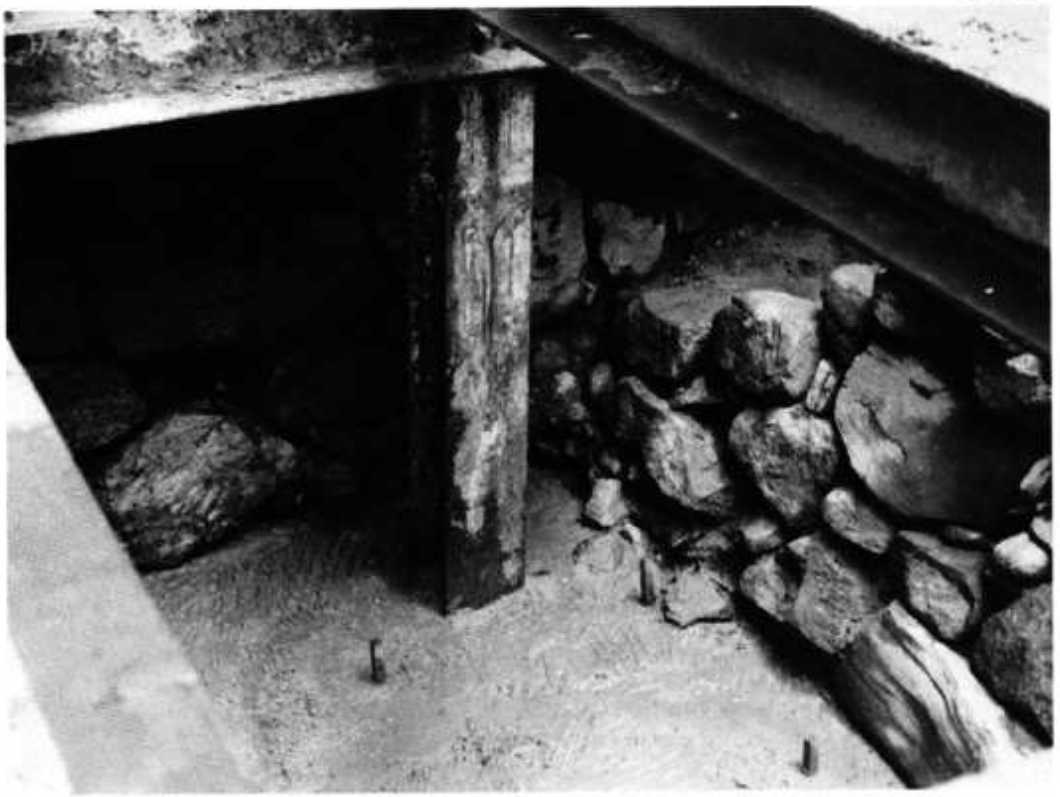
2．Ⅲ区石垣入隅部（南から）

1．Ⅳ区石垣（西より）

2．Ⅳ区石垣（東より）

1．Ⅳ区石垣（東より）

2．Ⅳ区石垣入隅部（西より）



1．Ⅳ区石垣入隅部（南西上より）

2．Ⅳ区石垣入隅保存部

1．Ⅳ区石垣入隅部保存作業

2．Ⅳ区石垣清掃作業風景

1．Ⅳ区第２トレンチ裏込め

2．Ⅳ区第２トレンチ土層

1．Ⅳ区第3トレンチ

2．Ⅳ区石垣入隅部第12トレンチ

1. Ⅵ区ポンプ室石垣岩盤状況

2. Ⅵ区石垣（東より）

1．Ⅵ区石垣入隅（西より）

2．Ⅵ区石垣旧入隅（西より）

1．Ⅵ区第6トレンチ土層

2．Ⅵ区拡張トレンチ1（左旧、右新石垣 北より）

1．Ⅵ区拡張トレンチ2石垣

2．Ⅵ区拡張トレンチ3石垣

1．Ⅵ区拡張トレンチ4石垣

2．Ⅵ区拡張トレンチ5石垣

1．Ⅶ区石垣（東より）

2．Ⅶ区石垣（東より）

1．Ⅶ区石垣（東より）

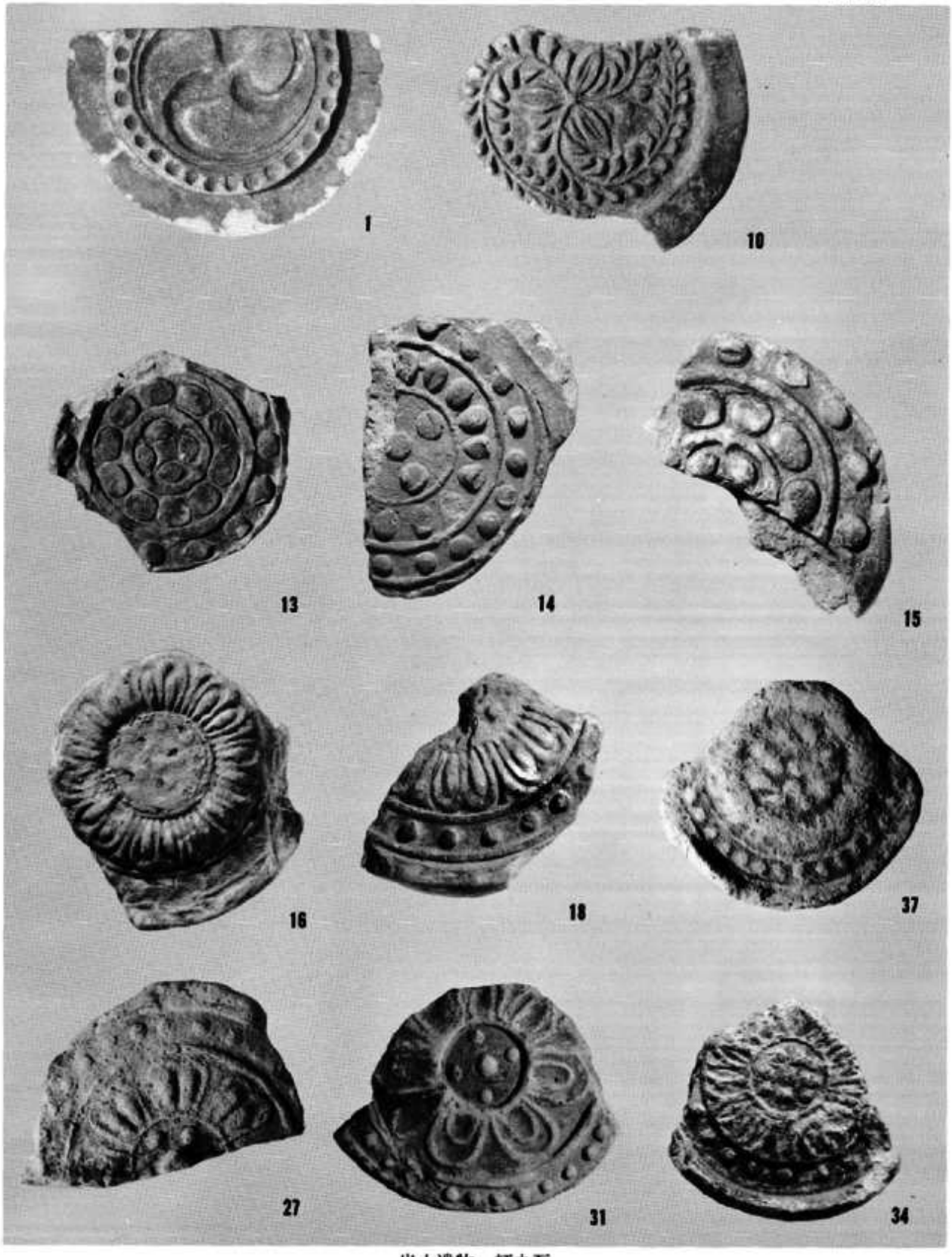
2．Ⅶ区石垣（西より）

1．薬院新川石垣（南より）

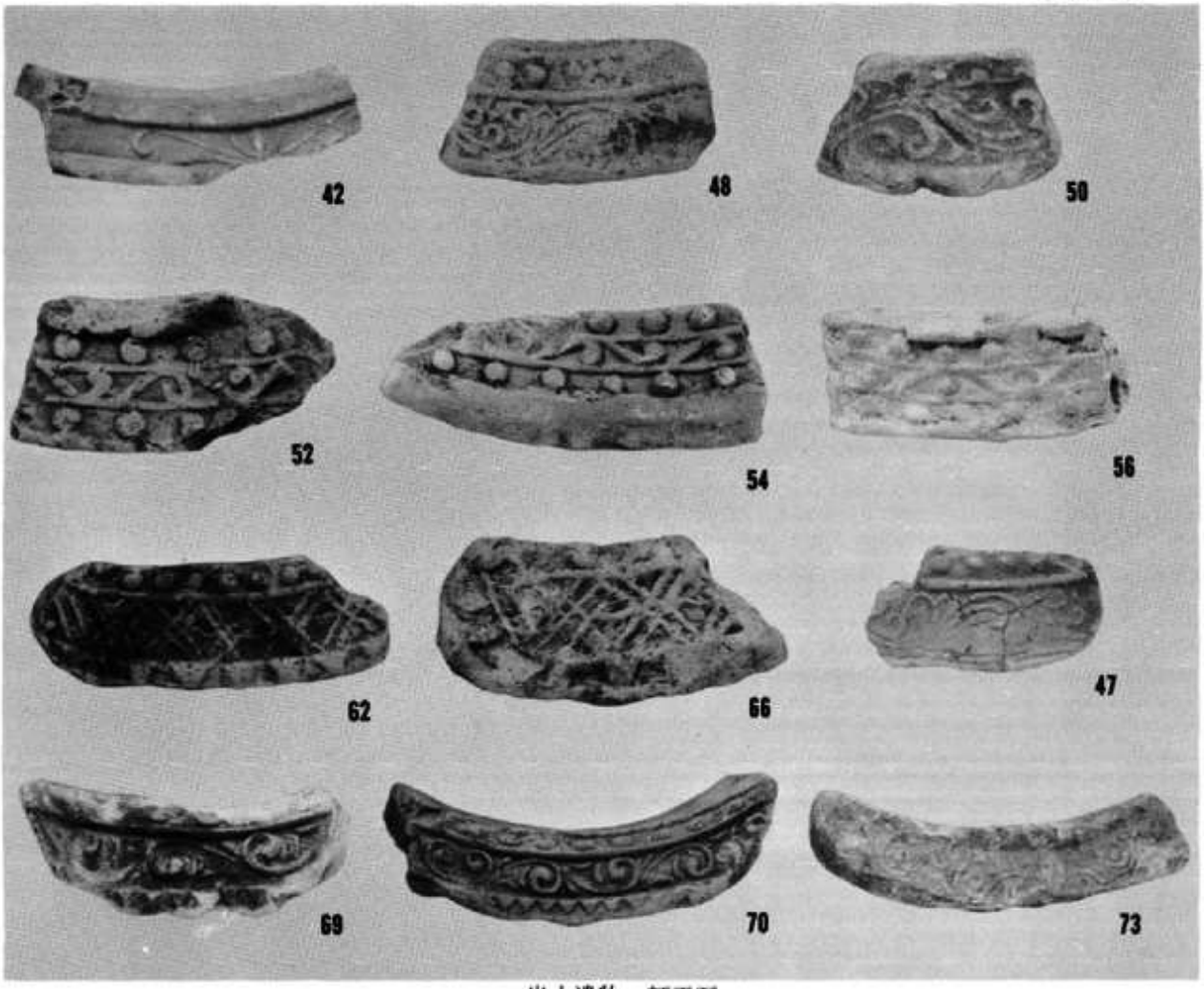
2．薬院新川石垣（北より）

↑1. 薬院新川石垣断面

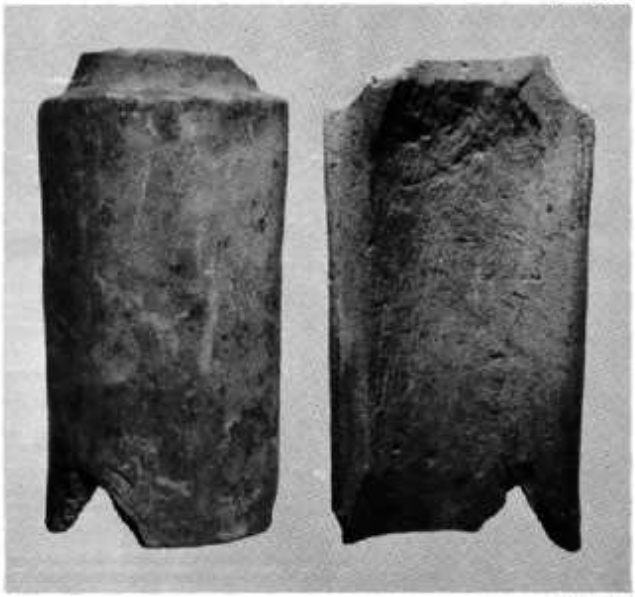
←2. 薬院新川石垣胴木出土状態



出土遺物　軒丸瓦



出土遺物　軒平瓦

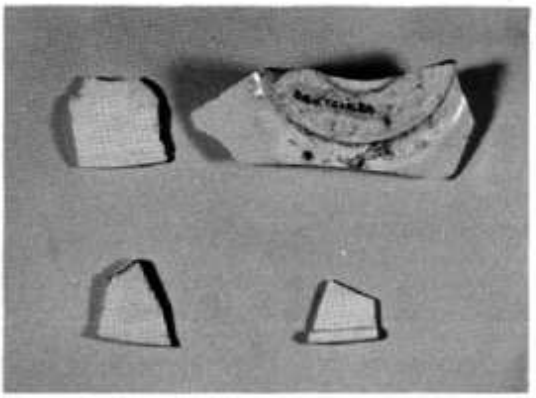


出土遺物　丸瓦

福岡城址石垣出土の陶磁器

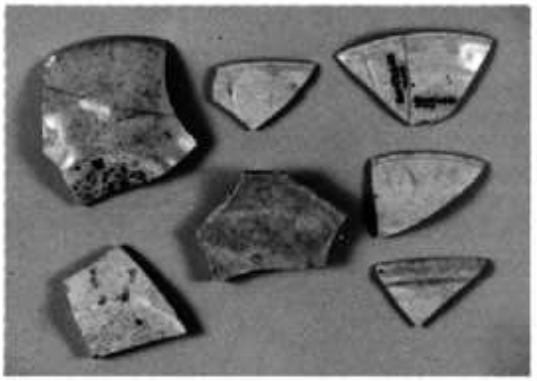
↑3

←1



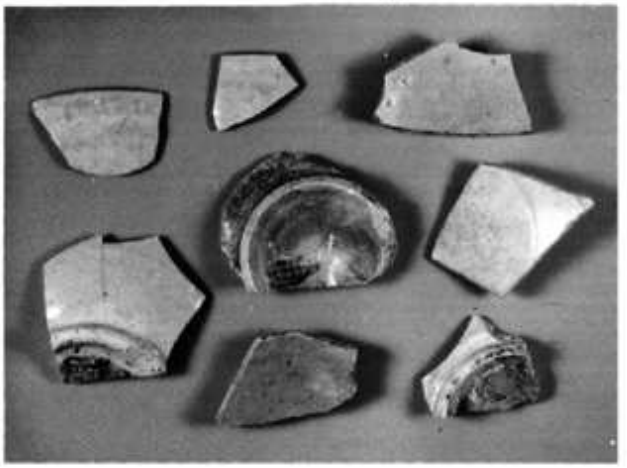
↑2

←4



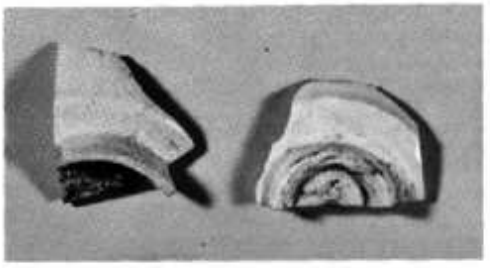
↙5

6↓



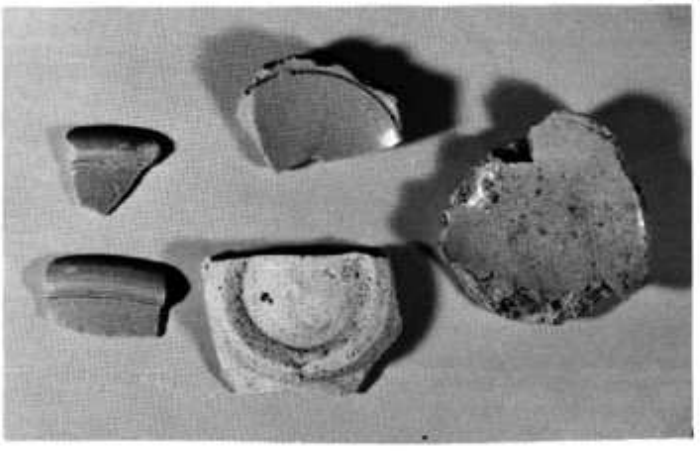
PL. 26

← 7

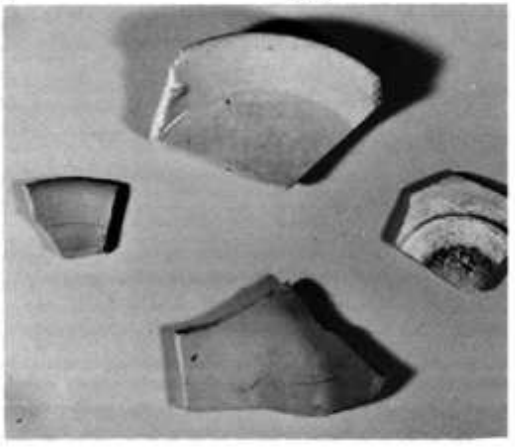


↑ 8

↙9

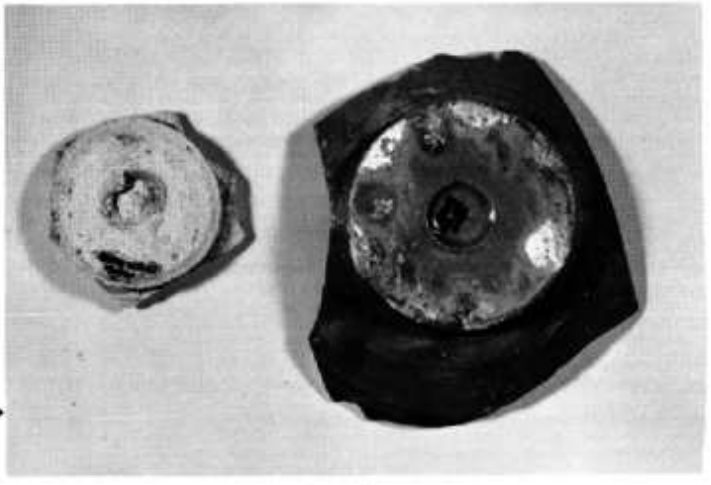


↓ 10



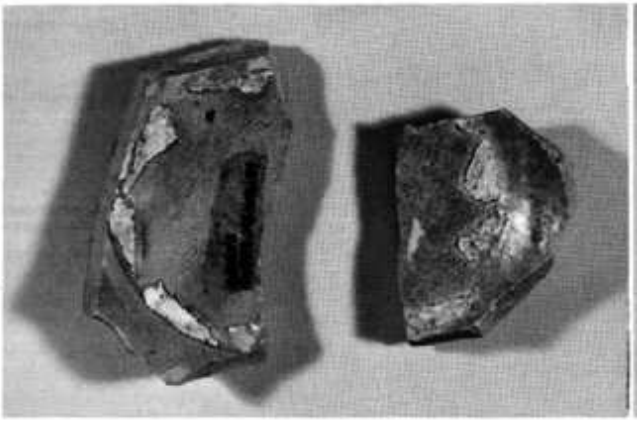
↑11

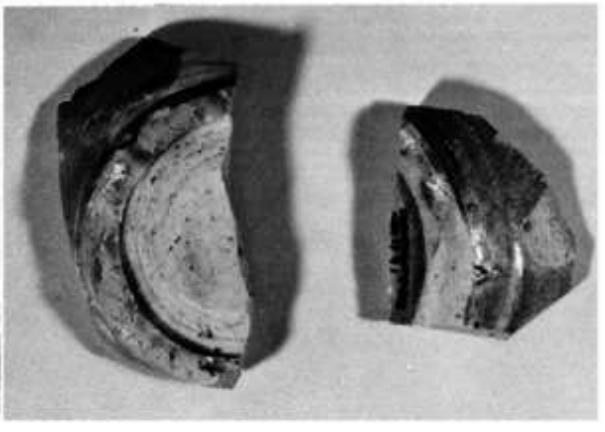
12 →



↓13 a

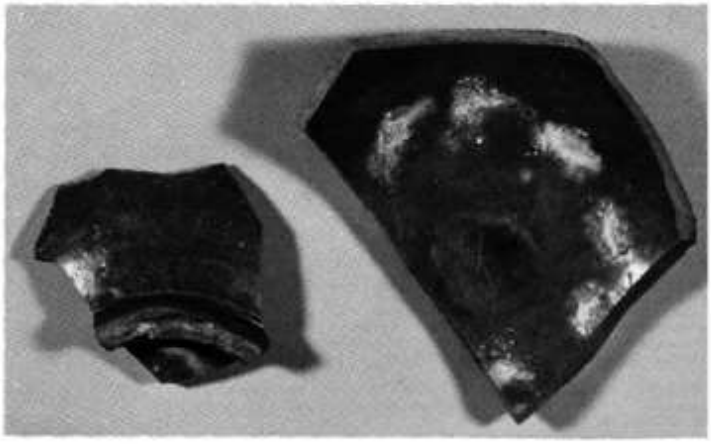
13 b →



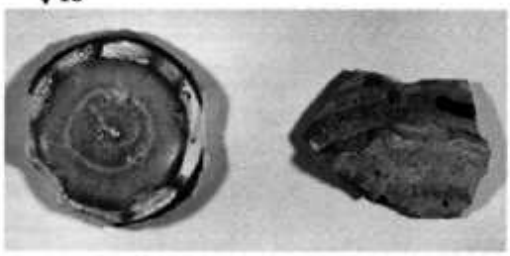


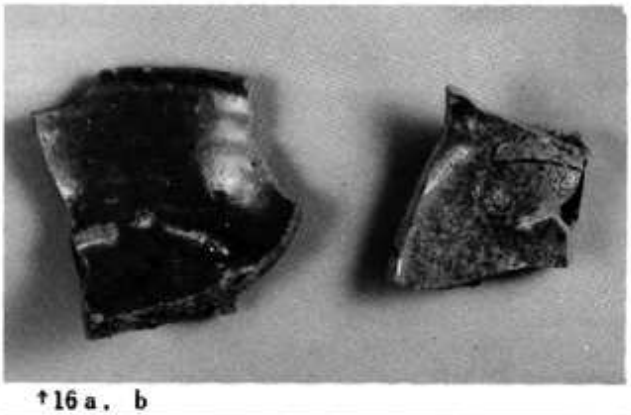
PL.
27

14 →



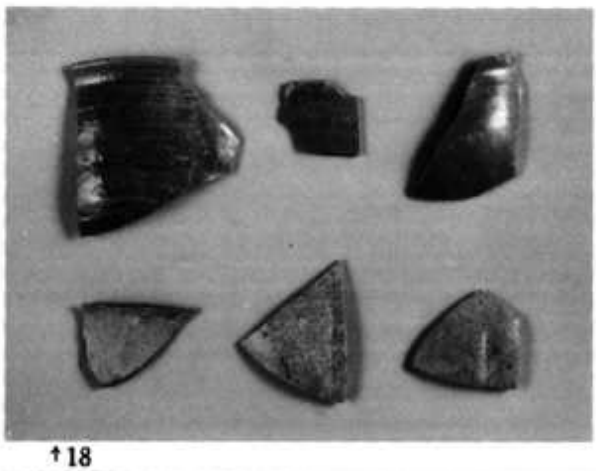
↓ 15



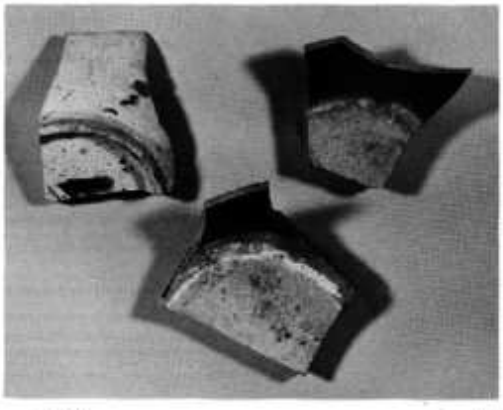


↑ 16 a, b

↑ 17

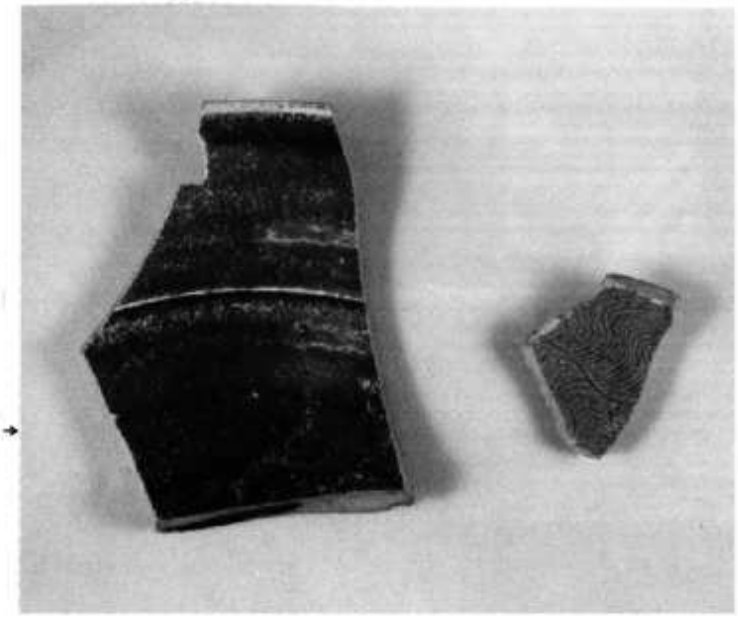


↑ 18

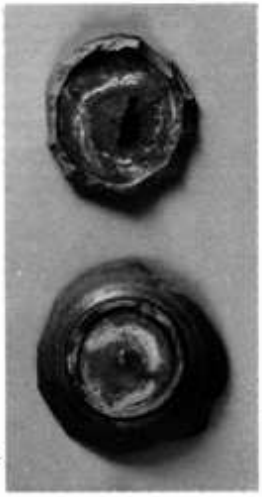


↑ 19

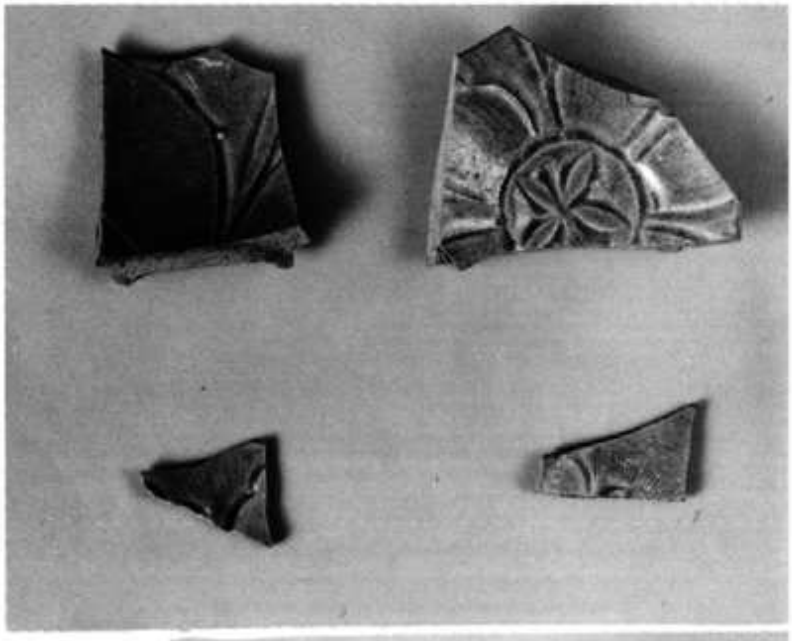
20 →

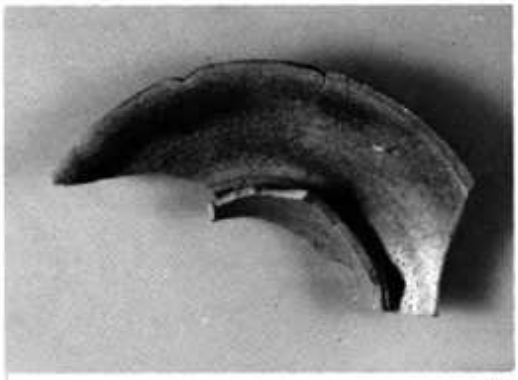


PL.
28

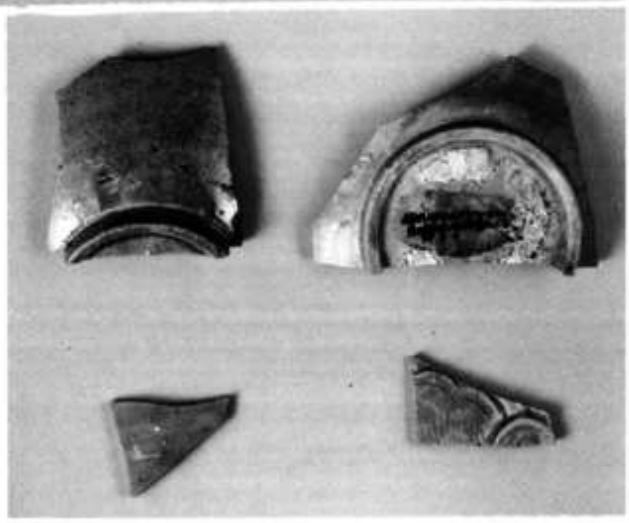


22 →

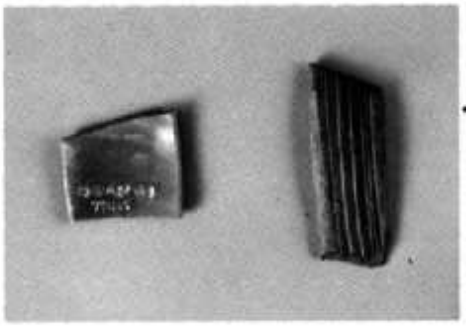




↑ 23

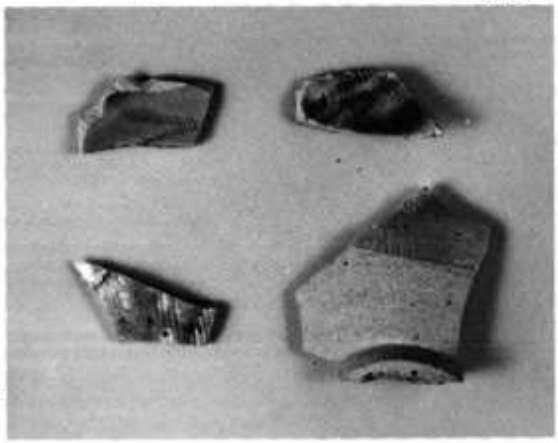


↑ 21 a, b



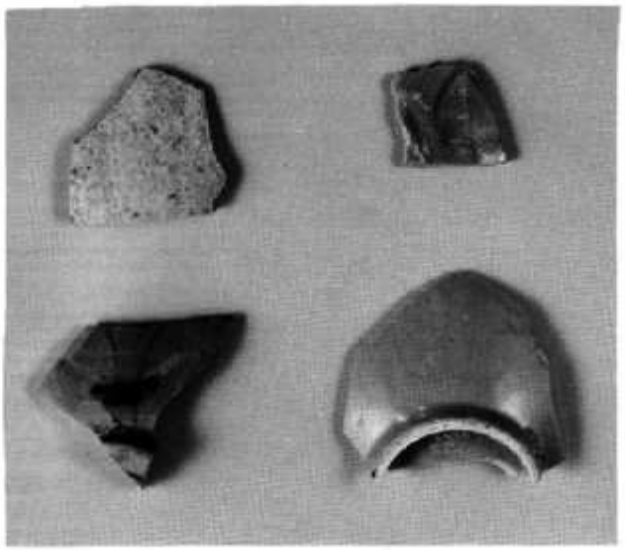
← 24

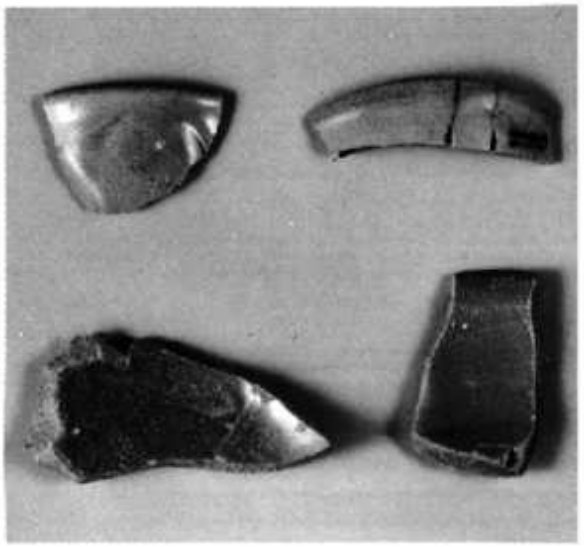
↓ 25



↓ 26

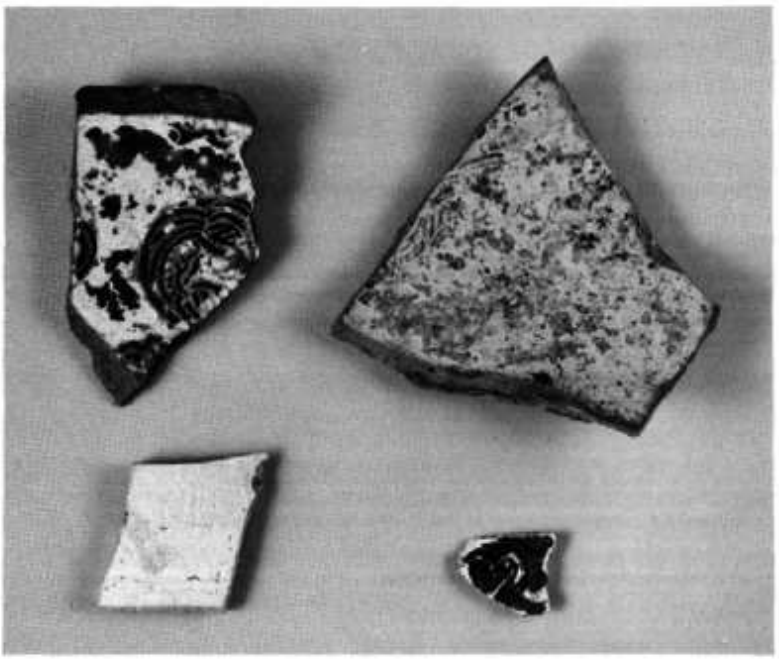
PL. 29





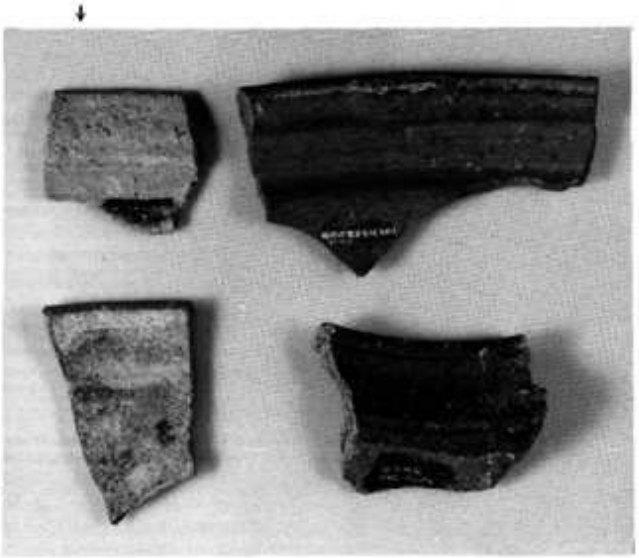
27

28

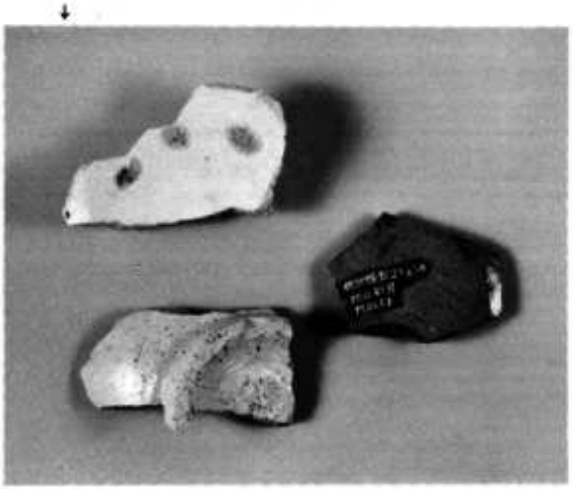


29

30



31



PL. 30

付　　編

1．福岡市中央区赤坂１丁目の福岡城石垣の調査

2．福岡市立歴史資料館収蔵の高野コレクション

3．出光美術館の高野コレクション

4．九州大学考古学研究室収蔵の平和台出土遺物

5．黒田長政と福岡城

付編1．福岡市中央区赤坂1丁目の福岡城石垣の調査

福岡城の東側に位置する赤坂門および肥前堀周辺は、明治時代中頃から数回にわたって埋立てられ宅地化が進み、現在では中層ビルが立ち並ぶ福岡市街地中心部を形成しており、昔日の景観はほとんど窺い知ることができない状況である。当該地区の肥前堀を含んだ城堀石垣線の位置については、地下鉄工事に伴い昭和51年から昭和52年秋にかけて実施された荒戸一赤坂門間の発掘調査の成果と、江戸時代古地図ならびに明治期の地形図等を底本としておおよその推定がなされ、文化財分布地図に推定位置として記載されている（付図1）。今回の調査地点は、この推定線では、江戸時代末期から明治時代中頃まで在ったとされる城堀石垣線に相当すると考えられる位置であり、文化9年（1812年）作成の福岡城下町・博多近隣古図では、赤坂門に近接する地点にあたる。現在の行政地番では福岡市中央区赤坂1丁目12－8番地である。

石垣は吉田医院の増築部基礎工事中に発見され、文化課へ届けられた。現地踏査により福岡城城堀石垣であると確認された為、吉田医院長吉山義一氏と文化課とで、保存上の問題も含め協議を行ない、(1)基礎パイルの位置を変更し、石垣を現状のまま地中に保存し、(2)基礎工事に先立ち緊急に発掘調査を行なうことが確認された。

発掘調査は、昭和57年3月19日から3月25日の7日間にわたって、福岡市教育委員会文化課が実施した。

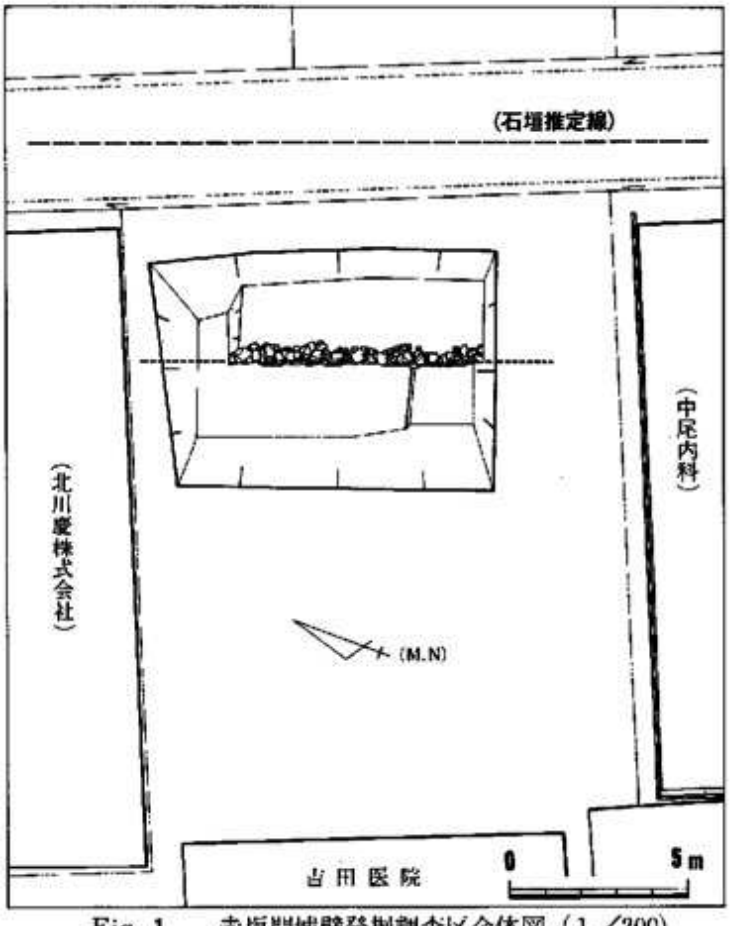


Fig. 1　赤坂門城壁発掘調査区全体図（1／200）

調査区の設定（Fig.1　PL.1）　調査区は、石垣線の方向を考慮し、東西に約7.0m、南北に約10mの範囲で設定し、石垣推定線の発掘調査による検証、石垣の遺存状況、構築状況等の把握を目的として調査を行なった。

石垣の検出状況（Fig.2　PL.2～4）石垣は現地表面から約120cm下位でその天端が現れ、基礎工事中に破壊された部分を除いて約7.2mの長さにわたり調査区内では検出された。地表から石垣天端までと、堀内の埋土はその上層中からガラス製化粧瓶、ホウロウ引き洗面器、下駄、陶磁器等が出土していることから明治期以降のものと考えられる。石垣上部は原位置をとどめず動いているものもあるが、比較的遺存状況は良好である。石垣線は、磁北から西へ20°30″振れており、先述した推定線とほぼ同じ方位を測るが、実際の位置は推定線よりも西へ約6.4mずれていることが明らかとなった。本書第3章の6・7節で述べた第Ⅵ区入隅での外壁石垣の調査所見、第Ⅶ区の3地点における試掘結果（付図.2）を踏まえると、少なくとも文化9年以降の肥前堀を除く赤坂門までの城堀の縄張りは推定線どおりほぼ誤りないものと判断できる。なお当該地点での城堀幅は石垣天端間で約33.3間（60m）を測る。

石垣の構築状況（Fig.2　PL.4）石垣は標高－20～25cmを基底面として、最っとも残りのよい所で高さ2.1mを測る。基底部の状況は、調査区壁の崩落の危険があり、掘り下げていないため明確でないが、当該地点はかなり厚い砂層が堆積しており基盤は軟弱である。したがって、「捨て石」あるいは「丸太敷き」等の基礎工法がとられたものと考える。石積みの状況は、標高約0.4m前後から上位は、数回の補修が行なわれたとみえ目地の不規則な乱積みとなっており若干の孕みがみられる。下位は水平に目路が走る布積みで、石材も長大なものを用い安定感を保っている。裏込めは、拳大の割石、栗石を石垣空隙に埋めこんだ後、赤褐色粘質土、灰白色砂土を突き固めている。なお裏込めからは近世陶器片、土師器片が出土しているが図示しえるものはない。

以上、大まかに調査所見について述べたが、今回の成果を加味し、築城当時から明治期までの赤坂門～肥前堀縄張りの考古学的復元が、今後の課題としてあげられる。

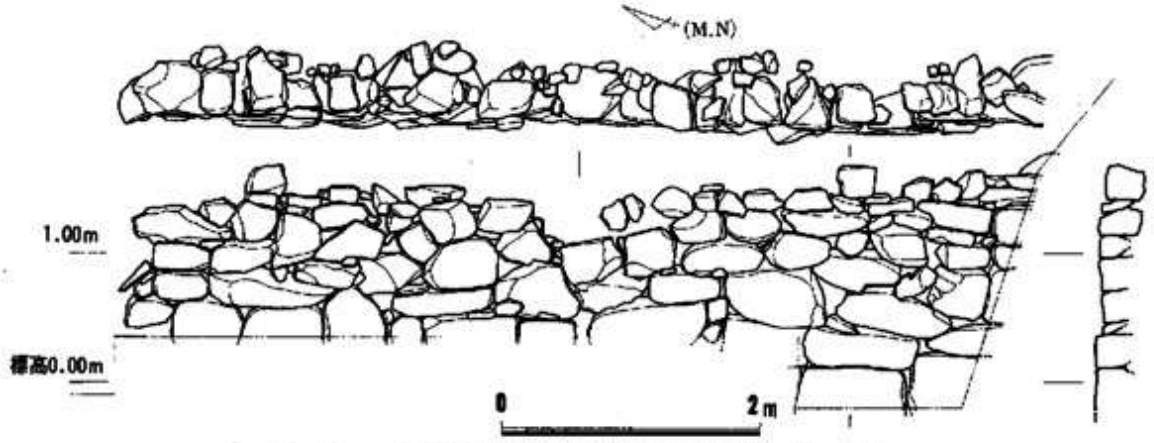
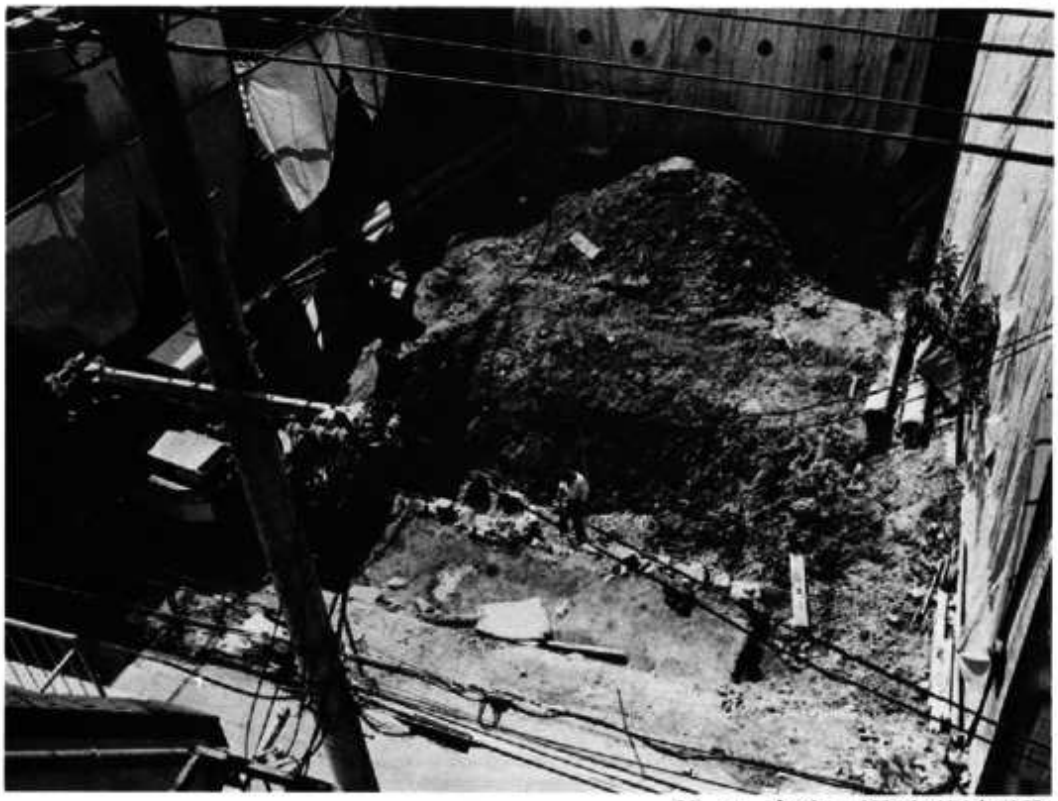


Fig. 2　赤坂門城壁平面・立面及び断面図（1／60）



PL. 1　赤坂1丁目石垣調査風景

PL. 2　石垣露呈状況（西から）

PL. 3 石垣露呈状況（北西から）

PL. 4 石垣部分拡大（西から）

付編２．福岡市立歴史資料館収蔵の高野コレクション

戦後間もなくの混乱期に、福岡城内は幾多の工事という名の遺跡破壊が行なわれ、中山平次郎博士によって論証された大宰府鴻臚館跡も、遺憾ながら遺構の実体は何ひとつ明らかにされぬまま潰滅の憂き目を見る結果となった。この困難な時期に、確実に各工事地点の遺物を採集し、整理した故高野孤鹿氏の業績は、のちのちの鴻臚館研究の基礎となるものであり、大いに評価されなければならない。氏はまた、1972年『平和台の考古史料』（プリント）として、この間の遺跡破壊の実態とその経緯、遺物の採集地点などを克明にまとめている。これは遺跡破壊の告発状とも言えるが、氏のフィールドワークの総括でもあり、これによって採集遺物は倍旧の学術的価値を付与されているのである。採集された遺物は、1970年に鴻臚館関係が福岡市立歴史資料館に、大宰府関係が九州歴史資料館に寄付されている。これまでに幾度か世に紹介されているが、その全容には及んでおらず、今回の福岡城堀石垣調査報告の関連資料として改めて出来るだけ多くの資料を紹介したいと考える。掲載するにあたって、福岡市立歴史資料館石橋博館長、後藤直氏に便宜をはかっていただいた。記して感謝の意を表したい。

高野コレクションの出土地点を知る上での参考に、城内の主な工事過程を記すことにする。

1950年　３月平和台球場完成。９月22～24日球場地ならし後の廃土より小蒋硯発見、この前後に千数百個の越磁を採集

1951年　６月球場入口堀側を拡張　７月大音屋敷跡で破砕前の巨石を見て助命　８月九州文化総合研究所が巨石付近を調査

1952年　７月28日　小山富士夫氏、高野コレクションより八片の越州窯青磁を発見

1954年　４月６日ナイター工事開始　同12日Ｂ区（付図１参照）に礎石出現、５月４日Ｅ区に井戸跡、古瓦出土、調査をまたず破壊、Ｆ区で瓦と陶器破片採集（Fig.4-36．37）

1955年　３月大音屋敷跡拳闘場脱衣場全焼　６月この地区の採集品あり

1957年　８月福岡城国指定史跡となる　10月球場改装開始　スタンド盛土移動

1958年　４月球場改装なる　11月庭球場西側土塁切取工事（無届）

1959年　２～５月庭球場の土運び去り、土塁を破壊（無届）　５月貞和６（1350）年銘板碑発見　６月文化財保護委員会国立病院建設予定地調査　８月建設着工

1963年　９月緑地課バレーコートに溝を作る（無届）　11月高裁予定地学術調査

1964年　１月高裁工事開始　３月高裁隣接地の土塁破壊（無届）耳付須恵器の破片発見
３月天守台跡より石棺発見

1965年　８月高裁工事現場で石組み井戸発見、９月６日これを調査　10月同所より門司銘瓦が出土

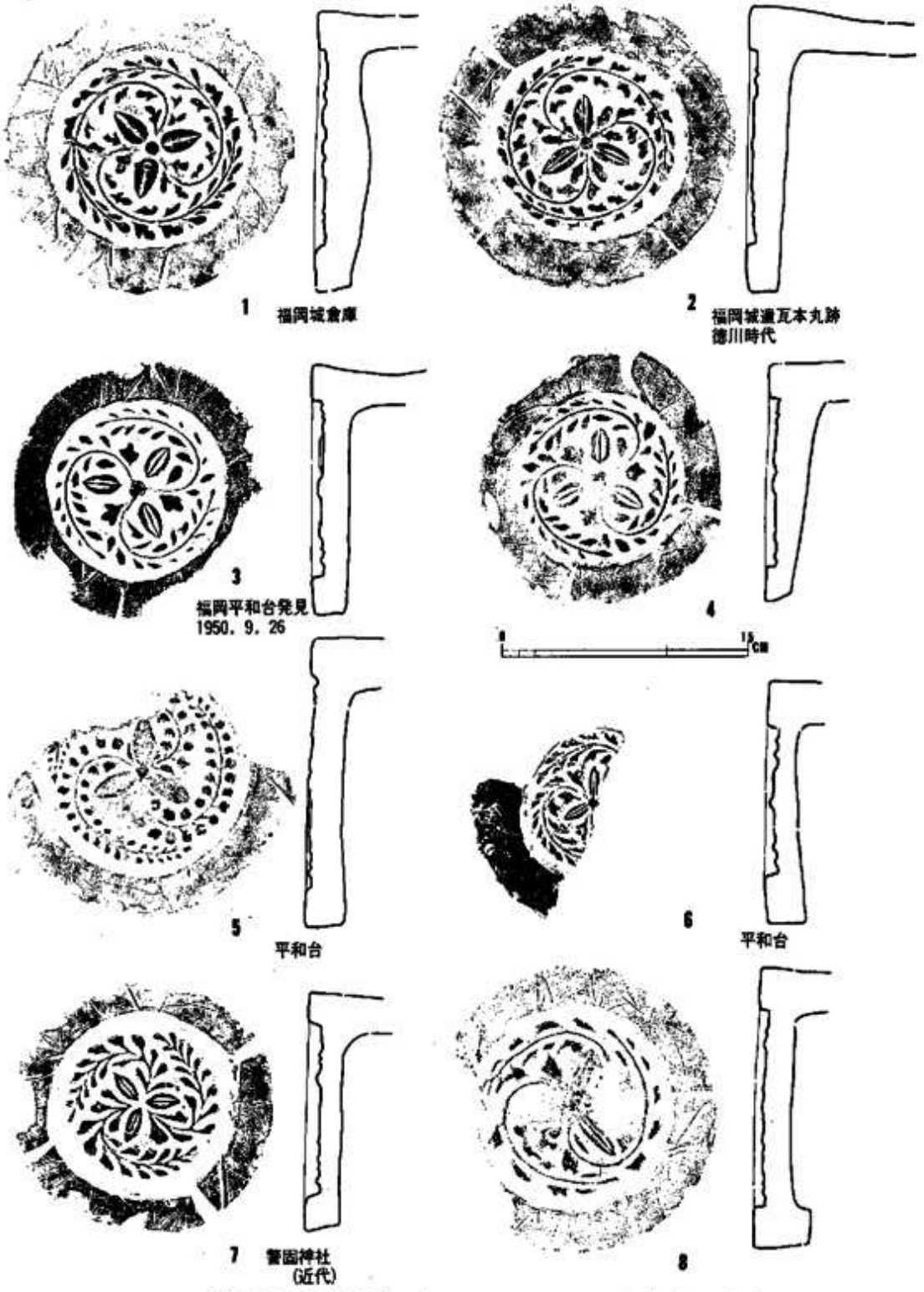


Fig. 1　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　瓦（1）（1／4）

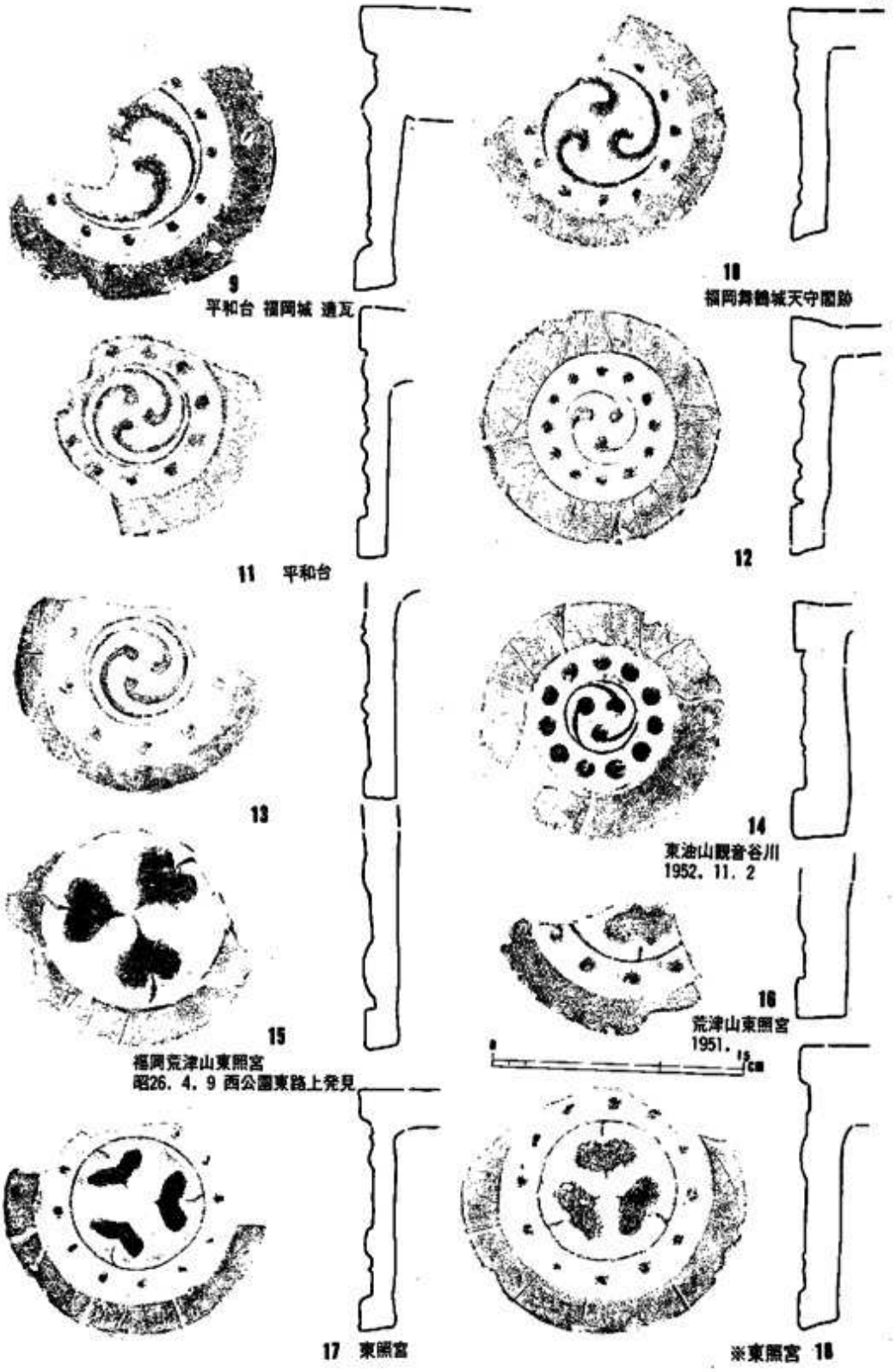


Fig. 2　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　瓦（2）（1／4）

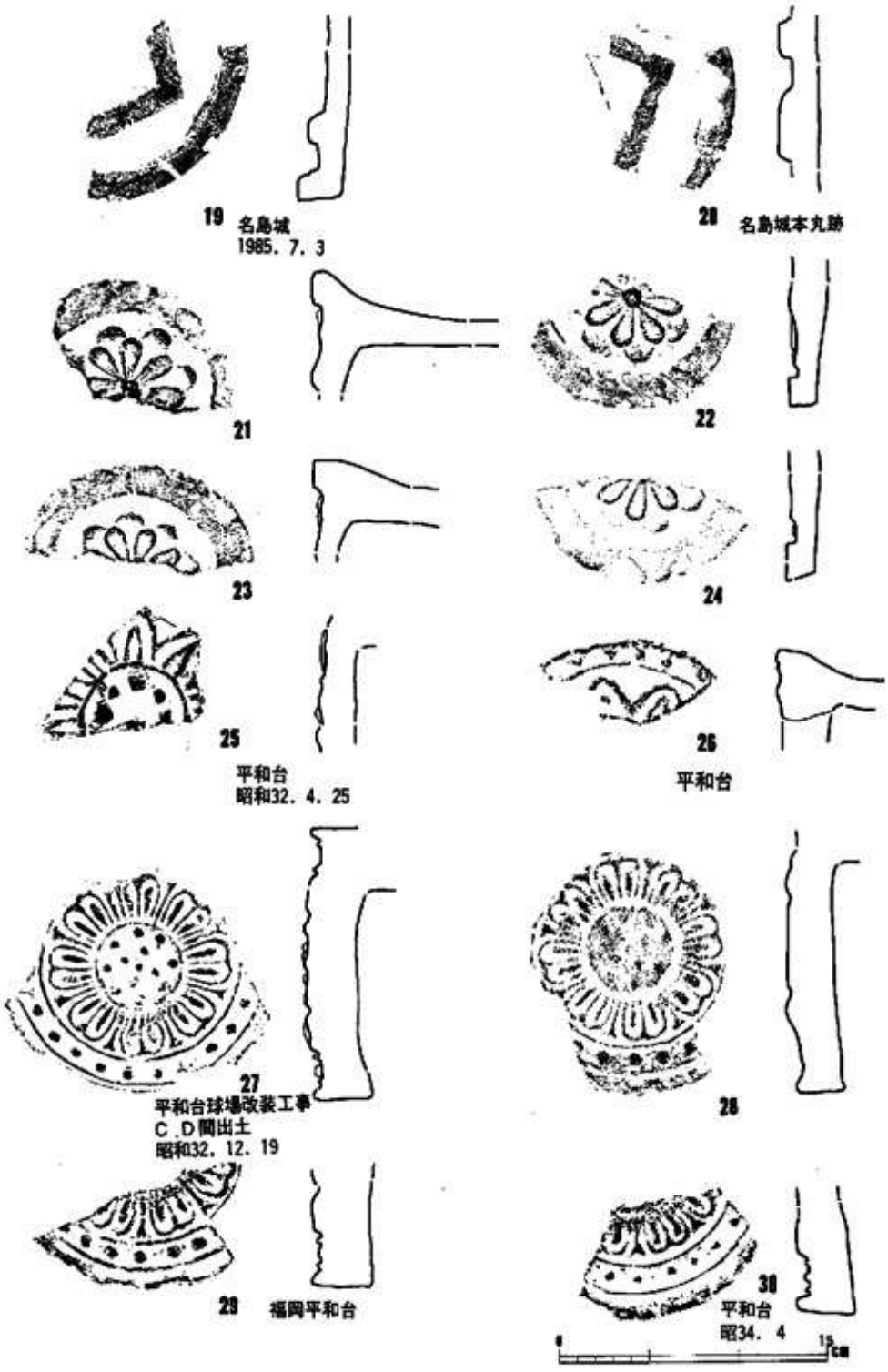


Fig. 3　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　瓦（3）（1／4）

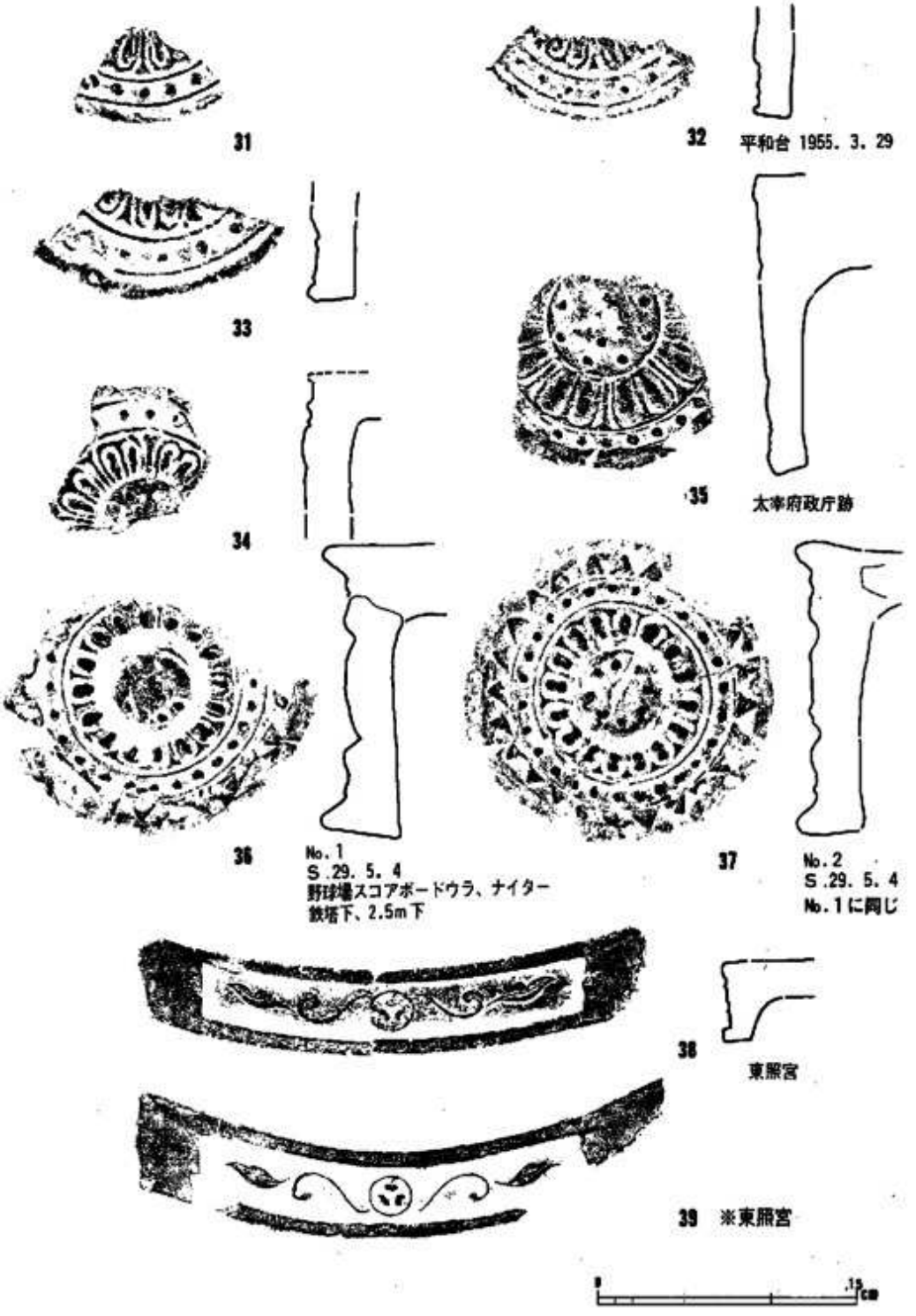


Fig. 4　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　瓦（4）（1／4）

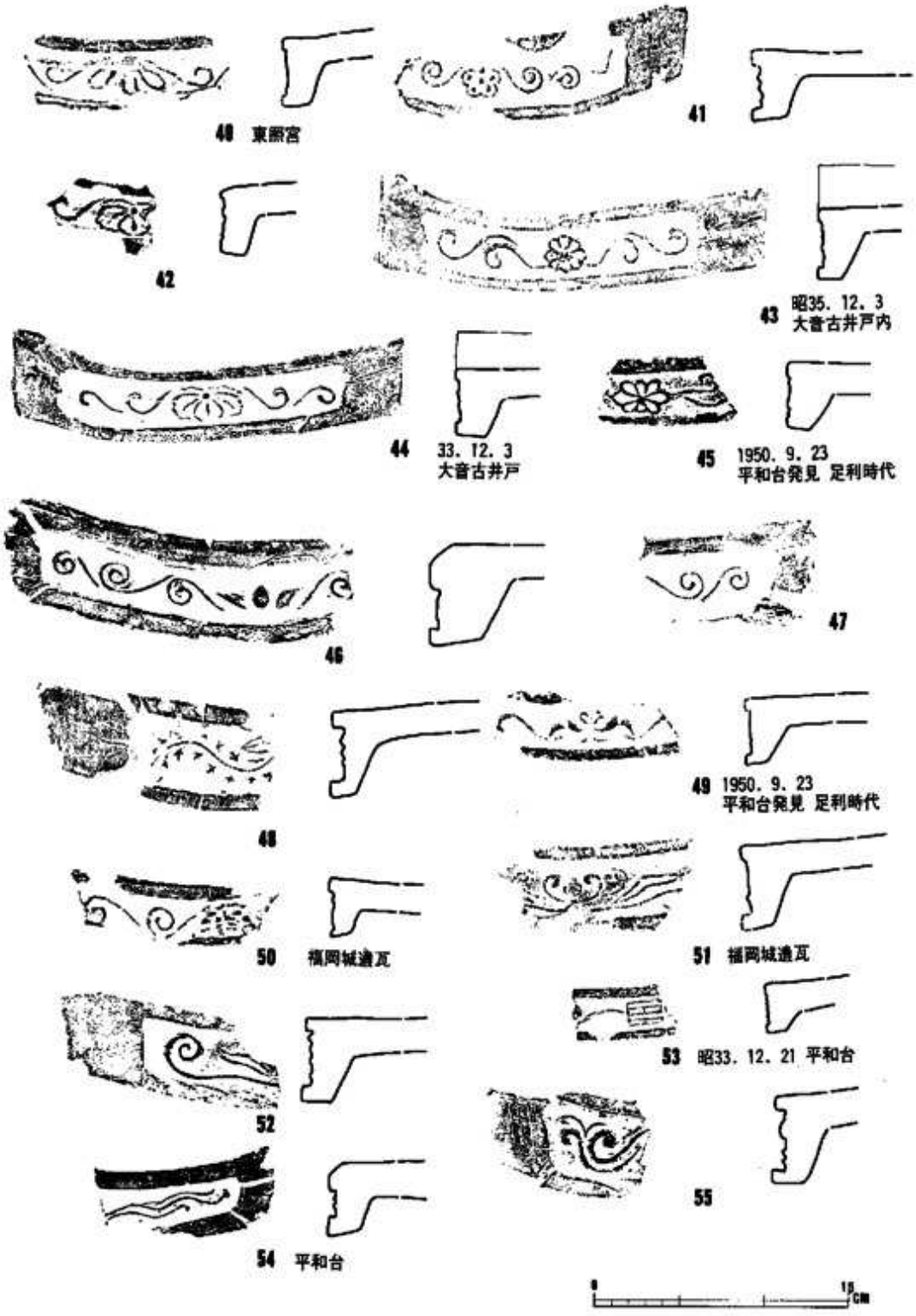


Fig. 5　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　瓦（5）（1／4）

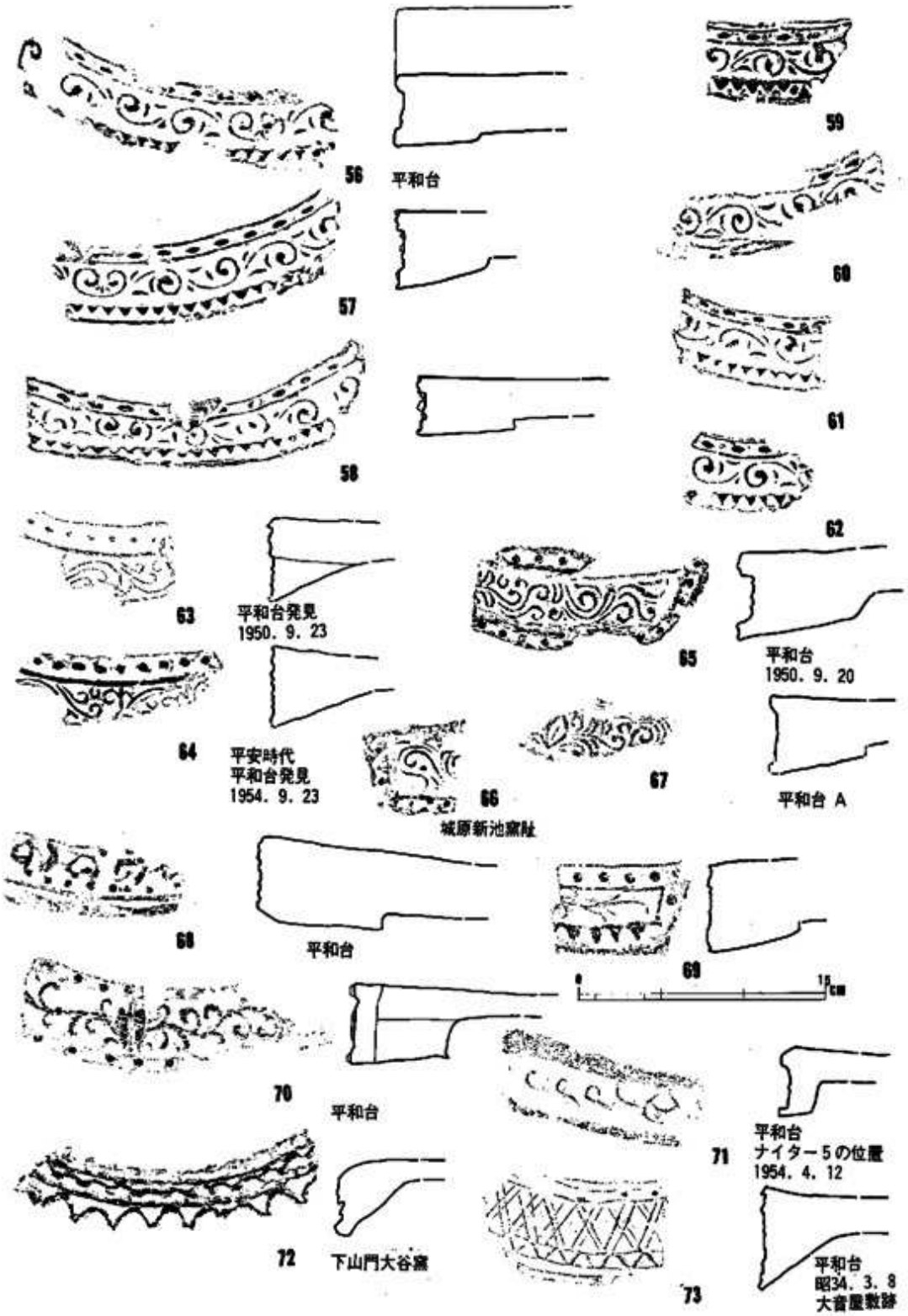


Fig. 6　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　瓦（6）（1／4）

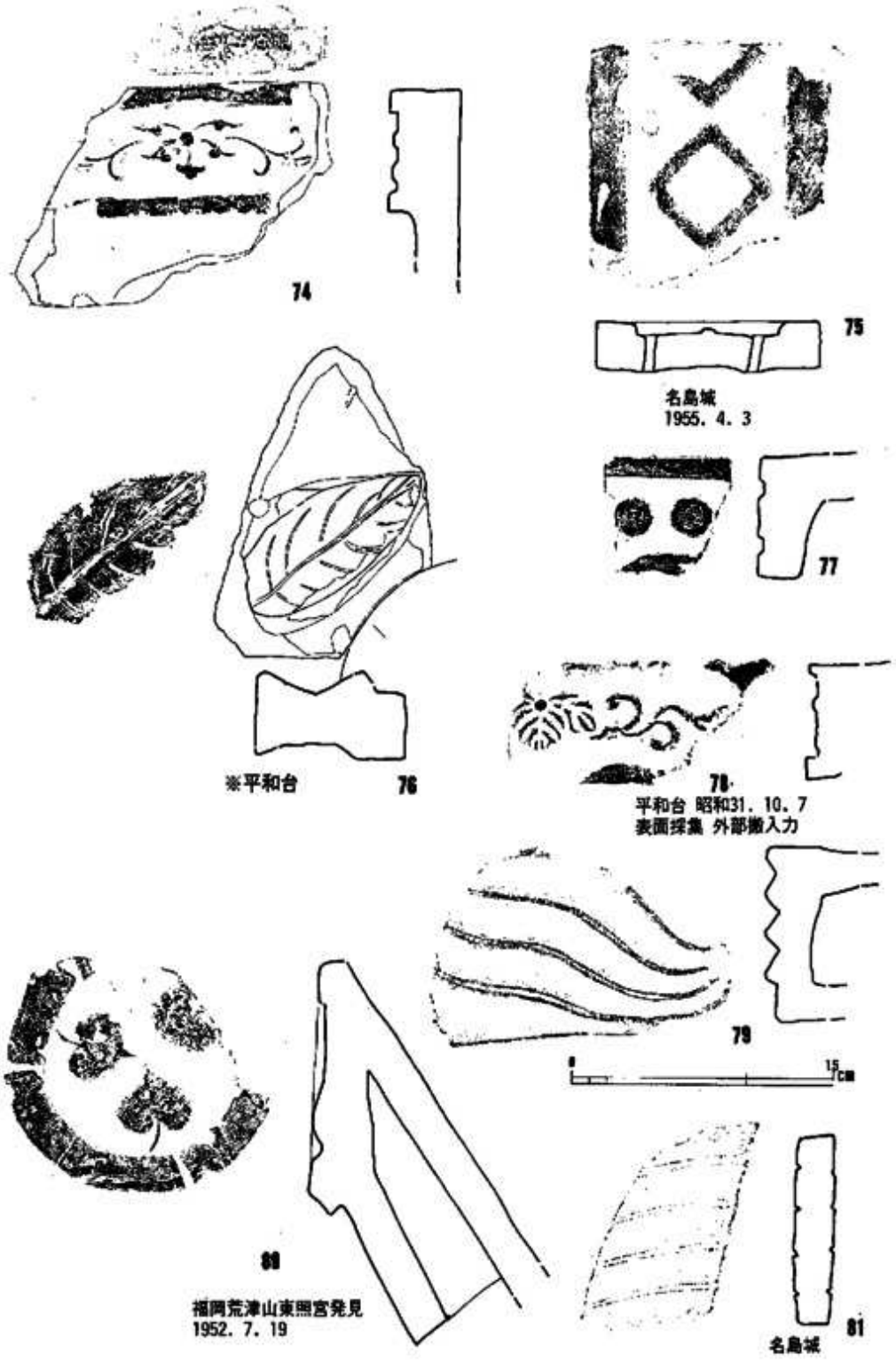


Fig. 7　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　瓦（7）（1／4）

1．瓦

紙面の都合上全体的な説明にとどめる。採集地は平和台のみでなく、多岐にわたるが、注記のあるものについてはそれぞれ忠実に実測図中に記した。注記のないものについては一部混在もあろうが、ほとんど平和台出土のものと思われる。採集地点が明確にわかるものについては※を付してその地点を記した。収蔵された瓦類はコンテナボックスに12箱であり、内わけは軒丸瓦52点、軒平瓦83点、丸瓦16点、平瓦74点である。この他に８点の道具瓦と文字瓦には「賀茂」「伊貴作瓦」「作」「警固」などの銘がある。重要な資料ではあるが、今回は軒瓦のみ図示し、割愛せざるを得なかった。高野コレクションの瓦の中で、注目すべきことの一つには、平和台球場ナイター鉄塔E区で採集された老司系の軒丸瓦が２点存在していることがあげられる（Fig.4-36・37）。中房内に1＋8の蓮子を配し、外区に26個の珠文を置く複弁八弁蓮華文であるが、弁間の小葉がなく単弁十六弁とも見做せるものである。しかしながら外周を斜面に仕上げ外向する陽起鋸歯文をもつ点は老司系の特徴を具えている。鋸歯文は24個である。この瓦は鴻臚館における瓦葺き建物が七世紀末から八世紀前半に存在することを確実にするばかりか、その位置を明らかにする上でも貴重であるといえる。

市立歴史資料館収蔵の高野コレクション越磁の分類

高野コレクションの陶片は、およそ1,020片を数える。平和台以外の採集地は、大宰府及びその周辺に所在する。この中には約100片の、宋・元代の中国陶磁や、唐津・高取などの陶片が含まれていた。他は全部が、いわゆる越州窯系青磁である。小片ばかりで、全形を知り得るものは皆無に等しい。表１の壺・瓶等を除けば、すべてが碗・皿である。表２はそれらのうち、底部以外の小片を、形態と胎土で分類して数えたものである。底部の221片については、形態、施釉法、窯詰法などによって分類した。この分類が、胎土の分類と合致したのはうれしい。底部の類別個数はP105～106を参照されたい。紙数の関係で検討を省くが、この資料が何らかの形で活用されるならば幸いである。

表1

器種＼胎土	精	良	粗	その他
壺・瓶等袋物	45	15	41	4
器蓋	3			1
合子蓋				1
揚彩のある小片			9	

表2

口縁部	直口	52	10	28	
	先細り直口	30		17	
	外反	27		49	
	内弯	1		13	
体部小片		147	18	153	8

高野コレクション越州窯系青磁碗・皿の底部分類表

	底部の形と、推測される全体の器形			施釉及び窯詰に関する特長	
Ⅰ	幅広の高台、いわゆる蛇の目高台で碗と思われる。高台は低く、比較的小さい底部から斜行する体部はほぼ直線的にのび、そのまま丸くおさめるものが多い。 Ⅰ—1を典型として、さまざまな土で写しが行なわれているという印象を受ける。	1	典型的な蛇の目高台。底はややあげ底気味、もしくは平らで中央部をくりこみ幅広の畳付を作る。畳付の外側は鋭く丁寧に面取される。	a	器内外全面施釉の後、畳付外縁部で軽く釉を削り、焼台にのせている。目跡は大体6こ。内底に目跡はなく重ね焼は行なわない。
				b	器外では釉は高台の少し上までで外底露胎である。内底と畳付に6この目跡が残る。
		2	外底のくりが大きく畳付が狭いため、輪高台というべきだが、それ以外の点については Ⅲ・Ⅳ類よりもⅠ類の特長をもつものである。	a	器内外全面施釉の後、畳付を軽く削る。畳付と内底に6こ以上の目跡あり。
				b	器外下半露胎。畳付に8こ内底に10この目跡。
		3	Ⅴ類の外底中央部を浅くくった細めの蛇の目高台。		器外は高台の少し上まで施釉。内外底に目跡。
		4	Ⅵ類の外底中央部をくった蛇の目高台。		
		5	上に似るが外底をくり込まず、沈線を入れる。		
		6	平たい外底の中央を粗くの字にえぐる。高台は高め		器外は高台の少し上まで施釉。内底に目跡はない。
Ⅱ	平底で体の中ごろで屈曲しながら以後直線的に斜行して終わる。口縁を輪花に作るものが知られている。皿である。			a	器全面に施釉後、外底の周りで軽く削り、そこに塊状の目土を置く。体側から削り込んだ見込。
				b	器外下半露胎、内底に目跡

	胎　　土	釉　　質	図版番号	参　　照
精	胎土は灰白～灰色。混りは少ないが、緻密な感じは薄い。	釉色は灰オリーブ色。焼成不良かよく熔けず、黄土色のカセあるもの多し。透明感はなく、つやもあまりない。	Fig. 8－1～8 PL. 3－1	亀井碗A－Ⅰ－a　注1) 森田碗Ⅰ－1　注2)
良	胎土は灰白色砂っぽく、少量の黒点あり。焦跡は淡い。	明灰色、灰青色の透明感ある釉	Fig. 8－9，10 PL. 3－2	亀井碗A－Ⅰ－b
良	胎土は上よりは細かいが黒点やや多く、白化粧あり。焦跡は赤茶色	灰オリーブ色でよく熔けず、剝落がある。	Fig. 8－11，12 PL. 3－3	
精	胎土は灰白色。混りは少ない。	黄がかったオリーブ～灰青色透明感がありガラス的。細かい氷裂あり。よく熔けている。	Fig. 8－13 PL. 4－4	
良	胎土は灰色。黒点が少し混じる。赤茶色の焦跡。	完全剝落、焼成不良か。	Fig. 8－14 PL. 4－5	森田碗Ⅱ－1
良	灰白色の細かい土に、黒点ごく少数混じる。	オリーブ色で黄ばむもの多し。細かい氷裂があり剝落するもの多し。	Fig. 9－15 PL. 4－6	亀井碗B－Ⅰ
粗	胎土は細かい灰色泥質に黒点が多く混っている。白化粧を施す。焦跡はあまり見られない。		Fig. 9－16～20 PL. 4－7 Fig. 9－21，22	森田碗Ⅱ－2－a 森田碗Ⅱ－3
	胎土は黄白色。2mmほどの褐点がポツンポツンとある。生地のきめは細かい。厚く白化粧する。	淡い黄金色のガラス質で、細かい二重貫入がある。	Fig. 9－23，24 PL. 4－8	
精	胎土は灰色精良。	オリーブ色氷裂あり。やや厚め。	Fig. 9－25 PL. 5－9	森田坏Ⅰ－1
	土はやや暗色Ⅰ－6に似て褐色の砂粒が入る。	黄金色、一部なまこが出る。細かい氷裂がある。	図列ナシ	

高野コレクション越州窯系青磁碗・皿の底部分類表

	底部の形と推測される全体の器形		施釉及び窯詰に関する特長
Ⅲ	低く厚い輪高台の底で、大形品が多い。低い高台は、外側から大きく面取する結果、ますます低くみえる。高台内側のくりも丸く、高台と底部の境目はなくて、この削りと外底中央部の削りが段をなしていることが多い。器壁は底部から直線的に斜行し、そのまま先細りに終わるものが知られている。土の精良さに比して成形、釉、焼成が雑で、下手物の感が強い。Ⅳ類と一部区分できぬものがあるが、この類では目跡が細く輪状になることはない。	a	内外とも全面施釉で、内底と軽く釉を削った畳付に斑状の目跡がある。多いものは20こ以上を数える。
		b	施釉は高台の少し上まで。内底・畳付に目跡。(ア)大形で体部と見込に境のないもの。(イ)小さめで見込を沈圏線で作るものがある。
Ⅳ	輪高台　Ⅲと違い高台が内側・外側からはっきり削り出されている。器壁は軽い曲線を描いてのぼり、先細りに終わるか、外反するものが多い。この類のものには口縁に刻みを入れ、又刻みの下で体部を縦におさえて輪花碗につくるものが知られている。		器全体に施釉後畳付の釉を削り、ここと内底に目土を置く。目跡は塊状・紐状があり。(ア)見込と体部に境のないものと、(イ)沈圏線もしくは段づけにより見込を作るものがある。
Ⅴ	平底　高台は削り出さず、底はあげ底ぎみの平底である。体の最下部で大きく面取りしている。この調整のへら跡はきっかりしている。体部は直線的にのび、そのままおさめるものが知られている。		底の少し上まで施釉、内底と底部面取部に目跡。(ア)体部が斜行するもの、(イ)体部が横に張り、仮高台のようになったものがある。
Ⅵ	円盤底　上げぎみの平底で円盤を貼りつけたような形態となっているが、貼りつけ底ではない。体部は心持ちカーブしながら上に引きあげる。直口で終わるもの、内弯して終わるものがよく知られているが、ここでは外反する輪花のものも見られる。	a	器外は下半露胎、内底に目跡がある、外底の目跡は目立たない。
		b	下半露胎で内底に目跡のないもの、底に糸切跡が残る。
Ⅶ	平底　Ⅵから円盤状の底を除いたような形である。底部に切り跡はなく平だが、端は周囲に押つぶされて残る、褐彩のものにこのような底部の例が報告されている。		器外は下半露胎、内底に目跡ああり。
Ⅷ	細い輪高台・高台が比較的高く先細りに入念に作られている器壁には丸みを持ったものが多い。器形はⅠ～Ⅶまでのものとは異なり変化があるが、細分するだけの資料に欠ける		器内外全面施釉。目跡は畳付でなく外底面につく。

注1）亀井明徳「日本出土の越州窯陶磁器の諸問題」九州歴史資料館研究論集1，1975　分類による。

	胎　　土	釉　　質	図版番号	参　　照
精	胎土は灰色でかなり緻密である。 ※38のみ褐色の大小の砂粒が混り粗い。土は乳褐色。で焦跡。	焼きは甘く、よく熔けず、灰オリーブ色のものが多い。よく熔けているものには灰オリーブ～黄オリーブ色のものがあるが、透明感は少なく貫入もあまり見られない。 ※38は黄味のあるオリーブ色のガラス質の釉で細かい貫入が一面にある。	Fig.10—26～34 PL. 5 —10, 11	亀井碗A—Ⅲ
			Fig.10—35～40 PL. 5 —12, 13	森田碗Ⅱ—1
精	胎土は灰白～灰色。Ⅰ—1に似て、混りはないが緻密感の薄弱なものが多い。 しかし中には、比較的緻密なものもあり、それらは灰褐色を見せるものに多い。	オリーブ～灰緑～黄オリーブ色など釉色に幅があり、質もよく熔けたものや、にごったものなど変化がある。(イ)では釉が剥落するものが多い。	Fig.12—41 ～14—60 PL. 6 —14～16	亀井碗A—Ⅱ—a 森田碗Ⅰ—2 亀井 皿A—Ⅱ—a
良	胎は灰白～灰色。少量の黒点が見られる。外底の目跡の周囲には赤茶の焦跡が出るものが多い。	釉は厚めで氷裂がある。青緑色を帯びたオリーブ色で濁った感じ。焼成不良のもの、剥落しているものも多い。	Fig.15—61 ～16—72 PL. 6 —17, 7 —18	亀井碗B—Ⅲ 森田碗Ⅱ—3
粗	土は灰色の緻密泥質であるが黒点を多く含み、非常に汚れた粗質の感を与える。白化粧する。	釉はオリーブ色～灰黄色で、細かい氷裂があり剥落しやすい。均一な発色をしているものは見られず、焼成は雑。	Fig.17—73 ～19—97 PL. 7 —20, 21	亀井碗B—Ⅱ 森田碗Ⅱ—2
			Fig.19—98 PL. 7 —19	森田碗Ⅱ—2—e
粗	Ⅳに似て黒点が多く混じる。	灰黄色の釉はなまこがかる。褐色の釉だれ跡を残している破片が一つある。	Fig.19—99 PL. 7 —22, 23	青磁褐彩か
精	土は灰白～灰色で雑物は混入しない。	灰オリーブ色の釉は平均して滑らか。透明感はなく氷裂はみられない。	Fig.20—100 ～105 PL. 8 —24, 25	亀井碗A—Ⅱ—b 森田碗Ⅰ—3

注2）横出賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」九州歴史資料館研究論集4，1978 分類による。

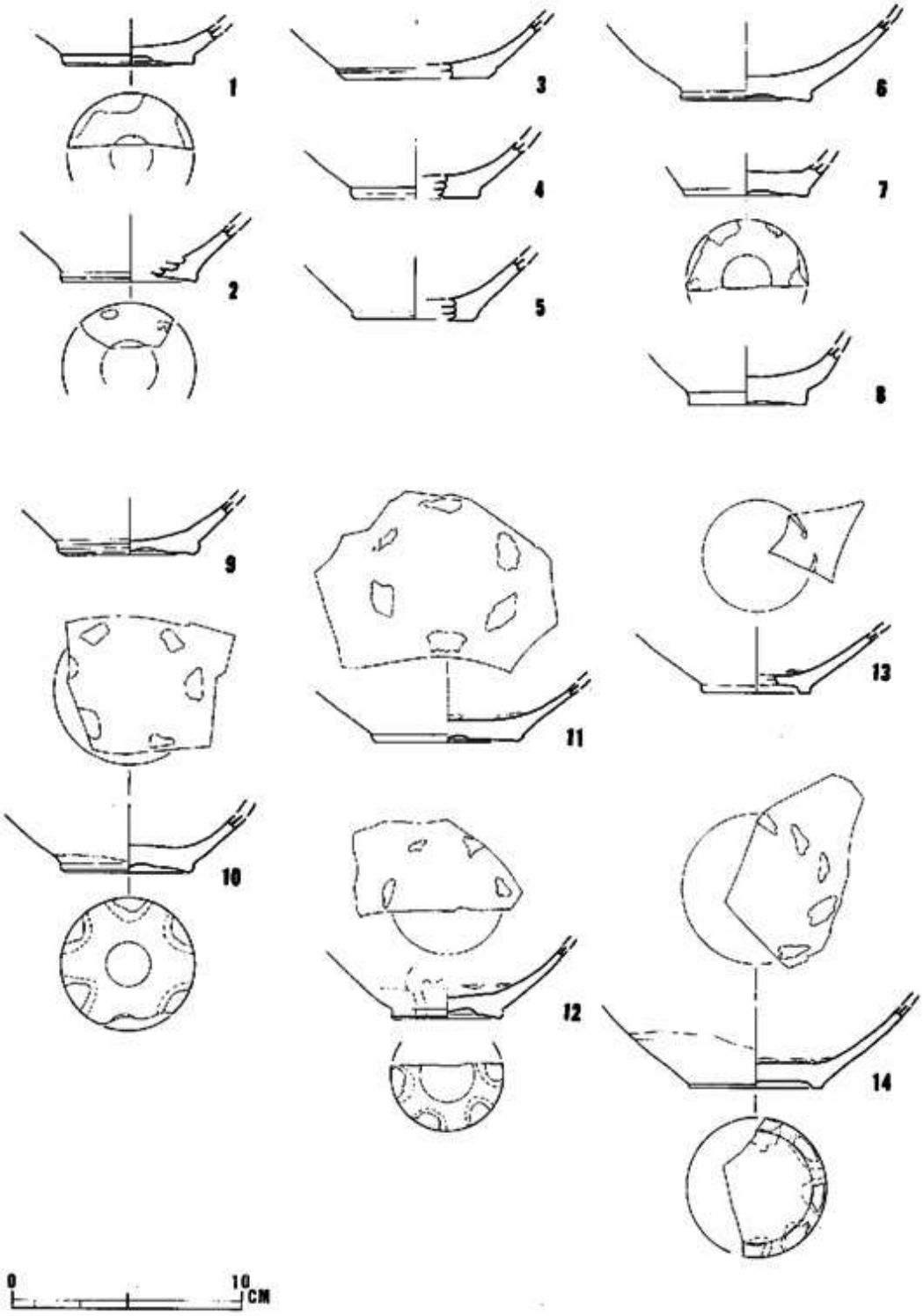


Fig. 8　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　陶磁（1）（1／3）

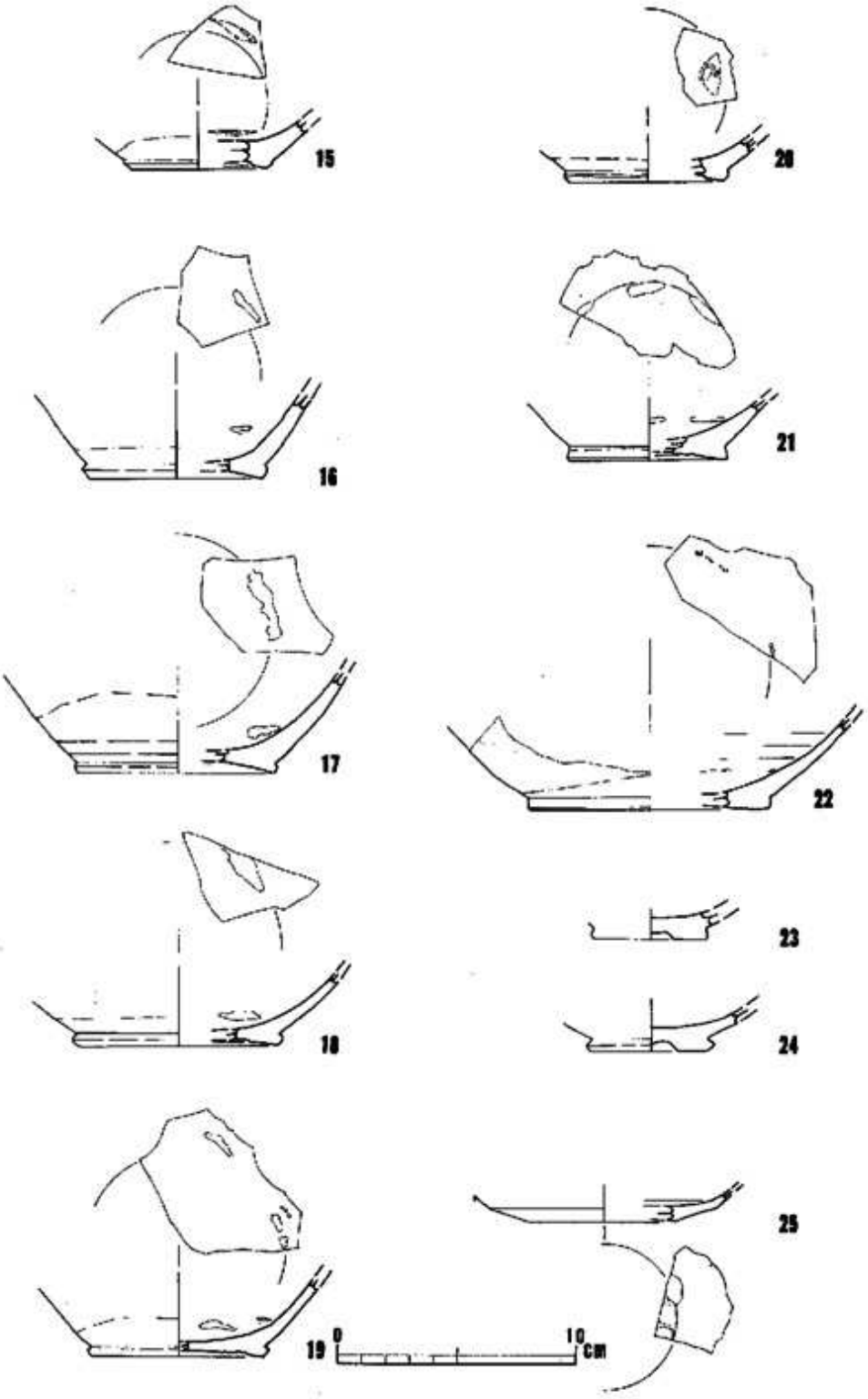


Fig. 9　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　陶磁（2）（1／3）

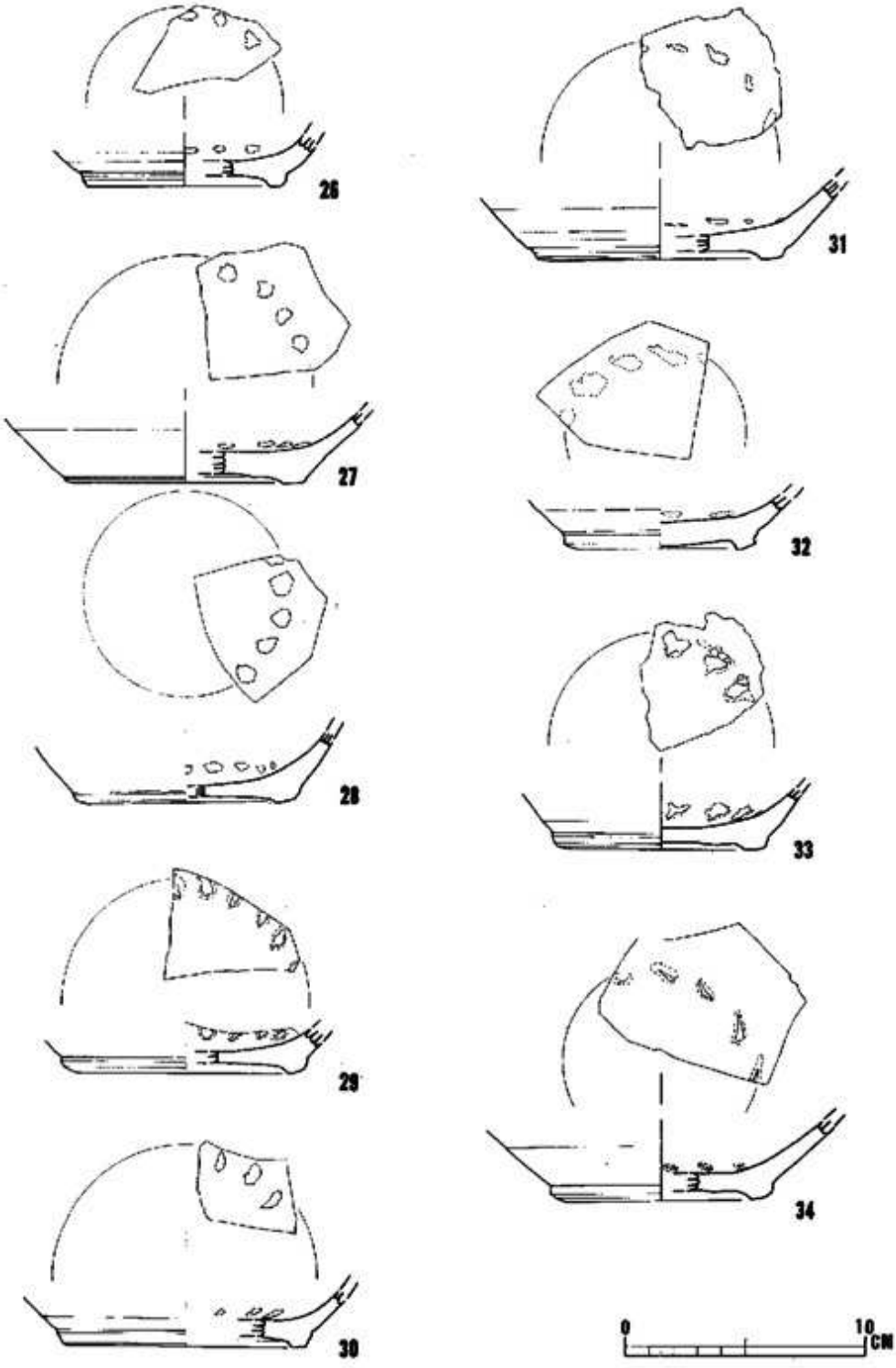


Fig. 10　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　陶磁（3）（1／3）

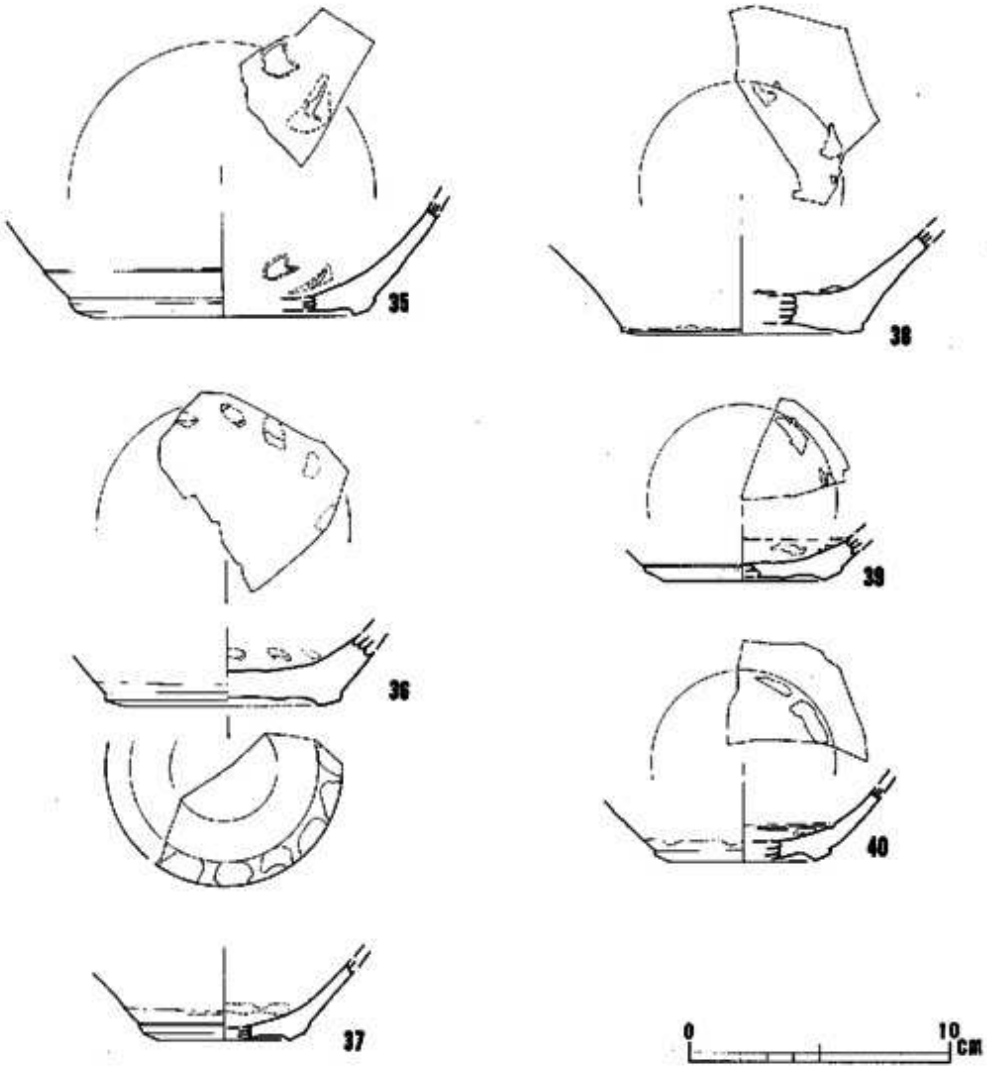


Fig. 11　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　陶磁（4）（1／3）

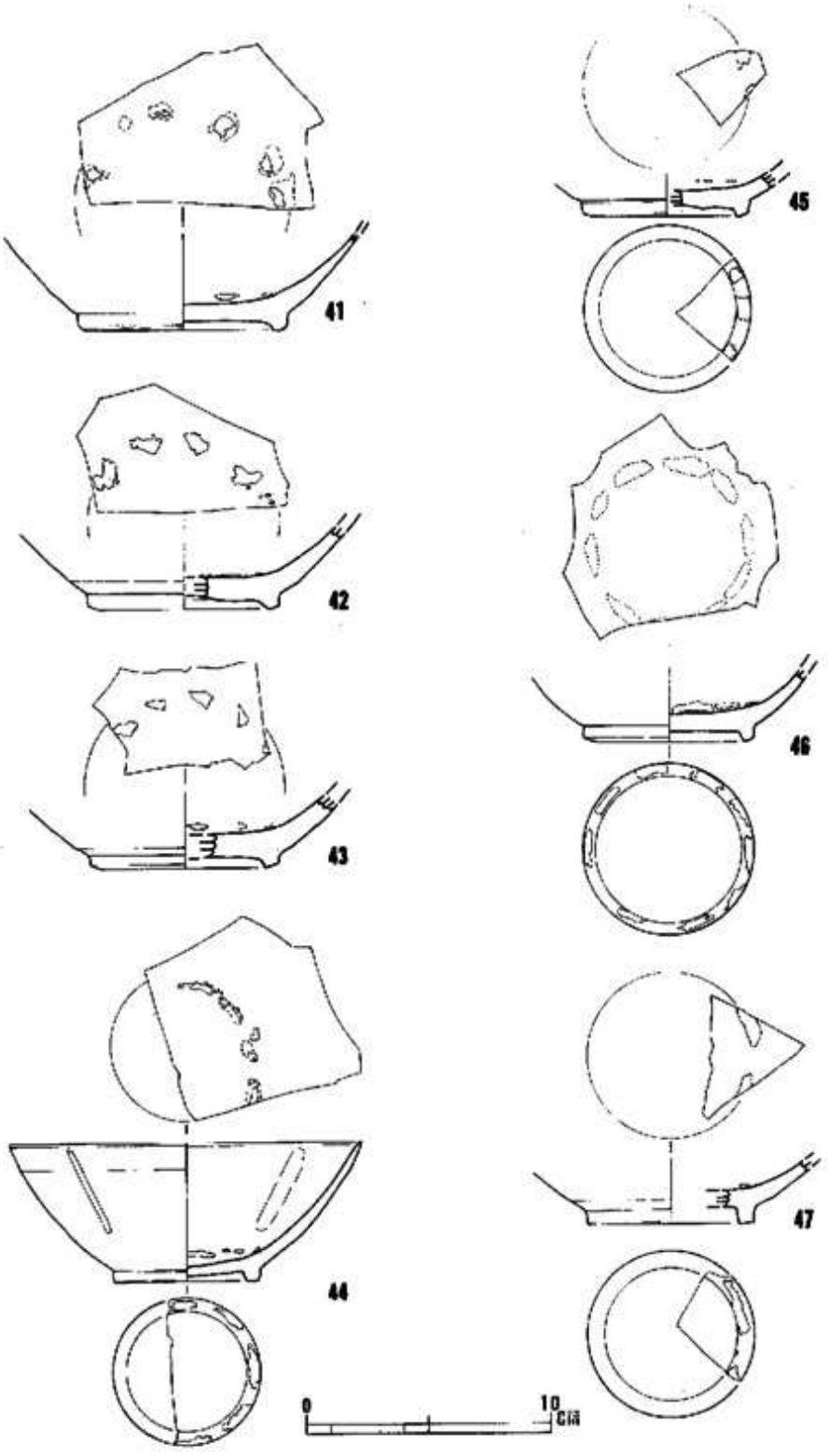


Fig. 12　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　陶磁（5）（1／3）

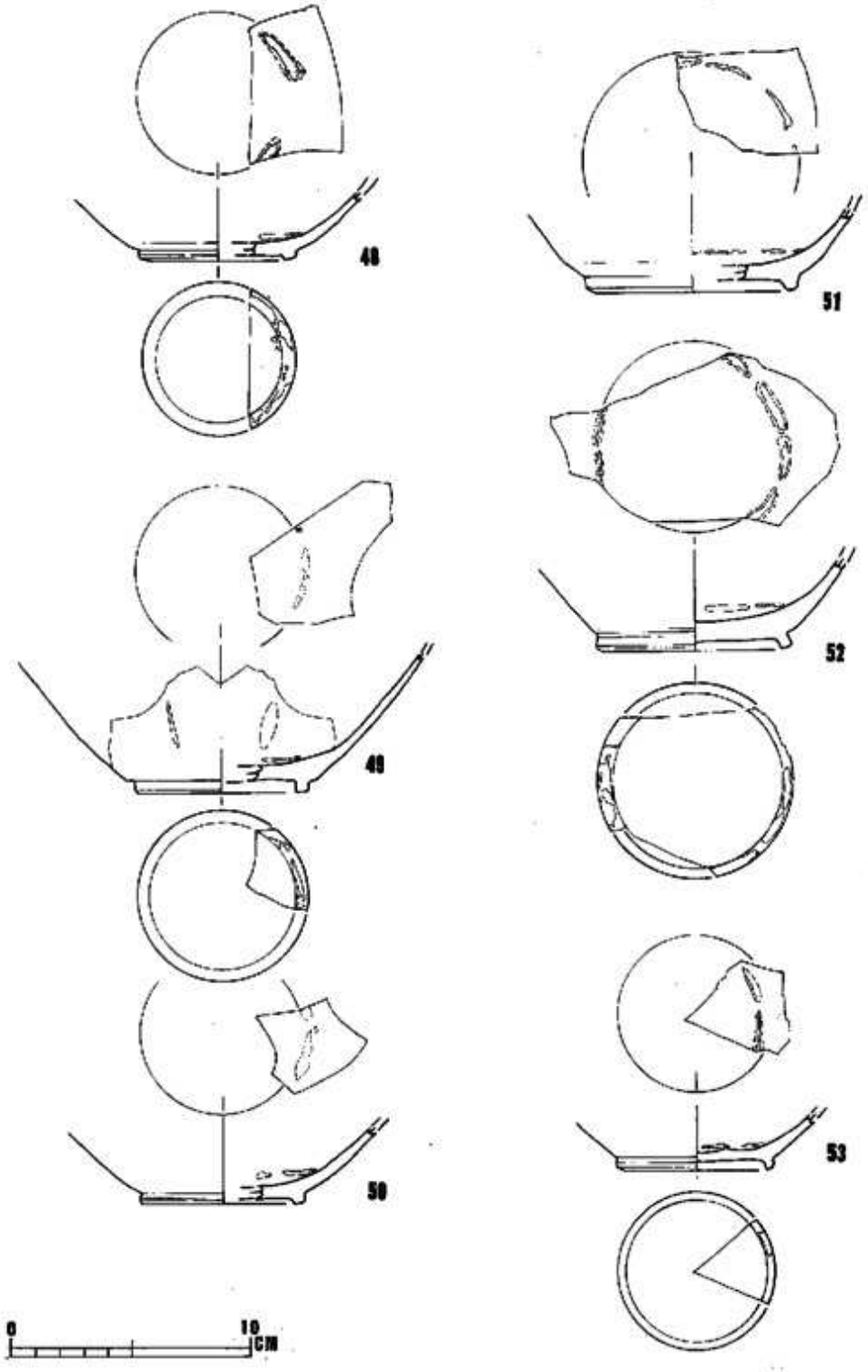


Fig. 13　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　陶磁（6）（1／3）

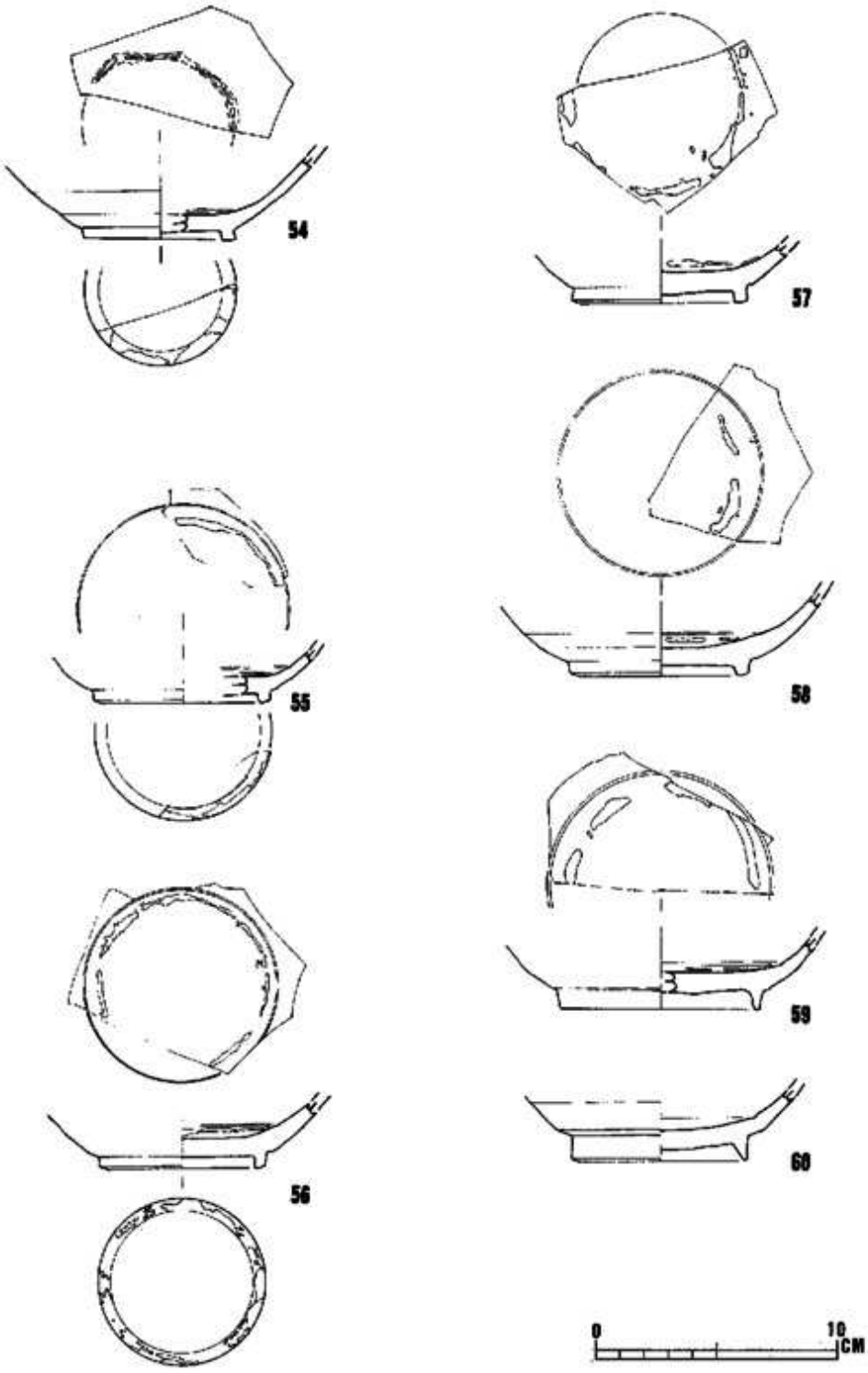


Fig. 14　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　陶磁（7）（1／3）●

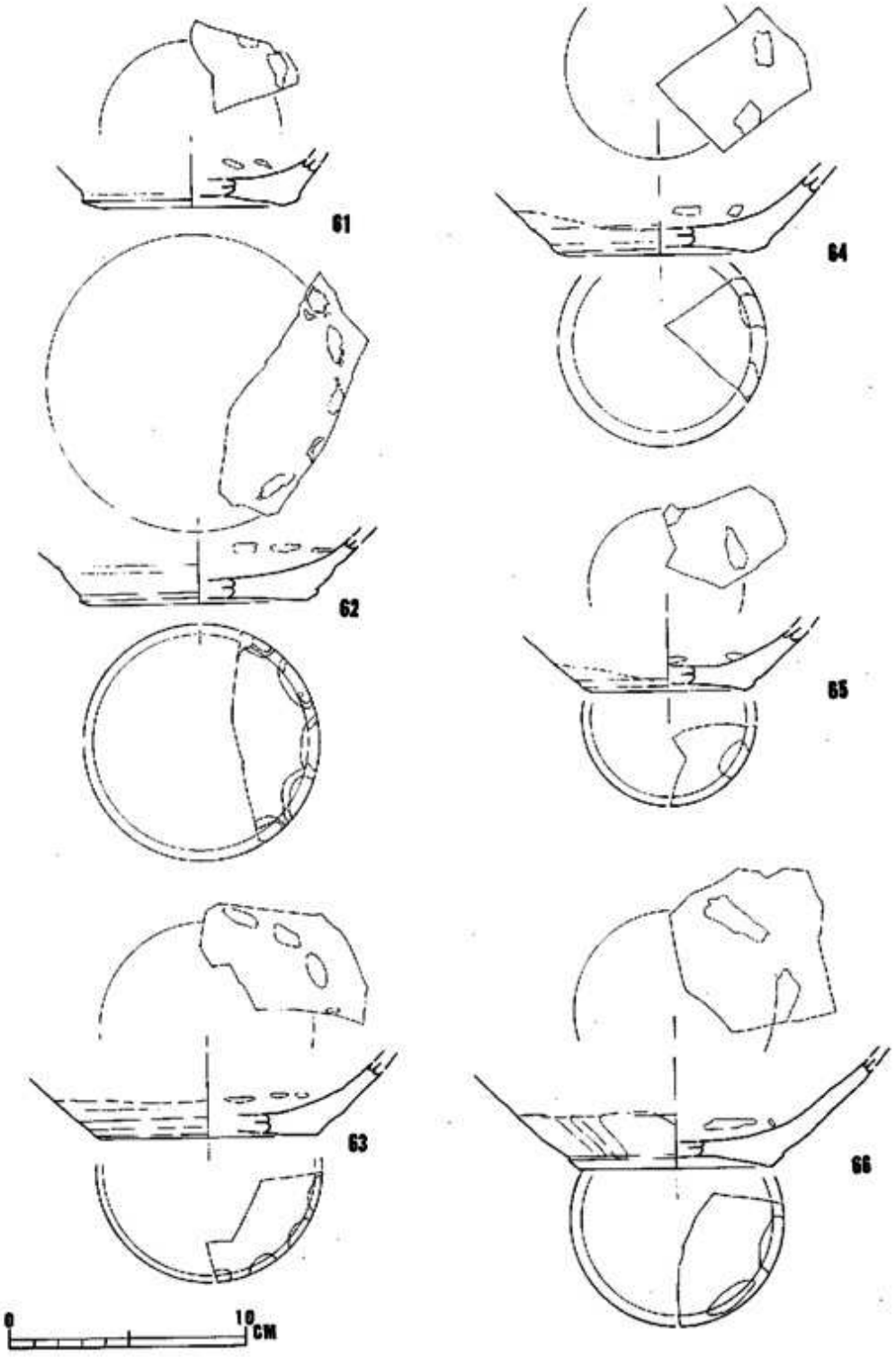


Fig. 15　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　陶磁（8）（1／3）

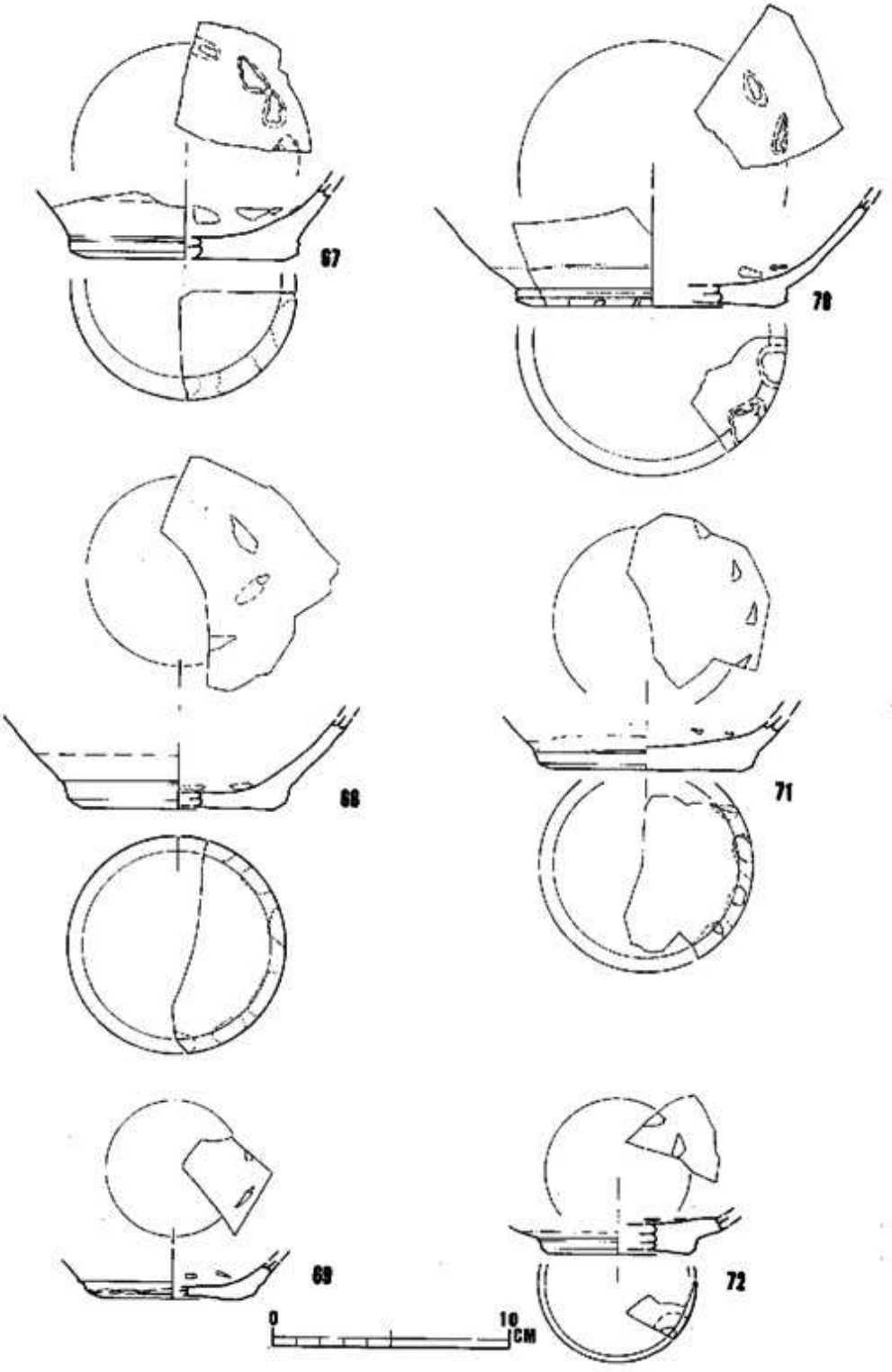


Fig. 16　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　陶磁（9）(1／3)

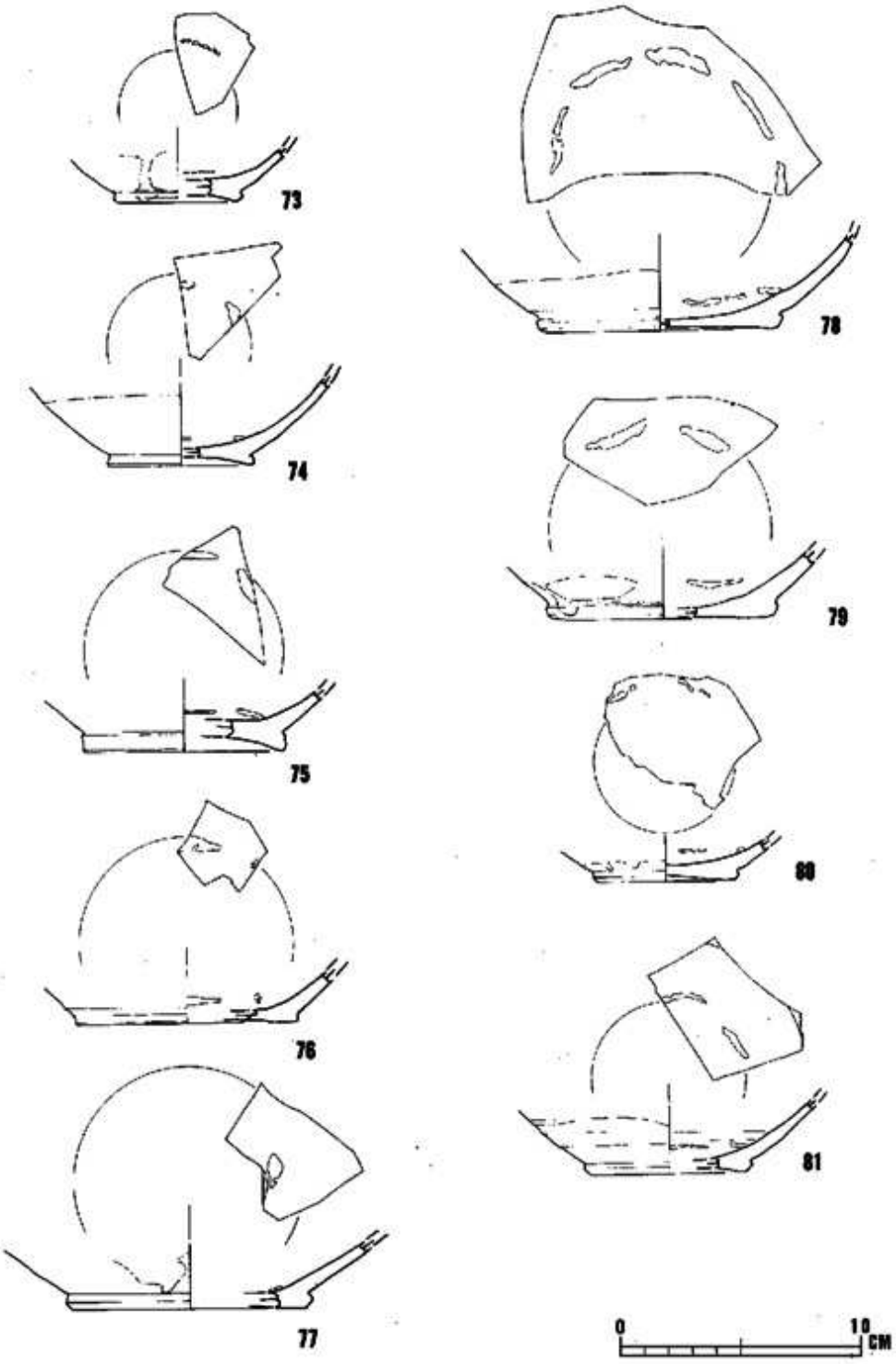


Fig. 17　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　陶磁 (10)(1／3)

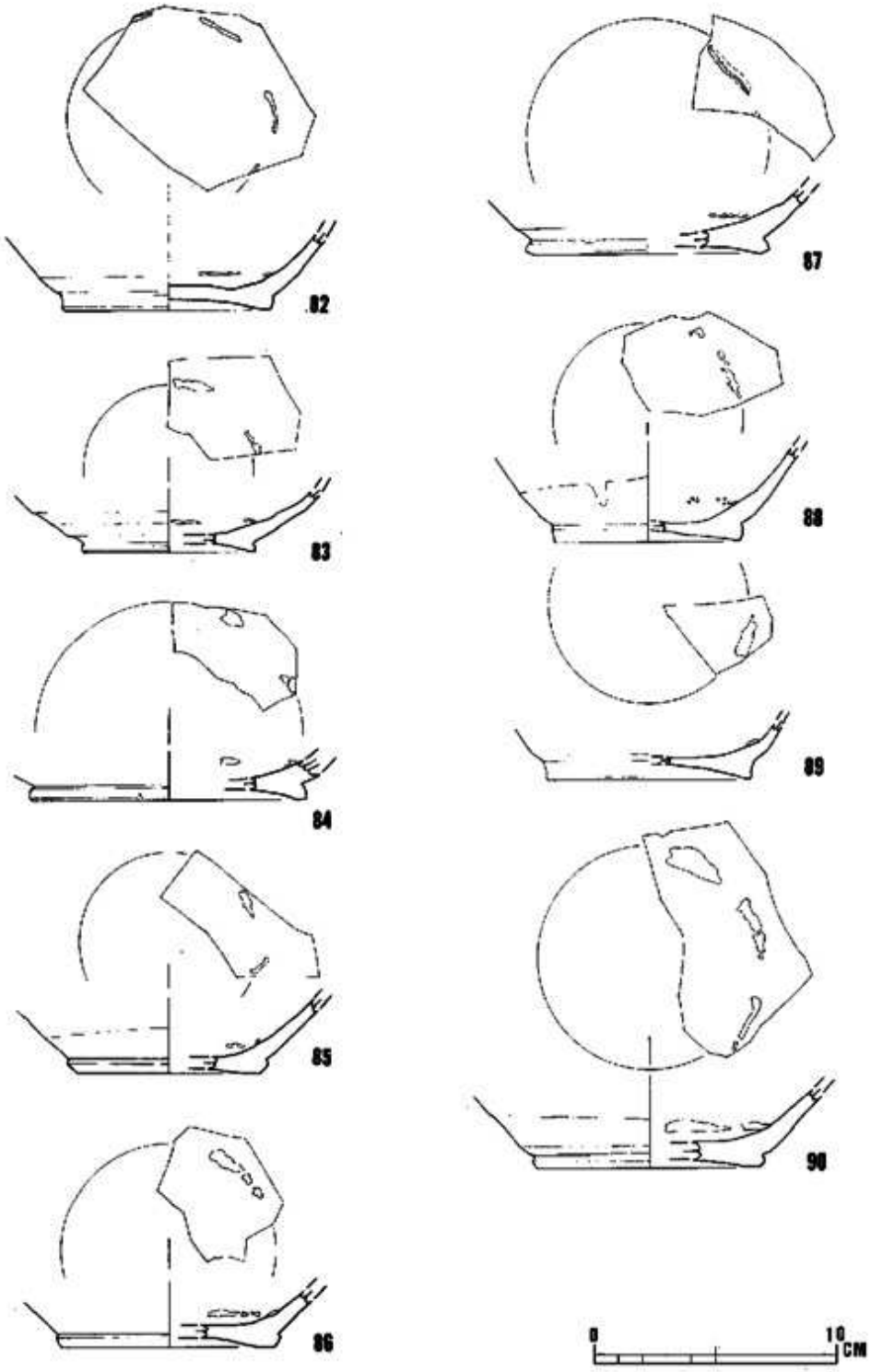


Fig. 18　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　陶磁 (11)(1／3)

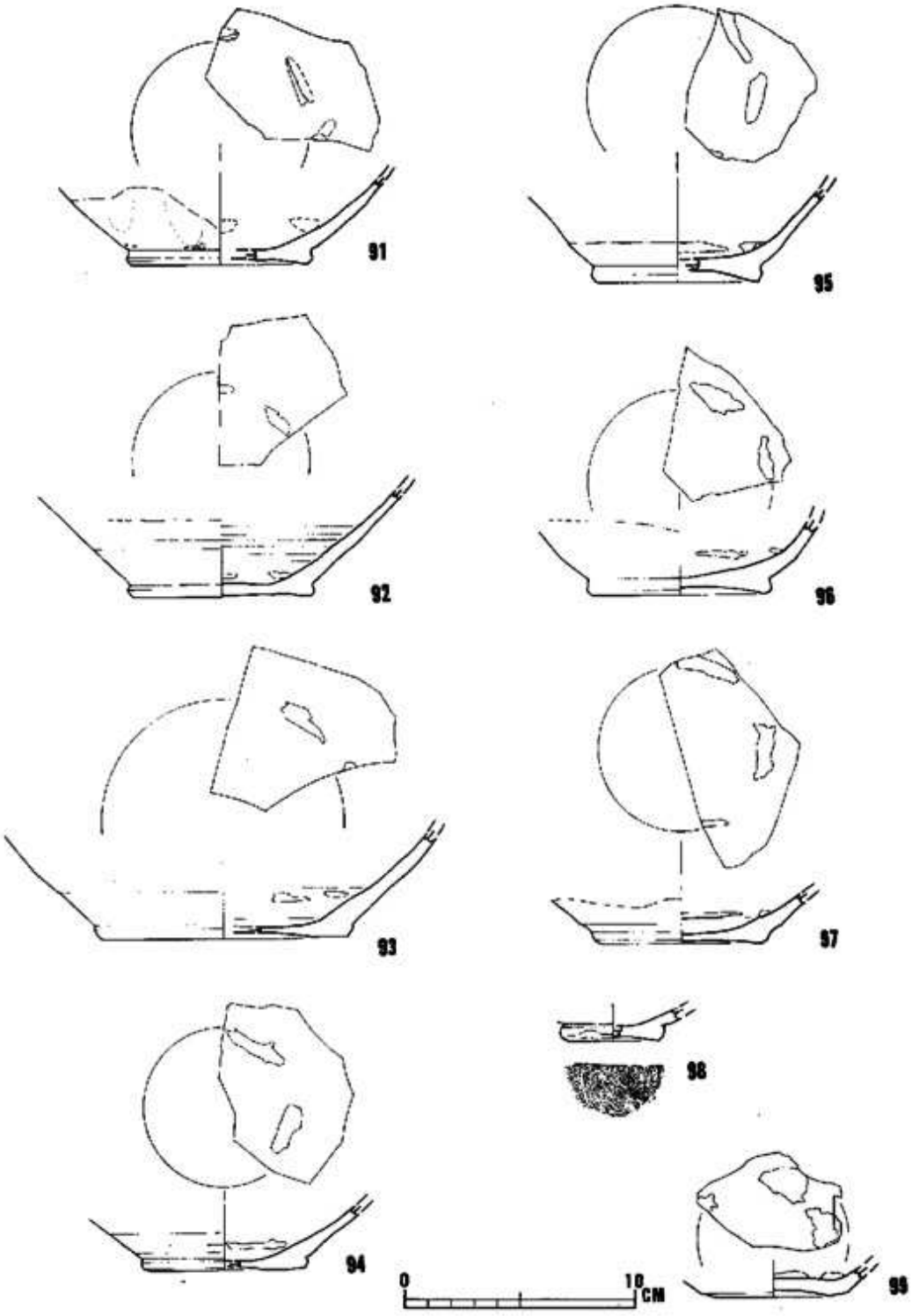


Fig. 19　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　陶磁 (12)(1／3)

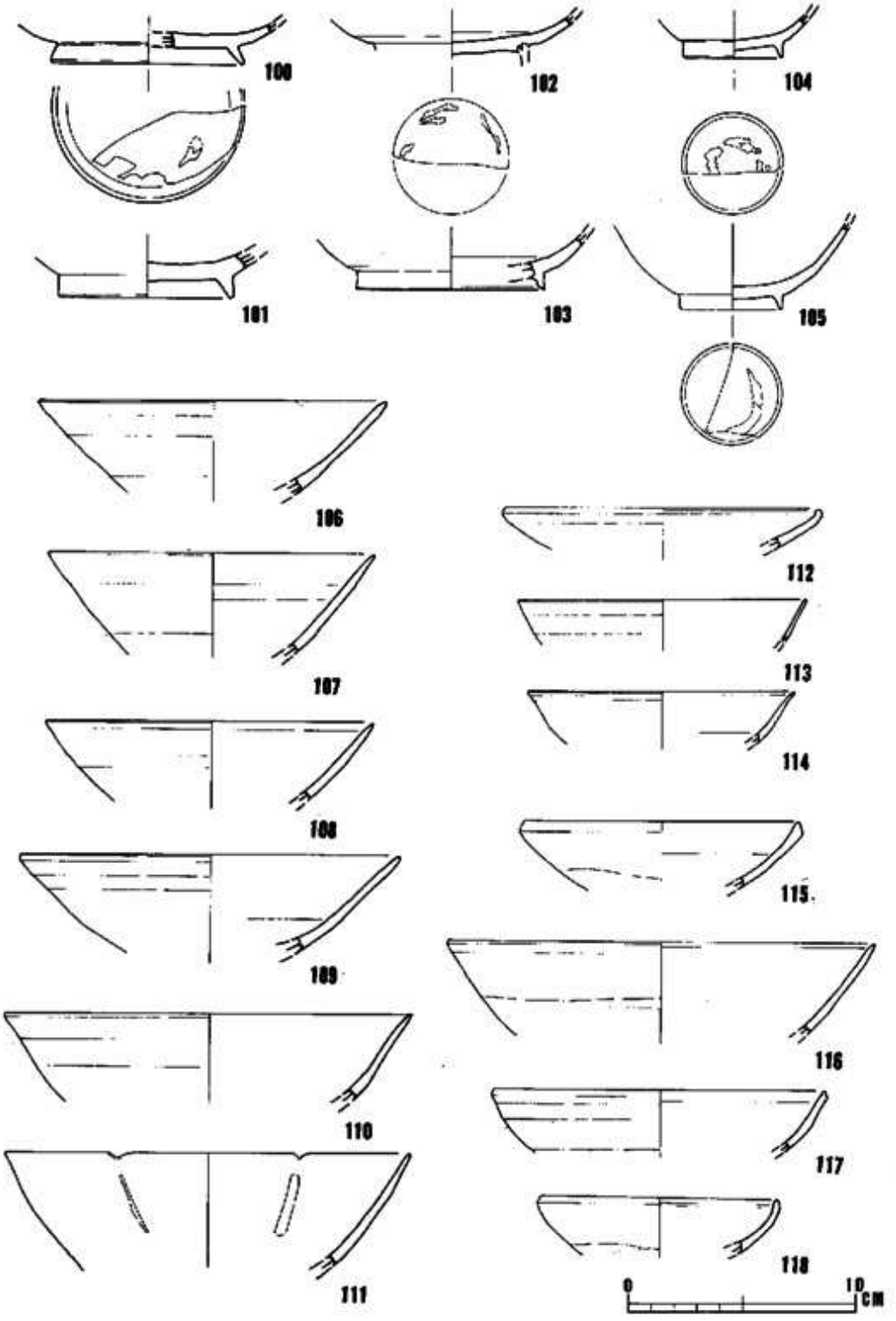


Fig. 20　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　陶磁 (13)(1／3)

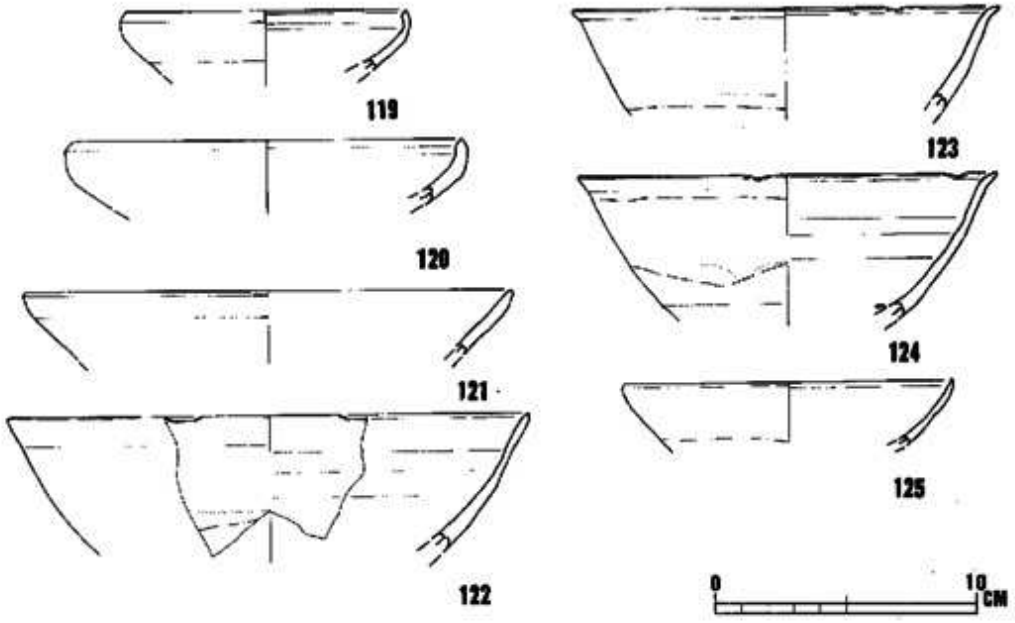


Fig. 21　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　陶磁 (14)(1／3)

※ 120は灰色瓦質の胎土で厚造り。釉も軟質で国産の緑釉陶器の可能性も考えられる。

碗・皿以外の器形

次ページの126～142は、碗・皿以外の器形のものである。126(PL.9-29) は盤口壺の口部と思われる。褐色を帯びた灰色の緻密な土に褐色の大小の砂粒が多く混入している。釉はオリーブ色のガラス質でまだらに付き、厚い所で細かい貫入がある。長谷部楽爾氏(東京国立博物館)は、「見たことのない種類のもので越州系としても福建省寄の地方のものか。7～8世紀の盤口壺か」とされた。とすれば、我国出土の越州窯系青磁の中では最も古いものに属することになる。127～137(PL.9-30) は精良な胎土のものである。129は口唇部に目跡がある。同様の特長を示すものに京都西寺出土の灯盞[1]が知られているが、このコレクションには他に2例がある。130～132 134～136は壺・瓶の類。底部は全体に施釉され、高台畳付に目土が付く。133は盞の頂部か。138 (PL.9-31)は合子の蓋。黒灰色の土に白黒の細砂が混入する土は他と異質である。器内の釉はオリーブ色で細かい貫入が入り、器外では黄褐色の釉が僅かに残存しているのみ。139はⅥ類と似た土で器外頂部にのみ施釉。140、141(PL.9-32) は、これもⅥ類と似た土の円盤底の壺である。142は黒褐色釉の壺で、灰色の砂っぽい堅い胎土に、茶オリーブ色の釉がかかる。釉尻では釉が厚く溜まり、ほとんど黒釉に見える。釉表面に浅く細かい貫入がある。この他に小片のため図示できなかったが、青磁褐彩壺の破片と思われるものが数片ある(PL.9-33)。これらは長沙

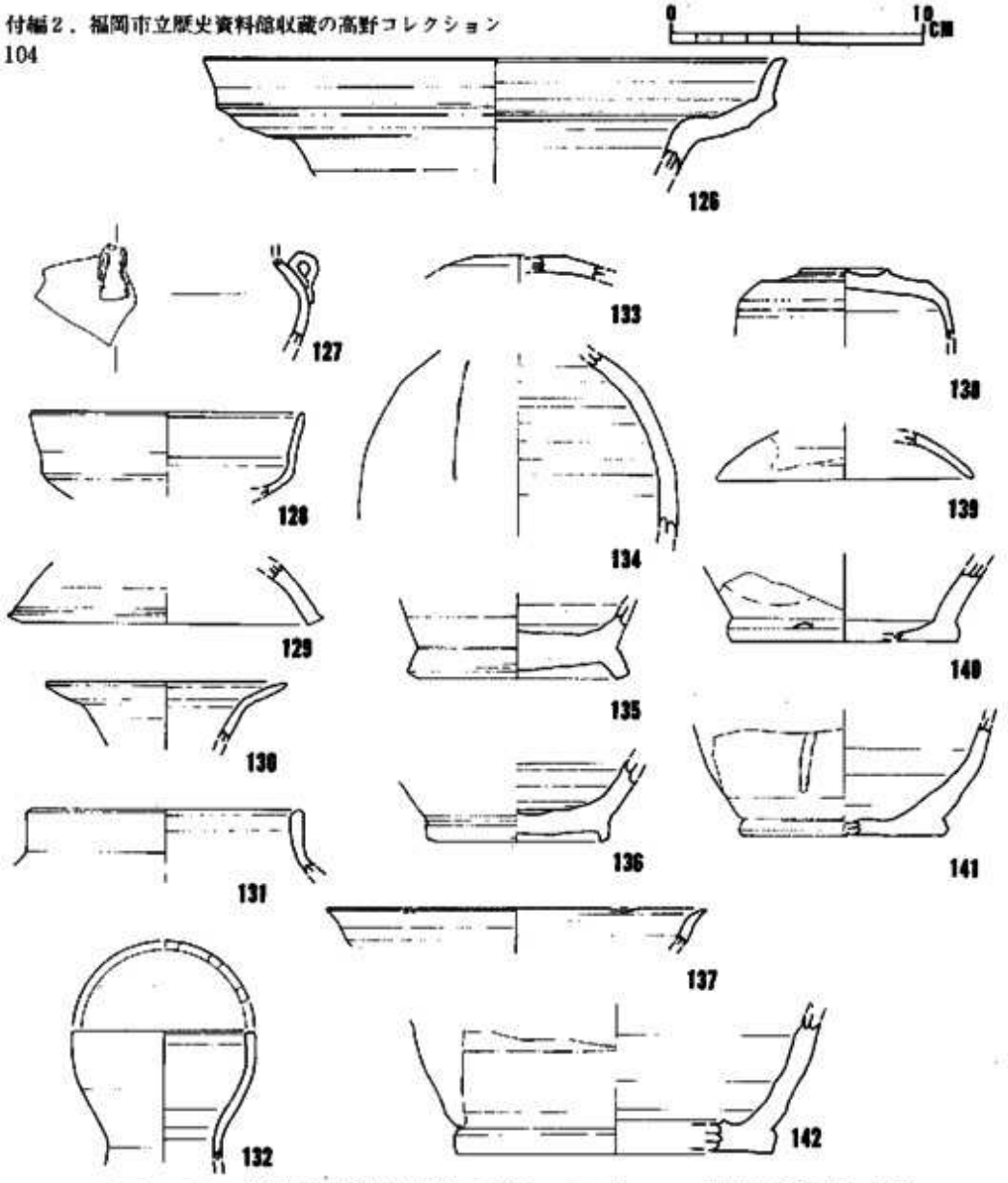


Fig. 22　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　陶磁 (15)(1／3)

窯の青磁褐彩壺とは異なるもので、Ⅵ類やⅦ類とよく似た胎土であることから、越州窯系のものと考えられ、最近は婺州窯[2]に擬せられることの多いものである。

註1　東京国立博物館編　「日本出土の中国陶磁」　1978

註2　馮先銘　「三十年来我国陶瓷考古的収穫」　故宮博物院院刊　1980—1
福建省寧波窯及び婺州窯の項に褐斑のある青磁のことが記されており、昨年、馮先銘、李輝柄・朱伯謙先生御一行の訪九州の折にも、その可能性が指摘された。

高野コレクション越州窯青磁採集地及び採集日時
（底部破片を主として）

型式	図版番号	採集地	採集日
	1	平和台	1959.3.22
	2	平和台	1955.7.9
	3	四本松	1954.11.23
	4	平和台	1955.7.9
◎	5	榎寺前	不明
	6	平和台 E	不明
	7	平和台	1957.4.25
	8	笠寺一の注連	1956.4.15
		榎寺	不明
Ⅰ－1－a		平和台	不明
		平和台	不明
		平和台	1950.秋
		平和台	1953.6.26
20個		平和台	1953.6.27
		平和台	1955.7.9
		平和台	1957.4.20
		平和台	1958.12.31
		平和台	1959.3.7
		平和台	1959.3.7
		平和台	1959.3.21
Ⅰ－1－b	9	平和台	1959.2.7
	10	平和台	1959.3.7
5個	11	平和台	1959.3.22
	12	平和台	1959.2.7
		一の注連	1954.11.23
Ⅰ－2－a	13	平和台	1953.7.10
Ⅰ－2－b	14	平和台	1958.12.4
Ⅰ－3	15	平和台	1959.2.7
2個		榎寺一の注連	1950.3.21
	16	平和台	1959.2.26
	17	平和台	1959.3.4
Ⅰ－4	18	平和台	1953.5.28
	19	平和台	1953.5.28
	20	平和台	1953.4.25
14個		平和台	不明
		平和台	不明
		平和台	不明
		平和台大音跡	1955.7.1
		平和台	1957.9.17
		平和台	1959.3.7
		不明	不明
		不明	不明
		不明	不明

型式	図版番号	採集地	採集日
Ⅰ－5	21	立明寺	1953.3.?
	22	平和台	1953.12.28
◎ Ⅰ－6	23	平和台	不明
	24	平和台	1959.4.9
Ⅰ－?		平和台	1958.3.21
Ⅱ－a	25	平和台大音跡	1955.6.22
Ⅱ－b		平和台	1954.10.14
	26	平和台	1955.7.9
	27	平和台	1953.6.7
	28	平和台	1959.4.5
	29	平和台	1959.2.15
	30	平和台	1955.3.2
	31	平和台	1960.12.4
	32	平和台	1953.5.28
Ⅲ－a		平和台	1953.6.26
		御所ノ内	1953.7.26
		平和台	1957.4.20
18個		平和台	1957.4.25
		平和台	1959.1.25
		平和台	1959.2.22
		平和台	1959.2.22
		榎寺	不明
		榎寺	不明
		不明	1955.1.2
		不明	不明
	35	平和台	1959.3.7
◎	36	平和台	不明
Ⅲ－b	37	平和台	1956.2.8
	38	平和台	1958.12.4
7個	39	平和台	1956.9.18
	40	平和台	1959.3.7
		平和台	1954.10.14
Ⅲの	33	平和台	1957.12.21
口縁	34	平和台	1953.12.9
	41	平和台	1953.12.28
	42	平和台	1954.5.4
	43	平和台	1953.7.23
	44	平和台	1959.3.7
Ⅳ－ア	45	平和台	1958.1.2
	46	平和台大音跡	1955.6.18
	47	平和台	1959.3.7
	48	平和台大音跡	1955.3.22
	49	平和台大音跡	1955.6.21

型式	図版番号	採集地	採集日
	50	平和台	1959.4.5
◎	51	平和台	不明
	52	平和台	1959.2.24
	53	平和台	1959.2.15
	54	平和台	1959.4.1
		平和台	1953.6.27
		平和台	1953.7.10
		平和台大音跡	1955.6.21
Ⅳ－ア		平和台大音跡	1955.7.1
		平和台	1958.12.5
		平和台	1958.12.31
30個		平和台	1958.12.31
		平和台	1959.2.15
		平和台	1959.3.3
		平和台	1959.3.7
		平和台	1959.3.7
		平和台	1959.3.8
		平和台	1959.4.9
		片野東方畑	1954.3.28
		武蔵寺近	不明
		不明	不明
	55	平和台	1959.3.7
	56	平和台	1959.4.5
	57	平和台	1959.3.8
Ⅳ－イ	58	平和台	1954.1.10
	59	平和台	1959.3.7
9個	60	平和台	1959.4.1
		平和台	1959.3.17
		平和台	1959.3.21
		平和台	1959.4.21
	61	平和台	1959.7.16
	62	平和台	1953.6.26
	63	平和台	1959.3.4
	64	平和台	1959.3.7
	65	平和台	1953.6.26
	66	平和台	1953.6.26
Ⅴ－ア	67	平和台	不明
	68	平和台	1957.12.21
25個	69	平和台	1959.2.24
	70	平和台	1958.12.4
	71	ナイター E区上層	1954.5.19
		平和台	不明
		平和台	1953.6.26

型式	図版番号	採集地	採集日
V－ア		平和台	1953.6.27
		平和台	1956.9.18
		平和台	1957.5.11
		平和台	1959.2.15
		平和台	1959.3.22
		通古賀田中長者	1953.8.31
		大宰府	不明
		榎寺	不明
		四王寺	不明
		四王寺	不明
		不明	不明
		不明	不明
V－イ 2個	72	平和台	1959.3.7
		榎寺	不明
VI－a 67個	73	平和台	1957.3.1
	74	平和台	不明
	75	平和台	1959.2.10
	76	平和台	1953.12.27
	77	平和台	1959.12.7
	78	平和台	1959.4.5
	79	平和台	1953.7.10
	80	平和台大音跡	1955.6.21
	◎ 81	榎寺前	不明
	82	平和台	1959.4.5
	83	平和台大音跡	1955.6.20
	84	平和台	不明
	85	平和台	1957.4.25
	86	平和台	1953.6.7
	87	平和台大音跡	1955.6.22
	88	平和台	1959.4.5
	89	平和台大音跡	1955.6.22
	90	平和台	1957.4.20
	91	平和台	不明
	92	平和台	1959.3.7
	93	平和台	1957.7.29
	94	平和台	1959.3.7
	95	平和台	1959.2.7
	◎ 96	平和台	不明
	97	平和台	1957.4.20
		平和台	不明
		平和台	不明
		平和台	不明
		不明	不明
		不明	

型式	図版番号	採集地	採集日
VI－a		不明	
		不明	
		不明	
		不明	
		平和台	1952.7.12
		平和台	1953.1.12
		平和台	1953.5.15
		平和台	1953.5.28
		平和台	1953.6.7
		平和台	1953.6.7
		平和台	1953.6.27
		平和台	1953.6.29
		平和台	1953.6.29
		平和台	1953.7.22
		平和台	1953.7.22
		平和台	1953.8.15
		平和台	1953.8.28
		平和台	1954.10.14
		平和台	1955.3.1
		平和台大音跡	1955.6.21
		平和台大音跡	1955.6.22
		平和台	1956.3.11
		平和台	1957.4.25
		平和台	1957.11.16
		平和台	1958.12.5
		平和台	1959.2.7
		平和台	1959.2.15
		平和台	1959.2.15
		平和台	1959.2.15
		平和台	1959.3.7
		平和台	1959.3.7
		平和台	1959.3.7
		平和台	1959.3.8
		平和台	1959.3.28
		平和台	1959.4.5
		平和台	1959.7.16
		不明	1955.1.2
VI－b	98	平和台	1957.6.28
VII 6個	99	平和台大音跡	1955.6.22
		平和台	不明
		平和台	1953.6.27
		平和台	1953.6.27
		平和台	1953.9.2
		不明	不明

型式	図版番号	採集地	採集日
VIII 6個	100	平和台	1959.3.7
	101	平和台	1953.7.22
	102	平和台	1959.3.8
	103	平和台	1953.6.7
	104	平和台	1957.4.25
	105	平和台	1959.3.7
口縁部	106	平和台	不明
	◎ 107	平和台	不明
	108	平和台大音跡	1955.6.18
	109	平和台	1958.1.2
	◎ 110	平和台	不明
	111	平和台大音跡	1955.6.18
	112	平和台	不明
	113	平和台	1953.9.27
	114	平和台	1958.1.22
	115	平和台	不明
	116	平和台	1959.3.21
	117	平和台	不明
	118	平和台	1959.2.5
	119	平和台	1959.2.7
	120	平和台	1959.3.7
	121	平和台	1959.4.12
	122	平和台	1959.2.22
	123	平和台	1959.2.7
	124	平和台	1959.2.7
	125	平和台	不明
椀・皿以外の器形 盤口壺など	126	平和台 E	1954.5.4
	127	平和台	不明
	128	不明	不明
	129	平和台	1959.3.7
	130	平和台	1953.6.26
	131	平和台	1959.3.3
	132	平和台	1959.7.7
	133	平和台	1959.3.26
	134	平和台	1959.3.4
	135	平和台	1956.9.18
	136	平和台	1959.3.3
	137	平和台	1959.2.22
	138	平和台	1957.3.27
	139	平和台	1958.12.5
	140	平和台大音跡	1955.6.21
	141	平和台	1956.9.18
	142	平和台	1953.7.22

頭に◎印を付したものは、1952年7月28日小山富士夫氏により初めて越州窯と認められた歴史的破片。
採集日時不明のものはそれ以前に採集されたものであろう。

付編３．出光美術館の高野コレクション（福岡市平和台採集の陶片）

出光美術館　学芸員　　弓場　知紀

出光美術館に所蔵されている高野孤鹿氏採集の福岡市平和台出土の陶片はすべてで63片である。そのうちもっとも多いのが越州窯系青磁で34片ある。越州窯系以外では、龍泉窯系青磁が２片、唐白磁が３片、青白磁が２片、褐釉磁が５片、天目釉磁の茶碗片が５片、高麗青磁が１片などで、それ以外は日本産のものや、はっきりとしないものである。一部を除いては５cmぐらいの小破片で、器形もはっきりしないものが多い。陶片の表記によれば昭和30年から35年までの５年間に採集されたものであるが、採集地点ははっきりせず、平和台一帯と考えられる。この高野孤鹿の陶片コレクションが、どのような経緯で出光美術館に収蔵されたのかは明らかではないが、かって当館顧問であった故小山冨士夫先生と高野氏の交流において収蔵されたものと考えられる。

今回、福岡市教育委員会が平和台出土の中国陶磁を集成されるという話を伺い、当館に収蔵されている平和台採集資料を紹介する機会を与えられたことは幸いである。陶片の整理、実測図作成は当館学芸員の岡野智彦君によるものである。以下、越州窯青磁片と唐白磁片、龍泉窯青磁片について記述することにする。なお陶片番号は、実測図、図版とも一致しており、１～20は実測図、図版の共通番号であり、21～42は図版のみの番号である。

１．越州窯系青磁（Fig.1～15,18,19, PL.1,2,3,4,5）　越州窯系青磁は34片あり、全体の半数以上である。ほとんどが小破片であり、全体の器形を知ることができるのは２点（6, 11）だけで、その他は底部や口縁部の破片である。器種は碗、水注、長胴壺、坩などがあるが、碗がもっとも多い。次に器種別に述べることにする。

碗（PL.1，2，3，4）　碗は高台の形式によって次の４形態に分類することができる。

（Ⅰ類）　蛇ノ目高台のタイプ。これはたった１点（4）だけしかない。底部のみの破片である。幅広の低い高台を持ち、畳付、高台内部にも釉がかかる。畳付には白土の目跡が２つみえる。灰緑色の釉調を呈し、胎土も密で、良質の越州窯青磁である。晩唐代のころの作と考えられる。

（Ⅱ類）　円盤状の高台を持ち、高台内が上げ底状になったタイプ、平和台採集の越州窯系の碗としてはこのタイプがもっとも多い。全体の器形を知ることのできるものが２点（6,11）だけある。６は口縁部端部が端反りになった浅い碗。内面は灰青色の釉が全面にかかり、外面は底部の⅓を残して施釉されている。内面の見込みの周辺には白い目跡が４つみえる高台は円盤状で、内側がくぼんでおり、上げ底状を呈する。胎土は砂粒を少し含み、やや粗い。高さ3.6cm、口径13.6cm。11は６と同じ高台の形態をしているが、やや大ぶりな深い碗。口縁部外面か

ら内面全体に暗緑色の青磁釉がかかっている。内面には白い大きな目跡が2つみえる。外面下辺部にはロクロ目が顕著で、成形はやや粗く仕上げられている。このタイプのものとしてはこの他に、3，5，7，1などの破片がある。釉のかからない部分は赤くこげた色を呈している。1は口縁の破片であるが、端部が少し折れている。外部上辺と内面には灰緑色の釉がかかっており、鉄分が多く、斑文が内外面にふきでている。

（Ⅲ類）　輪高台のタイプ。高台が厚く、しっかりとつくられている。高台に釉のかかるもの（15）と、釉のかからないもの（9，10，12）とがある。15は高台の径が5.5cmの小さい碗。内外面に灰緑色の釉が薄くかかる。畳付は目跡があり、釉はところどころはげている。10は高台の径が10cmある大ぶりの碗。高台はロクロで引き出され、がっしりとしている。底部と高台を除いて薄く釉がかかっており、畳付には目跡があり、内面周辺にも白土の目跡が残っている。9はやや高い輪高台で、畳付の部分を除いて内外面に暗緑色の青磁釉がかかる。12は内外面ともに釉が剝落している。このタイプの碗は器壁が厚く、胎は比較的密である。

（Ⅳ類）　その他のタイプ。13は高台径4cmの小さい碗。高台の形成はⅡ式のものであるが、底部は糸切り底になっており、越州窯としてはめずらしいものである。底部を除いて施釉されている。8は全面に均しく暗緑色の青磁釉がかかったもので、越州窯としては作行きは上手のものである。底部のみの破片であるが、側面はまるみを持った深い碗の形態。高台は幅がせまく、高くなっている。余姚上林湖畔窯の作か。晩唐、五代のころと考えられる。31～38，40～42は口縁部の小破片であるが、いずれも碗の一部。33、42は口縁端部が少し端反りになるが、他はまっすぐな口縁をなす。2は暗緑色の透明釉がかかった碗。口縁端部は端反りになり、内面にはカキ目で施文されている。胎は比較的密である。

水注（Fig.19，　PL.5—19，25）　2片ある。19は水注の肩から胴上部にかけての破片。肩には幅2cmの5つの溝のある幅広の把手がつく。外面には灰黄色の釉が薄くかかり、ところどころ釉が剝落している。内面には釉がかからず、ロクロ目がみえる。器壁の厚さは約5mmで均一であり、胎は密である。25も水注の破片。外面は灰黄色の釉がかかり、内面は釉なし。左下に把手の痕跡がある。いずれも博多聖福寺などで出土している越州窯系青磁の水注のようなものか。

壺、小壷（PL.5—14，26～29）　14は長胴壺の底部。底部はごけ底になり、畳付は釉がかからず、目跡がある。内外面に薄く暗緑色の青磁釉がかかるが、内面は一部釉のかからない部分がある。器壁は厚さ7～10mmの密なものである。26～29は図化ができないが、小壷ないしは壺の口辺部。26は口縁部端部が折れ、胴はまるみを持っている。器壁は密であるが、厚さは3mmぐらいの薄いものである。27は釉がかかっていない。口縁端部は玉縁状をなす。28は口縁部が小さく折れまがった壺の破片で、肩は少し張っている。29は小壷であると考えられる。口縁

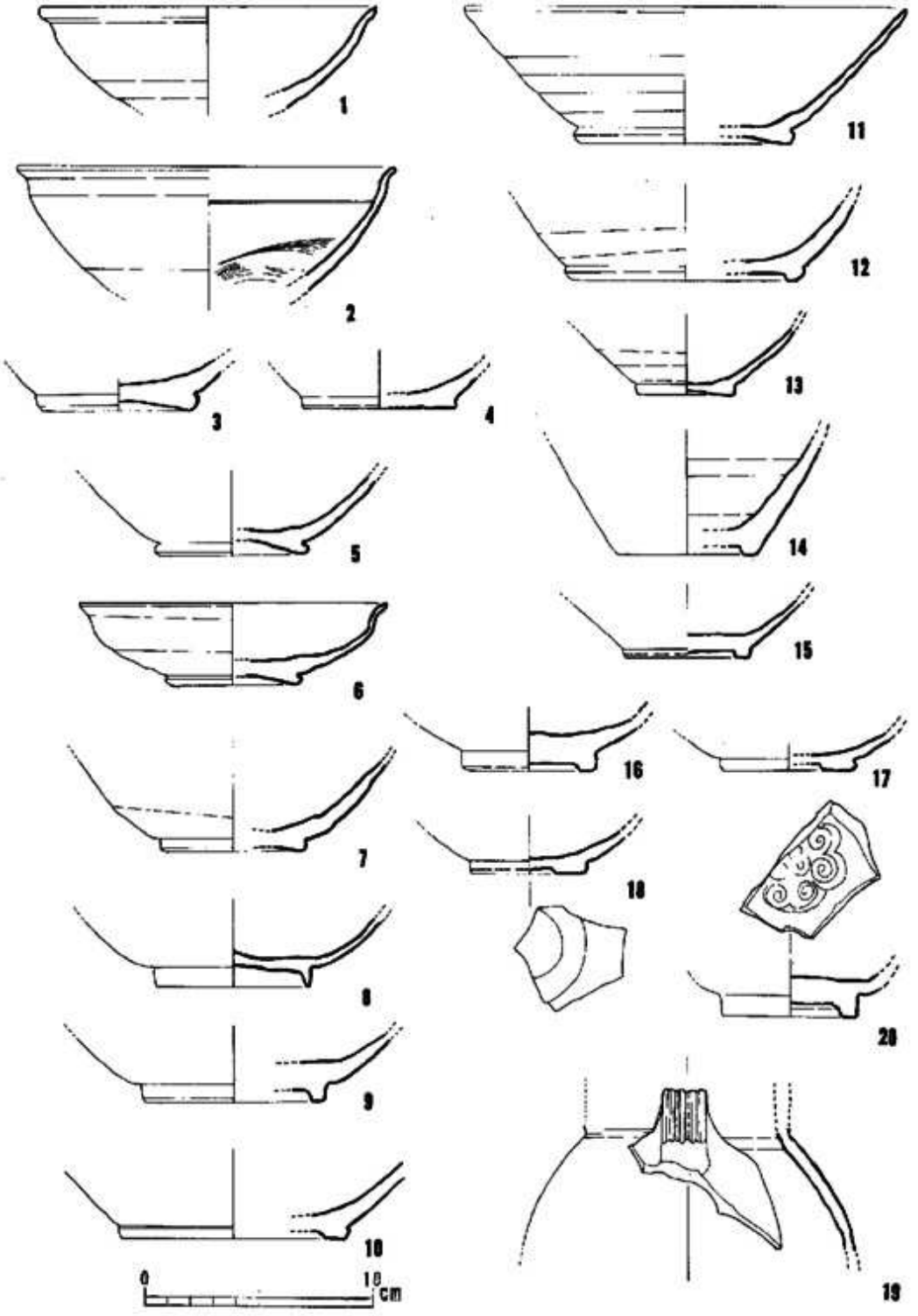


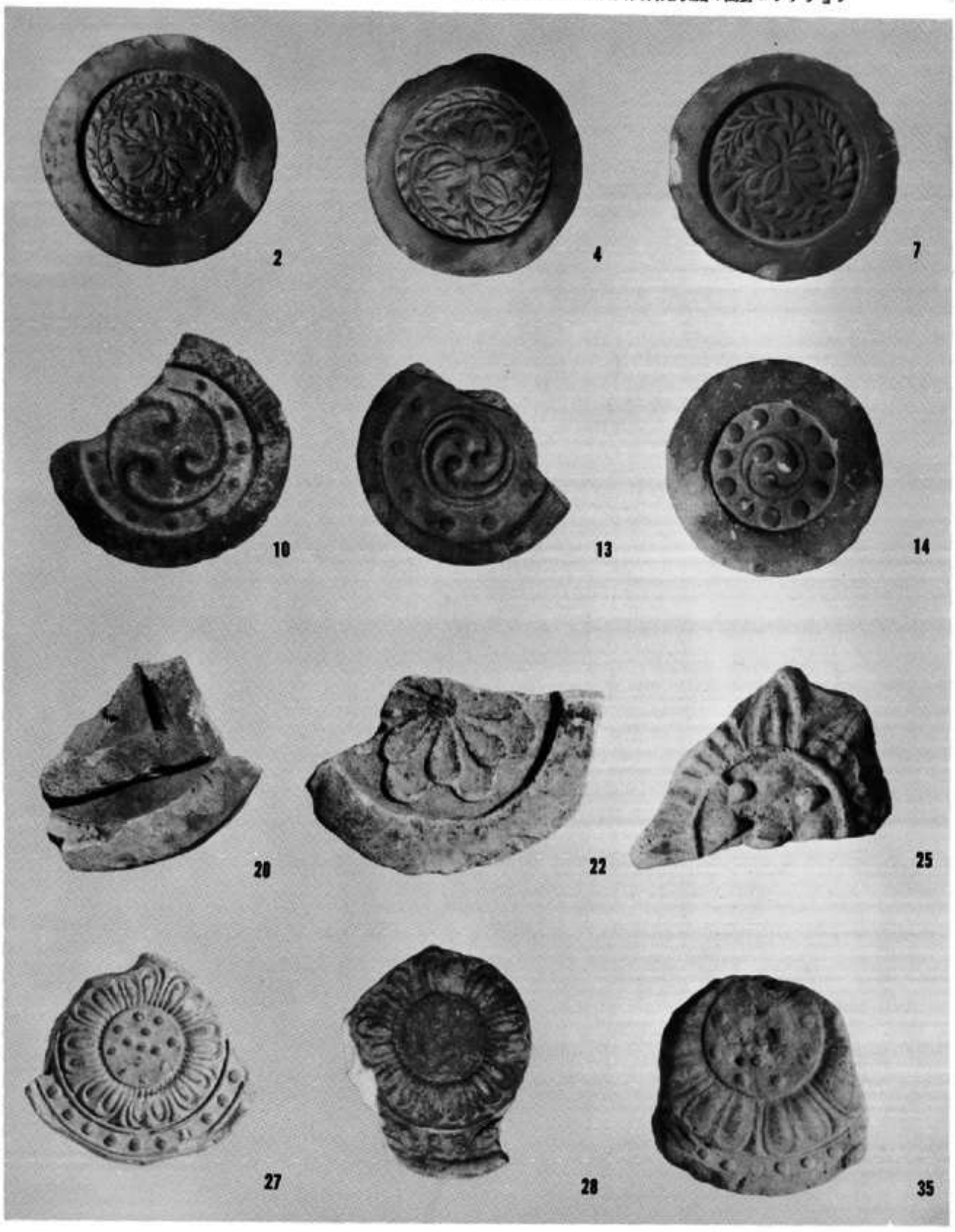
Fig.　　出光美術館の高野コレクション　実測図（1／3）

は広口になっている。

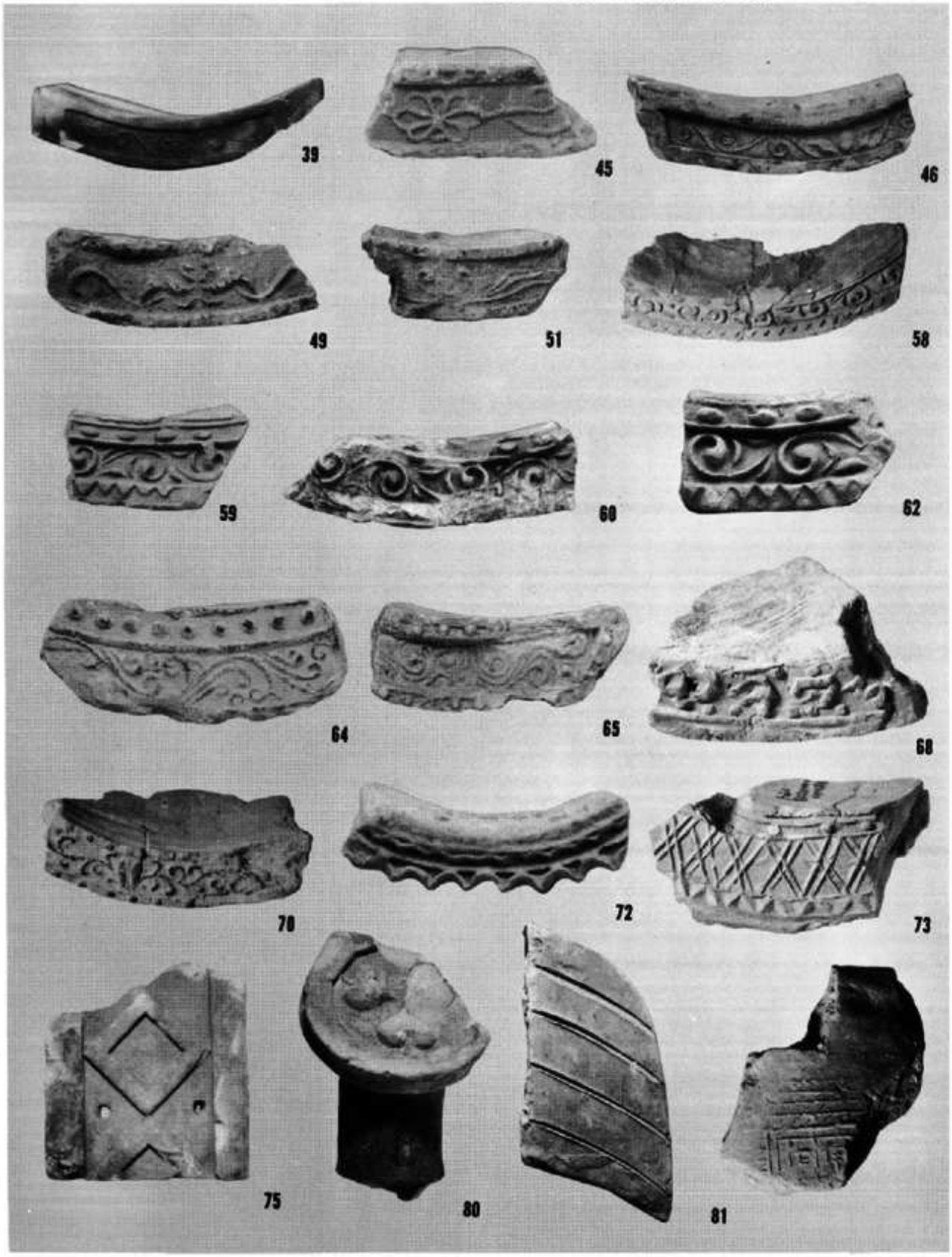
2．白磁（Fig.17，18　　PL．6－16，18，17，24）　　4片ある。17、18は蛇ノ目高台の白磁碗の底部。17は胎土が密で、磁器質の碗。畳付は釉がかからないが高台内部、外面、内面は均しく白釉がかかっている。焼成は硬い。邢窯産か。18も高台は蛇ノ目高台であるが、畳付、高台内は釉がかからない。内、外面には白釉がかかるが、一部ナマコ釉のような状態を呈するところがある。24は口縁の破片で、端部は玉縁状を呈する。器壁は薄く、内、外面に白釉がかかる。16は幅の広いがっしりとした輪高台のタイプで、大ぶりの碗の破片。底部から高台は釉がかかっていない。器壁は底部が10mm、側面が8mmあり、厚い。

3．龍泉窯系青磁（Fig.20，　　PL．1－20，21）　　2片ある。20は厚手の青磁碗か坏の底部。畳付と高台内部は釉がカキとられており、その他の部分は1mmの暗緑色の青磁釉がかかる。見込みの釉下には宝相華文の印花文が施文されている。21は皿の小片。巾の狭い高い高台を有し、釉には細かい貫入がみられる。南宋代の砧青磁の釉調を呈している。

4．高麗青磁（PL．3－35）　　1片だけある。35は口縁の小破片であるが、灰青色の釉調を呈し、内面には3本の円圏文の象嵌文様がある。器壁は薄い。



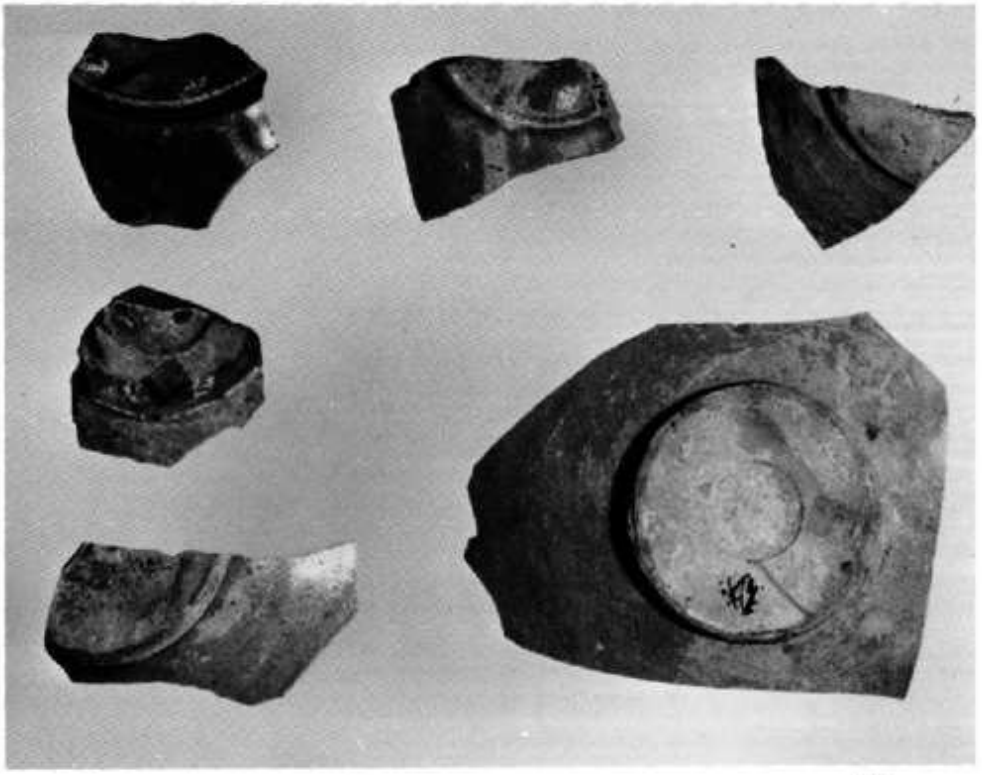
PL. 1　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　瓦（1）



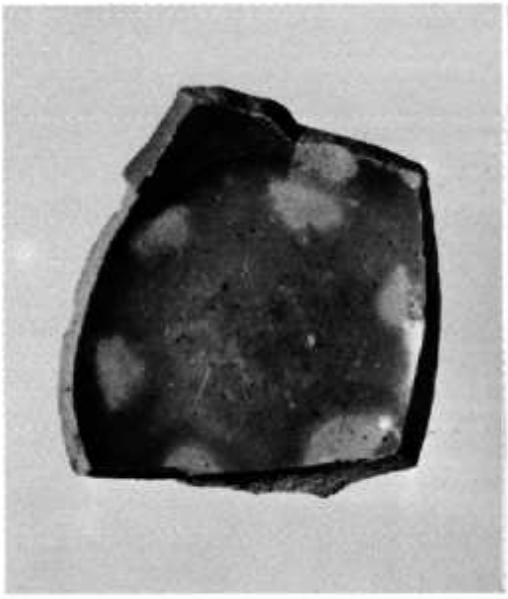
PL. 2　福岡市立歴史資料館の高野コレクション　瓦（2）

高野コレクションの陶磁

福岡市立歴史資料館

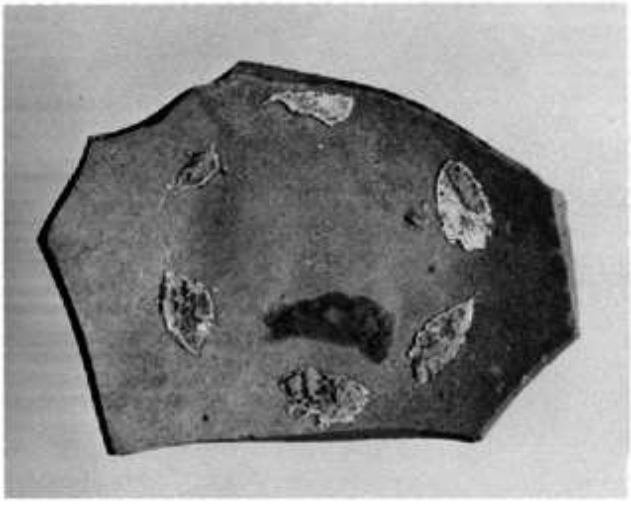


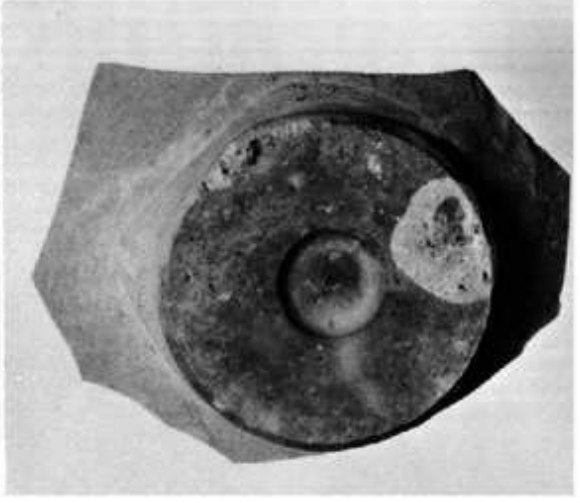
↑1



←2

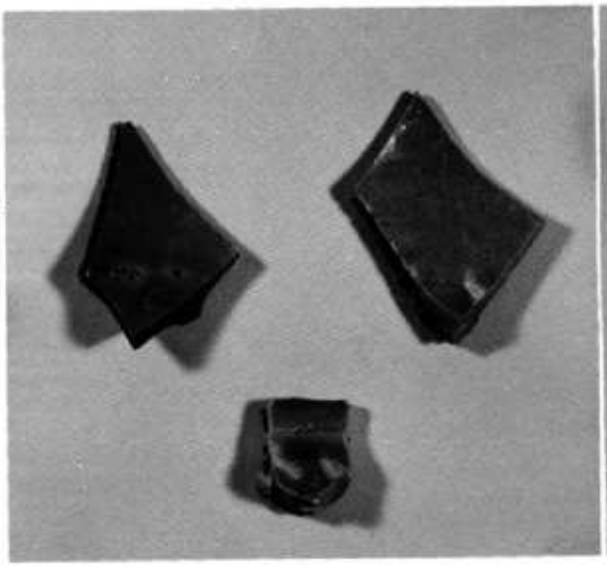
↓3 a, b

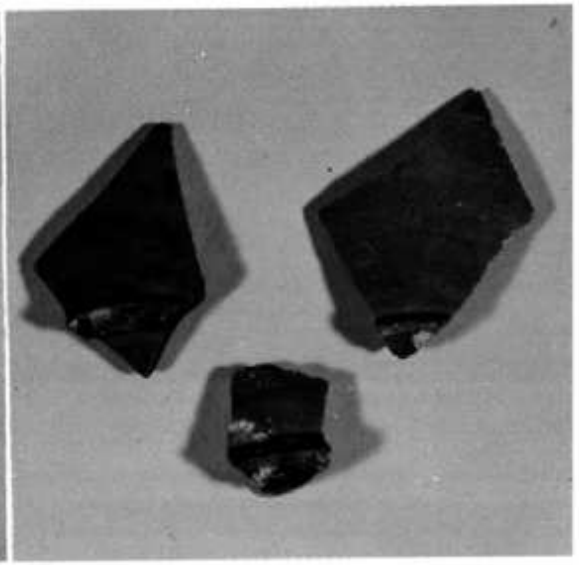


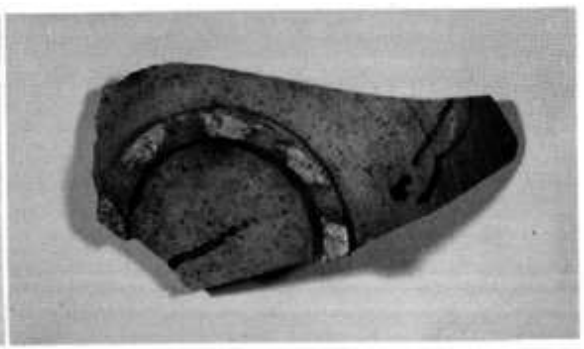


PL. 3

4 a, b →

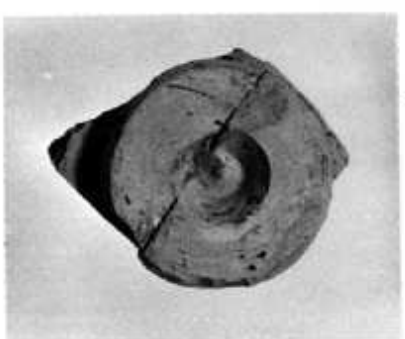






↑ 5 a, b

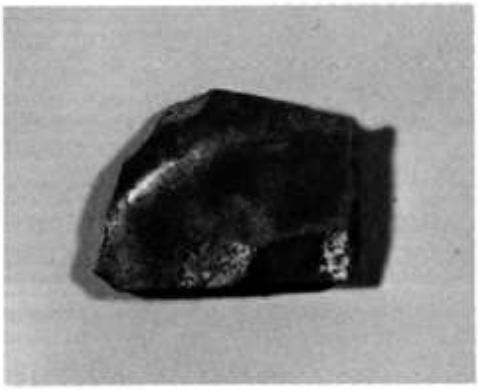
← 6



← 8

7 a, b →

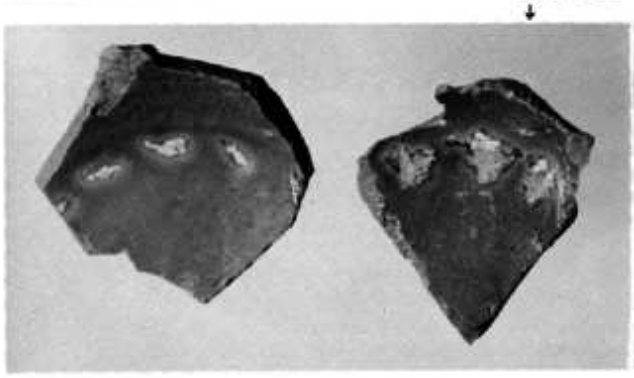
PL. 4

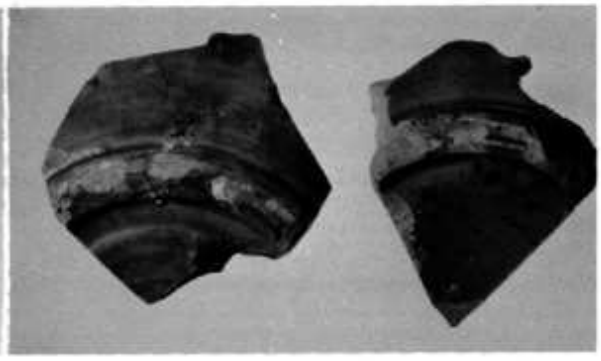


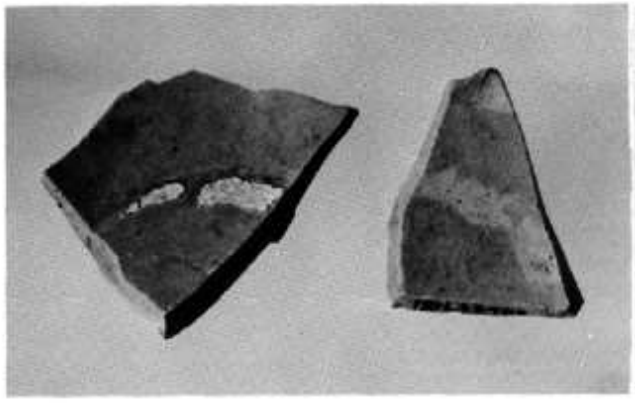
← 9

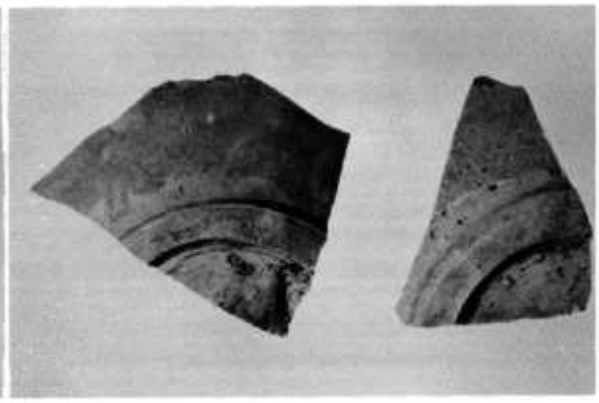
10 →

11 a, b
↓

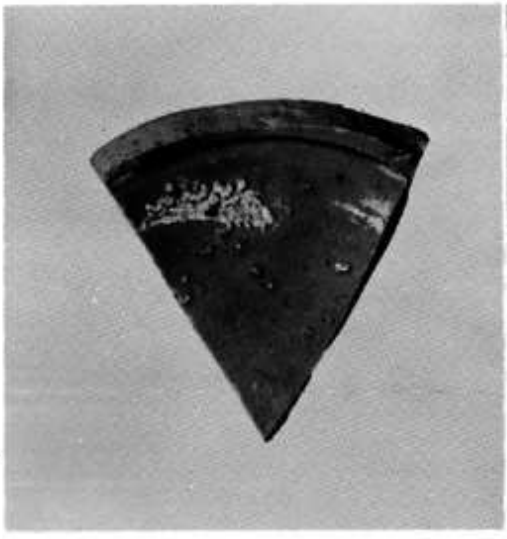






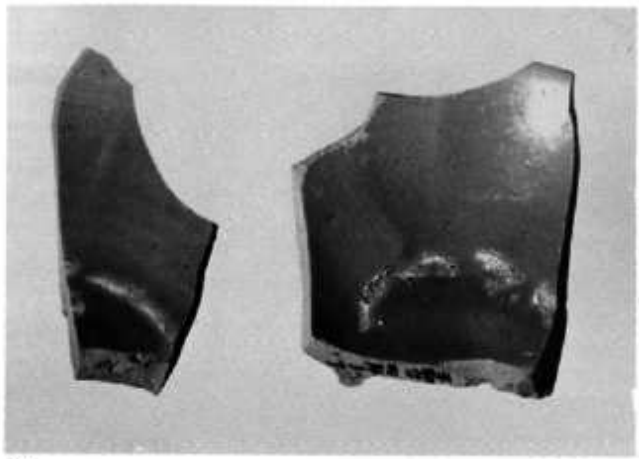


↑
12 a, b



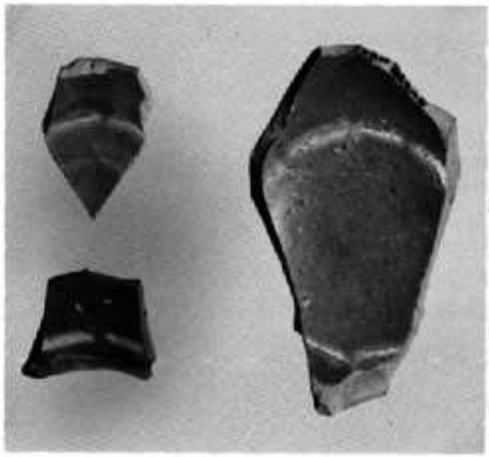
13 a, b →

PL. 5

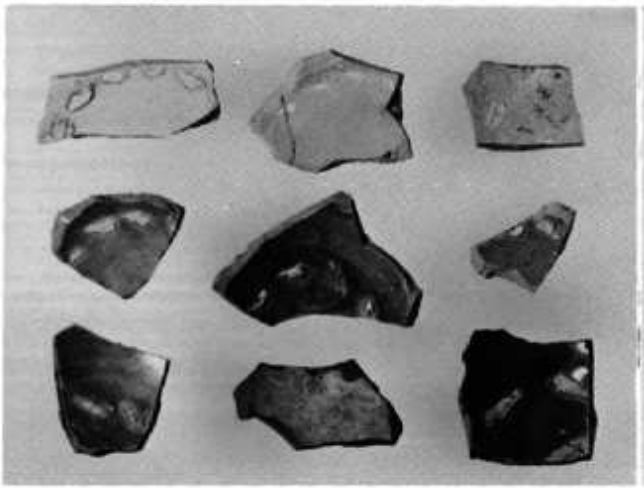


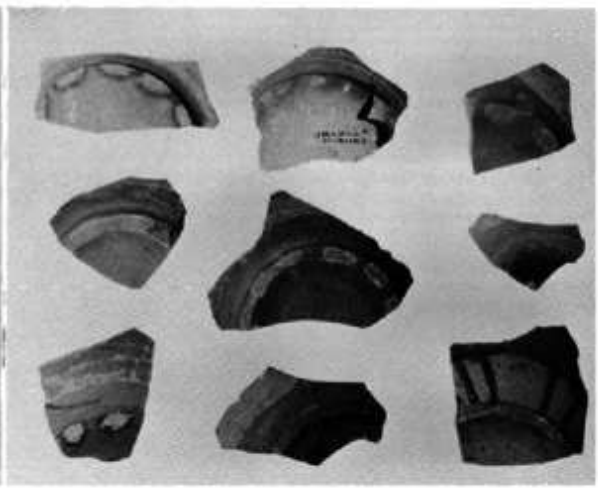
↑
上 14 a, b
下 15 a, b

16 a, b →

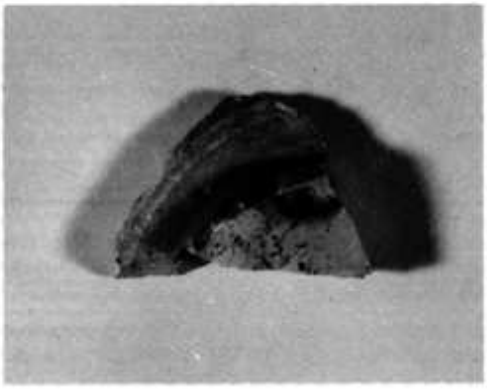


17 a, b
↓

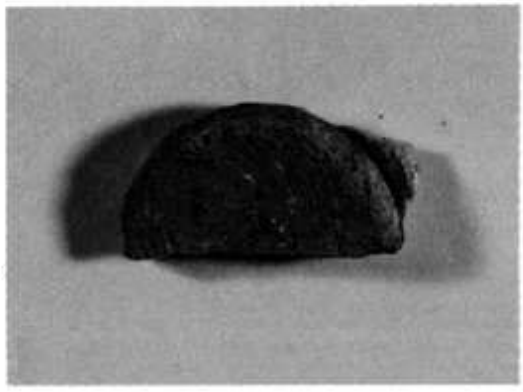




PL. 6

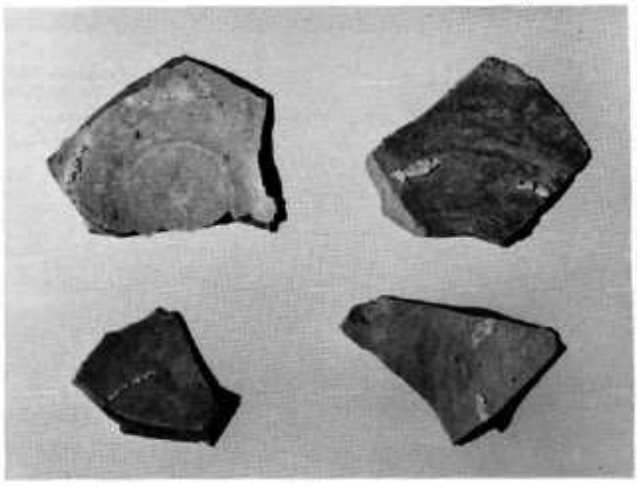


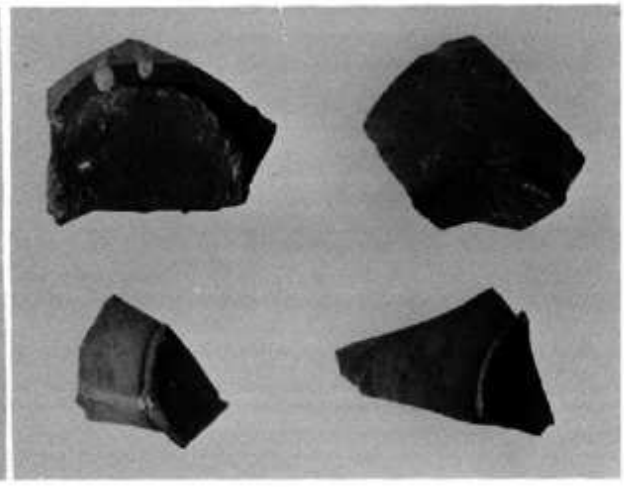
← 18

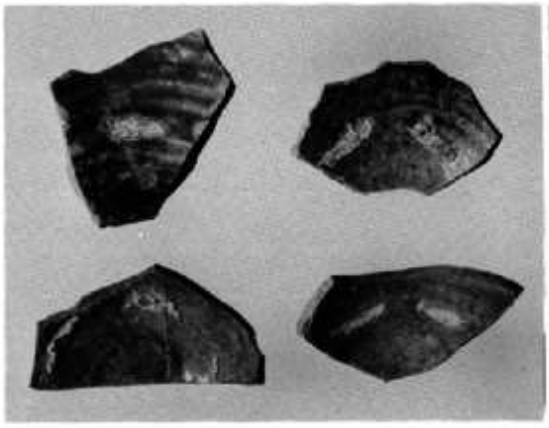


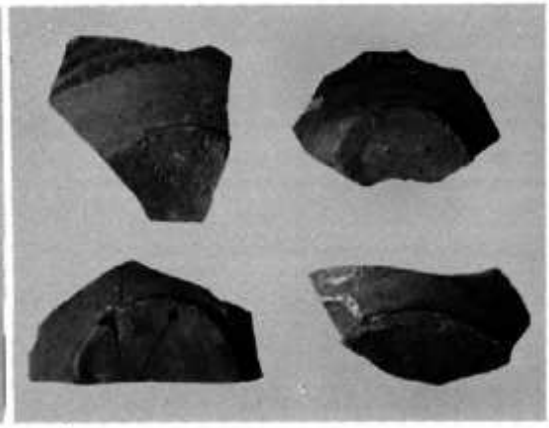
19 →

20 a, b
↓







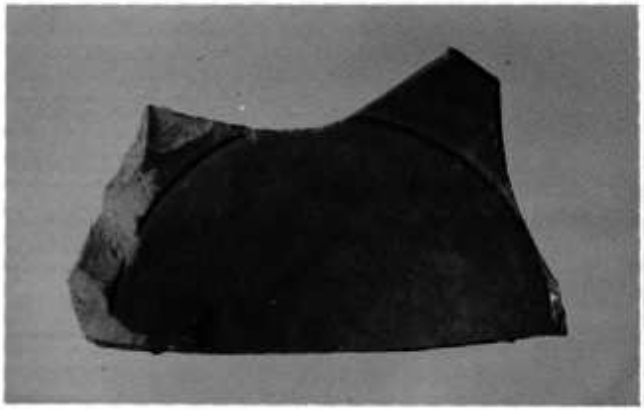


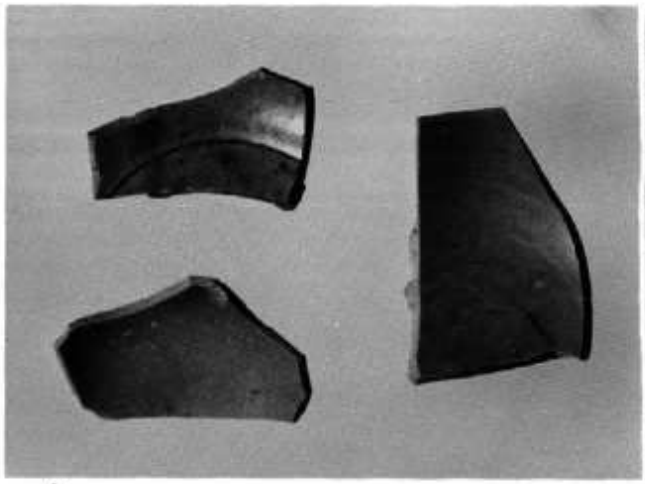
↑
21 a, b

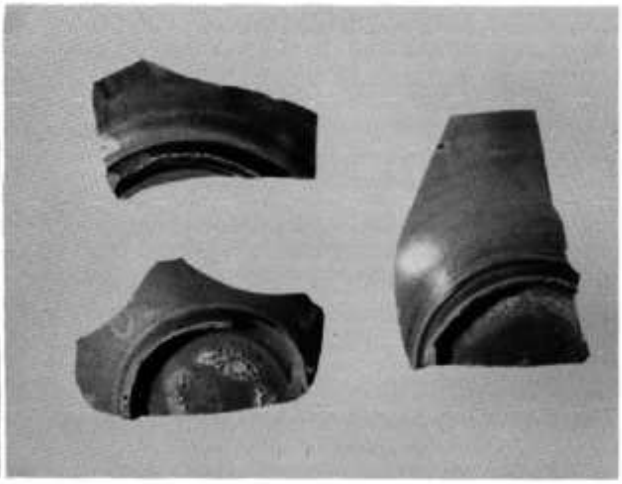
←
22 a, b

23 →

PL. 7



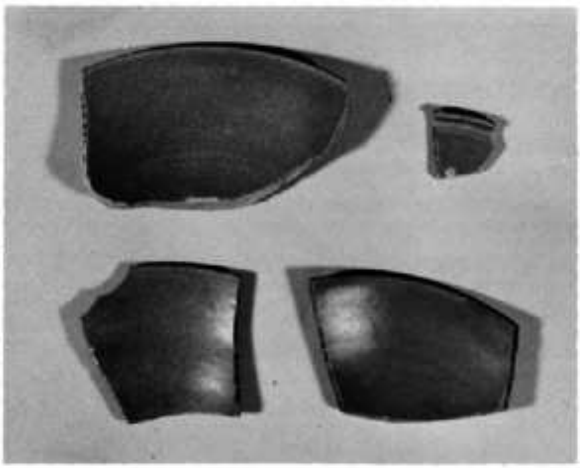




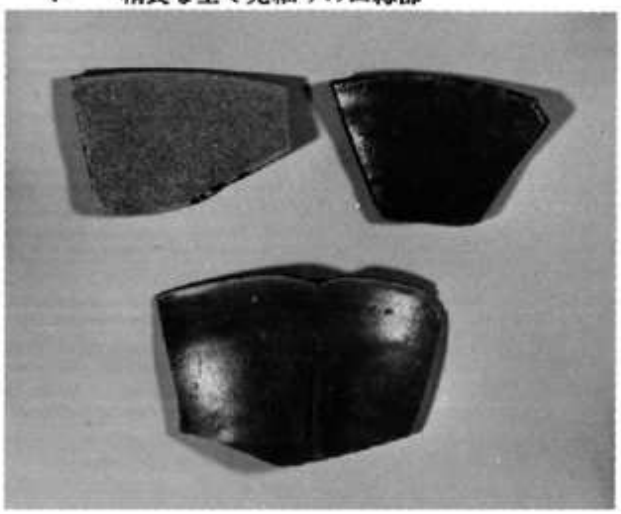
↑
上 24 a, b
下 25 a, b

26 →

精良な土で直口の口縁部

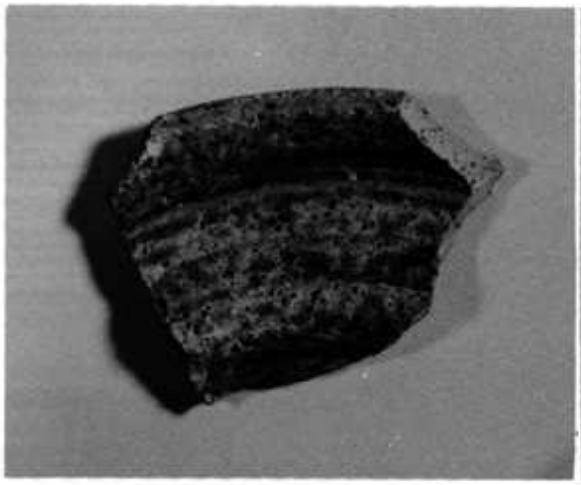


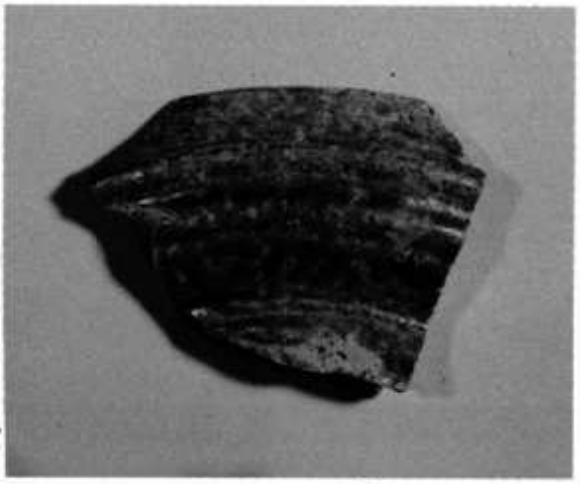
27
↓ 精良な土で先細りの口縁部



28 ↓ 粗い土の口縁部

PL. 8





↑ 29 a, b

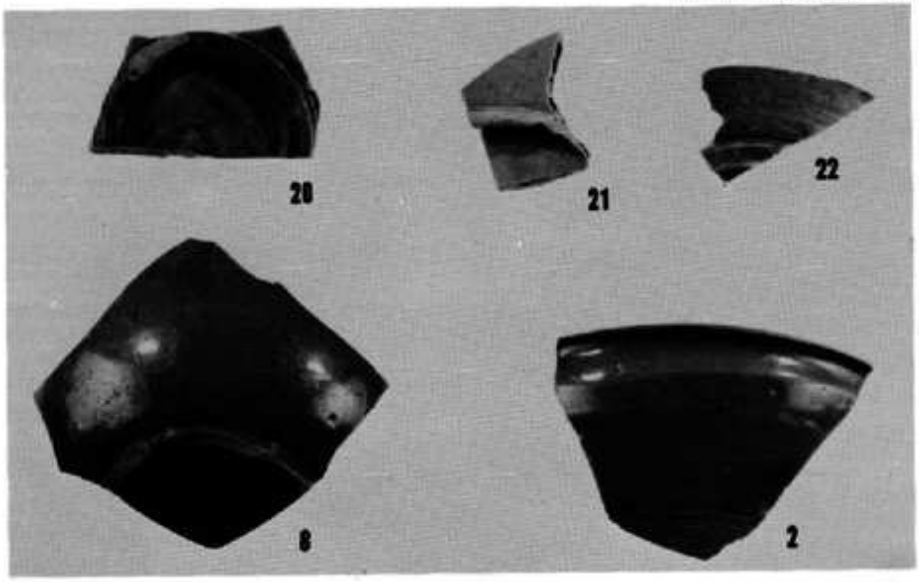
← 30

31 ↓

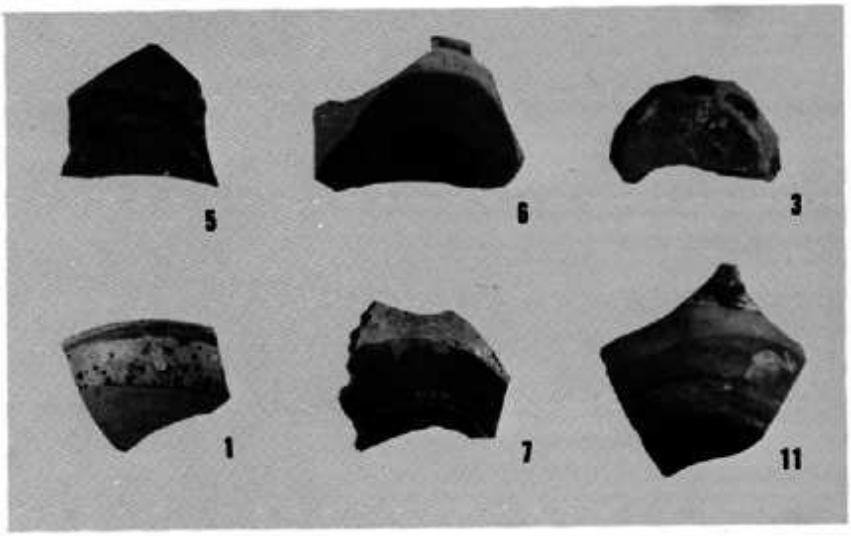
32 ↓

33 →

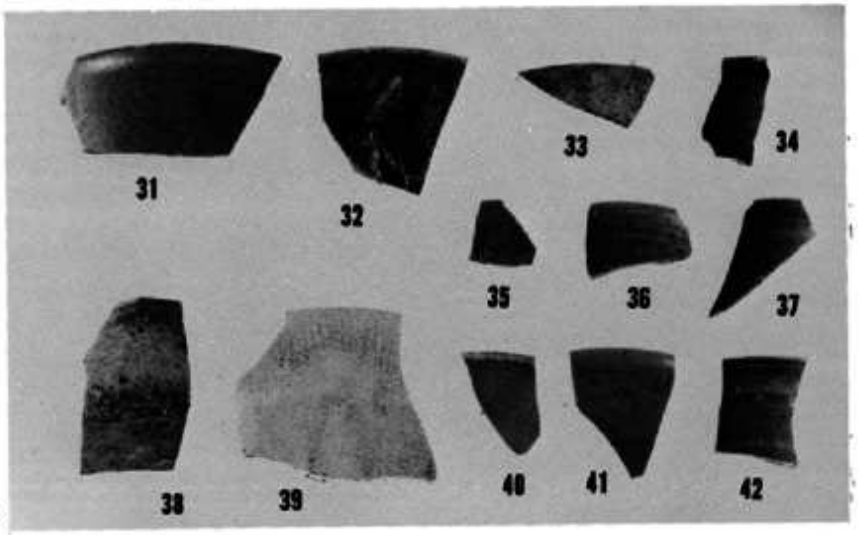
PL. 9



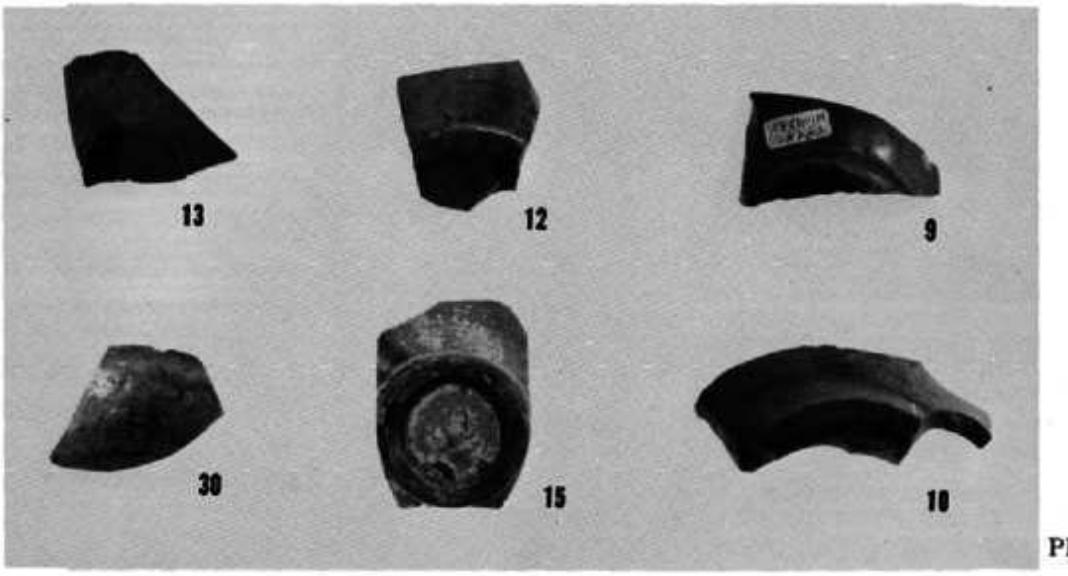
PL. 1



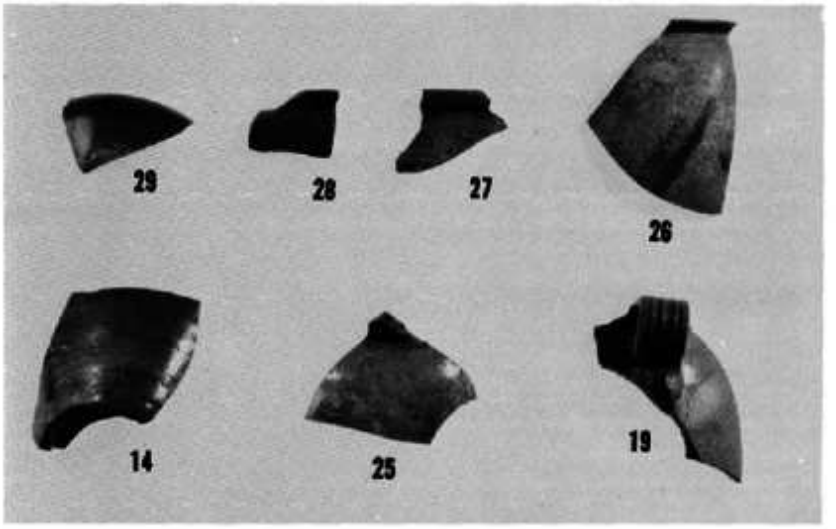
PL. 2



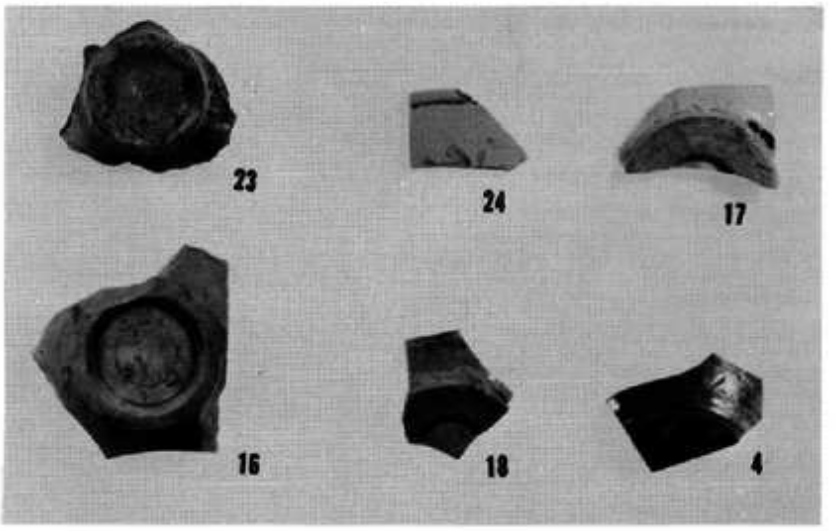
PL. 3



PL. 4



PL. 5



PL. 6

付編4
九州大学考古学研究室収蔵の平和台出土遺物

九州大学考古学研究室

現在、九州大学考古学研究室には福岡市平和台出土の遺物がコンテナーボックスで10箱収蔵されている。これらは昭和26年（1951）8月に九州文化総合研究所を調査主体に鏡山猛先生を中心として渡辺正気、岡崎敬氏等が参加して行われた発掘調査の出土遺物である。調査地点は、現在平和台市民球場の南側にある2面のテニスコートのうち西側コートにあたる。一帯は黒田藩家老の大音兵部の屋敷跡で、戦前は陸軍歩兵第24連隊の火薬庫として利用されていた。戦後、平和台市民球場建設・球場入口堀側城壁横の拡張工事のために一帯から多量の土砂が運ばれ、遺跡は壊滅状態となり、昭和26年当時には第3回福岡国民体育大会に関連して拳闘選手の脱衣場と公衆便所がたてられていた（PL.1，2）。

調査は脱衣場の北側に削平工事中にあらわれた玄武岩（？）の大石（縦1.51m，横1.21m，厚さ約24cm）を中心として行われた。大石の下からは井戸が検出され、大石は井戸埋設時に石蓋に用いられたことが確認された。また、渡辺氏によれば脱衣場の西側にならぶ南北方向の礎石列の西側に雨落溝らしき小溝があらわれたとのことである。現在、市民球場の外野からテニスコート付近は、方一町の大宰府鴻臚館が想定されており、調査地点はその西南隅にあたり、土壇状の土盛と礎石から礎石建物が想定されている。調査時の遺物出土状況については研究室の資料整理が充分でないために明らかでない。　出土遺物には須恵器・陶磁器・瓦などがある。

①須恵器（Fig.1）

1・2は坏蓋で、口縁端部をおりまげる。内外面ともに横ナデ調整を施し、1は灰青色、2は灰色を呈する。3は皿の口縁部破片で、口縁部内面に細い沈線を1条めぐらす。内外面ともに横ナデ調整を施し、灰青色を呈する。1～3とも胎土には微細砂粒を含む。4は外底を左まわりの回転ヘラ切り離しし、体部および内面はナデ調整を施す。内面はあれが著しく、部分的にスミが付着しており、転用硯として用いられたと考える。5は壺の頸部破片で頸部中央に沈線文を1条めぐらし、その上下に6条を1単位とする櫛描き波状文を2単位配する。胎土には微細砂粒を多く含み、灰色を呈する。6・7は外面に平行条線文のタタキを施し、7はその後にカキメ調整を施し、内面に同心円文のタタキを施す。8は内外面を横ナデ調整した後に、3条を1単位とする櫛描き波状文を2単位配する。1は8世紀前半、2は8世紀中頃、3・4は8世紀代に比定される。

②陶磁器

出土した陶磁器は破片ばかりではあるが、越州窯系統青磁・龍泉窯系統青磁・白磁などの中国陶磁器のほかに、近世の国産陶器が含まれる。

越州窯系統青磁（Fig.2，3，4－1～5）Fig2-1・2は皿の口縁部破片で、1は体部中位で

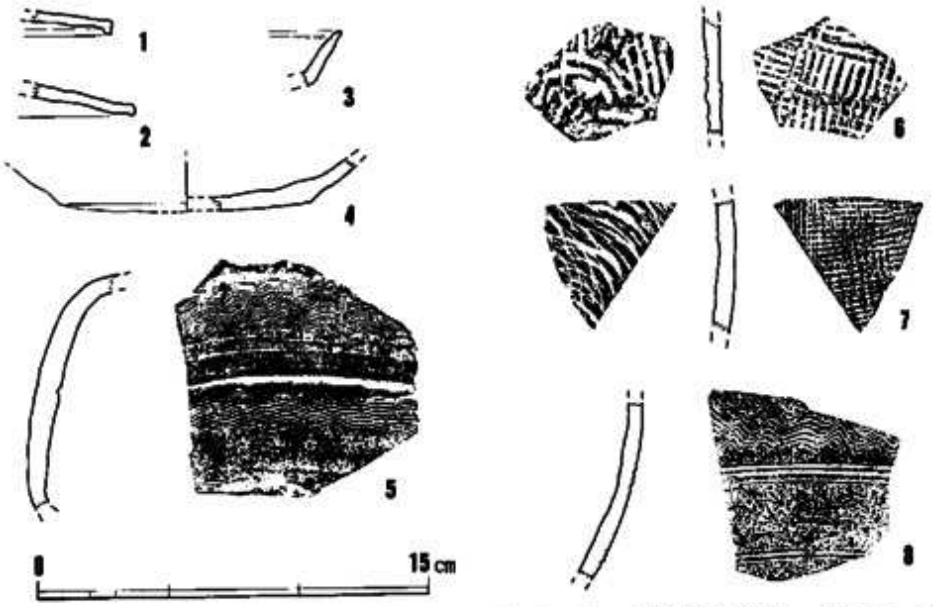


Fig. 1　九州大学考古学研究室収蔵　平和台出土　須恵器実測図　（縮尺１／３）

一旦反転してのびるものである。内面および外面反転部付近まで白色の化粧土をかけ、その後に全面に黄緑色の釉を施すが、剥離が著しい。2は口縁部下まで回転ヘラケズリを施し、暗緑色の釉をかける。胎土はともに灰色を呈するが、1は須恵器に類似して粗いのにくらべ、2はやや緻密である。3～6は椀の口縁部破片で、口縁部付近でわずかに外反するもの(3～5)と、口縁部外面を肥厚させたもの(6)とがある。3は暗緑色の釉がかけられ、口縁部付近には余分の釉がたれ、部分的に貫入がみられる。4は内面および体部上半に白色化粧土を2度がけし、その上に緑黄色の釉を体部上半まで施し、体部下半は露胎のままである。5は輪花をもち、緑黄色の釉を全面に施す。6は緑黄色の釉を全面に施し、部分的に貫入がみられる。胎土は、5が精選良好なものであるのに対して、3・4・6は砂粒を含みやや粗い胎土である。7～19は皿または椀の底部破片である。7～11は上げ底の円盤状の高台をもち、胎土は粗く灰色ないし暗灰色を呈し、つくりもやや雑である。暗緑色ないし緑黄色の釉を内面および外面胴部上半に施し、胴部下半は露胎のままである。11の内面には斑点状の目跡、9の内面、10の内面および畳付には白色砂の目土が斑点状に残る。12・14・15は蛇ノ目高台風のものである。12の胎土は粗く、釉は体部上半までしか施されず、下半は露胎のままである。釉は緑黄色を呈して剥離が著しい。内底には目痕が斑点状に残る。14・15は全面に白色の化粧土がかけられ、その後に高台畳付以外に施釉するが、剥離が著しい。胎土は緻密で灰白色を呈する。内底と高台畳付に目痕が斑点状に残る。13・16～19は輪状高台のもので、さらに高台の低いもの(13・16・17)と、前者とくらべ高台がやや高めで細くなったもの(18・19)とに分けられる。13は灰白色を呈する緻密な胎土で、暗緑色の釉が内外全面に施され、部分的に貫入が認められる。内面には斑点状の目痕がみられ、畳付の目土は擦り取られている。

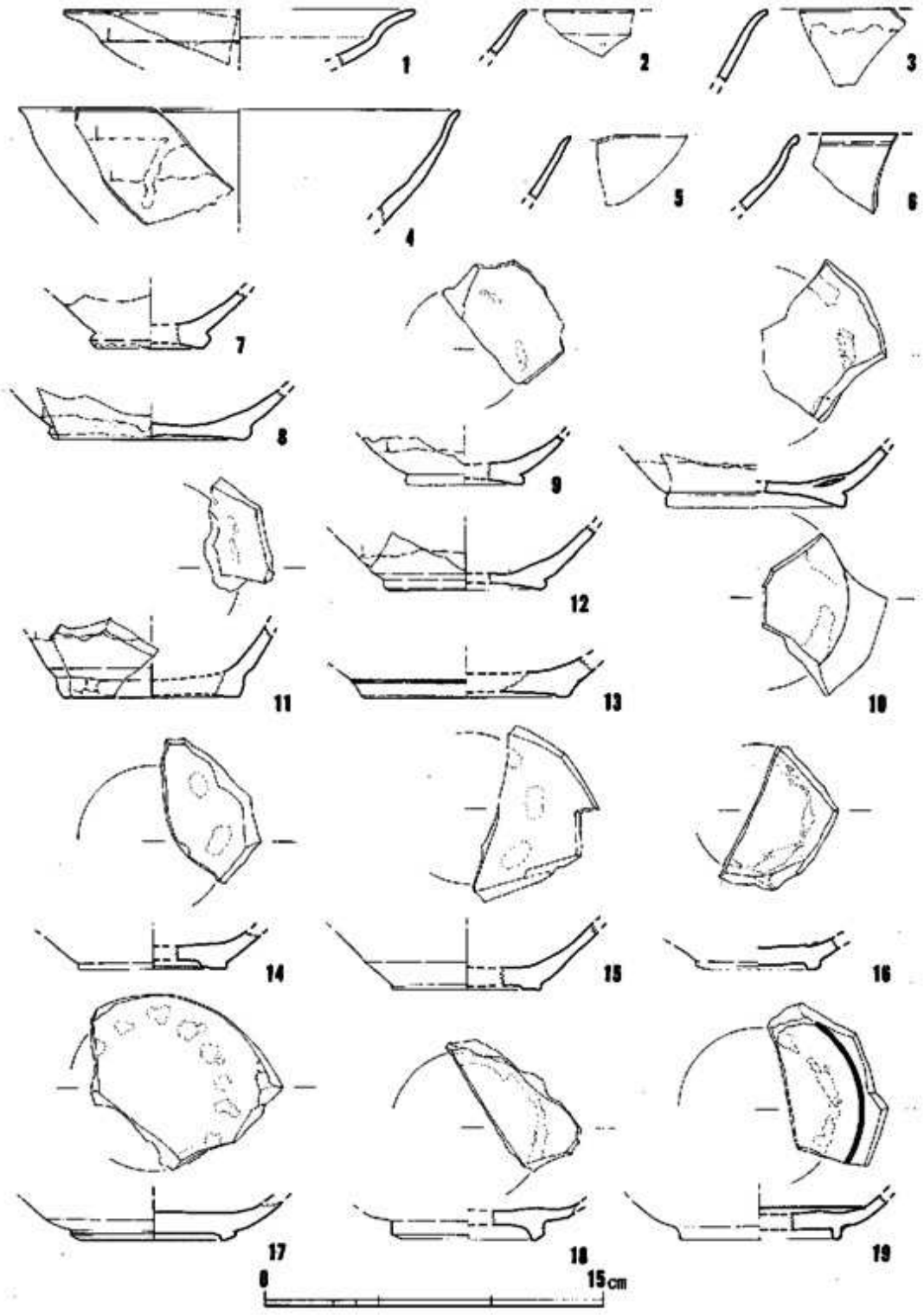


Fig. 2　九州大学考古学研究室収蔵　平和台出土　陶磁器実測図1（縮尺1／3）

16・17は内外面に白色化粧土をかけ、緑黄色の釉を全面施釉する。16は内底に目土が圏状に残り、17は目痕が斑点状に残る。ともに畳付は目土を擦り取っている。18は灰色の緻密な胎土で、暗緑色の釉を全面に施釉する。内底には目痕が圏状に残り、畳付の目痕は擦り消している。19は灰色の粗い胎土で、暗緑色の釉が全面に施され、内外面に貫入を認める。内底には目土が残り、畳付は目土を擦り取らない。Fig.3は皿の体部破片である。内底に圏線をめぐらし、内側に蝶に近い草花文を毛彫りで描く。浙江省余姚窯採集品、同省鴉鶏山窯出土品に類似した文様モチーフをもつものがある。灰色の緻密な胎土で、暗緑色の釉を全面に施す。Fig.4-1は壺の肩部破片で、肩部に輪花をもち頸部の付け根に削り出しの小さな突帯が1条めぐる。外面全面に暗緑色の釉を施し、内面にも釉だれがみられる。胎土は緻密で灰白色を呈する。2は鉢または壺の底部破片である。底部付近まで白色化粧土がたれるが、釉は胴部下半には施されていない。胎土は粗く灰色を呈する。3は壺の底部破片で、外面は回転ヘラケズリを施し、内面は横ナデ調整である。外面全面に緑色の釉が施され、外底全面に目土が付着する。胎土は密で灰白色を呈する。4は水注の破片で、外面に緑黄色の釉を施すが、剥離が著しい。胎土は粗く灰色を呈する。5は鉢の底部破片で、内外面ともに横ナデ調整を施し、緑黄色の釉を施すが、外面胴部下半は露胎のままである。釉には細かい貫入がみられ、胎土は粗く暗灰色を呈する。その他に、褐釉の四耳壺と考えられる小破片がある。

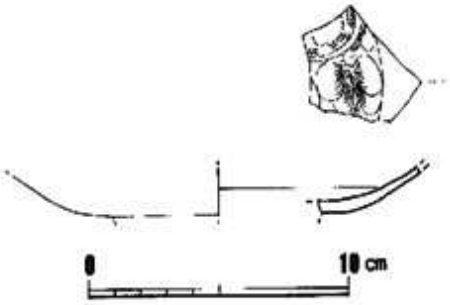


Fig.3 九州大学考古学研究室収蔵　平和台出土　陶磁器実測図2（縮尺1／3）

龍泉窯系統青磁（Fig.4-10）

椀の高台部破片である。体部外面および外底部は回転ヘラケズリ、他は横ナデ調整である。内外全面に施釉され、外底には目土が圏状に残る。胎土は密で灰白色を呈する。

白磁（Fig.4-6～9）

いずれも椀の破片である。6と8は口縁部を短く外反させ端部を平坦に仕上げる。8は内面見込みの釉を輪状にカキ取り、その上方に沈線を1条めぐらす。外面は回転ヘラケズリ調整を施し、体部下半は露胎のままである。6は口縁部下を削り、小さな玉縁状に仕上げる。外面は回転ヘラケズリ、内面は横ナデ調整を行う。6～8は釉が薄く、胎土は灰白色を呈する。9の胎土は粗く灰白色を呈する。

その他の中国産陶器（Fig.4-11）

甕の底部破片で、横ナデ調整を施し、底部付近をヘラ状工具で再調整する。胎土は粗く暗灰色を呈する。その他に福建省付近で生産されたと考えられる中国産陶器の破片などがある。

近世国産陶器（Fig.4-12～14）

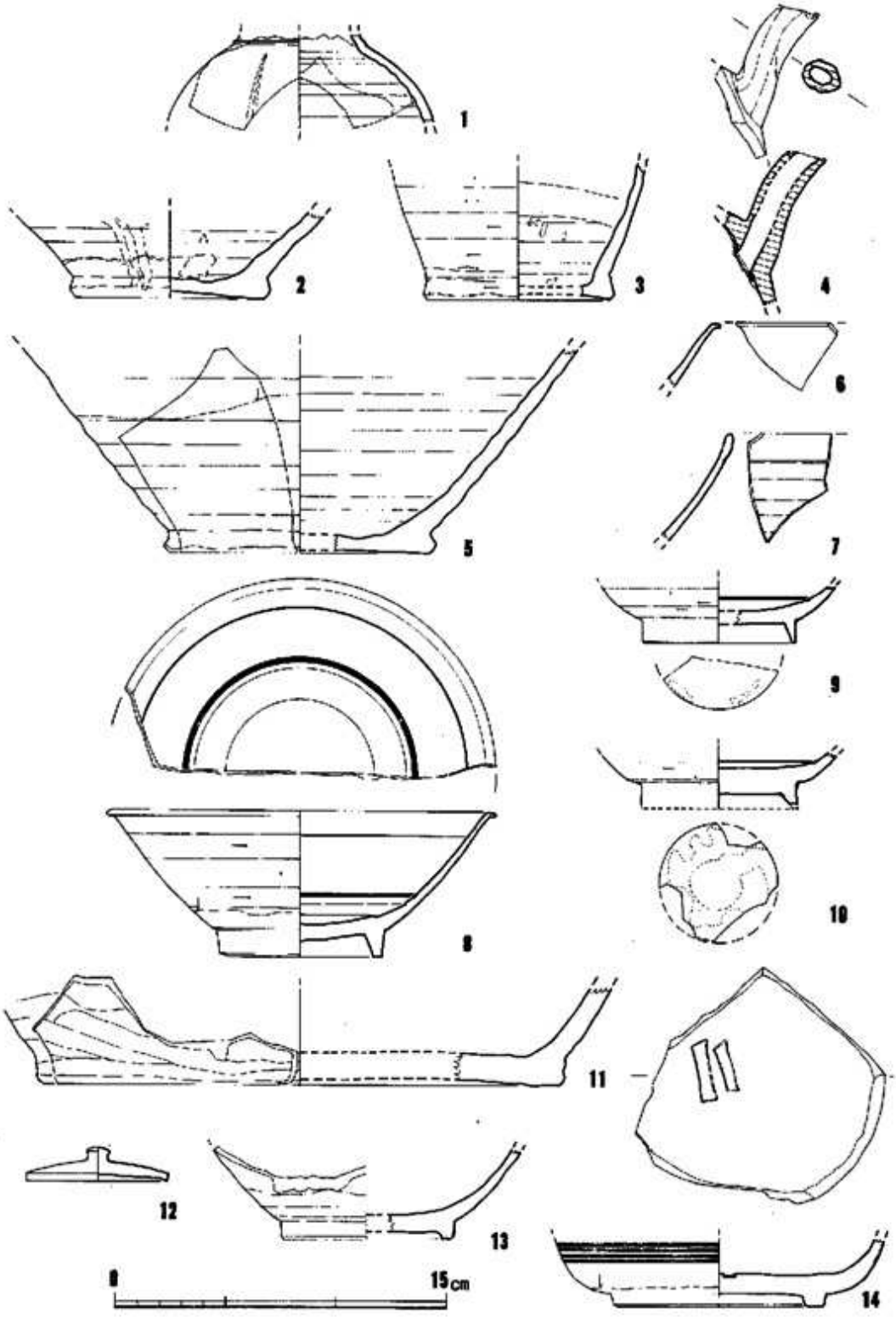


Fig.4　九州大学考古学研究室収蔵　平和台出土　陶磁器実測図3（縮尺1／3）

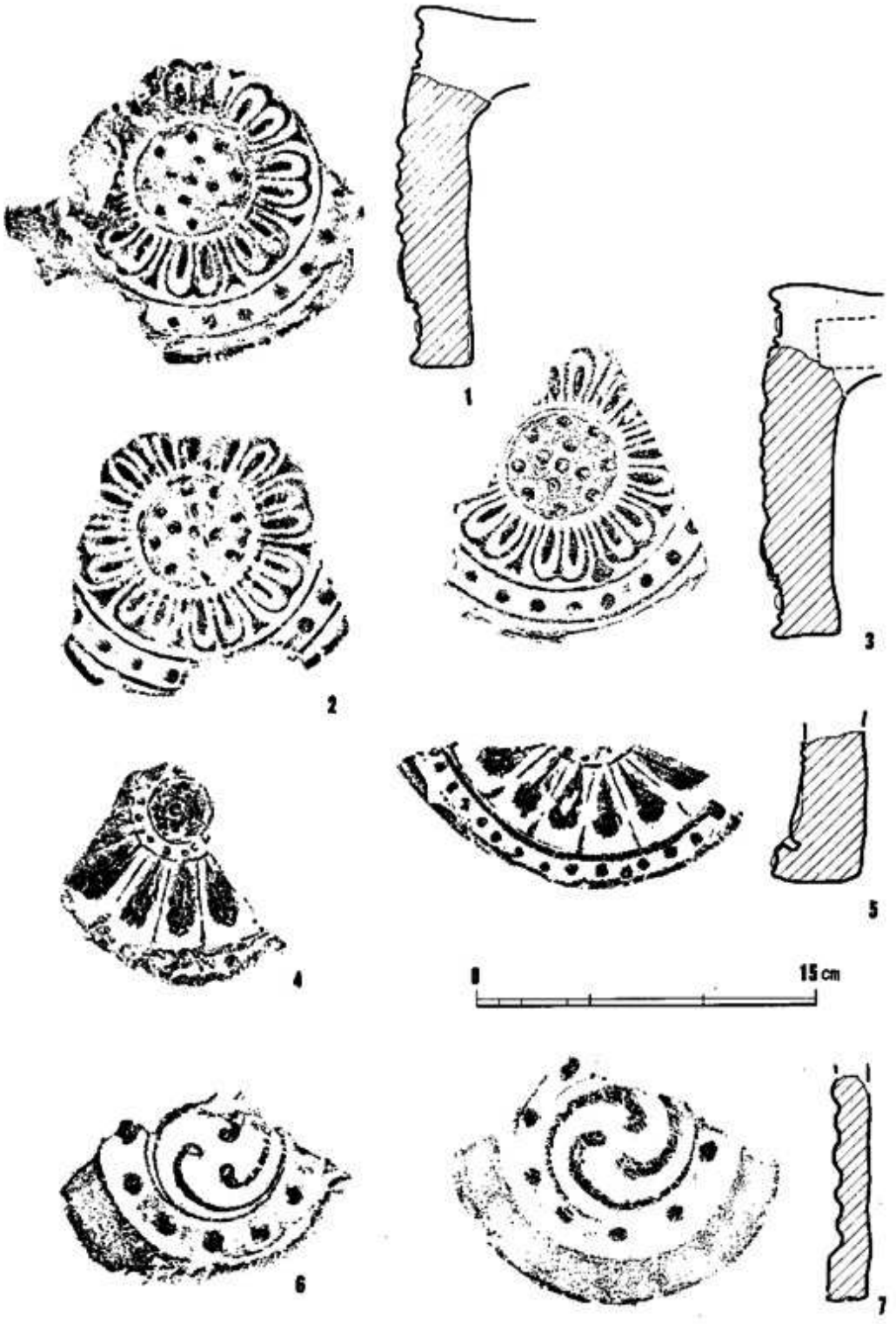


Fig. 5　九州大学考古学研究室収蔵　平和台出土　瓦実測図および拓影1（縮尺1／3）

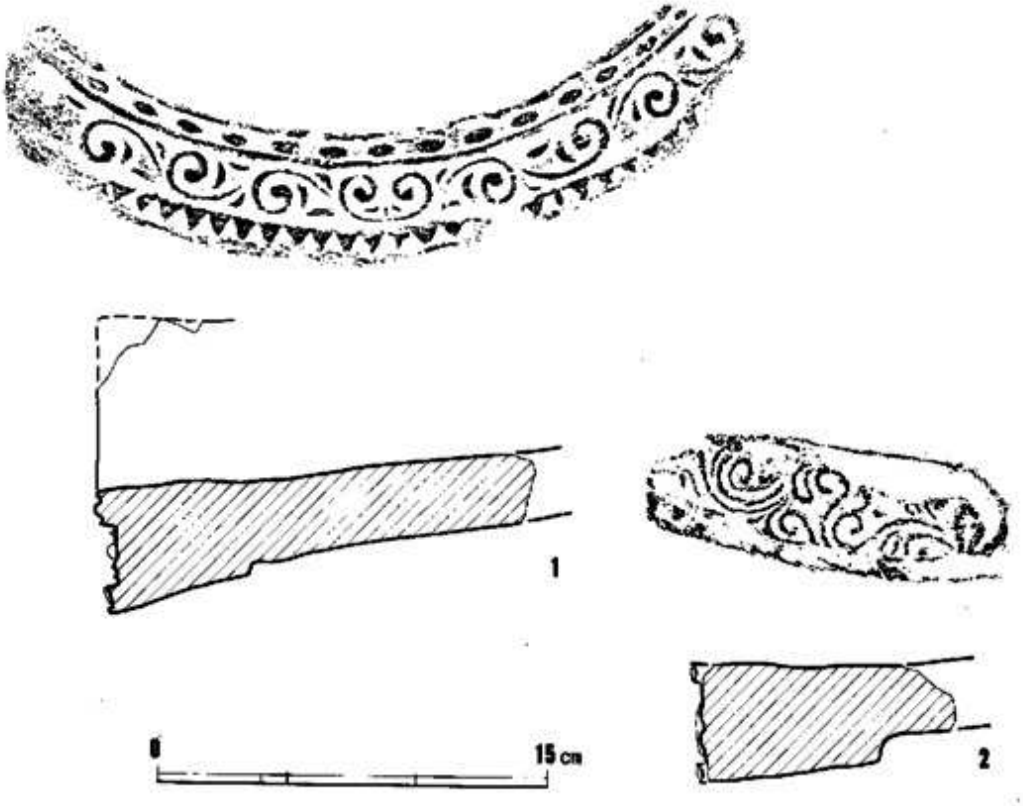


Fig. 6　九州大学考古学研究室収蔵　平和台出土　瓦実測図および拓影2（縮尺1／3）

いずれも高取焼きと考える。12は蓋で、胎土は粗く灰白色を呈し、外面に淡緑青色の釉を施す。13は素焼きの椀である。体部下半に4条の沈線をめぐらし、内底に「ニ」の陰刻を施す。釉は体部下半までしか施されていない。

③瓦類

出土した瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、塼、丸・平瓦があり、奈良時代～中世のものが含まれる。

奈良～平安時代の瓦（Fig. 5－1～5，Fig. 6）

軒丸瓦は2型式10点出土した。Fig. 5－1～3 は所謂鴻臚館式と呼ばれるものである。中房に1＋4＋8の蓮子を配する複弁八葉蓮華文で、周縁には24個の珠文をめぐらす。瓦当裏面、側面はナデで仕上げる。胎土は砂粒を含み、焼成はやや軟質であるものが多い。Fig. 6－1 の軒平瓦とセットをなす。4・5は単弁十二弁蓮華文瓦である。中房は高く突出した半球状をなし、その周囲には珠文を12個めぐらす。外区は一段高く、珠文を密に配する。焼成は軟質で胎土は砂粒を含む。類例は韓国慶州市千軍里廃寺にみられる。軒丸瓦は2型式6点が出土している。Fig. 6－1 の内区は「小」字形の中心節の左右に4回反転する唐草をおく均正唐草文である。外区は一段高くつくり、上外区には杏仁様の珠文、下外区には凸鋸歯文を配する。顎は段顎で平

瓦凸面には縄目タタキを施す。2は内区に桃実様の中心飾から左右に4回反転する唐草文を配する。顎は段顎で凹凸面ともヘラケズリにより調整する。

中世の瓦（Fig.6—6・7）

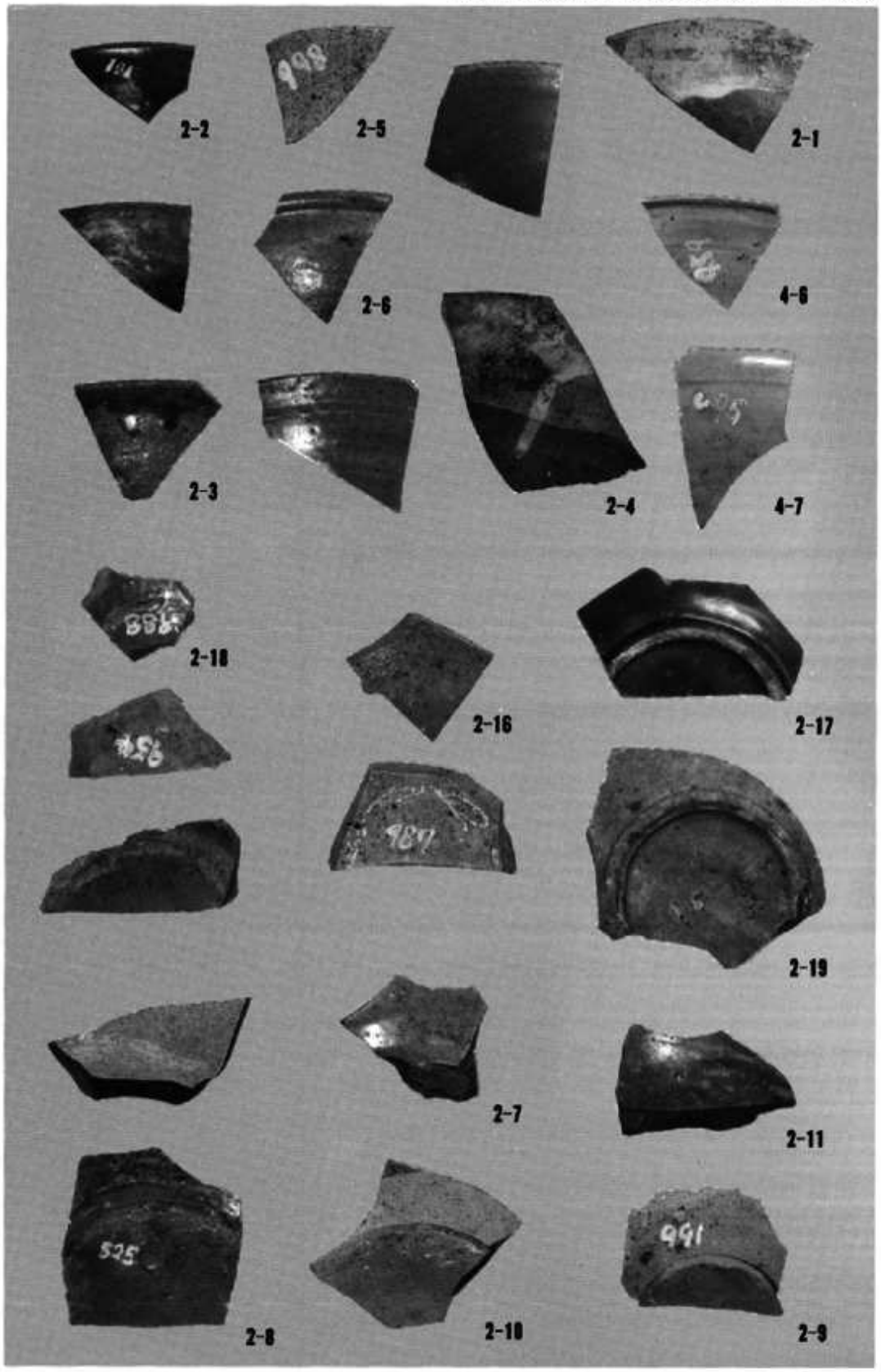
巴文の軒丸瓦が2点ある。左まわりの三巴文で、4は尾部が長くのび、外区内縁に珠文を配し、5は巴文の外側に圏線をめぐらす。

その他に鬼瓦と考えられる破片、無文塼などがある。

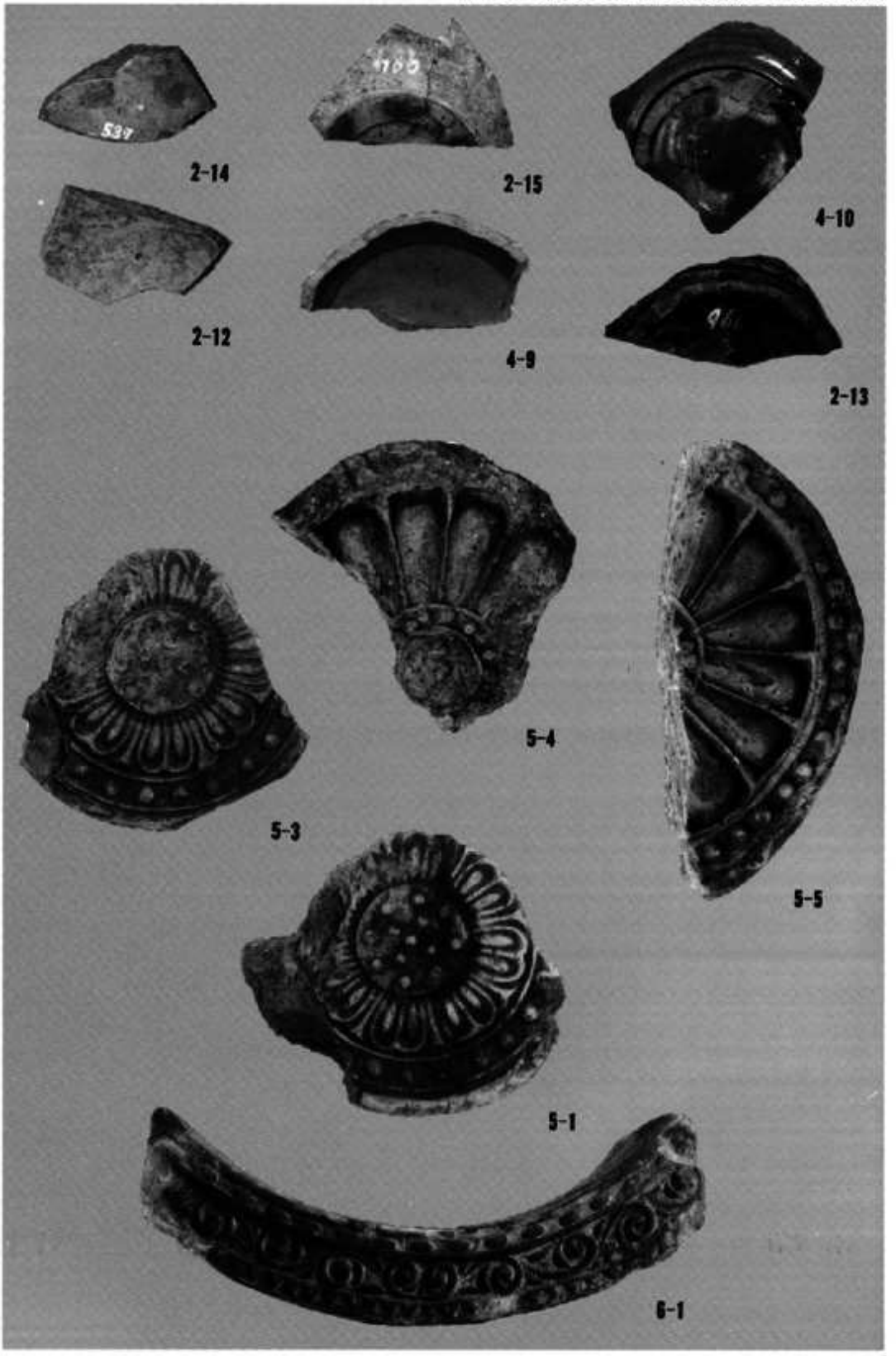
現在、考古学研究室では保管・収蔵の考古資料の整理を行っているが、本稿は平和台出土遺物の整理を行った矢野佳代子、田崎博之が執筆した。また、渡辺正気先生・岡崎敬先生には昭和26年時の調査に関して種々の御教示をいただいた。折尾学・塩屋勝利・池崎譲二氏には資料紹介の紙面をいただき、森本朝子氏を含め有益な御教示をいただいた。文末ながら記して感謝いたします。

（1）昭和26（1951）年8月　調査風景（南より）背景は平和台球場

（2）昭和26（1951）年8月　調査風景（北西より）



PL. 2　出土遺物（1）陶磁器（縮尺不同）番号はFig.と一致する



PL. 3　出土遺物（2）陶磁器・瓦（縮尺不同）番号はFig:と一致する

付編５．黒田長政と福岡城

福岡市美術館　　田坂大蔵

福岡城に関する史・資料は非常に少ない。築城の経緯或いは櫓の使用例などについて、一冊に纏められた史料は管見の限り存在しない。これは城が戦場となる可能性がある以上やむをえないことであり、むしろ詳細な史料の残っていない方が一般的であったろう。

福岡藩の正史である『黒田家譜』中に散見される史料と、作成年の判明する絵図などが根本史料として存在するのみである。以下それらの史・資料により、福岡城築城当時の状況を記してみたい。

慶長５年（1600）９月に行なわれた関ケ原の戦いは、文字どうり天下分け目の戦いであった。この戦いの後多くの豊臣大名は没落し、徳川家康に従った者は命脈を保つか、又は更に伸長発展し後の徳川幕府の一要員となっていった。黒田如水・長政父子も豊臣家臣団から徳川家臣団へと転身した多くの武将の中の一人で、その転身が円滑に、しかも成功を収めた好例の一つであった。

この関ケ原の戦いでは黒田如水・長政父子は各々異った場所で戦い、各々抜群の功績をあげている。即ち、如水は領地豊前中津（現大分県中津市）を中心にして九州各地に点在する豊臣勢力の一掃を行い、北部・中部九州を制圧した。一方長政は徳川家康に従い関東に下り、更に関ケ原に引き返して徳川方の一武将として参陣した。長政は従来、智将としてよりも勇将として知られ、父如水とは異質な武将と考えられていたが、この戦いにおいては父如水にも勝る智謀を持つ勇将として名声をあげている。

東軍（徳川方）と西軍（豊臣方）とが関ケ原に相対峙したとき、その軍勢の員数、陣配りを単純に比較すれば西軍の方が僅かに優位にあったとされている。黒田長政は、この均衡を破るための方策としては、西軍の大将分の大名を東軍に寝返らせる外にはないと考えその目標を筑前中納言秀秋に絞った。

その理由としては秀秋は小早川隆景の養子で、筑前50万石余を領した豊臣方でも有力な大名であるという軍事的、政治的効果と、秀秋の家老平岡氏が長政の縁者であり、更に秀秋の家人河村氏の兄が、長政の重臣井上九郎右衛門という関係があり、内々で交渉を進めやすいという家内的事情があったことがあげられる。

戦いそのものは、如水が九州において考えたよりもはるかに短時間で決着がついた。それは全く長政の武と智（秀秋の謀反）によるものであったと言われている。

戦いの終了と共に、徳川家康へ諸将が拝謁を行った。その一番手の栄誉は黒田長政に与えられている。徳川家の正史である『徳川実紀』には、その時の模様が次のように記されている。

「一番に黒田甲斐守長政御前に参りければ、御床机をはなれ、長政が傍によらせられ、今日の勝利は偏に御辺が日比の精忠による所なり、何をもて其功に報ゆべき、わが子孫の末々まで黒田が家に対し、粗略あるまじとて、長政が手を取りいただかせ給ひ、これは当座の引出物なりとて、はかせ給ひし吉光の御短刀を長政が腰にささせ給ふ。」

この抜群の功績により黒田長政は恩賞として豊前国六郡12万石の大名から一挙に筑前国52万石の大々名へと取り立てられた。一方如水は隠居の身という事もあり、上方において希望のままの恩賞地を与えるとの事であったが、子の長政が黒田家としては遂に念願の「国持大名」になったことを謝して、如水は全くの隠居生活を望んで恩賞地の件は断った。

黒田長政は慶長5年（1600）12月上旬豊前中津から飯塚を経て博多に止宿した。8月には筑前藩の居城名島城をうけとり、12月11日入城した。この後中津に残した家臣団の家族、町人、職人が陸路・海路で移動を始め、年内に筑前転封は完了した。

この名島城は、天正15年（1587）九州平定後に筑前領主に任じられた小早川隆景が居城として築いた城で、三方を海に囲まれた要塞堅固な城となっているが、これは隆景が、毛利一族の中でも水軍を率いていた経験により設計された名城であった。

僅か10余年の間に世情は乱世から平治へと転換し、戦法においても、個々の武将同士が所領拡大のため城攻めを行う形態の戦いは激減し、より大規模な戦闘形態へと変化していた。そのため地形的に難攻不落を誇る名島城は、城地及び城下町の狭小さにおいて時代に不適合の城となっていた。

ここに黒田氏による新城築城の方針が決定されたのである。

新城の候補地探しは慶長6年（1601）から始められ、住吉・箱崎・荒津山などが検討され、最終的に築城地として決定されたのは那珂郡警固村の福崎であった。この地は大休山、赤坂山（現南公園）に連なる丘陵部で、博多湾に突き出た岬の地形を成しており、古く奈良・平安の時代には、この福崎に設けられた大宰府の迎賓館、鴻臚館が置かれ、遠く朝鮮半島・中国大陸へ往来する人々で賑わった地点であった。

中世以来の商都博多から余り離れずにしかも独自性を有せるという距離的なものがあるとすれば、福崎の地はそういう場所であったのかも知れない。

工事は慶長6年（1601）から始められた。

当時は設計を業とする人々は多くない。むしろ城になれ親しんだ武将がその経験によって設計を行っていた。その意味からして黒田如水・長政父子のように戦場暮しを送った武将ほど良い城が造れる道理であった。

事実この新城のモデルとされた城は韓国南部の晋州城（韓国慶尚南道晋州市）である。

文禄・慶長二度にわたる朝鮮出兵中の数多の攻城戦のうち、最も日本軍が苦戦したのがこの

晋州城攻であった。城門にとりつくことも難かしく、加藤清正・黒田長政両軍の協力で遂に石垣の石を崩して城壁の壊し、やっと城内に突入するという有様であったと多くの軍記物に記されている。

しかしながら晋州城が新城にどのように影響しているのかは詳かでない。

新城は海に向って伸びた丘陵台地という地形を最大限に活用して設計されている。北・東の二方向は台地と平地との境界に水堀を設けて区切り、南に伸びる丘陵は城地の端で山を掘り切り、水堀及び道路を設けて切り通しとして完全に区切り、更に西方は、博多湾の海水が入り込み広大な潮入り潟地となっていたため、埋立てるのではなく、土砂を浚えて深くし、潟地をそのまま水堀（現大濠公園）とし、原形を利用して、四周を水堀に囲まれた平山城が考慮された。堀の幅だけを見ても大小異同がある。北側、つまり博多湾に面した側は城の正面と考えられた模様で、堀幅は30間（約54m）を基準にして、東西に一直線ではなく、何段か段がつけられた雁木状を呈している。堀の深さは約３ｍの箱堀である。東側及び南側は近代以降早期に埋立てられ、現状では類推するのみとなっている。西側の大堀（他の堀とは比較できない程大規模な為当時からこの名称がまま散見される）についても城側の境は文化財保護の観点から判別できるようになっているが、近代に入って埋立てがなされ不明な点が多い。

この堀を渡って城に入る橋が三ケ所設けられ橋際に門が構えられた。北側の堀に二ケ所、南西側の大堀際に一ケ所で、各々上の橋御門、下の橋御門、追廻御門と称している。前二者は大手門であって、桝形門形式となっているが、後者の追廻門はより小規模な構えであった。

城の四周の水堀の石垣について共通していることは、城側の石垣は三ケ所の門付近を除いて、いわゆる腰巻石垣の形で、水際より５０～６０cm上までが石垣で、その上部は土手となっていることである。城の対岸の石垣については、本報告書に北側石垣の報告が詳しいので参照されたい。

城側の第一線が土手であることは一見手薄に見え、かつ城の威圧感が薄れはするものの、後述するように、長政にとっては実用第一で、30間の水堀幅で充分だったのではなかろうか。

このような設計により、城地の面積は24万坪（約80万㎡）、周囲2400m、堀の外周1700mの新城が縄張りされた。

城内は石垣によってほぼ四層に分けられ、下から三の丸、二の丸、本丸、天守台と呼ばれた。

三の丸は城内で最も広い面積を持っており、現在の福岡高等裁判所から西へ平和台球場、パレーコート、陸上競技場、国立中央病院、舞鶴中学校、城内住宅がこれに当たり、かっては家老の別宅が軒を並べ、三代藩主光之以降は舞鶴中学校から国立中央病院の境内にかけて藩主の城内居屋敷が設けられていた。また下の橋御門近くの小高い丘には、如水の隠居所が建てられていた。

城普請はまず三の丸から整備されている。慶長7年12月に生まれた二代藩主忠之は、本丸が未完成であったため、二の丸東丸（現福岡高等裁判所）で誕生したと『黒田家譜』に記されている。

三の丸から一段と高い所を二の丸と呼んでいる。両者の間には、松の木坂御門、桐の木坂御門、東御門の三つの門があった。二の丸から上は公用の場の性格が強くなり、石垣の隅には二層以上の櫓が建てられ、その櫓と櫓との間を平櫓で結んでいる様子が絵図面で判る。これらの櫓は諸士の詰所、役所、資材倉庫などに使用されていた。

二の丸から表御門、裏御門で明確に区画された高台が本丸である。ここには首実検のための首洗い井戸なども設けられ、正に軍事、政治、経済の中枢であるとともに、藩主の生活の場でもあった。初代藩主長政は、ここ本丸に居住し、時折大濠の対岸鳥飼に茶屋を建て、遊んだと記されている。二代藩主忠之は本丸西側の二の丸の一角（桐の木坂の北側）に居屋敷を新築し本丸を公式の場と明確化したが、前述のように三代藩主光之は、居屋敷の敷地を更に北側に移動させると共に大規模にした。これ以降幕末まで居屋敷は移動せず、城内の配置もほとんど変化していない。

本丸の南に大石を積んだ石壁が構築されている。これが天守台である。大・中・小と三つ並列された天守台の内側には礎石が整然と配されており、いかにも天守閣の跡地の雰囲気であるが、文献、絵図ともに天守閣の存在をうかがわせるものはない。城の象徴天守閣は軍事的な側面と、庶民威圧の側面を持っているが、筑紫平野の中の丘陵地であることで望楼としての天守閣の必要性は薄れる。それよりも、黒田如水長政父子は、晋州城をモデルとして難攻の城を設計した以上、豊臣大名だったという来歴を考えれば、徒らに徳川幕府の嫌疑を受け易い威圧感みなぎる城造りよりも、可能な限り威圧感を薄めた実用向きの城造りを主眼としたと考えた方が理解し易い。その考え方に立つとすれば、水堀の城内側が土手であることも首肯できると思われる。

城内の配置は前述のとうりであるが、防衛に関しては如水・長政父子の配慮がより拡大した形で表わされている。それは城下町を「四の丸」に見立てる城造りという事である。

この構想に即して見ると、北は博多湾、東は那珂川、西は室見川、そして南は大休山・赤坂山の丘陵が各々城の外側の防衛線となるものである。

北側の博多湾沿岸には寺院を配し、城の近くには大身の侍の屋敷を配している。東の那珂川沿いには高さ約3mの石垣を数馬門（旧知事公舎付近）から薬院新川沿いに海岸まで連ね、博多部から直接城下町へ入る唯一の中島橋は粗末な板橋とし、橋ぎれ（現福岡市立歴史資料館付近）には巨大な桝形門が設けられていた。

この石垣と門とは博多人にはとりわけ不評で町人を蔑視した象徴とされてきたが、事実は異

なる。元来黒田藩の戦略は、東と南からの防衛を第一義として配慮されており、そのため新城築城と並行して築かれた藩境の6ケ所の支城のうち、5ケ所までが実に豊前との境に設けられ残る1ケ所が南に対抗した配置であったことは重要である。このことからしても那珂川沿岸の異常な配備は対博多町人策だけではないことが知られよう。

西側の防衛線は室見川が想定されているが、実際の配備としては大濠が海とつながる川に唯一設けられた橋のきわに黒門が築かれた。また、大濠の南、現在の護国神社付近には大身の士屋敷が配置されている。

南側の備えとしては、赤坂、大休山（現南公園）の自然の山陰を利用して要塞化すべく中級、下級家臣の屋敷が所々に置かれている。しかし南側からの進攻は山地伝いからだけではなく、むしろ城下町を攻められた場合は見渡す限りの筑紫平野のため、防衛の仕様がない。そのために三の丸東丸の端から那珂川岸までほぼ東西方向に一直線に30～35間（約54～63m）幅の水堀を設けていた。この堀に三ケ所橋を架け、門を建てた。東端の春吉方面を数馬門、中央部の薬院方面を薬院門、赤坂方面を赤坂門と呼んでいた。この水堀の一部は肥前鍋島氏が、関ケ原陣の時の如水の恩義に報いるために加勢工事を行ったもので、特に「肥前堀」と通称されていた。

この那珂川、肥前堀、大休山、室見川と海に囲まれた内側で城下町を形成したが、城を中心に士屋敷を配置するためには、もう一つの土木工事が必要であった。これが荒戸町の造成である。この一帯は大濠の潟地が海につながる場所で、船がかりの良い場所であった。長政はこれを埋めたてて、士屋敷をつくり、ここに城下町と城の輪郭が出来あがった。

従来築城期間については、貝原益軒の『筑前続風土記』の「本城、端城ともに凡7年の内に悉く成就せり」の条項によって7年説がとられてきたが、これは城、城下町、端城全ての工事が7年と言うことであって、城本体は『黒田家譜』にあるように「一両年を経て」完成したと考えた方が妥当と思われる。

ともあれ、自然を活用した形での二重濠を廻らした新城が完成し、城下町も配された。長政はこの福崎一帯に築いた城と城下町とを「福岡」と改称した。その由来は次のとおりである。黒田氏は近江源氏の流れをくみ、近江に住んでいた。長政の曾祖父高政のとき、近江から備前国邑久郡「福岡」に移住を余儀なくされた。この福岡で次第に力を蓄え、長政の代に遂に国持大名に列することができた。長政は黒田家隆盛の基を高政に求め、遺徳を永く顕彰すべく「福崎」を「福岡」に改称したのである。

福　岡　市
高速鉄道関係埋蔵文化財報告Ⅲ
福岡城址
1983(昭和58)年3月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目7－23

印　刷　(有)松古堂印刷
福岡市西区大字周船寺407

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ

福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集

1983

福岡市教育委員会